第三種郵便物認可　每月一回五日發行

女學世界

第四卷第九號

口繪

旅順口、勲章　五彩畫

金魚、七夕　毛筆畫

恤兵品を促すの詞

北白川宮大妃殿下

丸井少将の家庭

記事要目

日本の姉妹諸君に

女學生の處世法

戰時婦人の自活

カイコの一生

婦人會の見聞

男女の婚姻資格

賢母の責任

臺所和之帳



女學世界 第四巻第九號 目次

時論……二

日本の姉妹諸君に……米國義勇看護婦會長 マッギー女史

女學生の處世法……近藤耕

天與の美術國……藤田文藏

婦人自活の必要……塚本はま子

家庭月令……

男女婚姻資格の反例……

家庭……一一

婦人會見聞のまゝ……羽仁もと子

父母の責任……川瀬元九郎

賢母の手かゞみ……松村仙藏

一日醫者……糸左近

臺所控え帳……藤葉女史

看護心得二十題……

シャムの製法……

石鹼と垢……

季節茶席料理……廣田星橋

西洋一品料理……

夏の衛生……

衛生顧問……

家事顧問……

家庭談叢……七一

玄海の悲劇……擔當記者

鷲の一生……擔當記者

壯烈譚……九七

戰場の天使……小野田花子

薩摩の乙女……根岸文子

婦人壯烈談……松浦政泰

珍書解説……一一二

夏季學校……水原翠香

通俗源氏物語……

科學……一二五

美人の肌膚……糸左近

蟲の學問……鈴木眞吉

昆虫十二種……

素人紺屋……好染翁

臺所算術……竹貫直人

裁縫手引……井上はつ子

夏季雜題十二種……小川草舟

社會……一五六

英國皇室の社會事業……鸚鵡主人

支那婦人の習俗……西澤好子

三國婦人の價値……ミセス、バートン女史

譚海……一七六

陣中の盆栽外九件……麻軒生

才媛詞藻……一八六

和歌（綠陰讀書、夏海、軍隊慰問狀の端に）……

小說……一九四

家の櫻……巖谷小波

新夫婦……神谷鶴伴

書畫手本

旅順陷落、勳章（水彩畫）……三宅克己

金魚、七夕（毛筆畫）……跡見花蹊

郵兵品を促すの詞……三宅花圃

詩句、和歌……跡見花蹊

口繪

▲北白川宮大妃殿下

▲丸井陸軍少將の家庭

▲小川海軍中佐の家庭

▲英國の小兒

▲露國軍人の家庭

▲古戰場

▲京都看護婦學校

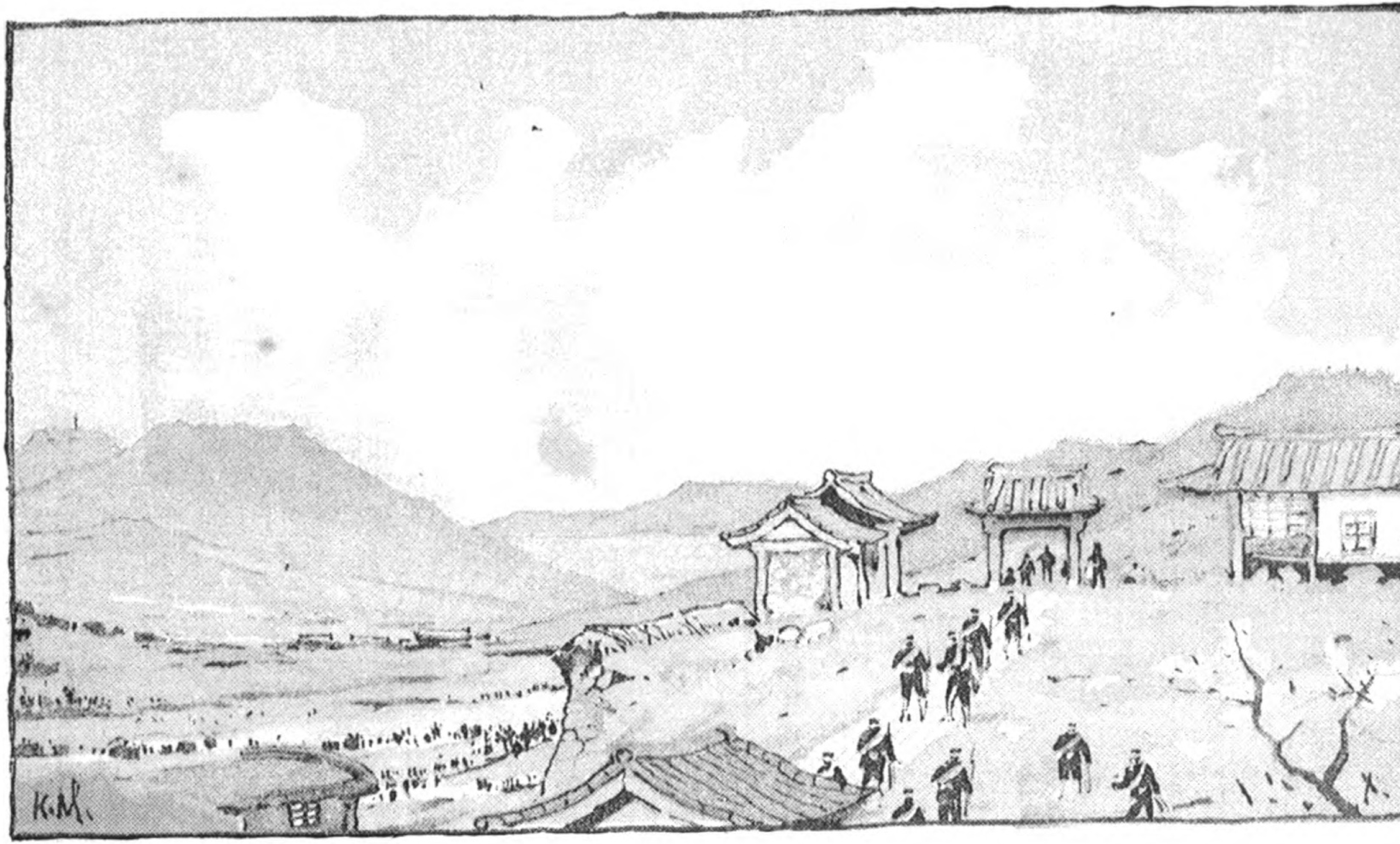
▲米澤高等女學校

卷中插畫

蠶の一生……樹谷洗鮮

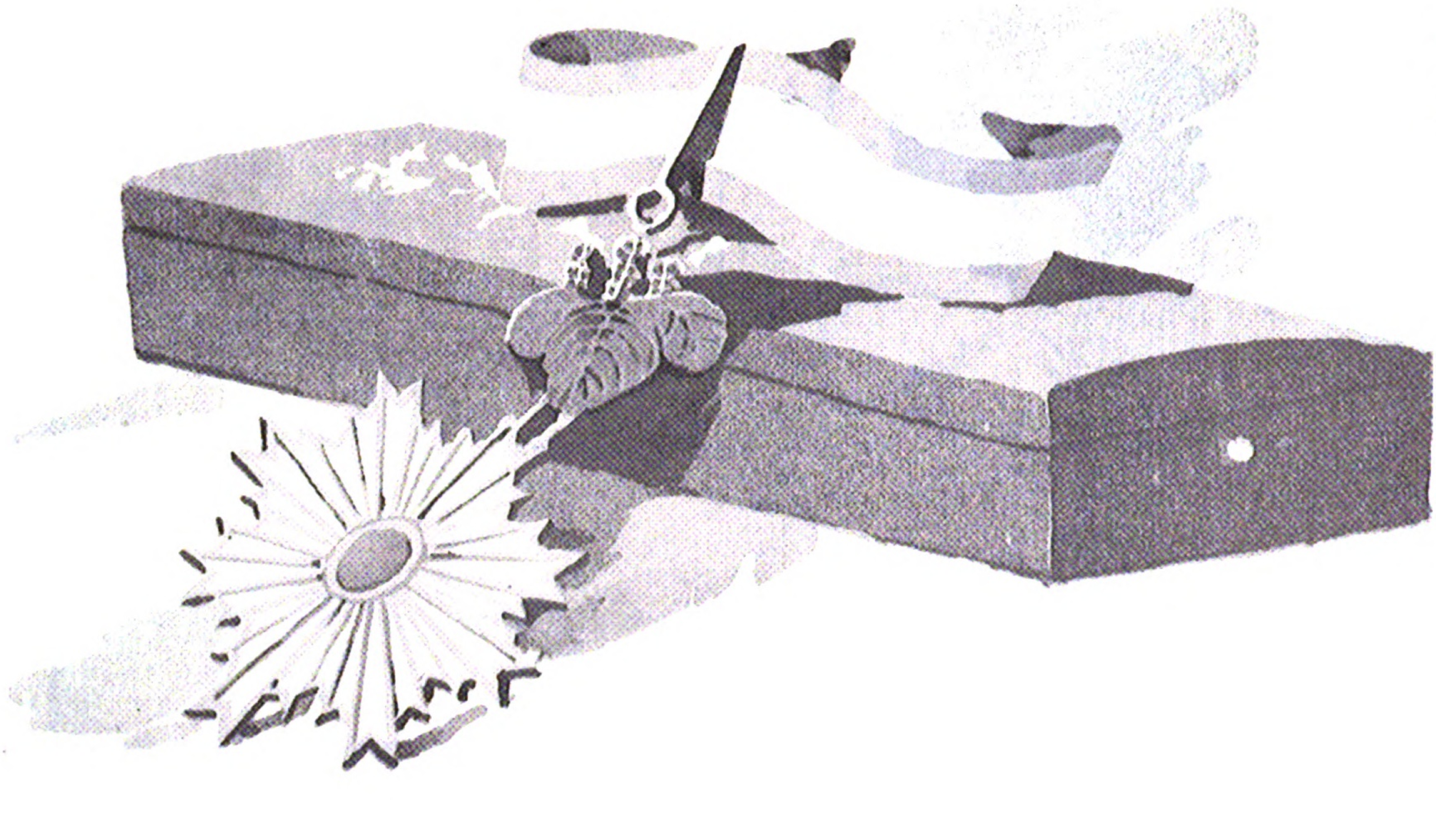
戰地通信……田內千秋

旅順口



三宅克己氏筆

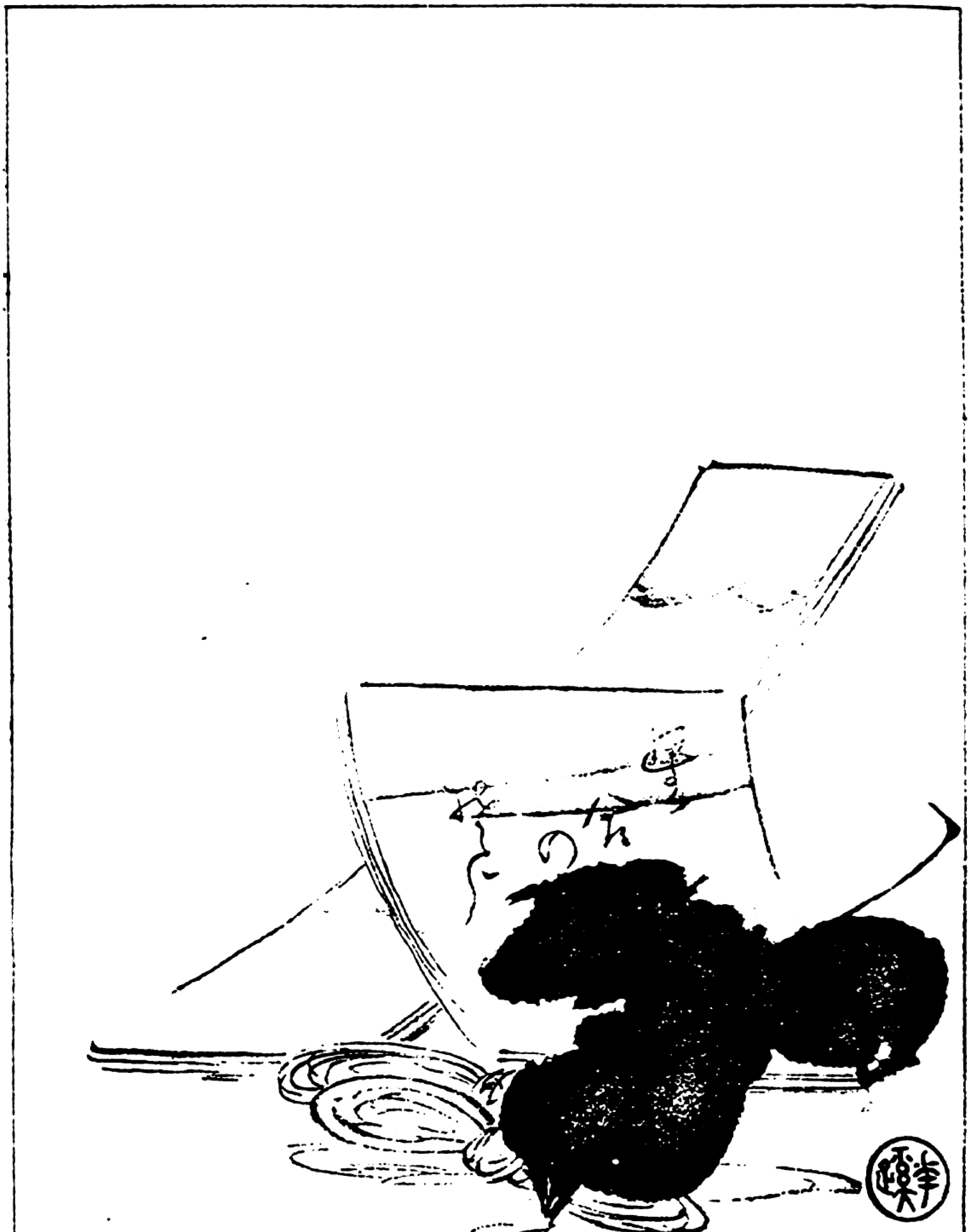
勲章



三宅克己氏筆

七夕

跡見花蹊女史筆



金魚

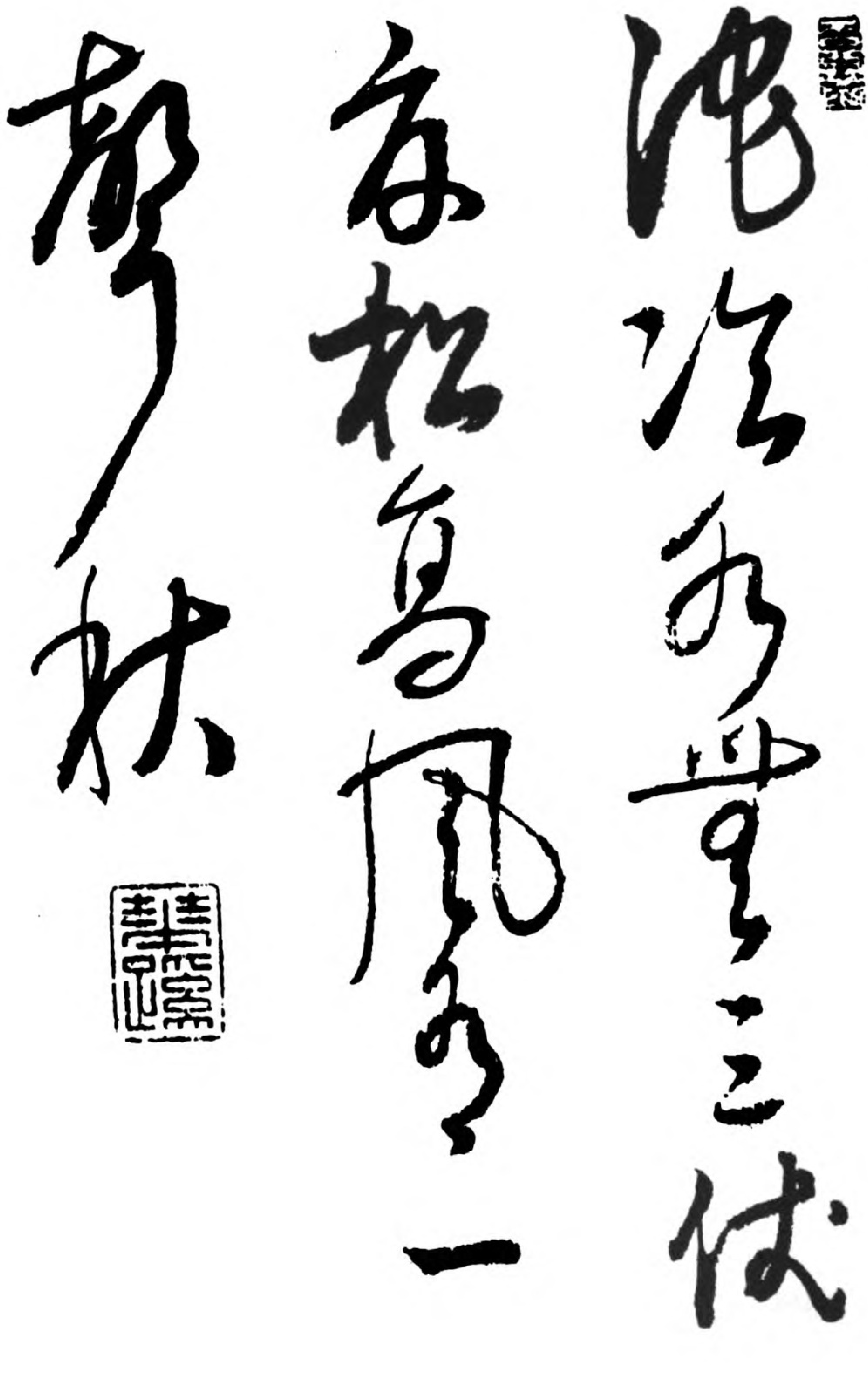
跡見花蹊女史筆



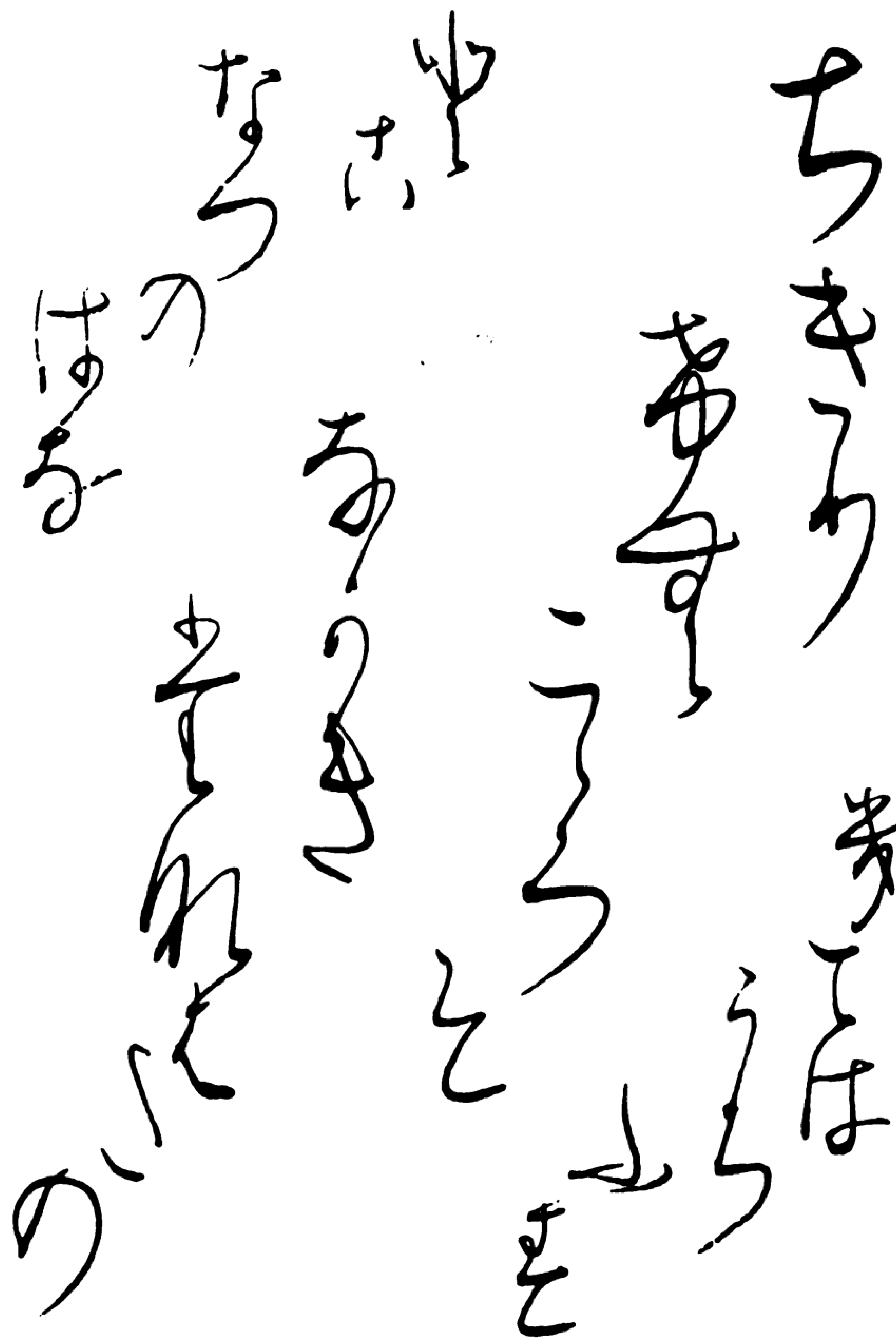
偖まあけれはりの人飛しくいふのみ
此ころは一と穐てや七夕ぞ過ぎ龍になり候
なほ多きまなぶる父の事なかれかなしき
月今けふ一八湖よ山り煙迄のこと
さらぬよのならぬ花に田舎迄もそれぬ

るの歌らしきなるをあらはしつゆも安宿も
おほえのるへく候へ共思ひはへこれ
労多く殺ゝのはさと候へ共宮附ゝの段
あゝ霧もいそのしか出来候趣てけ
皆もし安如実を如得芳にも尓
いのしこ

跡見花蹊女史筆



跡見花蹊女史筆



法學士 武田千代三郎君著 （製本既成）

理論實驗 競技運動

第壹冊

洋裝上製洋布
大判六百八拾頁
正價一圓廿錢
小包十五錢

第壹編 總論
第壹章 運動の眞價
第貳章 運動の類別
第貳編 運動生理
第壹章 運動の機關
第貳章 疲勞
第參章 休養
第四章 運動の効果
第五章 運動の生理的區別
第三編 體勢訓練
第壹章 運動機關活力の增進
第貳章 疲勞の輕減
第參章 訓練中の攝生法
第四章 競技に臨む時の注意
第五章 結論
第四編 技術訓練
緒論
第壹章 競技運動の性質
第貳章 競技運動の種類
第參章 端艇競漕
第四章 競走
第五章 競走
第六章 飛躍技
第七章 投擲技
第八章 應用競技
第五編 運動會
第壹章 運動總論
第貳章 競技運動會
第六編 競技道
附錄 第一 審判用帳簿樣式
第二 運動術語解

武田法學士著

心身鍛練 少年競技運動

（全壹冊洋裝 挿圖六十個） 正價金十八錢 郵稅金四錢

本書は室外教育の理法に通曉せる武田先生が我帝國少年の爲めに何如にせば能く其心身を訓練して大國民たる實力を養ひ得べきやの問題を極めて簡明平易に解說せられたる空前の良書にして戰時少年の好讀み物なり

（甲の一）

發兌元 東京本町 博文館

●華族女學校學監 下田歌子先生著

女子自修文庫 第二編 女子の文藝

明治的女子に最も完全にして最も適當なる讀物を供給せんの目的を以て特に編纂せられつゝある女子自修文庫は曩に第一編女子の心得を發刊し非常の好評を博せしが今や其第二編として女子の文藝を生まんとす說く所詩歌俳諧より女子に必用なる百般の文藝を網羅し材料豐富運筆輕妙又以て作文の模範たるを得べし

◉全部六冊 正價一圓四十錢●三冊前金一圓十四錢●六冊前金二圓十六錢郵稅各八錢

●菊判やまと綴美本

第一編 女子の心得 既刊

●第三編 近日發行

東京神田裏神保町 合資會社 富山房

大阪高等醫學校長兼同病院長 醫學博士 佐多愛彥序
大阪高等醫學校病院小兒科醫長 兒科專門 長濱宗信著

小兒養育の心得

全壹冊

總クロース製本美麗
正價金五拾錢
郵稅金六錢
郵券代用一割增

夏は小兒の健康を保つに不適當にして小兒を持てる父母の尤も恐るべき季節なり本書は著者が多年の經驗により特に此邊に注意し養育上の要件を詳細に記述したれば此際父母の座右に欠くべからざる良書なり

本書は暑中歸鄉の土產として尤も適當なるものなり
本書は暑中見舞として尤も適當なるものなり
本書は結婚の祝物として尤も適當なるものなり
本書は出產の祝物として尤も適當なるものなり

發賣所
東京市日本橋區通三丁目 丸善株式會社
大坂市東區博勞町四丁目 丸善株式會社支社

●其他全國有名の書肆に販賣す●

(甲の三)

（甲の四）

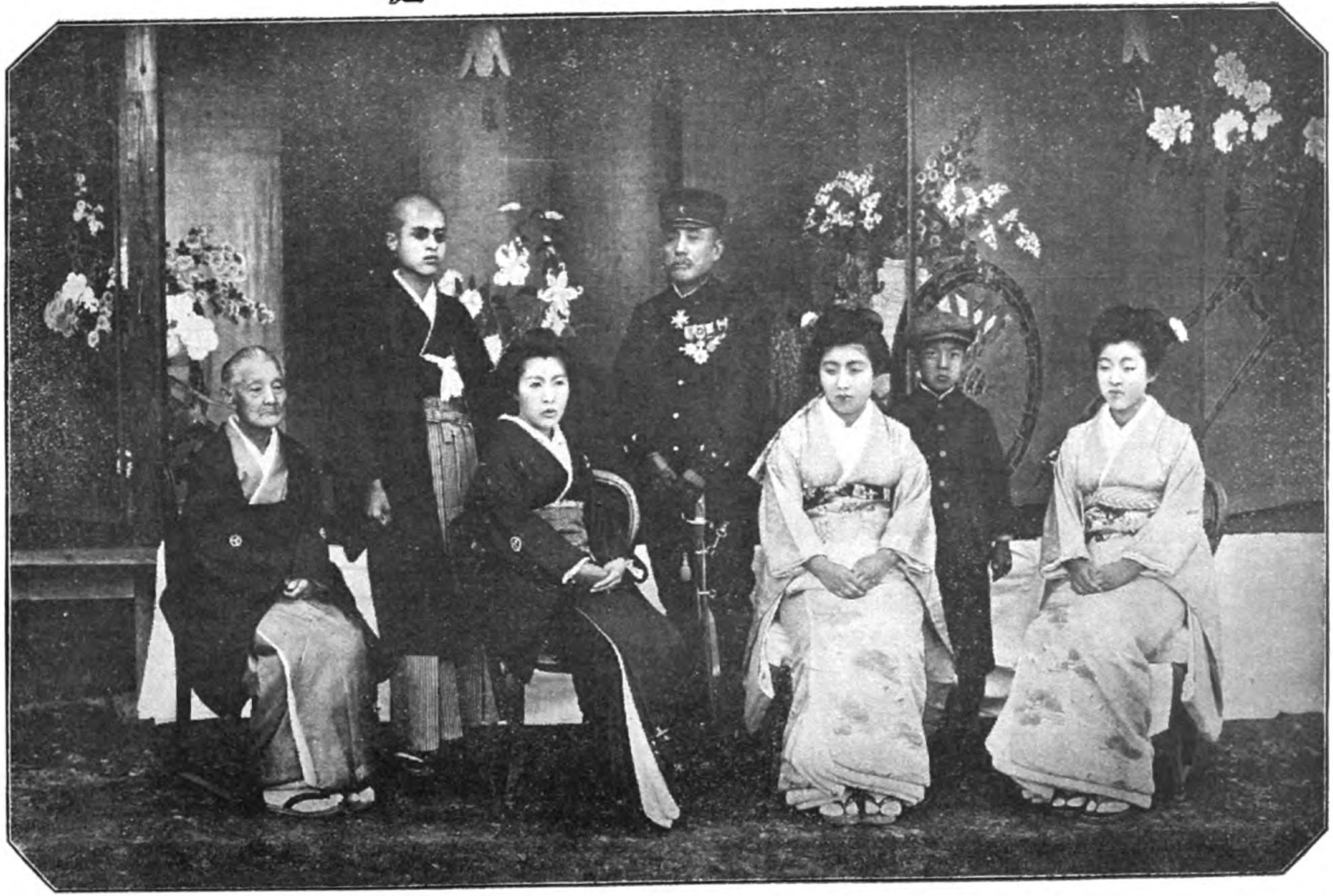
北白川宮母堂富子殿下



(博進社工場印行)

大阪慈惠會總裁

軍人家庭



福知山旅團長丸井少將の一家

小田海軍中佐の一家



軍人家庭

英國の小兒



巖谷漣山人著

今の少年の爲め、今より後の少年の爲めに空前の壯擧日露戰爭を永く記臆せしめん爲めに著者が、獨特の快筆を揮へるは即ち此書とす、その第一卷開戰の卷は、日露の干係、開戰の原因を、毫も遺憾なく、仁川旅順の兩戰の實況、躍々として目に睹るが如し、若し夫れ附錄軍國讀本に至りては、開戰當時に於ける、名將勇士が逸話奇談を一種の讀本体に記述せるもの、戰國少年の讀み物として、何者かまた之に如かんや、眞に本書の如きは、世間數十の日露戰記中、正に千古に傳ふべき唯一のものたり苟も日本帝國の少年たるもの、一本を坐右に備へずんば、日本少年たるの資格なきものなり。

毎編密畫挿入

少年日露戰史

全十二册

第一 開戰の卷

▲戰爭の原因
▲三國の干涉
▲露國の無法
▲露西亞は何な國
▲文明と野蠻の戰
▲艦隊の出發
▲仁川の勝利
▲旅順の攻擊
▲宣戰の詔勅
▲國民皆兵
▲擧國一致
▲新艦の到着

附錄 軍國讀本

●葉山の御夢●東洋のチルソン●三殿下の御勇武●敵前の尺八●殘る劍●軍歌旅順の海戰●下瀨火藥の事●初瀨の初花

製本既成——紙數一百頁
諸大家密畫及寫眞版挿入

續刊

第二●決死隊の卷
第三●九連城の卷
第四●南山の卷

以下戰ひの進むに隨て有益に且面白き、戰況を例の麗筆にて、少年讀者の前に飾る逐卷閱讀心性修養に資せられんと希望の至りに堪えず

正價—壹册金拾貳錢・郵稅四錢
前金申込は—六册金六拾七錢—十二册金壹圓貳拾八錢—郵稅一册四錢
發行—毎月一回十五日發行
裝釘—紙數毎號各一百頁・表紙洋製
美本毎號諸大家の揮毫に成る密畫及珍奇新斬の戰局に關係ある寫眞版入

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の十)

高等バラ芳香入

高等化粧品案內

衛生無鉛 雪於しろい

◉本品には內務省衛生試驗所の無鉛報告書を貼附せり現任警視廳第三部長栗本氏の試驗成蹟に依るも我國白粉無鉛製の優勝者として認められ貴顯紳士の令夫人令孃方の御定用となれり

煉おしろい（大金五拾錢 小金拾[illegible]錢）
水おしろい（大金[illegible]錢 小金[illegible]錢）
玉おしろい（金拾錢）
粉おしろい（大金參拾錢 小金拾貳錢）

御顏直し雪

金五錢

美麗なるたとう紙包

◉本品は四季共に輕便なる衛生打白粉にして懷中用化粧品として欠くべからず夏季には汗しらずに代用尤も妙なり

高等化粧水花

長壜 金三拾五錢
小壜 金貳拾五錢

◉本品は肌を濃かに色を白くし日に燒くるを防ぎ、にきび、ひゞ、あせもを治す其他おしろい下としては勿論皮膚病豫防劑として頗る奇効あり

束髮用 香油松風

長壜 金三拾五錢
小壜 金拾五錢

◉本品はふけ及垢を去り優美なる艶を生す且つ毛生液を配劑しあれば拔毛を止め毛髮を養生す日本髮には御くせ直しとして頗る妙なり

（乙の二）

（地方諸君の御注文に應じ迅速に配達す）

（販賣店は各地有名なる小間物店にあり）

本舗 東京麻布區材木町（電新二四一四番）
寶商會

特約大卸賣店 日本橋區通鹽町（電浪二三〇二番）
西澤喜右衛門

●料理界唯一の珍書●

再版

大家 赤堀峯翁
日本女子大學教授 赤堀峯吉
東京女學館教授 赤堀菊子 共著

家庭十二ヶ月料理法

和装美製全二冊
上巻春夏 金五十錢
下巻秋冬 金五十錢
郵税一冊に付金八錢

本書は著者が多年各女學校に於て實地に教授せし日本料理法及菓子製造法を詳密に記載せるものにして普通一般の料理法は勿論日常の**惣菜料理**を主とし貴婦人令嬢が實地に試み得るやう懇切に説明を施し又**懐石料理、儀式的献立、祝祭節句料理**に至る迄各四季十二ヶ月に分ち家庭の**漬物加減法、食物原料編、食品の説明及分析**等をも示し且つ行文努めて平易なるを以て如何なる人と雖も一度本書を繙かば洵ちに著者に親炙して傳授せられたると異なることとなし

鶯居主人 杉本新造著

●増補日用 **西洋料理法**

洋装全一冊 正價金四十錢 郵税六錢

華族女學校教授 小野鶯堂編并書

●増訂 **女子手紙之文**

和装全一冊 正價金四十錢 [illegible]

[illegible] 三輪田眞佐子著

●**女訓の栞**

全一冊 正價金四十五錢 郵税四錢

華族女學校教授 坂正臣作并書

●女子習字 **文の山口**

和装全二冊 一冊に付卅五錢 郵税各四錢

（乙の三）

發行所 東京日本橋通一[illegible] 大倉書店 [illegible]四一四一番

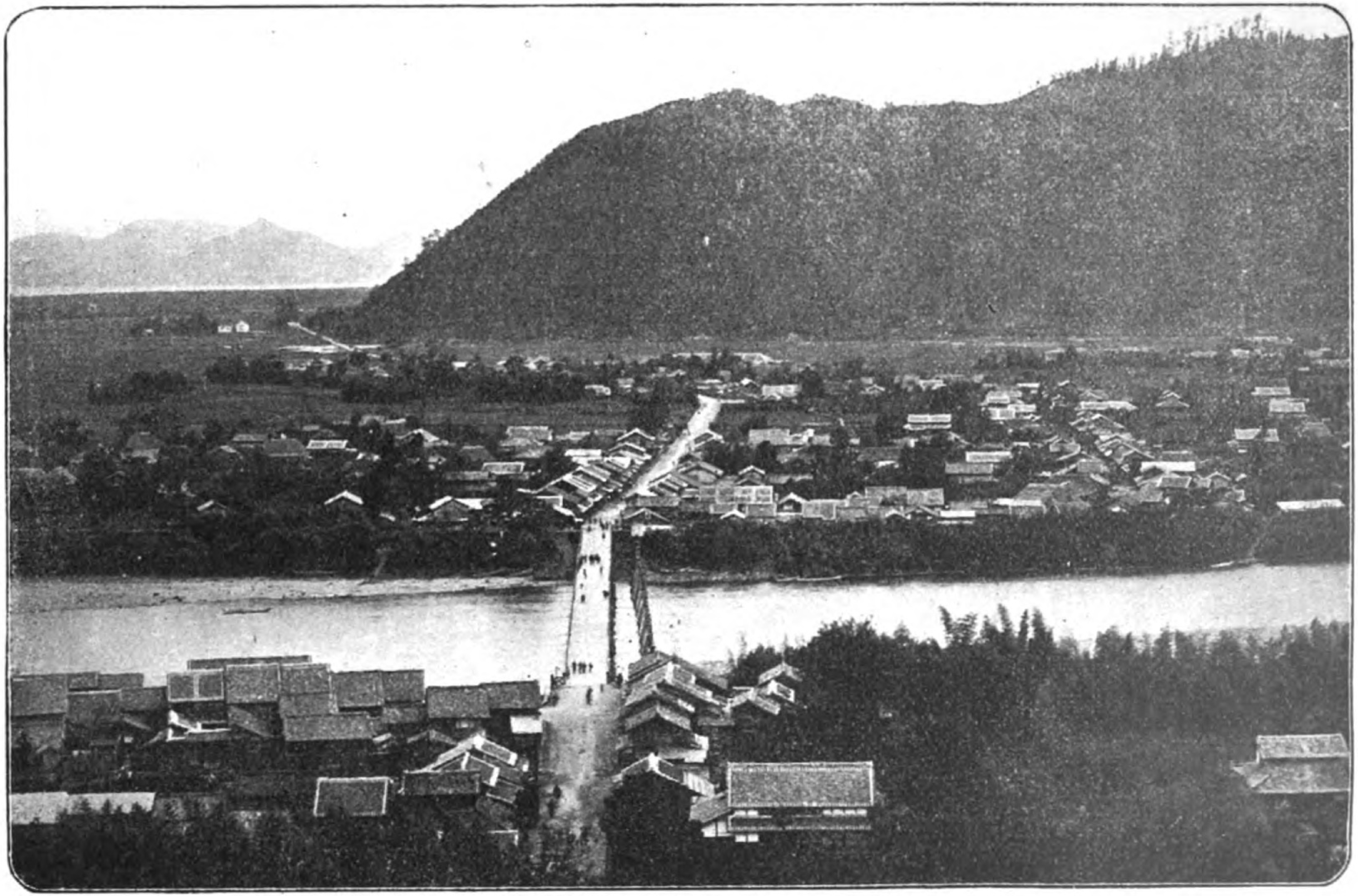
露人の家庭



在旅順口露國將校の妻女並に其の侍婢（侍婢は日本人也）

婦人の服地は支那産の水色緞子に金絲もて雲龍の繡を施したるもの又小兒の服は友仙染なり

古戰場



日向國延岡町の全景(西南役の古戰場也)



京都看護婦學校卒業生



福島高等女學校卒業生

五大軍醫合議製劑

、定價　五週分壹円、三週分六十五錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢

本舖　東京銀座壹丁目　大阪南久寶寺町堺筋東

山田安民



全國各藥店ニて取次販賣す

女子軍歌

日本女子大學校教授　文學士　鹽井雨江君作歌
日本女子大學校教授　白井規矩郎君作曲

全一册
正價十錢
郵税二錢

無道の露國天誅なかるべからず、我が征露の大軍はこゝに出づ、四千餘萬の臣民誰か勇まざるものあらん、内治を天職とする温良なる女子も、心の中には亦凛烈なる氣骨を具ふべきなり。此書『家の守り』、我等は國の爲め、看護婦、此の日の御旗、『想夫戀』の五編を收む、軍國の淑女令孃たち、庶幾くは其折り／＼の聲として、歌ひ慰み給はんことを

（博文館發兌）

女學世界夏期增刊

婦人壯烈譚

正價二十錢　郵税二錢

我國民今や世界有數の大國を敵として戰ふ出師二十萬遼東の野到る處砲火の巷ならざるなし是れ實に空前の大役にして又非常の時たりこの非常の時に當りて尋常の家事を營み得るもの偏に我**勇士壯烈の結果**によらずんばあらず然れども國民的**戰爭の裏面**には婦人も亦家にありて軍務に役するの覺悟なかるべからず本編壯烈譚は以て**軍國の婦人**に貢する處尠少ならざるなり

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（丙の一）

英學新報社藏版

【新刊】宇野光三郎先生詳註【新刊】

エヴアンゼリン

洋裝美本　正價郵稅共金三拾錢

ロングフェロー氏の傑作中最も多く愛讀さるゝものは本書なり、俳優は之を演じて好評を博し、畫工は之を畫題となして數多の名作を産せり、蓋し作人約婚の健兒と離散し之を索むること殆ど四十年、夫が臨死の際まで相見るを得ざりし悲劇なり、編者之に詳註を施して初學者に便す。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

發兌元　東京神田表神保町　東京堂

東京高等商業學校教授 高嶋捨太先生著

◎増補訂正 **和文英譯集**

中判美本　正價三拾五錢　郵稅六錢

英學新報社編纂

◎**英文書簡**

中判美本　正價四拾五錢　郵稅八錢

村井弦齋先生原著 高柳龍吉先生英譯

◎和英對譯 **近江聖人**

袖珍美本　正價三拾五錢　郵稅六錢

英學新報社撰訂

◎英文 **英國大家大演說集**

中判美本　正價三拾五錢　郵稅六錢

東京神田表神保町 **東京堂書店**

電話本局　二三三番　二四八番

◎讀書家諸彥の御便利を圖り新刊圖書雜誌は汎く蒐集陳列致置候間御來觀希上候

◎地方御同業者の取引は薄利を以て發送は非常の敏速に勉強致候間御注文希上候

書籍雜誌

何れの出版を不問　**勉強販賣**

◎書籍雜誌の委託一手販賣は獨特の擴張法を以て販路勉強致候間御申込被下度候

◎東京堂出版部(文武堂英學新報社)は擴張し良書續々出版可致候間御愛顧希上候

東京神田表神保町 **東京堂書店**

電話本局　二三三番　二四八番

(丙の五)

阪本隆哉君著

衛生食物調理法

（口絵）調理の圖……（小峯大羽君筆）

全壹冊

和裝菊判　紙數二百頁

正價金

郵稅金

（其の六）

本書內容

（一）調理に就ての心得（二）金と時間の經濟（三）器具（四）色素類（五）飲料水（六）中毒（七）魚、鳥、米、野菜の鑑別（八）調理の方法（九）香味料と嗜好品（十）庖刀の切り方（十一）食物調理の便宜方法（十二）出し汁（十三）汁け酢、注け醬油、注け酒、附味噌、混味噌の製法（十四）刺肉及膾類（十五）汁類（十六）羹物及蒸物類（十七）煮物類（十八）炙物類（十九）和物類（二十）浸物揃樣（二十一）揚物の仕方（二十二）鮨の製法（二十三）寄せ物類及蒲鉾、はんぺん、しんじょ（二十四）調理雜集（二十五）人体營養の事（二十六）食物の消化吸收の事（二十七）小兒營養の事……

本書は從來の料理法より其衛生に叶ひたるものを撰擇し其調理法を最も平易に述べたり故に日常の膳椀に上るべき食物も此書によりて調理すれば滋味多くして人体を加養すべし例へば章魚は皮を去り奴豆腐は沸湯を注ぐなど其外野菜の洗方切り方煮又は炙り方食物の着色中毒物又は飲料水の選び方器具の清潔小兒の食物など逐一說き示したり家庭衛生として日用料理の師冊として各家是非一本を備へらるゝの必要あることを知るべし。

類書

藤本藤陰君著　**實用料理法**（全壹冊洋裝）　正價金二十五錢　郵稅金六錢

佐々木孝君著　**西洋料理法**（全壹冊洋裝）　正價金二十五錢　郵稅金六錢

下田歌子君著　**料理手引草**（全壹冊和裝）　正價金三十五錢　郵稅金八錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

工學士 增田知藏先生著

軍艦詳説

（近刊）

全壹冊

洋裝菊判上製
紙數
正價
郵税

本書內容

第一編
第壹章 軍艦の發達及沿革の概要
第貳章 軍艦の任務
第三章 軍艦の種類及階級

第二編
第壹章 軍艦製造の材料
第貳章 造船所
第三章 艦體の構造
第四章 船用機關
第五章 艤装

第三編
第壹章 軍艦の防禦方法
第貳章 装甲板
第三章 砲熕
第四章 水雷

第四編
第一章 無線電信
第二章 軍艦塗色
第三章 水雷の効果
附錄 帝國海軍艦艇表―世界七大海軍團艦艇表―內外度量衡比較表

上野義八郎君著 ●海軍兵器説明
全壹冊洋裝紙數百五十頁 寫眞銅版口繪數葉挿入
正價金十八錢 郵税金四錢

遠藤甬作君譯述 ●蒸漑機關使用法
全壹冊洋裝紙數百五十頁
正價金三十錢 郵税金六錢

增田工學士著 ●工業叢書 舶用機關學
全壹冊洋裝總クロース製 金文字入紙數三百有餘頁
正價金六十錢 郵税金八錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

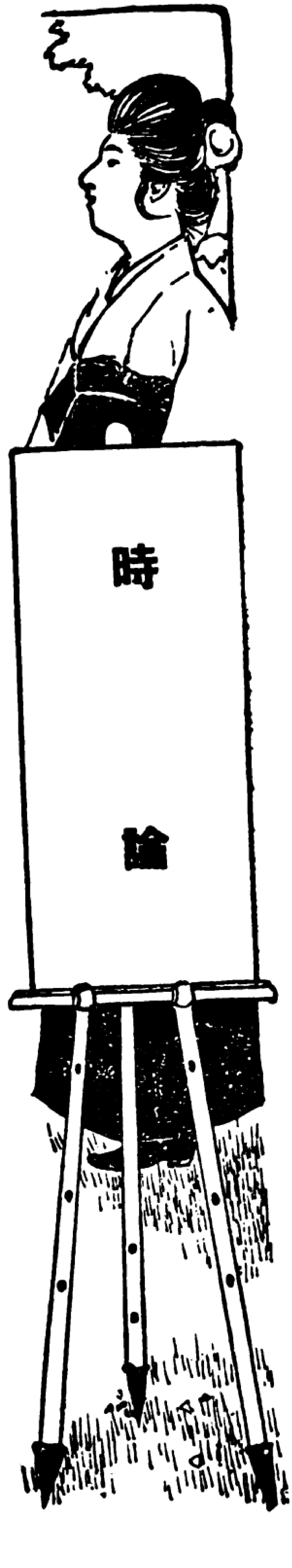


女學世界

第九號　七月五日發行

日本國民の大決心

宣戰媾和の大權は恐れ多くも我が　皇上陛下の大權に屬する事でありますから、我々民間の者が猥りに口にすべき處ろではありません、併し昨今世上の噂を承りまするに、日露戰爭も秋までには定まるだらう、旅順が陷落したらば媾和になるだらうなどいふ臆說を傳へる者があります、是れは只無稽の臆說に過ぎませんけれども、世間ではチラホラ斯樣な臆說を信じて露國が媾和を申込だらうなど考へる人もあるが。これは實に怪しからぬ話です。タトヘ露西亞が降服を申込んで來たにしても、一旦國運を賭して開いたこの空前の大戰爭が旅順陷落位で止められる譯のものではありません。斯樣な事を言ひ觸らすものは屹度露探かなぞの仕業でせう。日本國民は此の末何程の人命を失ひ、何程の軍費が費へやうとも、そんな事に屈托してはなりません。ヨシ護國の兵士が無くなれば國民軍を驅り催ふしても戰ふ決心でなくてはなりません。ヨシ糧食が續かなければ土に食ひついても戰を續ける決心でなければなりません、慾しいの戰爭をしては露國は再び頭を上げて來ます、此度の戰は禍の根を絕つまでやらなければ日本國民は將來枕を高ふする事は出來ないのであります。故に時局に對する日本國民の覺悟は長く久しく、屈せず撓まず、戰爭の終局まで遣り遂げる決心が第一です。



親愛なる日本の姉妹諸君に

米國義勇看護婦隊長ドクトル　マツギー

露西亜が、數年來、その侵略主義を以て、徐々として極東に欲望を擴げ來つた歴史は、今更ら事新しく説くまでもなく、何人も認めて居る所であります、これは或は露西亜國民全般の希望でないかも知れませんが、政府の希望であることは明かな次第であつて、その結果として、日本と遂に衝突するに至るであらうとは、かねて私共始め世界一般の認めて居た所であります、自分が日本へ參るといふ事は、この戰の起る以前に思つて居つたとで、其時すでに今日あるを豫期して居りましたが、ついに私の出發前に於て、早く砲火を交ゆる場合となつたのであります。

戰爭には、二つの方面があります、併し古代に於ては、戰なるものは單に敵を倒せば宜いと思つて居つたのであります、然るに今日は敵を懲すと同時に、人道の方面をも開拓せなければなりません、即ち博愛慈善の事

業であります、されば今後ます〳〵人道が發達して行きましたならば、戰爭の方面が、遂に一つになつて人道の方面のみが重せらるゝ樣になるでありませう、尤も其樣な立派な時代の來るのは、前途遼遠なことでありませう、今日の戰爭は、二つの方面、即ち一は軍備、一は赤十字を發達せしめて、死傷病者を救護する事であります。扨てこの赤十字事業は、國際的のつとめを爲して居りますから、其交戰國の一に對して、喜んで力を致す所であります。

この事に就ては、米國の事情を、少しくお話しなければなりません、米國では、日本の樣に、全國に亘つて居るといふ盛大なる赤十字社はありません、極めて小さな組織であつて、殆んど軍隊を助ける樣な準備がないのであります。六年前、米西戰爭の時に、米國の兵は、二十五万もありました、その內負傷兵は極めて少なかつたのでありますが、氣候やら不攝生の爲めに、チブス、赤痢等の病兵を出したとは、甚だ多數で、それが爲めに米國の赤十字社は、此等の病兵に對して準備が不足勝でありました、故にどんな戰勝國でも、不時の病兵の爲めに、赤十字の準備は、充分の上に充分の準備を爲すといふとは、極めて必要であります。

米西戰爭の時にも、又其後の比律賓の戰の時にも、米國の軍隊では、看護婦を多く要したのである、自分は軍隊に職を持つて居つたので、之れに力を盡す機會を得千五百人の看護婦隊を撰んだのであります、この場合の經驗によると、軍隊がコーいふ場合に際しては、多くの看護人を要するといふとを認めたのであります、而してその看護に任ずるものは、醫學上の學問も要り、訓練も要るのでありまして、その苦心をした結果、訓練の者の効が現はれて、看護婦の必要を認められましたが、いかに看護婦は多くとも、不時の必要があるとも、米西戰爭の時には、なか〳〵之に應ずる譯には行かなかつたのでありまして、經驗ある者の不足を告げました。

この米西戰爭に於ける時の經驗が、一層人道的の方面に趣味を有つとの原因となりまして、戰爭が起つた時

には、盡力しやうといふ考を、益々深くするに至つたのであります。偶々日露の戰爭が起りましたので、自分は米國の同情を表するの好機會と思ひまして、進んで日本に參ることとなりました。併し私の參つた原因は、單に夫れのみではなく凡そ人々が相集れば、種々なる智識の交換が出來るもので米西戰爭の時にもいろ〳〵の人が集つて互に相學び相研究することが出來たのでありますから、私共が日本に參つて、日本の看護婦と共に、看護の業に從事したならば日本の御方の爲めにもならうが又私共の智識も研ける譯です、之れが一つの目的であつて、他の人々と共に研究し互に長所を交換し互に缺點を補ひ合つて相練磨する事が出來るのであります。決して日本に來て新規なものを敎へるといふ樣な高慢ぶつた考へではないのであります。勿論、米國の婦人として、米國の好意、同情を代表して、日米の關係をます〳〵親善にしよう、との一つの務めをも盡したいといふとは、心中深く期して居るのであります。そこで私は唯今軍隊に籍はもつて居りませぬが、幸ひ其時の看護婦の團体を統べて居りますので、コーいふ場合、私共が少しでも國の爲、人の爲にならば奮つて從事しやうといふ考から參ッた次第であります、但併し今回伴れて參ッたものは極めて少數で、到底私の希望通りの働きは出來まいとおもひますが然しながら少數でありましても、私の背後に潛んで居る所の同情といふものは決して少數ではなからうかと存じます、で私は此の大なる同情を背後にして十分日本で働かうと思ふのでございます。

我が同盟帝國たる英國皇后陛下の博愛慈仁なる御思召を體して遙に日本に來遊せられたる英國貴女マッコレー嬢はマヤー夫人にも劣らぬ博愛家にして今回來遊の目的は日露開戰に對する我陸軍衛生の組織并びにその働きを視察して復命せよと女皇よりの長き主意にてある由なるが、嬢は倫敦にて私立の病院を建て身自ら其院長となり看護婦を養成して信用と有望を博し、皇室に於ける看護婦は皆嬢の薫陶の下に出でたるものなりといふ、嬢は又南阿の戰爭にも率先して看護婦隊を編成し遠く蠻煙瘴雨の域に入り幾日月の間非常の困難を餘しつゝ其任務を全ふしたる人なりといふ。

女學生の處世法

近藤刱

妻としては女學校出身の婦人ほど趣味に乏しく住み工合の好からぬものは多くあらざるべし、これ一はその學校に於ける生活の要素が夫家の家風と同化し難くして、何所までも女生徒流寄宿舍時代なるが故に然るもの實にその大原因ならむか。

女學校育ちの婦人なりとて短所もあれば長所もあるべし故に一概に之を惡しとは云はず、然れども、得點は欠點より尠く長所は短所の如く多からざるなり。此觀察は余輩一巳の偏見のみにはあらで、事實の立證するを如何せむ、之を統計に考ふるに離婚者百分中その半以上は所謂女學校育ちの婦人なりと云ふに至ては、其間多少餘義なき事情の在するにもせよ、女學校流の婦人が一家の妻として存外に不適當なる事を知るに餘りあらむ、而して又此の忌むべき現象は決して女子敎育當路者の輕々に看過し去る事を許さゞる所なり。

勿論離婚の原因とても多種なるべし夫に死に別れたる爲に餘義なくも實家に復歸せるもあらむ、或は生計の困難なるが爲に離婚するもあらむ。然れども其多くは家風に適はざるが爲に離婚の不幸を見るに至れるもの多しと云へり。家風に適はぬとは或る意味に於て氣隨我儘を意味す、况んや離婚の多くが婦人より請求せらるゝもの多しと云ふ、實にその耐忍克己の德に乏しくして夫家の家風に同化し得ざるにあらずや。

夫家の家風とて悉く善美なりとは云ひ難きも、亦女生徒が理想せる家道が必ずしも好しとも限らず、故に之を一言に許すれば古風なる日本流の家道と泰西の男女同權的家庭を基として書かれたる家事敎科書に養はれたる

と双方思想感情の融和を欠けるに由るべし。

一家に家風あるは猶ほ國に國体國風あると等しくこれに因りて以て一國一家の面目を保ち歴史をも誇るの材料と成るものにして祖先が一家を興すに當りて苦心したる事柄の大部分が殘りて、その家の習慣となり、爲來りとなれる事は何所の家にも有勝の事にして、所謂家風は斯の如くにして來れるなり、中には兒戯に等しき事柄もあらむ、餘りに利益ともならざる事柄もあらむ、然れども、其無邪氣にしてつまらぬ樣なる家風にやがて一家の装飾と爲ることもあるべく、又家族に向ては祖先が無言の教訓とも成るべし。

然るにその習慣が兒戯に類せりとて、又別段の利益あらざればとて新來の嫁婦が之を輕視し或は廢棄せんとして舅姑の感情を傷つくるが如きは大なる心得違と云はざるべからず。獨り一家中の習慣爲來のみならず一國の習慣などを見るに如何にもつまらぬ他愛無き事柄の保存されて、典禮となれるもの頗る多し、然れども其利益なきが如く兒戯に似たるが如き、たとゑば祭禮式日の如き親類附合の如き習慣は却て多大の趣味を人生に與ふるものにして、若し世の中より之を取り去らんか、實に社會は乾燥無味なるものに終らむ。

殊に女學校育ちの婦人には祖先を崇敬し或は拜禮すると云へるなどの感念は極めて薄きが如し、この祖先拜禮の習俗は、殆んど我日本人民の稟性と見るべき迄久しき間の習慣にして、何も宗教的の意味あるにあらず、亦支那流の道德論に因るにもあらずして、只今は無意味なる一箇の習俗となれるのみなり。然もこの習慣は國家擁護の上にも偉大なる勢力となりて一家の秩序を保つ上に重要となりたり。

新玉の年立ちかへる春の始めに氏神の社頭に詣で、文月半の精靈會に祖先の墓に參て、一もとの草花を手向けたりとて何程の失費あるにもあらじ、この可憐にして美しき習慣は、我禮儀國民に美俗として永久に之を保存したく思ふなり。而して斯の如き一家中の年中行事とも云ふべき事柄は多く主婦の職掌として誰の家にも行は

れ居るものにして婦人としては、か丶る事柄の一通りは心得居らねば爲らぬ筈なるを、家事敎科の中には親族知人に贈る音物の作法や水引の掛け樣を始めとして茶の湯、挿花などの如き中流以下の家庭には殆んど無用の末技までをも敎授するに拘らず、祖先禮拜の式作法などは之を書記せる敎科書のなきのみならず、講話の間に於ても之を敎授する學校ある事を聞ざるなり、されば新夫婦が新世帶を持ちて理想通りの家庭を作る考ならば別段この邊の用意なくともよけれど、苟しくも數代連綿の家に嫁らんと欲する若婦人にありては大に此の點に注意せざるべからず、別けて地方の大家などに嫁かば、舊思想なる姑舅の外に、幾多の緣戚あり又家に就て深き關係ある人々多ければ、新たに世帶を引受けなば此等の間を程よく調和し行く事最も肝要なり、若し此際に當りて無遠慮に舊式古禮を癈し、多年の仕來を一朝にして癈するが如きあれば、思ひ掛なき所より禍を招くに至るべし。新婦人の心すべき處なりかし。

祖先を拜みたりとて金錢が得らる丶にもあらず、然りながら報本反始は社會道德の起源にして殊に我國の如き族制々度の國柄にありては一層この習俗養成の必要なるを思ふ。

泰西の女學校が日曜日の祈禱、朝暮の禮讃を奬勵するが如き、これ宗敎を以て道德とする國柄たるに由るべしと雖も、學校としてはその生徒の他日一家の主婦と爲れる時に當りて其家の習慣に背かざらしめん爲の用意の一にして誠に好すべきの美風ならむか。

されど斯る作法の奬勵が宗敎的により爲れむことは希はしからず、單に一國の美俗保存の爲め後來の主婦に向て、その精神敎育と同時に作法をも督勵されたきものなり。

凡て斯の如き習慣を重ずるは年若き人よりも老人に多し、故に斯る習慣爲來りなどを重んずるの行爲が偶ま嫁と舅姑の感情を調和する所の最大方便となり導火線となる事もあるべからむ。薔薇花の下は土までも香しとさ

へ云へば、學校生活の時代に於て、この感念を養ひ置かば、希くは學校育ちの婦人は無趣味なり殺風景なりとの批難は自ら消滅せむ。

余はこの言の女學生諸君に甚だ不愉快の感を與ふべしとおもへど亦決して諸君を辱むる言葉なりとは信ぜざるなり、只如何にもして完全なる將來の母を得むか爲に、世の女子敎育者に向て家事科敎授の改善を望むか爲めに云へるのみ。

天與の美術國

藤田文藏

皆さん御承知の通我國は天與の美術國でありまして山嶽の姿、河流の有樣、草木花實の色、獸鳥魚介の形に至るまで一々先天的の美形を備へてゐる、それ故この國土に生れ、この國の天然に成育、感化された國民は知らず識らずの間に美の感想を喚起する樣になつて參りませう。

彼の歐州の美術國、然も先天的の大公園と昔しから稱賛されてゐる伊太利、瑞西の如き國すらも到底我國の美術的なるには及ばないといふ事である、勿論、彼の壯嚴雄大なる、アルプスの山、沈鬱樸茂たる獨逸の山林の如きは箱庭的風景の我國には見る事は出來ません。

前述の如く我國は世界の美術國である、美的の一大公園である、其故我が國より古來產出する文學、繪畫、彫刻、音樂、刺繡、其他百般の裝飾物は世界のいづれに於ても到底見出す事の出來ない精巧なものである。

假令ば文學で申せば源氏物語、枕の草紙、繪畫でいふと雪舟、元信の神韻ある物、書でいふと弘法大師、嵯峨天皇、行成卿の如き龍蛇奔馬の氣品ある物、其他樂器、刺繍、香爐、花瓶、置物の如き有名なる寺院堂塔或は舊家候伯、富豪の家に實物として秘藏されてあるものに就て見ると我輩のこの言の決して唐突ならぬ事を悟らるゝでありませう。

勿論歐洲諸國にても決して美術品の劣つてゐる譯ではありません。けれども歐洲各國の美術品は我國の如く神韻に乏しいのであります。假令ば樂器の如き西洋の樂器は我國のに比して趣味が淺いかと思はれる、成程ピヤノ、バイオリン、オルガンの如きは我國の琴、簫、三味線に比して單調ではなく其の音は大にして其の調は密であるけれども之れに添ふものがないのである。三味線や、琴はいかにも單調には相違ないが、之れに副ふものがあつて謠なり、踊なり、適當に人の感想を惹いて興味を喚ぶ丈のものは十分に整ふてゐるのであります故に我國の音樂會は西洋のに比して趣味が澤山にあるといふ事は西洋音樂者の毎に稱贊してゐる處である、又繪畫の方から申しても同じく一線を畫くにしても西洋畫の方は別にその線を畫くに重きを置きませんが日本畫の方では中々むづかしい、即ちその線に於ての筆致とか、筆法とか筆力とか、又神韻とか氣格とか、精神とかいふて中々仔細に吟味し撿覈するのであります。

以上の如く西洋でない事を日本では大層やかましく申して繪畫の上に意想を費やす、これは我が國が世界無比の美術國であつて千早振る神代のむかしから美想が發達してゐる爲である、是が永い間系統的に國民の頭腦に遺傳し、風土の美に順應し來つたもので到底沒趣味なる西洋人の想ひ浮ぶ處ろではありません。

それ故或西洋人は我國を評して美神の活現せる國であるといひました、實に我國の事物一として美妙の相を含まぬはなく我國民として美的感情を有せぬものはない、彼の和歌の如きは旣に敷島の道として古來我國民の

上下貴賤、貧富の差別なく一般に愛唱する處ろである、蓋し風土の感化によるものと言はねばなりません。

そこで歐州の美術は成程進歩發達してゐるには相違ありませんが我國の美術の如く一々その美術品の上に形ちの美と想の美と一致され調和されて居りません、若し強いて其美術品の上に於て我國の長と歐洲の長とを比較するときは我國の長とする處ろは即ち形體にあらずして意想にある、歐州の長とする處ろは意想の上でなく形體の上である、之を繪畵でいふと西洋畵は寫生を尊び、日本畵は寫想を重んじてゐるのである。勿論これは一長一短の存ずる所ろですべて美術の完全を期せんには其持つて居る形の美と、想の美とを能く一致調和してそうして作品の上に發揮せねばなりません。

次に少しく美術を學ぶ方の參考として御話致しませう晩近美學の研究が盛大になッたと同時に美術の品隲も又隨ッて盛んになり、種々面白い議論もあるが我輩は此形想一致論を措いて他に美術の極致を認め得ない、勿論これは美術家の夙に唱へてゐる處ろであるがしかもその實際に於てはどうであるかといふに到底此域に達してゐるものは洵に少い、假令ばこれを繪畵の上にしても如何に其布置結構が能く整ふて居り、如何に其筆力が雄健であッても又其墨色や彩色が整ふてゐても其畵の内容に何等の趣味が含んで居ないと、これは所謂糵拔の殻のやうなもので到底完全な繪畵といふ事は言はれません。

成程その畵は一寸奇麗に見へやう、美はしくはあらう、けれどもそれは一時的であッて到底永遠に趣味を以て見られない、即ち單に其術を弄したといふ丈のもので決して美術の神髓には達しないのである。

さればといふて又その作意ばかり高遠であッて不思議の妙想を蓄へてゐても其の筆力が雄健ならず、その彩色墨色が不調子であッたならば折角の想情も外面に表はす事が出來ないで觀者をして注目せしむる點が惡い、是れが即ち形想一致の欠乏したものである。

そこで想美といふのは眼に見る事の出來ない畫の內容に潛んでゐる無形の美であつて彼の一休和尙の所謂墨繪に畫いた松風の音といふものである、形美といふのは此反對で眼に見へる丈の畫の外容に顯はれてゐる美で寫實を主としたものである、觀者の側から此兩方を見れば、一方は眼に訴へるもの、一方は心に訴へるもの丶相違がある。

之れは獨り畫に就てのみならず美術本來の性質には、悉く想美と形美とが伴ふてゐる、御覽なさい文學にせよ、繪畫にせよ音樂にせよ刺繍にせよ其他あらゆる美術品は悉く此性質を含有して居るから美術の發達を圖るものは先づ此二容に就て調和し、合致して、間斷なく長短なく發達するに努めなければならぬ、之れは美術家たるもの丶荷へる天職とも云ふべきであります。

夫れから我國の美術發展の前途はどうであるかと云ふと或るものは今日よりも古代の方が優つて居るかも知れぬが美術全体の上より觀察するときは無論今日は進んでゐて且將來は確かに進むへき前途を有つて居る尤も今日は舊新の事物と思想との混淆時代であつて、其進步の有樣は恰も交叉的である、この交叉的より純一的に進むは進化の順序である。

殊に今日の時代は御承知の通り國運の發達と共に百般の學術、技藝は悉く其眞相と面目を改むる秋である、されど美術に至つては他學術との比較上其發達頗る遲々として居る樣に思はれる、之は予輩の常に憾みとして居る處である。

そうして今日の美術界は其交涉する處は支那、朝鮮のみではなく廣く歐米に及ぼして居る予輩は今日對外美術思想を發揮して廣く其長を歐米に採り、之れを我國舊來の事物に參酌調和して新なる明治美術を我國に建設せんと思ふのであります。

戰時に於ける 婦人自活の必要

塚本はま子

婦人自活の問題は、國情によりてもとより種々の相違あるべしといへども、概して平穩無事の社會に在りては、一家の主人たる男子が、義務としてその家族なる婦人を養ふ事、さしたる困難もあるまじく、又或る意味よりいへば一家族として弱者を扶助し、無能者を保護するは、家族制度上平和を保つには却て缺くべからざる要素なりやも計るべからずといへども、國家一旦事あるに及びては、國情の如何、風習の何たるを論せず、國民の半數たる婦人に、自活の能力のありとなしとは、一般國民の負擔につきて、極めて大なる相違を生ずべく、爲に國家の活動上、或は生産力に於て、或は戰鬪力に關して、尠なからぬ影響を蒙るに至るべし。現時我國の時局の如き、幸にして連戰連勝の好運に遇ひつゝありとはいへ、靜かに内に顧りみなば、日々新聞紙によりてわれらに報告せらるゝ、表れたる事實のみにてもかの出征軍人遺族の困難等聞くも酸鼻なる話ありて、假設必要物を割きても、扶助せざるべからざる必要あるかの如き感じを起さしむ、元よりかゝる人々に對しては、公に私に、各自團隊を組み、個人を以てし、夫れ〳〵十分保護するの道も立ち居るが如く、勿論出征軍人は國家の爲に總ての人民の代表として、かく戰鬪に出づべきものなれば、その遺せる家族の扶助保護等をなすべきは國民一般の正當なる義務にして、毫も恩惠的の意義を含まず、受くる者も亦安んじて受くべき性質のものなりとはいへ、若しこれを受けずして生計を立て得る者と比較せば、いふまでもなく不幸といふべく假設如何なる性質の救助なりとも、他人の助力を得て始めて飢渇を凌ぐ事は、決して心あるものゝ甘んじ得らるゝものにあ

らず、有形の物こそ得べけれ、無形に於ては却て失へる所ある思ひをもすべし。またその救助を勤むる方よりいふも、救助を受くる家族が、少ければ少きほど、完全の扶助も行き屆くべき筈にして、且猶餘裕ありなば、直接軍費にあつるも恤兵の資とするも、赤十字社に臨時寄附をなすも、其使用には聊かも困難なからん、かゝる方法に多く金錢を用ふるを得ば、積極的に國民の活力をも增し、軍隊の士氣を鼓舞する動機ともなるべし、かの軍人家族の救助のみが軍國に盡くす有志者、慈善家が唯一の手段にはあらざるべし。抑々出征軍人の家族を扶助すべき必要多きは、一般人民の生活狀態上、平素家長一人の收入のみによりて、生計を營み來たれる生ける證據にして決して褒むべき現象にはあらざるなり。勿論家族の多數が病者廢疾若しくは自活力なき小兒、不具者等の如きものゝみならば、いふべき限りにあらざれども、出征軍人の遺族悉くかゝる不幸中にあるものにも非るべければ、家族中の各個人にして、大なり小なり獨立自活の能力を有したらんには、慈善家義俠者の勞力と醵金とを、猶一層有効なる事業に使用するを得べしと感ず、軍籍に身を置ける夫をもてる妻は、何時如何なる事情起りて、夫が召集を受くべきか計られざる事を思ひ、家族養育の任務はとにかく一身自活の方法を考へざるべからず、これ普通兵の家族はもとより、兵曹下士官及び下級士官の家族はいふまでもなく、自活し得る限りの者は必ず心がくべきことなり。

▲婦人の自活には準備を要す

男子にありても自活もしくは自活以上即ち家族數口を養ひ得る爲には、多少準備する所なかるべからず、これと等しく婦人も亦、藝術技能に對する準備をも要すべしといへども、今茲に述ぶる所は主として平素に於て自活の習慣を養ふの準備なり、由來我國の婦人は家務を處理するに多くの時を費し、そが以外には少しの暇をも有せざるが多く、知己朋友の訪問も思ふには任せず、たゞ一生を良人の小間使と所謂襤褸綴ぢくりにのみ費や

し終るもの珍しからず、光輝ある人生の處置としてはあまりに拙きが如く考へらる、もとより子女多きもの或は家務の複雜なる家庭にありては、われ人ともに許すべしといへども、簡單なる家を守る身に在りても、時間の制限仕事の手順等を考ふる事なく、閑にあかしてまゝ事の如く食膳の準備をなし、衣服の裁縫にのみたづさはる事、文明國の婦人が身の處しかたとは思はれざるがあり、若し夫れ各家の婦人が二時間づゝを要すべき食事の後仕舞を、敏捷にして一時間づゝにて切り上ぐるとせば、一日に三時間を餘ますべく、一日三時間の時間を以て、分に應じたる内職を營まば、初めは不熟練にて十分の收入もあるまじけれど、一ケ月には九十時間の練習をなし得べく、一ケ年には千〇九十五時間を用ひ得べければ、學校等にて日曜日大祭日冬夏休業等の日數を除き、一日五時間づゝ修得する學術技藝に比しては殆ど一ケ年分を修得し得らるべく、簡短なる技術を以て爲し遂げらるゝ手藝に在つては、稍々熟練を得らるゝ事疑ひなかるべし、たゞこれを爲遂げんとする耐忍力と、規律を確守して必ず日に三時間を餘すべき機敏の處置とは最も必要にて、且つ最も困難なる一事ならん、されどもかの米澤地方に貧困者少く、信州方面又一般に富裕なるの理を考へなば、些少なりと思はるゝ婦人の勞力がそれ自身の自活のみならず、如何に一家の富源を作り得るものなりやを了解し得らるべく、必ず舊習に逆ひても内職を營み勞力に甘んずべき、動機を生ずべし、學術に於ても戰爭に於ても、先進國を凌駕する我國民が獨り富の度に於て稍々遜色あり、体格に於て人後に落つるの憂あるものは、殖産工業の道未だ隆盛ならず、祖先の遺傳習俗等にも依るべけれど必覚國民の半數なる婦人が一生家長の支給によりてのみ生活し、家長の負擔が重きに過ぐる爲、貯蓄もなく餘裕も亦少きに起因せずんばあらざるなり。されどまたかく婦人が全く自活の費用を得べき餘暇なく、内職等の習慣を斷ちたる者は、男子たる

▲家長の罪なり

決して婦人自身の不束のみにはあらざるなり。見よ妻を持てる男子は、如何に不器用にして彼れが朝寢床を離るゝや、そが寢具の取片づけの出來ざるはいふまでもなく、寢衣を常衣に着換ふる事すら、夫人の手を籍らざるべからず、かくて辛うじて自ら齒磨楊子を使へば、人手によりて運ばれたる湯にて顔を洗ひ捧げらるゝ手拭にてふき終りてそが水は妻によりて流さるゝが如く、足腰手足の利かざる不具者と等しく、總て他人の補助を得て、始めて日常の生活をなし遂ぐるものなればそが心のまゝに滿足せしむるやう世話なす夫人の苦心は、決して一通りにはあらざるべく、いはゆるエヘンといはるれば、痰壺を取り顔を顰むれば耳搔を奉るが如く、片時も心に油斷なく奉仕するの必要あり、まことに氣苦勞なる次第といふべし。かゝる氣苦勞をなして漸くそが朝の食事を終らしめ、一服の煙草の後、日々の業務に就くものはその準備をなし、又外に勤むるものは衣服を換へしめ携帶品を整へ靴を揃へ、ステッキを出しこれを玄關に見送るまで、寸時も夫人の手を離るゝ事なし。かくて夫人はホット重荷を下し、始めて家務の整理に取りかゝるを得べきなり、かゝる間に費す時間は實に少なからずして、主人の出勤時刻遲ければ遲きほど、家務の澁滯を來たすに至る。されば極めて敏腕なる婦人といへども、簡單なる仕事の爲に、日々追はるゝ傾を生じ、遂には全く良人の小間使と、下婢の上働とを兼ねて、一生朽ち果つるに至るべし。されば順序よりいへば婦人の自活を鼓吹する前に

▲男子に獨立を勸告し

少くとも衣服の着換へ、執務の準備の如きは、夫人の手を籍らざる習慣を養はしむる事必要なり、夫人も亦良人の爲に、洋服和服の別なく、その附屬品携帶品等、一々一定の引出或は箱の如き入物を定め、洗濯したるシャツ靴下カラ、カフスは何處、ハンカチーフ紙入煙草道具等は此處と、毎土曜日に於て夫々手落なく整頓し、來週一週間不自由なからしめ出入に一々夫人の手を要せざるやうする事は格別、困難なる事にもあるまじく、

主人にして手足の利く限り、その居間の一定の場所なる、衣服を出して着換ふる勞力は惜しむまじき事、天より健全なる體軀を受けたる身の當然服すべき義務ならん、されど婦人自活の習慣、並に男子獨立の習俗とも、因襲の久しき決して一朝一夕のよく改良し得るものにあらず、ことに我國封建の餘弊として、士人以上の者が、

▲生計の爲に作業するを恥づる習慣あり

ことに主人がその家族をして生計費を得る爲に勞働せしむるは、わが無能を世に表はすが如き感じを有するものとみえて一般にこれを好まざる風習あり、この風習が家族一般に對して家長の尊嚴を保ち女子に對しては男子の權力を高からしむる所以と信ぜられ、なるべく家長外の者が、金錢を收得せざるやうなし來たり、遂に敎育あり見識ある男子にして、妻を求むるには、その要求容貌を外にしては、小間使たる資格あらば、その他の事を望まざる者多きに至り、むづかしき家務の整理、責任重き子女の養育の如きは措て問はざるが如き間違たる見解を抱くに至る、かの昔徳川幕府が町人百姓はいふまでもなく、士人といへども身分輕きものはなるべく學問なく、事理に通せざるを望み、寺子屋以上の敎育を勸めざる內規なりしは、施政者以外の者はなるべく無學文盲にして政事の善惡、得失等を論ずるの眼識なからしめ、以て政府の威信を永久に保たんとせるものなりときく、新進の文明國と誇る、我國の明治の紳士は、婦人に對して徳川幕府の主義を行はんとせられざるはいふまでもなければ、よくその妻に對しては、能を撰び技を伸ばし舊來の習俗を打破して、平素より自活の準備を爲さしめ、一旦男子が征衣を夜營の露に濡すに至らば、妻をして他人の助をからず生計を營ましむるの用意あるべき事、必要ならん。されども婦人の自活男子の獨立とも、今日までの習慣に逆らひ、明日より行ふ事は凡人の多くなし難き事なればおのれはこれを現代の國民にのみは强ひずして、

▲次代の國民に奬勵せん

とす、いひ換ふれば次代國民の敎育者たる、母なる婦人に勸告し、切望して次代の紳士淑女をして不調法なる露西亞人の如く、衣服の着換、身体の洗滌にまで、夫人の手を煩はさで、一身の糊口子女の敎育は、良人あらざれば他人の救助を待つが如き不都合あらしめざるやう、敎育すべきを望むものなり、そのこれを爲すに、男女に關らず

▲兒童に自活、獨立の精神を養ふ

事最も必要なり、自活獨立の精神は、決して成人の後養ひ得べきものにあらず、若し養ひ得たりとせばそはいはゆる附燒刄にして、本然のものといふを得じ、先づこれを養ふには、幼兒の滿二年ほどゝなりそが手足の利くに至りて、何事をも自ら爲さん事を望む時期より、十分深切叮嚀なる監督の下に、その手足を動かさしめ、そが思ふまゝになさしむるにあり、一例を擧ぐれば滿一年半以上となり自ら手に匕の如き物をもち、食事をおのが手にせんを望むに至らば、母親はこれをして口に入るゝに適するほどづゝ、匕の中に箸又は他の匕もてこれに入れて助くるが如し、顏手足など拭ひ得るほどゝならば、自ら鼻をぬぐひ食事後は口の邊を拭かしめ、手足の汚れたる時はこれを淸潔に洗はしめ、爪を剪り髮を理め、衣服の着換、足袋、下馱、靴等のぬぎはき等までその年齡に應じて自ら爲さしむる事必要なり、只かく幼兒自身になさしむればとて、全く放擲して顧みず指導監督を怠り、準備を忽せにすれば決して成効せず、獨り成効せざるのみならず、却て失敗に陷るものなり、

▲指導は懇切叮嚀に反覆すべし

顏の洗ひかた、うがひのしかたより齒の磨きかた石鹼使用の方法まで屢敎へてこれを爲さしめ鼻のかみかた用ひたる紙ハンカチーフ等の始末、衣服の着かた疊みかた等も敎へざれば知るべき筈なし、よし敎へたりとも始めより大人の如く、巧みに成し得べきものにあらず、極めて拙く極めて遲く、見るにまだるく齒がゆきやうなるは免れ難き事なれば、苟りにも面倒くさし待遠なりなどいふ念慮ありては、かゝるしつけは出來難きものと知るべし、

▲監督は最も綿密なるを要す

前に述べたる事項につきても、一々望めるが如くなし遂げられ居るか如何を監督せざる時は、到底完全なる結果を得る事難かるべし、例へば自ら顔を洗ひ、手足を拭ひたる時も、これを點撿し清潔なる時は賞め、然らざる時は敎へて洗ひ直さしめ、靜かに叮嚀にその方法を敎ふべし、決して叱責し或は肝癪を起すべからず殊に監督は常に一定にして、或時は嚴に或時は緩なるが如き事あるべからず、特に監督が干渉となりて一々にあまり世話を燒き過ぎざるやうせざるべからず、若し一々事々物々に世話をやく時はたとへ兒童が仕事に於ては獨立に爲し遂ぐるも、精神上獨立を失ふべく、一言母親の干渉を缺く事あらば、全く何事をもなし能はざるに至るべし、猶必要なるは

▲準備を極めて十分にするにあり

例へば三四歳となりて、自ら外出し得るに至りなば、兒童の手の屆く所に帽子掛を作りて、みづからこれを取りて被り、又みづから納め得るやうにすべく、五六歳ともなり、衣服の着換をそが手に爲し得ば、簞笥の下方の引出を定めて、その衣服を藏めしめ、或は手の屆く所に、洋服かけを造る等の準備をよくすべし。若しこれを怠りて、一々人手を煩して、取り外しをなす事あらば、決して獨立の精神は養ひ難からん。又自分の玩具を自分にて始末するに至らば、年齢に應じて始めは籠の如きものに入れ、その次には被せ蓋の品物を用ひさせ、滿六歳頃よりは、錠前ある手文庫を與へ、大切なるはこれに藏めしむるを要す、この準備を怠り、十分役に立つべき兒童の手を、空しく惡戲のみに費さしむるは、極めて無益の事と云ふべし。

かく指導、監督、準備を完全にして、子女に獨立の精神を養はゞ、必ずや自活の必要なる念慮も生ずべく、多く夫人の手を待たざる男子と、良人の支給をのみ仰がざる夫人とを、近き將來に於て得ん事疑なかるべし。若し戰爭によりて婦人自活の必要を知り、婦人自活の必要を知りて、男子獨立の氣象を養ひ、相待ちて國力を增し、富源を造るの一助ともならば、不幸なる戰爭を利用して、幸福となすの道にして、「總ての事、我れに害からざるはなし」と敎へたる、聖言のよくおのれらを欺かざるを知るに足るべし。

（完）

家庭月令

七月——大——文月

（二日）半夏生。（七日）七夕……昔は此の月今夕を以て牽牛、織女の二星、天の河原に會見するとなし、上下貴賤之に供物を捧げ、手習ふ雅兒は色紙に詩歌を認めたるを竹笹に結付けて前庭に樹てたるものなり、今は廢れたれど舊慣を守る地方にては尚ほ此儀を見る。（十一日）暑中休暇始め……學校官衙の休暇此日より始まる、學生は行李を整へて歸省の途に上る。（十二日）草市……町の所々に草市立ち、魂棚飾物供物を商ふ、又た河々には河施餓鬼あり。（十三日）孟蘭盆會……此日より十六日迄家々にて魂棚をしつらひ、くさ〴〵の供物を捧げて先祖の精靈を祭り、十三日夜は麻殻を焚きて迎火となし、十六日朝又た麻殻を焚きて送火となす、蕉三の句に「送り火や虫の這ふまで見ゆる月」（十六日）藪入……商家一年兩度の大休日とて男女の雇人終日賜暇を得て親許に歸り、扨て後ち諸所に遊樂す。（二十日）土用入……暑氣其の頂に達するの季節、寒暑計九十五度以上に登る、土用中家庭に在ては衿簡衣服等、社寺に在ては寶物古器の虫乾をなす。（二十七日）肥後阿蘇祭。

（氣節）「小暑」「大暑」。上旬より氣温漸く加はり、下旬よりは著しく炎威を逞うすれば、身に着くるものは可成く蟬の羽衣の薄からんを欲する季節、貞德の歌に「何事も時とぞ思へ夏きては錦にまさる麻のさ衣。」

（農事）耕耘を終りて青稻に水を與ふるに汲々たり、又た田草取に忙はし、土用入より三日間は農家の厄日とて注意する所、蠶の板落、夏蠶の飼育、胡瓜、南瓜、茄子、馬鈴薯等を收穫す。

（園藝）此の月賞すべき庭園の花は朝顏、夏菊、白木槿などなる可し、但し植替接木さし木共手を下すには宜しからず。

（食品）茄子と紫蘇の葉の味噌汁、素麵の澄し汁、泥鰌汁、隱元豆と生鮭の煮しめ、玉蜀黍、鳳梨、アイスクリーム。

（行樂）天にも地にも陽氣煥發して何となく面白き季節なれば、塵界を去て浩然の氣を養ふ最も可なり、近くば宵々毎の夕涼に、晩がけの朝顏見に、將た又小波寄する汀の魚釣に、遠くば海水浴に、溫泉に、瀧見に、扨ては山嶽に遊びて清興を恣にす、快之に若くものなけむ。

（勝地）夏時行樂に適する重なる勝地を擧ぐれば●朝顏……東京入谷●納凉……東京上野。隅田川。埼玉大宮公園。京都鴨川、大阪中の島●海水浴……相州逗子。大磯。駿州興津。牛臥。常州大洗。房州北條。●溫泉……上州伊香保下野鹽原。岩代飯坂。豆州修善寺。箱根七湯。●飛瀑……攝津布引瀧。紀州那智瀧。駿河白絲瀧。●山嶽……富士山。上野妙義山。下野日光山。上越奥野山。武藏高雄山。甲州御嶽。

（日曜日）三日……十日……十七日……二十四日……三十一日。

男女婚姻資格の反例

妻とすべからざる女

▲不節操なる女
▲亂雜なる女
▲浪費家
▲體質劣等の女
▲遺傳病ある女
▲口に締りのなき女
▲家事不取締の女
▲裁縫の心得なき女
▲身の廻りを不潔にする女
▲同情心のなき女
▲持參金を誇つて嫁入る女
▲虚言家
▲良人を尊重するの念薄き女
▲時間に無頓着なる女
▲虚飾に走る女
▲人を讒謗する女
▲親里の榮華を忘れざる女

夫とすべからざる男

▲責任を重んぜざる男
▲暴飲家
▲不忠實なる男
▲卑怯なる男
▲多病なる男
▲無氣力の男
▲粗暴なる男
▲濫りに失望する男
▲持參金を當にする男
▲喧嘩を好む男
▲風流韻事に耽る男
▲相場師山師
▲大負債家
▲金衣玉食の習慣を脱せざる男
▲放蕩家
▲賭博に耽る男
▲艱難に挫折する男



婦人會見聞のまゝ

羽仁もと子

近日私が各種の婦人會等で見聞いたし、自身もまた頗る同感であると思ふ二三の事を記載いたします。

▲ホントーの奥様

先日明治母の會の例會に於て、コーツ夫人のお話しに「私が先年米國に歸ります前でした。歸國の爲にそれまで使つて居りました一人の女中に、暇をやるとにしたのです。すると矢張或外國人の所で女中を探して居ると聞きましたから、どんな用事をおさせになるのか、兎に角行つてお尋ねするがよからうと申して、その暇をやる筈の女中を遣しますと、歸つて來ての話に「あちらの用事はボーイでもお子さん方の傳でもなく、奥様附きの女中です。奥様のお出入にお召物のお世話をするとか、お靴をとるとか致すんださうで、彼所の奥様はホントーの奥様で御座います。」と申すので御座います。私は一寸その意味が分りませんでしたが、考へて見ると成程合點が行きました。私のやうに自分の身のまわり、子供の世話は勿論、時には臺所に出てコックの手傳もし、外に出て働きもするといふやうなのは、ホントーの奥さんとは云へないので、女中だちの心には、寐るにも起るにも出るにも入るにも、侍女にて、冊かれて一日何の用事もなさらぬ方こそ、誠に上品にそれこそホントーの奥様だと思はれるのであらうと思つたのです。これは元より教育もない女中の思想でありますけれど、併しまた多數の奥さんの中には、矢張この女中のやうに、侍女でも使はなければ奥さんらしくないと、いくらか思つて居らるゝ方もあるかも知れません。で私は分りきつた事のやうではありますが、何の必要のために女中を使ふかと云ふとを、

皆樣にはッきりと考へて頂きたいと思ひます。まづ私自身の女中を使つて居ります理由から申して見ますと、第一に私のなすべき用事が、どうしても、自分一人の手には餘るからで御座います。即ち私は出來得る限り働いて、猶足りませぬゆゑ雇人を要するので御座います。已に雇人がいるといふことになりますと、次にはまたその雇人は幾人いるかといふことになりませう。私供には唯今四人の雇人が居りますが、若しも私は一切公共その他のために外に出て働くことを致しませんなら、多分雇人は二人位でも濟むのでありませう。併し私供は雇人の數を定める前に、自分の時間を最も有益に使ひたいといふことを、考の中に置かなければなりません。下婢などに任しても充分やれる仕事のために、自分の時間の大部分を費し、他に一層家庭のため、また社會のために有益にして、しかも自身にふさはしき仕事のあるのを打すてゝ置くなどは、事の輕重を間違いて居るのだと思ひますゆゑ、內に對し外に對して、これ丈は是非自分の職分として盡さねばならぬといふ仕事をきめて、偖それには凡そ何程の時間と健康がいるであらうかと考へて見、然る後はじめて我家の仕事の中で、何々を雇人に托すべきか、またそれには幾人の雇人がいるかといふことが分るのであらうと思ひます(勿論一家の收入を斟酌して)。どうぞ皆樣も御同意でありますならば、雇人は、自分の安逸に日を送るためにいるのではなく、却て自身の精一杯働くために入用なものであるといふことを、多くの人に分らせるやうにして頂きたいと思ひます。始めに戻りまして、即ちホントーの奧さんといふものは、家庭に向つて最も立派に自家の職分を盡し、併せて家人以外に對するその人の行動が、以て家人の光景とするに足るほどの資格を持つて居る方でなければならぬかと思ひます。」

▲雇人の解雇に就て

「今回の戰爭に就て私共外國人も、またお國の軍人方に出來る丈けの同情を表したいと思ひますので、月月特別の出金が必要になりました。その爲に何か家內にモー少し儉約の出來るものはなからうかと考へて見

ました時に、まづ第一に思ひ附いたのは、別當を解雇しやうかと、いふことでありました。けれども更に考へて見まするに、戰爭の爲にすべての家庭が儉約を心掛て居る此節柄、別當が解雇されたなら、新たに口を求めることが一層困難であるに相違ない、と思ふと氣の毒でもありますし、遂に種々思ひ比べて、樣々の費目の中から少しつゝ儉約して、月々前に考へた別當の給料だけ位餘すといふことに決心して、女中だちにも此事を云ひふくめて、いよいよ實行いたして居ります。一体給料などのやうな纒つたものを、丸で一つよして仕舞ふといふやうなことは、割合に容易な事で、種々なものから注意して儉約するなどは、餘程面倒な事でありますけれど、幾分の煩はしさを忍んで居るために、馬丁一人の生活を安全にすることが出來たと思ふと、いふべからざる慰めを感ずることが出來るので御座います。



するとまた暫くして、古くから頼みつけて居ります、仕立屋が參りました。そして此節は仕事が暇で困るといふので、是非何か縫はして呉れろと申すので御座います。子供だちの夏物の裁縫が隨分澤山あることはありますけれど、前のやうな事情から、是非繰り合せて自分でいたさう考で御座いましたから、どうしたものかと暫く迷つて居りました。併しその前私に英語の教授を依賴された方がありましたのを、時のない爲に躊躇して、まだ返答をいたしませんでしたから、若し

もその申込を承知して、毎日一時間づゝの稽古をしてあげるならば、仕立屋に子供の着物をまかせることが、誠にたやすいと思ひつきましたので、早速その事にいたしました。」

▲子供の躾け

「自分の喜ばしかつた事ばかりお話しするやうでありますが、私は平生宅の子供に、御飯前には必ず取散した玩具などを、奇麗に片附けなければならないといひつけてありますけれど、時々私が外に出て少し遅れてから歸つて來ますと、玩具をあちらこちらに散らしたまゝで、食事をして居るので御座います。私は度々失望しました。子供だちの心に此方の希望が少しも了解されてないやうに思ひましたから。併しある時子供の幼稚園の先生が斯ういふ事を申しました。先日或課業の後で是から皆で庭に出やうと云ひますと、ウイラード（私の長男）獨り後になつて、机の下の紙屑などの散つて居る所にガサ〳〵して居るので、早く〳〵と催促すると、デモ私のお母さんは次の遊びを始める前には、前のを皆片附けなければならないと云ひましたと平氣で紙屑を拾ひあつめて居るのです。でそれでは皆も待ちませうと云つて、後かたづけが濟むまで一同待つて居りました、と仰有いましたから、なか〳〵容易に覺えて呉れないやうでも、方針を變へずに敎へてゐる中には、必ず結果が現はれるものであると、愉快に感じた次第でありました。」

▲一人遊ひの利害

同盟母の會大會に於て、山田寅之助氏の談話中、子供の一人遊びに就て「子供といふものは御承知の通り、誠に手前勝手な我儘なもので、また大人にはとても忍びぬやうな慘たらしい事なども平氣でいたします。といふものは同情といふ事がないからで御座います。我我の同情の念といふものは、すべて經驗から起つて來るもので、例へば自分が打たれて痛い目をした事が、度々あると、遂に他の動物も打つなら矢張痛からう、苦痛をかけるのは氣の毒だといふやうな感じが出て來るので御座います。私はまづ第一に此事よりして、御

自分のお子さんのために、充分よい友達を得ることが、困難であるからといふので、いつそ一人遊びをさせる方が安全だと、思つて居らるゝお母さん方に、反對の意見を持つて居ります。子供が始終一人ぼつちで遊ぶとか、また大人ばかりを相手にして居ますなら、所謂お山の大將で、子供の持前の我儘が増長する斗です。即ち四人なり五人なりの友達と一緒に遊んで居ると、何をするのでも順番にしなければならん、自分の番になるまでは堪えて居らなければならんといふやうなことも自と覺え、また遊びの種類でも自分の好きなものばかりする譯にいかんといふことも分ります。是に於て順番のまわつて來るまで堪えるのは、なか／＼待遠いものだといふこと、思ひ通りに行かない時の不愉快であるといふ經驗も出來ます。かくして子供の得手勝手が減つて行き、智識もまたこの様な所から多く出て來るのであらうと思ひます。」



某夫人もまた以上山田氏の意見に同意見であると云はれ、かつ「併し唯一つ注意しなければならぬことは、あまり自分の意に充たぬ子供を、自分の子供と一緒に遊ばせる塲合には、適當な監督が必要で御座います即ち構はずその子と共に、その子の家に遊びにやること、また外に出すことなどはいけません、成

るべく自身なり傍なりの目の屆く所で遊ばせるやうにありたいと思ひます。」

父母の責任

ドクトル　川瀬元九郎

茲に一の幼兒あり其母の膝元にありて何やらん打ち語へる樣如何にも愛らしく、其母親の喜ばしき笑顏を見ては打ち喜び、其母親の心痛苦悶せる顏色を見ては打ち歎くのみ、其他に何等の雜念なく何等の餘念もなき有樣、罪なしと云はんか、無邪氣と云はんか、誠に是れ清淨無垢、至聖至妙神明に近きものとも謂つべし、此有樣が果して能く其幼年の頃より成人したる曉まで汚されず損はず、亂れずして繼續し得らるゝものとせん乎、人類の幸福は實に廣大無限のものならん、然れども變化轉換極りなきこの人生の常として斯る實例は極めて稀れなるものなり。

今この人世の有樣を見渡すに人漸やく其幼年時代を過ぎ去りて、卒一歩踏み出して世渡りの首途を爲さんとするや、人生不測の罪惡をつゝめる惡魔は忽ち種々樣樣と形を粧ふて彼等の身に襲ひ來り、彼の無垢清淨なる美を害し、至聖神明の德を傷くるに至るは世間に珍らしからざる實例なり、世の諺にも長生すれば愧多しと云へり、罪なく、あどけなき幼年時代に早く死したらんには、ことなきものを憖じい成長せし丈に世に赤愧を曝すはさても淺猿しき世と言はさるべからず、愛らしき花の盛りの幼兒を空しく無常の風に散らさしむるには、其母親の心痛悲歎は如何ばかりなるべき、去りながら其母親は死したる子の外に猶生ながらへる子もありて復た慰むるすべもあるべきなり、否な其生存る子を見て歎き、却つて其死せる子を想ひ遣りて慰むる場合なきにしもあらず、是は如何なる場合ぞと云ふに、後に生殘れる子は其死せる子と同樣に幼き頃手に手を盡して蝶よ花よと育て上げ、只管其生ひ行く先きを樂しみ居たる甲斐もなく、其成長するに從つて

悪事を働くとのみ増長して、其身は勿論親の面目までも傷つくる如き悪漢とは成り果てたり、之に引替へて死したる兒は無垢清淨にして頑是なき罪なき幼稚の中に死したるなり、さて此場合に於る母親の心は如何ならん、死したる幼兒は固より悲しむべしと雖ど幸ひに無垢清淨の中に死したれば悲痛の中にも又一點慰さめ得べきものあり、一方は生存らへ居れは喜ふべき筈なるに生き愧を曝す放蕩無頼にして却つて其心を痛ましめたり、是れ世間多くあり勝ちの實例ならずや。

幼兒を失へるは固より悲しむべきことなれども、成人して後、放蕩無頼の悪漢となり下る子を持てるも、是れ亦歎はしきことならずや、幼稚の時より兩親が注意を加へ丹誠に丹誠を盡して愛育したる幼童が、美はしき家庭の教訓に從はずして終に罪悪不測の淵に沈淪するもの世間に其例乏しからず、世に悲しむべき事故多しと雖も之に上踰す悲しみはあらざるべし。

試みに此幼き小兒を見よ、其容貌は恰かも薔薇の花の如くに麗はしく血色も艶麗にして身体の健康に申分なく遺傳性の疾病毫もなくして常に欣然として笑ひ恰かも妙なる音樂を聞くに異ならず、兩親の心よりすれば斯る幼兒が成長して一個の男子となりたらんには必らずや世に有用賢才の人ならんと、前途に多望を囑するなるべし。

然れどもこの如き幼童にして中途毫も失敗することなく成人に達するもの世間果して幾人かある。多くは是れ無智不善若しくは渡世の逆境に抑壓せられて天與の美質と能力とを失ふもの少からず去りとは又餘りに情けなく歎かはしき限りならずや。されば吾人は今是等の事項について體育、智育、德育、の各方面より養育の方針を抄記すべし。

▲体格

幼童が其父祖より受け繼げるもの丶中極めて大切にして又極めて價値あるものは、強健なる体軀なり、短小羸弱なる犢牛は到底強大なる牡牛となること能はず、之と同一理にして矮小羸弱なる幼童は終に身心共に活

潑强健なる一男兒となること能はざるなり、勿論多少の例外として幼少の時、前途望みなしと見做したるものにして、後健全强固の人となりたる人なきにあらざれども、此は千百人中僅かに一人あるのみ。到底一般の比較にはならざるなり。

体軀健全ならず身心共に不活潑にして何事をも成し得ざるの幼童、世間に其數甚だ多し其原因は果して如何多くは是れ其父母の懶惰放逸なる習慣に基かずんばあらず、試に其父母平生の習慣、生活狀態に就て見よ、彼の金滿家の如きは妄りに金錢に飽かせて其の生活を盛んにし殊に其の肉体の慾情を逞ふし、而して其子供の將來に於ける福祉安寧は毫も其念頭に介せざるなり。即ち唯不注意に、馬鹿遣ひに其金錢を浪費するのみ、斯くして其の健康を破り体力を無益に費すが如きは親として子に對するの道念欠乏せるものと言はざるべからず、而して是等の父母の生みたる子供は其父を非難して左の如く云ふにあらずや、曰く我体格を斯くの如く微弱ならしめたるは全く我父の罪に歸せざるべからず、我父は暴飲暴食を爲し、名利の念に役せられて過度の勞を取り、過勞の結果として遂に過度の嗜慾を逞ふし、妄りに酒を飮み猥りに惰を嗜み以て我体軀を薄弱ならしめたり、と、又其母の方を非難するの語に曰く、我身体の健全ならさるは半ば母の不注意に歸せざるを得ず、母は常に自己の生活の餘裕あるを濫用して衣服、裝飾の事にのみ意を注ぎ、時の流行とし云へば、其健康に害あるや否やは毫も其念頭に置かず、直に其流行に狂奔しその結果運動を怠り、無益の飲食に耽り、其健康上身体發育上の事に就ては甚だ無頓着なりし、是即ち我身の不健康となりし所以なりと、其子供等より斯る非難を受けざる父母蓋し世間に幾人かある、生れ得て健全なるものは人生幸福中の最大幸福なるものなり、然るに斯る最大幸福を受るもの世に幾人かある、人類の大部分は皆然らざるなり、戒心せよ世の父母たる者は其子をして一個の國民となし、一個の成人として世渡りを爲さしむべき重大なる職責を荷ふに非ずや、斯く國民として世渡りを爲さしめんと

欲せば其れ相當の準備なからざるべからず、即ち子を養育するはその子をして單に衣食住を給するのみを以て足れりせず、寧ろ一身獨立して勇敢に、正當に此の世に立ち働かしめんことを以て目途とせざるべからず。

▲衣食住

世には一歳未滿の乳兒が食物不良の爲めに斃るゝもの甚だ多し又五歳未滿にして衣食の二者不良の結果死するものも亦甚だ尠からず。

文明開化を以て稱せらるゝ國民の内に在ても空氣流通の不充分なるが爲め、愛兒をして不潔なる空氣を呼吸せしめ徐々に之が害毒を受けしむるの家庭甚だ多し、斯くの如きは畢竟するに止を得ざる事柄にあらず、豫防すれば豫防し得らるべきものなり、然るに空しく之を等閑に付するより、折角成熟せんとするを中途にして夭折せしむるに至る、心ある母は須らく此點に就て注意する所なくんばあらず。

幼童の身体に絹布を束縛して運動の自由を妨ぐるも、又寒暑を凌ぐに不充分なる衣服を纏はしむるも共にその當を得たるものにあらず、宜しく衛生法に鑑みて幼童を養育すべきなり。

▲教育

如何なる幼童と雖も皆な其れ相當の教育を受くべき權利あり教育の意義廣きものにして單に學校に行きて學藝を練習せしむるのみならず、教育の目的は人をして處世法(世渡り)の上に就て最も多くの便宜を得べき準備を爲さしむるにあり、社會の組織を發達進歩せしむる上に於て最も有力なる人たらしめんと欲するにあり語をかへていへば文明日新の社會に立ちて有用有爲の人たらしめんと欲するにあり、若し一の教育制度にして智育、德育、體育、此三科中の一にても忽かせにしたらんには、是れ決して完全の教育といふべからず、今茲に一の幼童を教育せんに單に學術技藝のみを練習せしむるとを勸め、眞理、純潔、善良、正義、及其他

の道德的心情を發達せしむることを怠りたらんには、其結果は如何ぞや、やゝもすれば犯罪者の巧者なるものとなりて巧みに法網を避け公道を破壊するものとなり了ふせんのみ、又智育、德育の二者專ら進みて適當なる体育之れなしとせん乎、後來世に出でんとする曉に至り、体力之に伴はざるが故に活力を要する社會には到底立つ事能はずして、却つて社會の厄介者となり終らんのみ。

されば教育の目的を達せんには智、德、体の三育を正當に施して、偏重あらしむ可からず。

▲習慣

人は其幼稚の時より廉正純潔なる習慣を養成せんこと最も大切なり、取り分け成年に達せんとする前、數年間は、極めて注意を密にせざるべからず、習慣は造られ易くして變へ難し一旦習慣となりたる上は、非常に苦痛を感ずるにあらずんば、變ずること能はざるなり、抑も習慣なるものは善惡共に同一の作業を幾度となく繰返して爲し續けるより初めて造られ得るものなり、今善作業を幾度となく繰り返して爲し續けるとせん乎、次第〳〵に之を爲すこと容易になり、後には殆ど機關仕掛にて之を爲すかの如く何の苦む所もなく無意識に、爲し遂げらるゝに至らん、是れ取りも直さず善作業の習慣となりたるものなり、惡作業の習慣となる亦た同じ、世の父母たるもの注意せずして可ならんや。

今、人の起居、動作共に和平にして而かも禮讓ありとせん乎、相見る人相逢ふ人皆な之と友たらんことを欲するに至る、是れ他なし其幼稚の時より善習慣を養成したる結果に外ならざるなり、之に反して智德の素養は前者と同様なるも、其擧動野卑にして嫌惡すべき態度ありとせんか、之が爲めに處世の事失敗多く、從つて生計上自ら困難を來すに至る所以のもの、他なし其幼稚の時より惡習慣を得たる結果たらずんばあらず、幼稚の時に得たる惡習慣は通常其人の一生涯其身に附き纏ふて離れざるものなり、人其幼稚の時は頭腦柔軟鋭敏にして物に感じ易ければ、如何なる反點も直に之

が感化を受けざるなし、而して此習慣なるものは身心の作用より道德上の作業に至る迄思想の總てに多大の行爲關係を及ぼさゞるはなし故に幼稚の時に際し端嚴整正なる習慣を養成せんこと極めて大切なり今父母が其子の敎育上に關し全く無頓着にして爲すが儘に打ち棄て置きたる結果其子は放慢懶惰不注意等の惡習慣を得たりとせん乎、斯る幼童は終身何事業を企つるとも一として成功することなく、空しく齷齪として苦しまざるを得ず、之に反して他の幼童は敎育法其宜しきを得て、秩序、敏活、淸潔、整頓、信實、等の習慣を得たりとせん乎、處世上の事業一として成功せざるはなく、最と幸福に渡世を營まんこと、毫も疑ふべきにあらざるなり。

肉体の習慣中最も重要なるものは食事に關する習慣是れなり、抑も此食事に關する習慣は極めて幼稚の時に養成せられ、而して後年の健康と幸福とに大關係を有するものなるが故に、此事に就ては取り分け注意を欝にせざるべからず、世の家庭を見るに、稚き時より飮食物を以て單に其口を喜ばすものとするの習慣を養成すると往々にして之れあり、夙に斯る習慣を得たらんには成長して後空しく食慾の奴隷となり暴食、暴飮を恣にせんのみ、されば幼童には其稚き時代より食慾を節制せしむるの習慣を養成せしめざるべからず、幼童をして其好むが儘に食事せしむるは健康を害し消化器病を釀すの媒助となるなり、故に幼童の消化器管に相當するものを擇び、適當の分量に於て適當の調理法を施こし之を一定の時刻に給與せざるべからず、又た彼の胡椒、芥子、酢の如き嗜好物を幼年時代に用ゆるときは結局胃弱を惹き起し、或は其他の疾病を釀すに至るべきなり、愼ますんばあるべからず。

規定の食事以外に間食を爲すの習慣は、幼童中には珍らしからぬことにて強いて咎むべきことにあらずといへども、是れ決して健全なる食慾の結果にあらずして、往々胃の調和宜しきを得ざるより生ずる不健全の嗜慾に基因す、故に注意して成るべく間食せしめざらん事を要す。

▲父母の信用

父母たるものは其幼兒をして幼稚の時より、自分達を信用せしむべき性質を養成せざるべからず、斯く信用せしめて後其子供等の心痛する所、樂しむ所、或は其希望、願念等を詳細に知悉し、以て安寧幸福なる方面へ其子の心を指導せんことを要す、即ち幼童の性質、嗜好、擧動等を詳悉して之に適當せる衣食住を給し、其安寧幸福を計るは、親たるものゝ義務にして、軈て又た其子をして已等を信用せしむる本なり。

▲家庭

父母たる者は、其子供等に美を愛するの觀念を養成せしむるの職責あること、恰かも其子供等に善を愛せしむる職責あると同一なりと心得ざるべからず、先づ子供等に美を愛するの觀念を養成せしめんには、屋の内外の粧飾等に注意せしめざるべからず、勿論其粧飾は貧富の度合に應ずべきものなること、勿論なれども、好し左までの富なしと雖も其れ相當の粧飾を爲さんは決して難き事にはあらざるべし、單純にして左まで高價ならざるものにても、尚は且つ一家の粧飾品として美を呈し韻致を增さしむるに足るべきものあり子供の漸次成長するに從ひ、有用にして興味ある書籍を備へ置くも亦此の趣旨なり、兎に角子供等をして家庭を愛するの心を養はしめざるべからず、世間愉樂多しと雖も一として一家團欒たる家庭の和樂に替ふべきものなしとの念慮を生ぜしめざるべからず、罪惡の邪路に踏み迷へる幾千萬の幼童は、概して暗黒不良の家庭中に成長したるものに多し、之に反し善良なる家庭に養はれたるものには、罪惡不測の淵に陷る事鮮し。是に據て之を觀るも、善良なる家庭は子供の養育上極めて大切の事なり。

賢母の手かゞみ

法學士　松村仙藏

▲母親の監督範圍

保姆は小兒の品性を發展する上に大なる價値を有するものなり故に世の母たる人は十分に保姆の性情を知悉せざるべからず、而して母は常にその小兒が世間百般より薫化さるべき事柄に關して極めて細心に注意し常に之れに應ずる適當の準備なかるべからず家内の人々は家事に多用なる母が斯かる事に費すべき閑暇なきを認むるならんも、世間の經驗に照らすに之を成す人は最も閑暇の多き人にはあらずして、寧ろ何事にも注意深き人にあり故に母が自ら子供を教育せんと欲する忠實なる心掛なくばいつまで立ちても如何なる境遇にあるも其暇はなかる可し、然るに世間多くの母親は他人の子に就ては兎角の批評を下す事多く家事多忙の際にも人の子の事としいへば様々の噂をなしつゝあるにも拘らず自分の子の上を見る事淺し若しも世間の母親が他人の事を注意する熱心の三分の一を我が子に注ぎたらば必らずや大なる功徳を生ずべし、而して今日兒童教育の任にある母親は種々なる書物を見て新しき知識を得る丈けの勞なかるべからず、近時中流社會の婦人は新しき書を讀みて之が準備に費す程の閑暇なきにあらざるにこれを義務として勉めざるは悲むべき次第といふべし世には又其子の教育に資せんとして種々なる書を讀むも、自已の交際上に何等の益なきを思ひて中途にして放擲するものあれど、是れ大なる誤解なり母親は常に子に對して教師ならざる可らず、而して其子の勉强の方法發育の情態等につき極めて熱心なる注意を加へざるべからず、去とて予は世間の母親に萬能萬智の學者なれと注文するにはあらず、少くともその子供の根本的品性陶冶に關する必要の問題を自ら解決するだけの智識はあり度きものなり世間にては往々、「私はそんな學者でありません」又「そんな暇はありません」「私は家計が困難でそんな事に關係して居れませ

ん」「子供は厄介で迚ても根氣が續きませぬ」などいふ辨解は元より母親として言ふべき言葉にあらずして元より是を採用すべき限りにあらざるなり。

▲奬勵と同情、發明

小さき子供は過言し易きものなり、之れを抑ゆるは母の忍耐力に據るべし是れ子供の失敗を控ゆる手綱を弛むるものにして其母は子供を愛せぬ者といふも可なり、其他子供の前に横はれる各種の誘惑は母の愛と力との全部を注いて救濟せざる可らざるものなり。故に「母親は世間に對しその子の爲め根氣が續きませぬ」てふ辨解を許さゞるなり、一度子と呼び母と云はれては意志の力の生すべきは自然の義務にして且之れ有りてこそ母たるべき價値ありといふべきものなれ、「だつて私は何も知りませんものこの子には困ッて仕舞ふ、……」などいふ抗議は母親たるの資格を失ふべき言にして實に如何なる敎育をも破壞せんとするものなり。假令實際然りとなすも、徒らに母たる義務の範圍を狹くせんと試むるものに外ならず、是に於てか母親たるべき女子に普通敎育の必要なる所以にして、又母となりては此に關する幾多の研究を怠る可らざる所以なり、而して母親は其知れる所を子に敎へさへすれば子供は之れを基礎として進むことを得るなり、世の母親よ希くは義務は束縛なりと記臆せよ、然らざれば我が子に對して怠ると多かる可し、怠惰の結果は遂にその子をして世に有用なる材とならしむる事能はざるべし前に述べたる如き小膽、疑惑はすべて敎育なきもの丶誤解より來るものにして多くの母は、例へば算術に於ては或規則を以て速に解釋し、子供の會得すると共に次に進まんと欲するなる可し、或は歷史的の小册子を取り聲高く讀み聞かせて、其之れを記臆せんとを望むなる可し、然れど此等は眞の敎育と稱すべきものにあらざるなり、唯敎師としての課業の順序たるのみ、而して些々たる事の如しと雖も、敎師は子供と類似の心を有つと必要にして、子供が如何に無邪氣なる眼を有すとも、敎師にして老成ぶりたる眼を以て見たらば其

の効甚だ少し。譬へば支那日本の古への敎育法のごとし、無邪氣なる子供に敎ゆるに論語、實語敎のごときむづかしきものを以てし、忠孝嚴格の說を取つて敎へたるがごとし、敎育の効なきや知るべし、故に敎師は常に子供の如き眼を以て世間を見、子供の如き心を以て之を爲さゞる可らず、之れを爲すには子供の生涯に就て知る所多きを要し、隨つて材料の蒐集及研究に勉むる價値あるなり、又母が子供に時々問題を出すよりも遙かに多く子供は疑問を提出するらん、斯かれば母は一々之を解釋して聞かせ多々益益辨する丈の研究をなさゞる可らず、要するに敎育は



子供に對して講話をなすことにあらで、注意深き暗示、巧なる獎勵及暖き同情に因りて子供自ら種々の事實を發見せんと勉むる樣導くことなり、子供が爾來知らざりしことを母の話に依りて始めて知るよりは、自ら之を發見する時の愉快は如何ばかりか重大ならん、而して假令告ぐる必要ある事にても暗示を與へさへすれば之を解する樣、其心を慣らし、總ての方面に此種の鍛錬をなせばなす程益々子供の理解力增進するなり、然るに世には之を書物に讓り談話に任じ此好手段を見棄てんとする母多きは歎かはしき次第といふべし。

教育の一般の原理を知らんと欲せば、書は積んで山の如し、されど主として左の如き要領を含むに似たり。

（一） 常に具體的より抽象的に進むべし、此故に子供が自ら實例に據りて知り得る迄は規則を示す勿れ。

（二） 常に一歩づゝ進み而して絶えず其過ぎ去りし土地を再び閲せよ。是れ甚迂回するに似たれど却て進歩發達する所以なり。

（三） 常に目及耳に訴へよ、言語にて千萬言ひきかすよりは事實を示して解釋せしめよ。

（四） 子供が其用ふる言語の意味に就て如何なる觀念を有するかを最も注意深く試みよ、譬へば戰爭とは何様に解釋せるか盗賊とは如何なるものなるかとの觀念のごとし。

（五） 若し母が今告げんとする所を子供が畧推量せるに似たる時は（昔話の題にても）成べく然るべき機會を與ふるをよしとす。

（六） 若し新しき事實を告ぐる必要あるに際しては一時に數多を告げぬ様にし、子供が確實に其の一ツ一ツを了解せんことを計るべし。

（七） 子供の成し得ることは之を爲さしむべし決して他人の手を藉す勿れ。

此種の項目は一々枚擧に遑あらずと雖も、總て物は之れを會得せしむる方法如何に依りて結果に是非あるを知るべし、而して教育に於ける一大秘訣は同情にして趣味深き同情は實に教育の成功なりと知るべし。現今の社會教育に於て母親の無趣味なるは一般に卑下せらるゝなり歐洲近世の巨人と呼ばれたる獨逸のゲーテは幼時その母親より趣味多き教育を受けたる結果によりてこの如く成功せり、母親の無趣味は實に其の子を上品ならしむる事能はさるべし教師は恰も百科全書の如く或は魔術者のごとくあるべし而しく正確なる知識の人たり、而して品行上の指針たるなり、故に母も眞の教師たらん程の覺悟ならば同情に富み、科學の智識に富み以て無趣味を避け、各方面の思想をいろいろに應用して無限の智識を求むる子供の理解力を養

成することに勉むべきなり。

▲職業の選び方

世間一般の母親よ我子をして如何なる職業に就かしめ如何程の收入を得せしめんと焦慮する勿れ、要は唯勉強、着實其の定むる處ろに隨つて疑はず惑はず熱心せしめよ。

少年をして自家の職業を選擇せしむるの困難は言ふまでもなく且つ其困難は今後益々增加すべきは言を俟たす、而して何事にも勤勉は貴ぶ可く怠慢は痛むべし、然るに青春の人にして生業を外にして徒らに飽食暖衣を希ふ者多きは歎はしき事なり。



學校の教師は往々其監督の下に於ける學生の前途に就て相談を受くることあり、隨つて又種々非難せらるゝこともあるべし、兒童が成長して丁年に達する頃までに其目的と生活上の進路を定めざるは失敗の原因なり、第一斯かる有耶無耶の間に在りて進路一定せざるは可惜青年血氣の精力を徒費破壞するものにして人間一生の誤といふべし、抑も學問研究の爲に進む順路の左

右には晴天の星の如く數多の職業あり、而して其目的さへ定まれば十六七歳なる少年にても、現在の勉强は將來成功の母なるとを知るに難からず、第二に幼時職業に對する希望は誰れしも大同小異なれど、年稍々長じて、愈眞に一定の職に就かんとするに際しては、大に迷ふものにして中には不幸にして意外の職業に身を擲つ者其實例少からず。

されば其子十六七歳に達し稍普通の知識備はり、其實力の程も推知せらるゝに至らば、父母はその子に向ひ「お前は一体どういふ職に就て一生の幸福利益を得世の中の爲にならうと思ふか」と問ひ二三の職業に就て選擇せしめ「マアゆつくり考へて見てお定めなさい」と諭し斯て半年以内に其子自ら決する所なくば他より之を決定する旨を告げ「それでは親の方で極めてあげやう」と告ぐるを要す、此半年間誰しも熟思する事勿論なるべけれど、人々に依り其考ふる所ろ各差異あるべし。扨てその差異に就て察するに少年が自巳の能力を認識してその職業の適否を考ふる者は最も優等にして職業に對する好惡の念を繰返す者は最も劣等とす、而して十六七才の希望は比較的軍人志望が最も多く決定せらるゝを常とす、然れども何れの場合にも準備的訓練は必要なり、されど一の職業より他に移ることは能はずとはいふべからず。唯注意すべきは、年の若き内に定むること肝要なり。醫者が、辯護士となり、商人が官吏に轉ずるが如きは不可能の事なれども。職業の性質上あまり懸隔なきものは都合により轉せしむも又可なり、故に誤つて性質に適せざる職業を選みたりと認知せば速かに方針を一變し確かなる目的に向つて轉せしむるを可とす、されど此際注意すべきは徒らに他人の身の上を羨みて迷ふ勿れ他人の好地位と他人の收入を見て事を定むるは極めて不健全なる選定と言ふべし。

又人間の成功は、決して年齢の少長に關係せざるなり、二十五才にして既に嶄然頭角を顯はすものあれば三十才にして猶身を立てざるあり四十才に及んで稍々家を成すあり、年老いて身の立たざるは不幸の甚しき

ものなれども、血氣定まらざる黃口の少年にして俄然好地位を得るが如きは危險にして前途失敗を覺悟せざるべからず、要するに文明社會秩序の整然たる國家に於て人の立身出世は階段を踏むがごとし如何なる職業と雖も未熟、成熟、老熟の三期ありて、この三期に於て各々應分の才能を發揮し以て一生の業を成功せしむるにあり、假令ば是れを軍隊の上に見んか、二十五才にして少尉となり、三十二才にして大尉となり、四十歲にして少佐となり、五十前後にして大佐若しくは少將となるは今日一般の例なり、この如く人の才能は多年の勉强と經驗によつて熟練し來



るものなれば黃口の少年にして好地位を占め、多額の收入を領收するが如きは失敗の恐れなしとせず、世間多くの職業又概ねこの狀態に在るものと知るべし。故に要は其道德心の發達並に一定不變の目的に向つて勉勵の功を積むに在り、扨て職業を選ぶに就て最好き方法を子供が相當の年輩に達せし時、其目前に事實を示し、其志す處の職業の狀態を說明するにあり、而して其職業と收入、收入と生活の關係を知らず識らずの中に了解せしむること緊要なり、されど既に其の職業に就きたる上はよしや收入少しといふも決して其子の選擇せる職業を妨ぐることある可ら

ず是と同時に少年が職業に對する精神のある處を見て注意勸告することを怠らざる樣すべし、現今の如く世界一般國家的社會的の觀念發達してより、職業に高下の觀念薄くなり如何なる職業と雖も眞面目に勤むるものは神聖にして犯すべからず且つ文明の進むに隨て所謂不生產的職業は消滅す可し、又學校卒業後直に相當の收入なきを以て方針目的を誤りたるが如く速斷する者あり、是れ實に今日一般の迷想にして實に短慮、愚痴の甚だしきものといふべく。現今歐洲各國に於ては大學を卒業せし專門の學士と雖も數年間は事務見習として無給に働らくの風習なり收入は經驗と熟練に酬ゆる手形にして老成に及ばざれば多額の俸給は得難きものと覺悟せよされば收入少しとて目的を誤りたるものと誤解し中途にして是を變ずるが如きは非常の迷想にして其子の一生を不成功に了らしむるものと知るべし。兎に角少年十六七歲に及べば前途の方針を豫見して多少の準備をなすの必要ありと知るべし。

一日醫者

糸左近

▲腋臭（内股の臭きも含む）

［原因］先天的にもあるし、或は原因の分らぬのもあるし、或は不潔不性からも起る。

［病狀］誰も知つてゐる如く、發汗と共に、一種の惡臭、即ち葱のやうな臭氣を、腋から放つのである。これは傳染するなど言ふけれど、信じ難し。

［療法］分泌物の出ぬやうに、乾かさしむるが肝要である。さうするには、澱粉或は明礬末を撒布し木綿の片を挿んでおかねばならぬ。又

撒里矢爾酸　二、〇　澱粉　五〇、〇

右能く混せて撒布するも可い。

右はすべて晝間の藥であるが、夜は

歇貌拉氏軟膏　適宜

右腋部に貼けて寢るが可い、さうして夜が明けた

ら、拭ひとり、撒布藥と取換るのである。斯様に施すこと、五六ヶ月も續けて試るが肝要である。

▲癜風

〔原因〕長い病氣、或は傳染、或は体質薄弱、或は不明の原因もある。

〔病狀〕これには白癜風、赤癜風の二種あるが、何れも始めは、皮膚に小點生じ、放擲つておくと、次第に周圍に蔓り、後には腹、股、手足遂に全身を被ふやうになる。

〔療法〕他の病あらば、それを治すが何より肝要である。其の病さへ治れば、癜風も亦自ら消滅するものである。身体薄弱なのは、滋養強壯の食事を取り、運動をなし、健胃強壯劑を用ゐるが可い。何れにしても、左の外用藥は甚だ効がある。

ゴーア末　二〇、〇　酢　一合半

右よく混せて一日數回塗り附くべし

又左の藥も、却て右のより優るかも知れぬ。

撒里矢爾酸　五、〇　酒精　一〇〇、〇

佩里設林　八、〇

右よく混せて一日數回塗布

▲黒痣

〔原因〕先天に、或は生後に、皮膚の色素が一部に沈着するのである。されど、何故に沈着するかは、未詳である。

〔病狀〕誰でも知つてゐることなれば畧す。

〔療法〕これには種々の方法もあれど、何れも劇藥であつて、危險の恐れがあるから、素人の方には其の治り様が遲いけれど、左の藥が可からう。

格魯兒石灰　〇、一　醋酸　一〇、〇

右少し宛其の部のみに塗るべし。

▲母斑

これは其の原因が黒痣と同じ道理で、唯範圍の廣いのであるから、療法も亦同じ譯であるが、併し之を治さうとすると、皮膚に傷害があるから、皮膚病專門の名醫に就いて、治療を乞ふが可い。しかるに、今これが療法を掲ぐれば、「一日醫者」の主意にも違ふのである。

▲無毛症

〔原因〕外傷皮膚病の爲もあれど、多くは不明である。又高年もこれが原因となる。

〔病狀〕火傷或は皮膚病の爲に、毛髪が生へぬのである、即ち皮膚が禿げて、光澤を放つて、滑らかになる。又生來普通人の生る所に生へぬは、顔手足の皮膚の如くに、白い贅毛の外は無いのである。

〔療法〕禿げて毛根の無くなつたのは仕方が無い、さうで無いのは石鹸をつけて、十分に洗ひ、然る後百倍の石炭酸水、或は撒里矢爾酸一瓦を温湯百瓦（半合）に溶かした水を塗り、乾いてから、

芫菁丁幾　一〇、〇　酒精　四〇、〇
丁香油　二三滴

右よくふり混せて、筆様の物を以て一日五六回も塗るのである。容易に効の無いもので、半年以上も忍耐せねばならぬ、世間の賣薬廣告を見ると、如何にも名薬があるやうなれど、爰に掲げてあるのより、優つてはをらぬ。

これには随分滑稽な話がある。髭の無い人が、芫菁丁幾を附くれば善いといふことを聞いて、早速試みた所が、水泡が出來、其の後禿げて滑らかになつたとか、或は又石鹸などで洗はずに、直に塗り、一年も行うたけれど、何等の効も無つたなど、實に笑ふべき至りである。何となれば前者は芫菁丁幾に酒精などを混せぬから、餘り強く皮膚を刺戟し、後者は洗はぬ爲に皮膚に脂があるから、藥を受け附けぬのである。能々注意すべし。

▲耳漏

〔原因〕素人の方に解り難いから畧す。

〔病狀〕耳の中から、粘液或は膿汁様の物が、時々又は絶えずジブ〳〵と出るのである。

〔療法〕スポイトといふ器械に、左の藥を注ぎ、後耳を傾け、綿を以て能く拭ひとるが可い。

硼酸　二、〇　倔里設林　一〇、〇
微温湯　一〇〇、〇

右一日二三回洗滌

〔注意〕すべて耳中に入るゝ藥は、其の温度は肝要である、若し冷たければ腦貧血を發し、熱ければ腦充血になり、何れも一時眩暈して苦しむことがある、故に其の温度は水氣を放れてゐるといふ位が上等である。

實岡に對しては、誌上を以てお答へ申さんと記しておきましたが、郵皆々郵券を入れて返信を乞ふとしてあるので、私の身に取ると、郵券唯取にする譯にもゆかぬから、悉く返事をしましたが、何うも仲仲繁忙であります、願くは誌上を以て答ふるやうにして貰ひたいのである。

又東京の方の中には私を立派な玄關でも構へ、金側の時計を閃めかしてゐるだらうと考へて、態々訪れて來らるゝのもあるやうであるが、私は以前開業してゐたこともあるけれど、繁忙を避けて今は唯一小屋に膝を容れて、或る一科を專心に研究してゐる老書生であります、そんな者にでも御用があつたら、前以てお知らせあれば在宅してゐませう、診察して處方箋は上げませうが藥は差上げませぬ、何うか其のお積で。

食品性分　臺所控え帳

藤葉女史

今日食物の改良とか何とか樣々の論說がありますが之等は畢竟理想的の論で、云ふ可くして行はれない。さらば如何にすれば最も營養の目的に適ひ、而も經濟に適したものが出來るか、よく其食品の含で居る性質を知つて消化し難いものでも他の食品との配合により消化の宜いものにするのであります。昔からよく申します芋蛸など丶云ふのもつまり海產物と陸產物との兩性分が合して何か其處に化學的作用を起して柔に煮えると云ふ樣なもので、一ツだけ煮ますと固いものも他のものと一所にすると柔になると申す樣なもので、之は只一例でありますが、其配合に依て何でもなります故、其性質性分を知て置く事は必要であります。

▲穀類

穀類の內で豆類を除たあとの者は皆同じ樣な成分を持て居まして其中でも小麥は最も蛋白質に富で居り無窒素物の類は米に澤山ありますし脂肪とか糖分とかは燕麥の中にあり木材質は多く蕎麥の中にあります。穀類の一番外側にある皮を穀皮と云ひまして其中に核皮があり其中に仁と云ふものがあります、此仁と云ふ

部分を我々が食べるのであります。核皮の中にも脂肪分とか蛋白質とかを澤山に含で居ますが、人間の身体では之を充分に消化す力を持て居ません。

日本では穀物を粉にして食べる事は少なく之に反して西洋では粒のまゝ食べる事は稀です。斯く粉にして食べますと塵が少し位入つても知れませんが粒では直にわかります、此點は日本の方が安心ですけれど其代りに穀物の取扱ひが極く粗末である爲に、黴が生たり、虫綴りに成たりして大變に滋養分を失ふ事がります、又干したり俵に入れたりする内に塵、砂が、入つたり、米などは早く白げる爲に石灰を入れる事がありますが、之は大に害になる事です。米はよく乾かして貯へて置くと二三十年は少しも滋養分が變らないで保存する事が出來ると云ふ事であります。

只の米と糯とを試驗して見ますに大抵の人はお餅などは重苦しい不消化のもの丶樣に思ふて居ますが糯米の方には溶け易い澱粉分を含で居りますから、割合に早く消化します。之を粉にして白玉とか、かんざらしとかを拵へますが何れも早く消化します。

麥は今日大變に消化し易い者の樣に申しますが實際試驗の結果左程い丶者ではなく、木纖維などが多くて腸胃に吸收せられない内に通りぬけてしまひます故に滋養分の吸收力は米よりも劣て居るものであります。

小麥で製したパンも燒き立の柔いものは胃腸の弱い人などには不消化でありまして一日位置いたものが最適當して居ます併三日以上になりますと又消化しにく丶なります。

麩は小麥のふすまから製したものでありますから餘程滋養分が有ります、西洋では麩とうどん粉とをまぜて蛋白質の多いものにして麵類を拵へて食べる處があるそうです。

大麥は麥湯などにして食べますが之は滋養分を取ると云ふのではなくて只良い香をはなつのみでお湯の代りとなる計であります。

大豆は其まゝ煮ても消化はよくありません殊に凡て豆類の皮は硬くて不消化ですが豆腐は此皮とか木材質と

かを皆除いたもの故道理にかなつたものですが形を造る爲に鹽のニガリを用ゐる爲に折角良いものも老人や病人に消化し難いのです。

實際價が安くて澱粉蛋白等に富で居る物はそら豆、ゑん豆、小豆、いんげん等であります、ゑんどうは獨乙ではスープにして食べるそうです。小豆は主に餡に使て蛋白質澱粉質に富で居ますが脂肪分は極く少なう御座います。豆の中の蛋白質は石灰に逢ふてかたまる性質を持つて居ますから石灰とかマグネシアとかを含だ所謂硬い水で煮ますと何時迄煮ても柔くなりません彼のソーダを入れるのは此爲であります。

▲野菜類

野菜類を食する目的は主に滋養分を取ると云ふのでは無くて只其中によい香があるとか一寸味ではわかりませんが天然に植物酸類か入つて居ますから他の肉類と一所に食べます時は大變に消化をたすけます。大昔は勿論野生のものを食べたのでありますが、風味が少なかつたり纖維質が澤山であつたりして消化の惡いと云ふ處から農業の盛になるにつれて次第に改良して良いものが出來る樣になりました。近頃では西洋物が盛に入り込で來る樣になりましたが之等とても悉く消化易い者ばかりと云ふわけにはまゐりませんが、多くは學理を應用して拵へるのでありますから日本出來のものよりは概して宜しい樣であります。

野菜類の中には蛋白質のあるものも多いが之が皆滋養になるといふ譯ではありません。

葱などは窒素を澤山に含で居ますが直接に身体の滋養となるのではなくて他の肉類と一所に食べますと兩方の性分を助け合て初めて消化の良い營養分となるのであります、又芋類は澱粉を含で居て大變に養になります、此芋類は芽の出る時分には往々有害な毒性をもつ事がありますから氣を付けねばなりません。野菜類は大抵水分に富だ物ですが之を貯へる爲に干したり鹽漬などに致す時は却つて天然に反いたものとなります。之等を食る時にはよく洗てからにしなければ菜の間から時として蚯蚓の出る事も珍しくない彼の小供によく

出來る蛔虫と云ふ虫は野菜物をよく洗はないで食べるとか、又は半煮のものを食べるとかしてまだ虫の玉子が死切れなくてお腹に入つてから大きくなるのであります、又十二支腸虫と云ふ虫は人間の腸の中に繁殖して大便の中に其卵子を生出すのでありますから、此人糞を肥料として造つた野菜の中には危險なもの丶あるのは當然の事であります。之ばかりでなく井戸水の中にも何かすると虫の卵子がありますから生水を飲では不可ません。

野菜類の中でも極く水分に富だものは瓜類で生瓜大根は百分の九十五迄は皆水です。

ねぎ。にんにく。にら。等は香の爲に用いられるので食氣をまし他の食物を澤山に食べられる樣に用ゐる一種の調味品であります。

日本料理によく用ひます蕗、わらび、ごぼう等は餘り宜しいものではない、澤山食べる價値のないものです、人參、大根、かぶ、等はそれ／＼糖分を含て居て養ひとなります、又酸類、鹽類を含だ物は消化を助ける物として用ひます。

▲海草類

海草類は西洋では餘り用ひませんが日本ではこんぶ、わかめ、あらめ、ひじき等は一般に食べます昆布の中には蛋白質がありますが極く僅なもので夫よりは不消化の害の方が多う御座いますから、料理の色取位に用ゐるのは宜いが重なる食品には出來ません同じ類のものでも青海苔、淺草海苔等は調味品として適當なものであります、斯るものを食物の色取に用いますのは至極宜い事でありますが安い料理屋などでは殊更に色を美しくする爲に金屬性のものとか藥品とかを用ふる事があります金屬性の色素の內には往々有害な性質を含だものがありますから餘り鮮な色の付た物にはよく注意しなければなりません。

▲菌類

菌類は良き香と味とを持て居ますから廣く用ゐられて居ます分析して見ますと大變に蛋白質があります、之は普通の野菜と異て殆ど動物性と植物性の物との中間

に位して居るもので、上等のものは肉の代りにまでなると云はれましたが、近來では窒素分は澤山あるけれ共之が必ずしも蛋白質になる肉の代りになると云ふ事は出來ません、只色の配合位に用ふるのが適當なもので、之を主なる食物とは出來ません、且甚だ危險なものであります、若誤て有毒なものを食べますとアヘン中毒と同じ樣な害を受けます、此毒性は初からあるのもあり、又甚だ腐敗し易いもので腐敗して毒の出來るのもあり、虫の爲に毒になる事もありますから少し疑はしいと思はれるものは手を付けぬが宜しい、之を調理しますにも一寸燒て食べるなどは極く危險であります、中にある毒は強い火でよく中迄通る樣にさへしますれば毒の消える事があります。菌の中で餘り色の美はしいもの、折れ口の色の直に變るもの、夜見て青く光るもの等は多く有害危險のものであります、笠の裏を返して見て筋の眞直にさけるものは大抵無害なものであります西洋では白い葱と一所に煮て色が黒くなるものは危險だとしてあります、日本でも生薑の汁と御飯と一處に煮て黒くなるものは毒があるとしてあります凡て此類のものは調理する前に鹽水に漬けて置きますと少さい虫などは皆死でしまいます。



看護心得二十題

看護は優しき婦人の務なり、美はしき女子の身に染みて行ふべきものなり、婦人にして若しむづかしき病人の看護が滿足に爲し畢なば、其の婦人は一人前にして如何なる家政にたづさはるも誤なかるべし、世に婦人の務むべき事千萬數多しといへども、看護は其の重なるものにて女子と生れしもの是れを知らでは叶はざるべし、さてこれを爲すに就ては不斷の心得こそ肝要なるべし。依てまづその大凡を掲ぐべし。

(一) 病人を看護するものは第一に親切を旨とすべし心を優しくして諸事柔和に振舞ふべし、變事に臨みても動せず、細事なりとて忽にせず、謹むが上にも謹みて何事も同情の涙を濺ぐこと肝要なり。

(二) 看護人は心を優しくすると同時に又容姿を清爽にすべし、まづ頭髮を整へ、衣服を清潔にするは勿論手巾、襟、前掛など身の廻りのものより、指、齒などは殊に注意して清潔にすべし、されぱとて病者の前にて耳掻、小揚子を使ひ、爪などを挾むべからず。

(三) 感覺の鋭敏なる病人は手の重みさへも厭ひ、また濕りたる手に觸るゝことなど痛く嫌ふものなれば、水を使ふ毎に充分手を拭ひ乾かし、冬などは手甲の荒れぬ樣に毎夜リスリンなど塗りて滑になし置くべし。

(四) 病室内にて他人に耳語するは禁物なり、病人は聽管極めて鋭敏にして、得て斯る時には耳を峙て易きものなれば、尤も謹むべきなり。

(五) 患者の面前にて他所の病人の事又は犯罪、災害等記しある新聞の事柄など凡て悲哀の情を惹起すべき事は語るべからず、談話は專ら患者の欝を散ずべき事柄を選ぶべきはよろしけれど要事の外は成るべく沈默を守るに如かず。

(六) 患者の依賴なきに決して音讀すべからず、若し患者より是を請ふか、又は醫師の許せる時は極く低音にて讀み聞かせ、決して音聲を抑揚し、又は感動

の姿勢をなし、長きに過ぐべからず、要は唯萬事温和を守りて病者の心神を平穏ならしむるに在り。

(七) 身躰を掻く音、揺する音、新聞紙又は書籍を裂く音、編針の音などは、時により病者の大に厭ふものなれば謹むべし、無益の音、不審なる音は其響小なるも病人の爲めには害あるものなり。

(八) 病室内の空氣を淨めんとて香料を撒き、薫物を燒くものあり、されど這は只一時汚氣を沈むるのみにて淨むること能はず、寧ろ新鮮なる空氣を屋外より入るゝの勝れるに如かじ。

(九) 病室の掃除は看護する者の務なれば成べく病人の妨とならざる時を見合せて掃除すべし掃除中は屏風を以て病床を圍ひ、木具、家具等は一切布巾にて拭ふべし、決して塵拂を用ゆべからず、されど萬一暫時にても病人を他へ移し得べき塲合あらば之を移して十分に掃除すべし。



(十) 枕は毎日數回取換ふべし、そは温暖なる物を去りて爽涼なるを病者の頭下に進むるにあり、若し病床の幅廣き時は病者を動かさずして徐かに左側より右側に轉臥せしめ、床の一半づゝを晝夜に分ちて用ふべし。

(十一) 敷布、被布、これ等も時々換ふるがよし、取換へんとならばまづこれを温めて風を通したる後、被布を横に卷きて病者の足部より、敷布は縱に細く折疊みて、病床の側面より徐々に取換べし。

(十二) 褥瘡は十中八九まで看護の宜しきを得ざるよ

り起るものなり、豫防は治療に勝れり、之を豫防せんとならば、褥瘡の起り易き部分即ち壓迫を受くべき部分は毎日酒精及び水にて洗ひ、澱粉を撒布すべし、若し甚だしく肥滿したる人或は痩たる人は重症ならずとも褥瘡を起し易きものなれば、少時間每に躰位を換へ、壓迫を一部分に受けざる樣、兼て空氣枕を用ゆべし、尙皮膚に紅色を呈するか、又は微痛を覺へざるかを注意してこの法を行ふべし。

(十三) 病者に害ある場合に於ては、よし親戚朋友の面會とても濫りに許すべからず、淺慮の人、騷しき小兒などは病室に入るを禁ずべく、人多ければ隨て汚穢となるが故に成宜く無用の人を避くべし。

(十四) 夜間は病者の心を安んずる爲めに特に其の初眠を妨ぐべからず、之を妨ぐる時は終夜不眠に陷ることと間々あるものなり。

(十五) 重症の患者にありては晝夜の別なく食物藥劑共に廿四時間を通じて一定の時間に之を與ふべし、衰弱したる患者若しくは衰弱症より快復せんとする者には一日中最後の食餌として淡泊なる滋養品を與へて寢に就かしむべし、温き牛乳一盞、少量の鷄卵酒、或は一椀の牛肉茶は能く翌朝に至り患者をして疲勞を忘れしむるもの也。

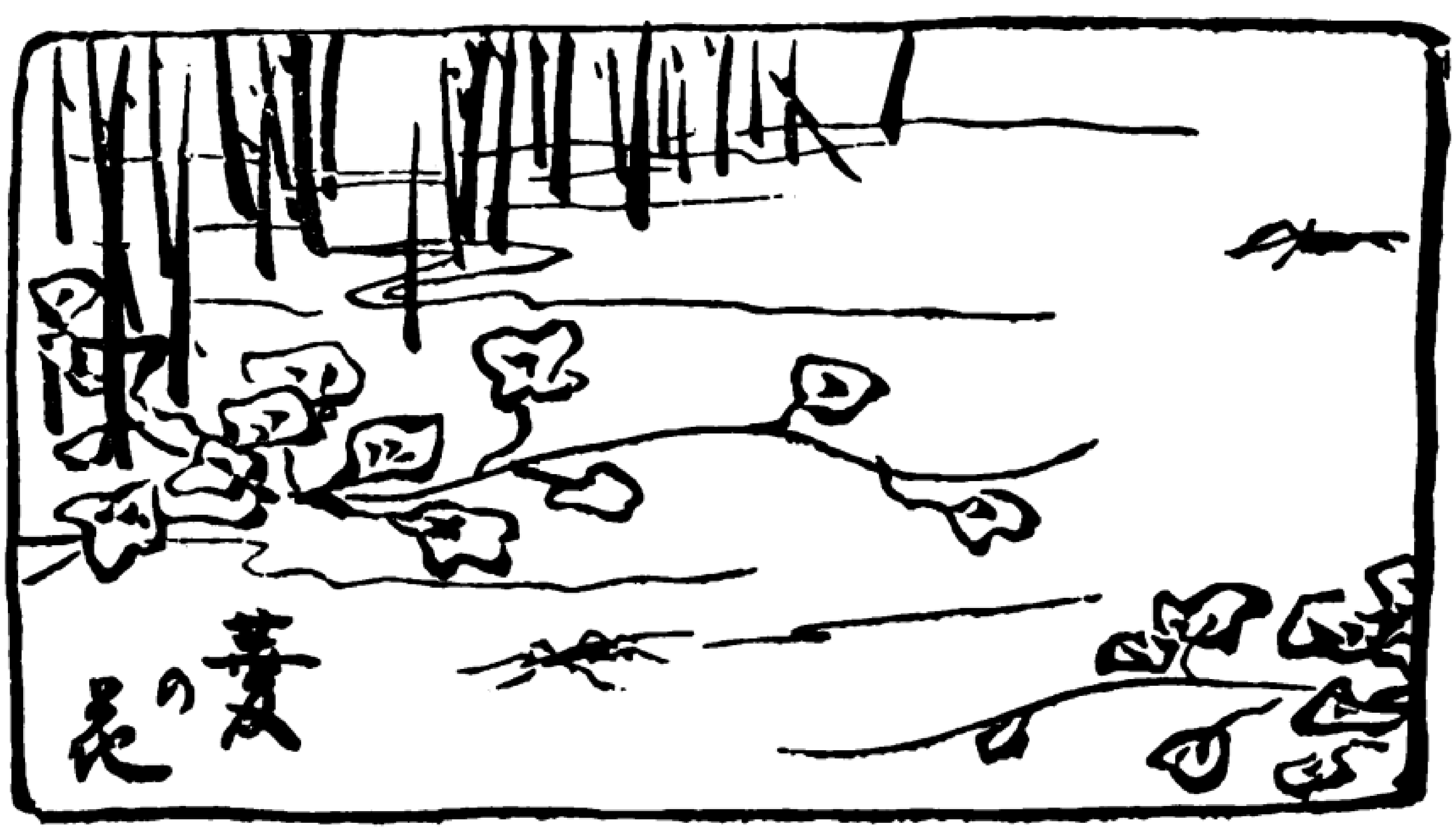
(十六) 患者顏面の色澤及び模樣等は晝夜共細心注意すべし衰弱したる患者又は老人小兒等にありては睡眠中驚くべく變狀を呈することあり、而してその變狀は唯顏面の色澤模樣及び呼吸等によりてのみ知るを得べし、されば萬一變狀を呈したる時は患者を喚び起して興奮劑若しくは食物を與ふべし、尤も夜間患者の顏色を見るには燈火を手にて蔽ひ病床に近くべし。

(十七) 重症の患者に在りては看護者は必らず早晩其の傍に侍るべし、早曉は大氣の温度最も低き時なれば是が爲め患者は往々感冒に罹ることあり、而のみならず、躰外の温度不足なるが爲め動もすれば死に陷ることあり故に必要と認る時は燈火を起して室を煖め、時には温き飲料を與へて躰温を回復すべし。

(十八) 食物藥劑等は患者の見る處及び其香氣の達する所に置くべからず、又患者後刻食する事あるべしとて之を枕頭に遺し置くべからず。

(十九) 一時に多量を食し能はざる患者には少時間に少しづゝ與ふべし、槪していへば食物は三度に多量を與へんよりは寧ろ少量づゝ六回に與ふるをよしとす。

(十二) 患者快復期に近くに當りては其心神を悦ばしめんが爲め、巧に手段を施すこそよけれ、たとへば室内に花卉繪畫を飾り或は親友を招き、或は好める書籍を供するもよし若ししめんとならば毛布類にて其軀を包み別室に伴ひて日あたり能き處に籐椅子などに倚らしむべし、されど回復期の患者にはなるべく靜穩にあらしむるをよしとす、患者の鬱を醫せんとして一日中に過多の事物を見聞せしむるは却て其疲勞を增さしむるものなり。



ジャムの製法

▲いちご　草苺を採集しその蔕を除き去り鍋に入れ文火にて煮、絶へず攪拌してよく煮へたる頃、苺一斤に付白砂糖百匁の割に入れ煮る事四十分位にして其やゝ堅くなる頃を度とし之を罐詰にせば永く貯へて變味することなし。晴天つゞき又種類によりて水分不足なる時は果實一斤につき水一合位を加入して煮も可なり。

▲李　すもゝを洗滌して鍋に入れ之を煮るに適宜の水を入れよく煮而して笊の如きものにて漉し皮と核とを去り、之に果肉と同量の砂糖を加へ三四十分間煮、而

して罐詰にすべし。

▲苹果　苹果の皮と核とを去り其量目を量り鍋に入れ之を煮るに適宜の水を入れ柔らかになるまで煮、之に果實の量目と同量の白砂糖を入れ二三時間煮、罐詰となして貯ふべし。

▲榲桲　製法は苹果に同じ但し林檎より速やかに煮るの便あると其の香味あるは遙かにいちごに勝る故に苺と等分に混じ製すれば頗る佳なり。

ゼリーの作り方

▲榲桲　まづまるめるの軸を拔きよく洗ひ擦りて毛を拔き切り八片位となし之を鍋に入れ冷水を果肉を蔽ふ位までに加へ果肉の十分柔軟になるまで煮るべし後是を地の厚き晒木綿の袋に入て漉し下に容物を置き汁を其の容器に滴下せしめ終れば是に等分の砂糖を混じて再び鍋に入れ成宜く早く煮るべし。其時間は二十五分乃至三十五分にして其表面に浮ぶ泡を汲み取るべし。後ち其果液を熱き湯にて洗ひたる茶碗若しくはコップの如き物に入れ、是を冷處に置き凝固せしめ、西洋紙を圓形に切り果液の上に置き猶又日本紙にて圓形の大なる紙を作り蛋白(鷄卵の白味)にて密閉すべし。

▲苺　製法マルメロに同じ、すべて「ゼリー」を製するには其の凝固するや否やを知ること必要なり故に相當の時間を經、之にて可なるべしと認めたらば其の少許を皿の如きものに取り冷處に置き其凝固するや否やを試むべし、

▲葡萄　房を洗ひ一粒づゝ取り鍋に入れ菓實一斤に付水一合位を注入し煮ること十分それより晒木綿の袋に入れ一夜間其滴汁を滴下せしめ、其汁をコップにて量り、同量の白砂糖を入れ、文火にて煮ること二十分乃至四十分、(其間絶へず泡を取るべし)而して是を前法の如くして貯ふべし。

▲葡萄のジユース　ジユースの作り方は粗々ゼリーに同じ、但し砂糖の量は液汁の半分なるべし而して熱したる罎に入れ直ちに栓をし封蠟、亦は白蠟にて密閉すべし。

▲ジャム及びゼリーの食用法

西洋食にては肉と共に食し、或はパンに着けて之を食し、在來風に適する食法はカステラの如きもの丶中に入るれば美麗にして味も亦頗る可なり、又餅、飯につけて食する時は病人の如き身体の衰弱せる者に在ては生果を食するよりも可なり。

▲ジュース食用法

適宜水に混和し、夏間炎熱の候に飲用し又アイスクリームの器械に入れ氷結せしめて食する時は其の美麗と言ひ味といひ實に佳なり。

▲梨子の砂糖漬

白砂糖と水とを鍋に入れ煮立て丶之に梨子の皮核を去りたる物を入れ煮ること二十分間にして直ちに罐又は壜に入れ密閉すべし。

因にいふ凡て果物を調理するに當り、長く煮る時は貯へて變味する憂なしと雖も色を變ずるの憂あり、又砂糖を多く投入し製する時はゼリーの如きは凝固する事速かなれども果物の味を失することあり、其の酸味と甘味との度合は尤も必要の點なりとす。



夏の衛生

此暑さで可愛さうなのは子供や婦人方が汗ぼに苦しめられるのですが之れは汗を掻いたら直ぐ水で拭取るのに越したことはない、汗になつて分解された複雑な成分は皮膚を刺戟するから夫れが爲め赤い腫物になるが白水を沸して洗ひ亞鉛花澱粉を撒布て置くと次第に癒る、然し汗になつた單衣を着て居るのは宜しくありません之れは直ぐに着換へるやうに仕たいものです、夫れから喉が

渴くからと云つて井戸水を飲みますが之れは禁じなくてはいけません、水道の水は井戸水よりは宜いけれども夫れでも一旦煮沸て夫れを冷して飲むか或は麥湯の冷したのを飲むやうにしたいものです。

避暑　避暑と云ふ事には避暑地を擇ぶのが第一ですが何うも大磯や鎌倉其他外洋に面した海水場は子供や婦人には尤も不適當だ海水は皮膚を刺戟して健康上の効力があるとしても波荒き海水場は氣分が發揚して稍ともすると逆上しやすいが東京人の爲には近縣で尤も適當な避暑地があるに態々外洋の海水場へ往くのは隨分迂濶な事と思ふ。

午睡　ひるねといふ事は風儀上によろしくはないがさりとて別段衛生上害のある事は未だ認められないばかりか却つて夏は午睡をした方が有益であるとは或る博士の說であります併し冷へるのは宜ろしくないから眠つても差支ない丈に毛布でも掛けて寐たら宜らうと思ひます夏は身体の機能が衰へ易く疲勞しやすいゆゑ午睡をすれば疲勞衰弱を恢復して更に新しき氣力を生じ休み〳〵働くやうになるから夏の健康上午睡は適當な事と思ひます。

晩涼　東京の如き人家稠密な處では此暑さに夜分もナカ〳〵暑苦しく眠られません夫れ故戸を明けて寢ますが之れに就ては折々衛生上の質問もあるけれど東京の如き樹木の少ない家ごみな處では夜の一時二時頃迄は戸を明けた儘眠つても差支はありません否却つて蒸暑い室へ蚊帳を釣つて團扇使ひをして苦悶しながら眠るよりも戸を明けて眠る方が遙か健康を助けます、併し濕氣を覺える時刻には直に鎖ないと却つて反對に害を及ぼします、夫れから夜の一時頃まで上野や愛宕山又は兩國橋あたりで涼んで居るのも暑て寢られない晩なら健康な者は左程身体に害は感じませんけれど總て濕氣を覺えるやうになつたら家へ歸るが宜い、リヨーマチスなどある者は注意しないと障ることがあります。

夜ふかし　子供を連て夕涼に出掛けたり緣日を素見に往くのは至て宜しくない夜は七八時には必ず床に就き朝迄は安眠させるやうにしないと發育上の害あるのみ

ならず、一度斯ういふ惡い癖を付けると外へ脊負て出なければ眠らぬやうになるし、又脊に眠つた子を夜氣にあてる事は尤も健康に害があれば總て子供は乳呑みの時分から日が暮れたら直に寢せると云ふ習慣を付けなくてはなりません。

暑氣中り　近日來の酷暑では子供でも大人でも婦人ても老人でも一般に食物をうちばにするのが第一の攝生法です、申す迄もないが胃腸の消化力の乏しいからである、夫れから暑さの烈い時婦人抔には斯ういふ事があります例へば十一時頃から三時頃迄風通しの良ない室に居て行儀正しく客に應對して居ると其客



が歸つてから俄に氣分が惡くなつて云ふに云はれない厭な心持になる。

之れは暑氣に中られたので所謂暑さが全身に感じ機能が衰へたのですから斯ういふ塲合には涼しい所で靜に休息して居れば日ならず恢復するものです、若し激症なら無論醫師の診斷を要するが餘り驚いて落膽すると却つて神經を傷めますから注意迄に申して置きます、斯ういふ時に薄荷寶丹など嘗めるは至極宜ろしいので清涼を覺え氣分を興奮せしめるからであります。

石鹸と垢

吾人の皮膚は松の皮の如く表皮

は次第に剝げ來るものにして此皮に細きと粗きとあり黒松を雄松と云ひ赤松を雌松と云ふ如し人の皮膚にも俗にきめの細かき粗きと云ふ差あるは是なり、而して之は次第に古きものは剝落つる樣に出來居るなり、我我は衣服を着するによりて躰內の肪脂、水蒸氣の發散を妨げられ、又は空氣の濕氣によりて皮膚面に凝縮せるなり、之等が皮とまじりて、所謂垢となるなり、猶其上に衣服の塵も肪脂と共に練られて皮膚に附着するなり、若し之が皮膚に長く附着する時は身体の蒸發作用を妨げて大に害あり、故に時々之を洗ひ落す事極めて必要なり、然れども此垢の多くは脂肪にして脂肪は水に溶けざる故に只水や湯にて洗ひても容易には落ちざるなり、然れども脂肪をアルカリ性のものと一所にすれば其所にグリセリンを生じて水に解くるものとなる故にアルカリ性にて洗へば最よきわけなれども、そうする時は只表皮のみならず眞皮迄もとかす樣になる、即灰水の入りたる水にて洗濯する時は早く手のすりむけるが如し、玆に於て皮膚を損せずして只垢のみの落つるもの即石鹼の必要を感ずるなり。

石鹼は歐洲にて一千六百二十年(太閤時代)頃に出來たるものなりしが今日のものと餘り大差なく、只粗製なりしのみ、其以前に於て衣服其他のものは草木の灰にて洗ひたりしが、前に述べたる如き不便あるを以て之にて顔手足を洗ふ事はせざりき、故に此性を弱めて其働きは以前の通りに强きものをと云ふ願望より終に石鹼の發明ありたるなり。

石鹼の種類を大別すれば硬きものと軟きものとあり、硬き物は洗濯用或は皮膚を洗ふに用ひ、或は藥用とす、軟き物も其目的は主に洗濯に用ふるものなれども、吾人の皮膚を淸潔にするには餘り用ゐずして種々の皮を革したり、馬具を洗ふとか西洋諸國にては羊の毛を洗ふに用ふ、此硬軟の差異は只水の多少に依るにあらず、元料を異にするなり、硬きものを造るには主に硬き脂肪即ちステアリン、パルミチンを用ふ、化粧用に用ふる石鹼も種々樣々あれども要するに其元料は皆一ッにして後より種々人工を加へたるものな

り、日常には硬くして少し位温めても溶解せざるものを宜しとす、之を試験するには石鹸を粉末となして强きアルコールを入れて温むるに若し純粋の石鹸なれは直に透明に解く、然れとも他に澱粉とか酸化金屬などの入りたるものは解けづして不透明のものとなるなり、然れども此場合には石鹸の内に含める水の多少は知れざるなり、之を見んとすれば前の粉末の一定の分量を目方にかけ置きて後それをよく乾かしたるもの丶目方と比較すれば直に明かに知る事を得べし、中に洗濯石鹸などには半分以上も水を入れて形を大きくしたる不良のものあり。洗濯石鹸の内にて使ひたる後にて其表面にぼつ〱と水の玉出で或は一面に白き結晶の出づるなどは皆不良のものにして其効用うすきものなり。

季節 茶席料理

廣田星橋

家庭で何かの折お客をなさる方々の爲め季節に投ずる茶料理を御紹介しませう、最もこれは粋を抜た調理法なれば客を歡迎するに適當なものと考へます。

▲水鱠　生貝を鹽で洗ひ、賽の目に切り、赤貝をおろし、鱠を鹽加減好き酢に暫く漬け、之に白瓜、木茸山葵を加へ皆一緒に蚊帳の裂の袋に入れて井戸の内に吊すか、薄手な器物に入れ、外側を氷詰になし冱冷し切つた加減を見定め、之を出して適宜に切り、器物に盛分け、口には林檎か青梅の類を程好く切りて用ひる。

▲鱠　鮎を脊越しにして之に白瓜を細引き、青紫蘇を刻みたるを加へ甘酢を注けて用ふ。

▲同　鯵を脊越にして（切るに剃刀が可い）、白瓜を繊に打ち、紫蘇と蓼を一緒に鹽で揉み、加減の酢を注けて用ふ。

▲同　鰹魚をズッ〱に切り、花柚又は葉生姜を酢取り、之に砂糖、醤油、酒鹽を配味せるを注ける。

▲同　鱚を生作りにして瓜を刻込み、蜆の茹でたるを取合せ、之を擂り味噌にて用ひる。

▲同　鯉を刺身に作りて能く洗ひ、砂糖、鹽、醤油を加減して之に注ける。

▲蒲鉾擂り味噌　蒲鉾を纎に切り、岩茸を取合せ、山葵を擂り交た味噌の加減したので用ひる。

▲鯷魚酢　鯷魚の頭を去り之を割いて白瓜を纎に打ち鹽で揉み、辛子酢で用ひる。

▲茄子煎り酒　茄子を皮のまゝ纎に切り、刀豆を小口から剥み、海老をさき、鹽、酒、砂糖、醤油を加減して煮る。

▲水貝　鮑を鹽で洗ひ、耳を去り、蕎麥粉で包み置、二時間程經て賽の目に切り、鹽水に漬けて後水に放し、青柚を剝ぎて口にする。

▲氷鯉　鯉を程好く切り、之を鰹節の煮汁に醤油を鹽梅し、先づ水七合に寒天一本の半分を入れて充分に煮て、沸騰つと共に鯉を引揚げ置、之に冬瓜の皮を去り、程好く切りて取合せる。

▲燒餅　餅を炙いて置、蓼酢を作りて用ひる。

▲酒浸し　鮑を小口より切り、カラスミか海老の皮を去つたのを酒、醤油に浸し、之を煮上げて直に干す。

▲同　鹽鱒の身所を切り、干鱈を細かにさき酒に浸して干す。

▲和物　小鮎の頭を去り、加減した辛子味噌で交へる

▲同　小鮎の頭を去り、程好く切り、辛子を擂り込みし味噌で交る。

▲同　田螺を茹で、山椒を擂込し味噌で交る。

▲鎌倉漬　鯛の鱗をふき、上等酢一合、古酒一合、上等醤油一合を煮立せ共に冷して之を等分に混交た中へ半日程漬け置、また一法として酒醤油では味が賤いといつて食鹽を用ひるが之は極上等酒一合五勺、極上酢一合、食鹽三勺を合せ右の如くするのである。

▲鮎の當坐酢　此は上等米を可なり强く炊き、之に食鹽一匕を撒り、茶碗一杯の酢を打ち置、鮎の頭を去り酢に漬置て、右飯を能く平にならしたる上に並べ、押鮨桶へ之を詰め壓搾て、一夜にて熟する、用ふる時蓼酢の蓼を添へ出す。

▲蛸の當坐酢　蛸を其儘に右の如くなし、木茸、海老を茹でゝ酢に漬け置たると、茹玉子を小口切りにして加へるか又撥尾魚、車海老の皮を去り好き程に切りたるを入れるなども至極好いのである。

▲煎り物　鰺の頭を去り、車海老の皮を去りたるを全状の損せぬ爲め鹽で煎るのである、また大鰺を右の如くして山椒を加へるも美味を感ずる（都て新鮮な魚を強い鹽で押し暫時そのまゝにして置、熱湯の上に蒸籠をかけ蒸して後鹽梅する法を取るのが可い全状もくづれず、味も損せぬと考へる）。

▲鯨　鯨の脂肉を短冊に切り、茄子を纎に切りて汁の種子とする、口は靑山椒。

▲鰌汁　鰌は鹽ばかりで殺し、味噌汁へ移すがよい。

▲さゝら汁　鰹魚の肉を細にたゝき、酒を注けて味噌汁へ擂り流し、栗を茹て之を賽の目に切り、紫蘇、蓼を細く切りて共に取合せる（鰹魚も斯うすれば違える）。

▲冷汁　夏大根を賽の目に切り、打栗の茹たるに一寸紫蘇を加へ、焼海苔を浮し、味噌汁の種子とする、汁は器物に入れ、氷詰にて冷すがよい。

▲鮑と靑豆　鮑の耳を去り程好く切り、靑豆と煮る。

▲小鯛煮　小鯛の頭ばかりを落して三枚におろし骨を拔き、尾を立て皮の方を内になし兩方から竹串を貫き、ぐるぐるに卷て鹽煮の汁で煮上げ、盛る時に串を拔くのである。

▲冷牛蒡　白玉牛蒡を能く干してザット湯煮になし、水へ移して後皮を能く去り、程好く切つて置、中の眞を「切出し小刀」で拔き其中へ魚の擂り肉を詰て湯煮をなし、之を小口切にして煮上げ、器物の外から氷で冷す、これは平皿へ盛るか取肴にしてよい。

▲鱸すまし　鱸を筒切りにして、出し汁の種子として柚を纎にして取合せる。

▲冷玉子　焼玉子を程好く切り、麸を短冊に切りて。靑豆と山の芋を取合せ煮て氷で冷す、また鶏鴨を鹽出しゝて用ひ、或は貝類にゼンマイを取合せる。

▲松もどき　小茄子の皮を剝き、庖丁目を入れて吸物

の種子となし、花柚を口にする。

▲揚茄子　小茄子の皮を剝き、胡麻油で揚げ、五加木に味を附けて取合せ、取肴とする。

▲燒茄子　小茄子の皮を剝き、鐵網にて炙き、山葵醬油で用ひる。

▲麩の吸物　積み麩と素麪を種子とする。

▲燒紫蘇　紫蘇の程好き葉に溶解た葛の中へくゞらし火に烘る。

▲擂り薯　山の芋を擦し、擂盆にて擂り、生醬油に擂り生姜で用ひる、又紫蘇の刻みたるもよい。

▲酢和　人參の皮を剝き、短冊に打ち、白瓜、芋莖共に皮を剝き、好き程に切り、木茸を細引き、加減した甘酢にて和へ、燒海苔を粉にして散す（但し芋莖は切りて後鹽を散り、其まゝ茹上げ、熱きうち酢を注け和かにすれば苦味去りて齒切れする）。

▲寄せ豆腐　同上に初茸の剝きたるを取合せ、薄醬油にて煮る、之を擦し柚にて用ひる。

▲薄葛　ムカゴを一寸茹き、皮牛蒡、人參を短冊に切り、小形の雁もどきを銘々に煮て之に薄葛を注ける。

▲揚げ麩　麩を胡麻油にて揚げ、皮牛蒡を短冊に切り共に、煮汁にて煮、之を大根おろしで用ひる。

▲鱚魚の吸物　鱚魚に蓮の若葉を取合せて、種子とする。

▲小鳥の吸物　何にても小鳥を程好く切り一寸味を附け、蕗の薹と取合せて種子とする。

▲鱸の吸物　鱸を程好く切り、茹き、蕎麥切を取合せ、青山椒を口にする。

右品々の献立は旬の遲速と物の熟、不熟がある故强ちに之れに片寄らずとも、其時々調理の參考に充つるべきです勿論其取合せ方の内には四季共にある野菜や鳥類で季節を嫌はずに採用し得るものと得ざるものがある、で其心組みで取捨ありたし。

洋食一品料理

▲コロツケ

並の牛肉をよく叩き、擂りつぶして鍋に入れ、バタ少

少〻、鹽、胡椒とを加へてずつと燒くべし、別に馬鈴薯を茹でつぶし置き、之を前の肉とまぜて細長き形となし、其上にメリケン粉をまぶし、玉子を塗り、パン粉をつけ更に油にて揚げるべし、此油は牛油にてよろし大凡狐色になりたる時を度とす。

▲豌豆スープ

野菜スープの中尤も手輕くして滋養のあるは此のスープなり。而してこのスープに肉入と並との二樣あり今其一種をあげんに青豌豆スープを製するにはまづ一升ほどの豆をよく洗ひ皮を剝き二つに割り置き火にかけたるスープ鍋に大匙二杯のバタを落し之に前の豆をいれ凡そ五分間煎付かぬ樣よく搔まぜ煮たる後水一升八合を注し、其沸立つを待つて浮滓を去り、玉葱三個、胡蘿蔔蕪菁各一本を細かく刻みてスープの中に入れ同時に鹽か醬油並に砂糖にて味をつけ、豆の十分軟かになるまで煮たる後これを用ゆべし。

▲サラダ

サラダは種々の肉類を食したる終りに出す料理なり、玉菜の外葉を去り、內部の葉を一葉づゝ放してよく洗ひ水氣を去りて適宜に切りソースにて和へ皿に盛りて其上に湯でたるトマトー(赤茄子)の皮をむき一分位の厚さに輪切になし添へて出す、さて右のソースを作るには鷄卵の黃味一個にバタ砂糖、鹽いづれも小匙一杯づゝ、麥の粉大匙一杯、水五勺位入れよく鷄卵の黃味とかき交せとろ〱火にかけてそろ〱煮るべし。

梅實の調理法

只今は梅實の熟した盛りであります、梅といふものは酸味が多くて果物として生食する事は出來ませんけれども調理をよくして食膳に供へれば風味を添て食慾を進ましむる料となり、殊に貯藏するには極めて便利なものでありますから庖厨には是非なくてはならぬ食品の一であります、よつて簡單な調理法二三種を掲げました。

▲梅子羊羹　梅子を取り能く洗ひ、湯にて煮立て、二日ばかり水中に晒して、酸味を去り、種子を除きてす

りつぶし、布篩にて漉し、心太を味淋にて遠火にかけて煮解し、又葛粉を解き（梅一升に葛の粉五勺の割）右三種を能く混交て、清淨なる箱に流し込み、冷めたる後ち能きほどに切るなり。

▲梅子の菓子　梅子の皮を剝き、山葵おろしにておろし、葛粉を堅く煉り合せ、之に鷄卵と砂糖を加へ、能く混和して蒸し、器中に移し、靑粉すこしを加へて煉り交せ、路々梅子の形につくり、蒸籠にならべて再び蒸上るなり。

▲梅子飴　肉厚き梅子を取り、酸味を能く煑出し、水を取り、之に味淋を加へてのばし、遠火にかけて溫め沸騰したるとき葛粉を少々しきて、恰も葛溜りの如くにして製するなり。

▲梅子の砂糖漬　半熟の梅子を取り、皮を剝き、核種を去り、日に乾し、梅肉の堅くなるを計り瓶に入れ、梅肉一斤に砂糖二百匁、鹽少量を加へて漬込み、瓶口を密封して暗所におき、後日砂糖をふりかけて食するなり。

▲甘露梅　梅子の靑色にして斑なきものを選び、梅一升に鹽五合の割にて鹽漬となし、三四十日を經て取上げ二片に裂きて核子を去り、紫蘇の葉を水に浸し、幾度も能く揉みたるものにて一片づゝ包み、壺中にならべ、其上に砂糖を被ひ、又た右の梅子をならべ、斯くすること數度にして、上に石をおき、二十日ばかり經て又た梅子を他品に移し、ザッと乾して砂糖を被らし能く密封すべし。

▲熨斗梅　梅子の能く熟したるを取り桶に投じ、蓋をなして一夜おき、擂鉢にてよくすり、核子を去り布袋に入れ、堅く搾りて製すべし。其調合は梅肉一斗砂糖一貫二百五十目葛粉四十匁の割合にて極めて、丁寧に混和すべし、又梅肉は溫火にかけたる鍋に入れ、能くかきまぜて砂糖を加へ、これを日光に乾し、よきほどに固め、適宜に切りて貯藏すべし。

▲梅子の靑漬　靑綠なる梅子をとり、能く洗ひ、水氣の乾くを待ち、豆腐粕一升に鹽三合を加へて能く揉み合せたるものに、梅子と梅子と互に相接せざる樣に漬

込べし、然る時は更に青色を變ずることなく、香味生果に異ならず。

▲衛生顧問▼

(問)極めて色の黒きは食物の爲めに候や又頭髮のおくれ毛を早くのばす法無之やまた毛を生すには如何なる藥を用ひ候得ばよろしきや(本郷弓町の梅子)

(答)色の黒きは食物の爲と云ふを得ずこれは先天的及び日光等に依るものである。毛に附いての事は本誌糸氏の一日醫者にあり。

(問)小生は從前より慢性鼻カタルにて鼻汁絶えず流出す簡單なる療法有らば御敎示を乞ふ。

(答)イヒチオール五瓦と依的兒及び酒精各五十瓦を混じ一日二三回十五分間程宛吸入を試みられよ。

(問)一昨年三月生の男子常に虫氣強くこれまで醫藥に親まぬ日とては一日もなく誠に氣六ケ敷て困り升すると其母は亦姙娠して三ヶ月程になりましたから乳をはなさうと思ひますが夜ひるとなく乳に取就いて居たくせが付て、なか〳〵はなれませぬ尤もミルクは飲ますがそれも乳を飲んだ後でなければのみませんどうしたらはなれますか御敎示を願升(なつ子)

(答)牛乳を以て代用するがよし乳房を離さぬのを離すやうにする方法は善い守でも賴んで何とか臨機應變の工夫をするより外に仕方は無い。

(問)(一)髮癖を治する藥ありや(二)顏手足の色を白くしキメをこまかにする法(三)瘠る法(四)石鹼は何といふのが一番宜敷や(五)レモンの効用(六)玉子は如何にして食するが一番滋養になりますか(備前岡の女)

(答)(一)衛生上には斷然無し(二)色を白くする方法は無いでも無いが危險なり敎へ難し、きめを細かくする法は滋養の食品を取り適當な運動法を勵守するが善い(三)脂肪過多の爲に肥えたのなら一つの病であるから脂肪の少い食物を取つて運動すれば善いが強壯で肥えてゐるのなら目出度事なれば瘠る必要は無いではありませぬか(四)硼酸石鹼が善い(五)清冷劑と申して令へ

ば喉の渇などを止るに宜い(六)半熟なり。)

(問)月經過多を治す方法を問ふ(左樣なら[illegible])

(答)陰門内に冷水を灌ぎ且つ陰部に氷嚢をあてそれで腰には熱湯嚢(攝氏五十度位)をあて左の藥を三四ヶ月試みられよ(但し醫者に相談して)　機那煎(四、〇)一〇〇、〇稀鹽酸一、〇單舎入、〇(一日三回分服)

(問)トラホームの治療法と養生法を問ふ(稲葉すみ子)

(答)トラホームの素人治療は六かしい御相談です眼科專門の醫師にかゝるより仕方はありませぬが兎に角硼酸と云ふ藥二瓦を温湯半合に溶し度々洗へば何分の効があります。又烈風劇光を避け餘り眼を使はぬやうにし藍色の眼鏡をかけてゐ玉へ。

(問)伺ひたいのは滋養藥タカ、ジアスターゼの事ですが一錠と云へば、どの位の事ですか、又東京の藥房ではどこで賣りますか一個所だけ丁寧に教へて下さいましな(秋田こと子)

(答)一錠とは一まるめといふやうな事發賣元は東京市京橋區南茅場町三共商店鹽原又策

(問)(一)妾事盲腸炎兼胃病後衰弱甚しく爾來雞卵肉類(主に豚肉)など用ゐ居ること茲に一ヶ月餘にも相成り候へども仲々肥え申さず如何なるわけに候や又如何にせば肥え申すべくや豚肉は日々食しても差支なきや(二)米飯と麥飯と何れが滋養に富み何れが消化よく何れがよく體内に吸收せらるゝや等衛生上の比較御教示を伺上げ候(三)食後驅走又は激動すれば横腹痛くなる理由如何(四)頭髪非常に赤し何卒黒くする法を伺ひます(五)或人の説には朝十分晝八分夕六分其割合に食事を取れと云ひ又或説には朝飯を廢すか又粥にせよと云ひます何れを取りて宜きか(文子)

(答)(一)生雞卵は善いでせうが豚肉は脂肪が多くて病後には吸收せぬからでせう日々食しては宜しくありませぬ(二)麥飯の方が滋養分に富んで居れど消化吸收の點は米の三分の一であります(三)食後は血液が消化器に集るものであるのに激動すれば其方に血液が行くからであります(四)無し(五)職業体質にもよるが大抵朝八分晝十分夕七分の方が善いでせう廢食説は朝寝家の

論であります但し習慣は一時に改めぬ方が善し。

(問)十九歲の女常にふけ多く癢くて困りますが療法を敎へて戴きたし常に使用するには何石鹼宜しきや御敎授を乞ふ。(無名子)

(答)度々清潔に洗ひ少量の酒精を撒いて御覽なさい。

(問)硼酸安息丁幾は永く用ゐざればそばかすに無効のものに候やまたそばかすは根治致すものに候や御敎示願上候(神田さくら子)

(答)早く効あることもあれど大抵は長く用ゐねばならぬ十中八九は根治するものである。

(問)(一)そばかす根治を致すには加里石鹼精宜しくとの事實に候や又無害に候や(二)月經前後に白或は無色なる粘液出で候が病的に御座候や(無名子)

(答)(一)無害で多少の効があります(二)明礬二瓦を水半合に溶し綿に浸して洗ふことを度々試みられよ。

右の外質問書は倘澤山あるけれども右のと同じければ其の答を省きました。

(問)手がろく色白になる法敎へて下さい。(一乙女)

(答)多少の害を與へずして左樣な方法は天下にある者に非ず賣藥の廣告に欺れ玉ふな天眞爛熳心高尙なれば容姿自ら優美に見ゆるものなり何ぞ色白藥を用ゐんや斯樣なお問を受くるは戰時の秋尙更殘念で堪りませぬ色黑く骨格逞しく筋肉肥え太つてこそ立派にも見ゆれ高尙な心も出るのである色白で紅葉の樣な手をして一つるべの水を汲んで心臟の皷動を高めてゐるやうな婦人を今の世には誰も愛しませぬ。

(問)窒扶斯後精神異常の快復せざる治療法如何御敎示を乞ふ。(福井縣の内藤正八)

(答)心身を安らかにし、滋養强壯の食餌を取らしめ、左の内服藥を連服せしめて御覽なさい。

機那丁幾　四瓦　稀鹽酸　一瓦　白砂糖　適宜

水　百瓦（半合）　右一日三回分服

(問)毛の無きを生じ、及び薄きを濃くする法如何敎へて戴きたい。(京都の禿毛生外五十七人)

(答)從來此の間程澤山あるのは無い、そこで曾て糸氏に請ひ、一日醫者欄に掲る積りで其の原稿を取寄せた

るを、不知誤つて掲載したと思ひ、前號にも「本誌を見よ」など答へたのは甚だ失敬である、依て今回のに出てゐますから御熟讀下さい。

(問)手掌及び足背に發汗の過多なるを防ぐ法如何、御教示を煩はす。(東京の夏子)

(答)撒里矢爾酸　二瓦　澱粉　五、〇〇
右二品よく混せて撒布。

(問)顔に紅を附れば、其の部分丈後が黒く焼ると云ひますが果して然るか、衛生上如何。(色　香　生)

(答)紅の性質にも依ります、附るならば生臙脂が宜い、これならば何の害も無い、術相當の鐵劑を服んで身体を強壮にし、自然に花の如き顔色にするに如くは無いのです。

(問)歯の裏に穴があき次々に移つてゆくのですが良薬無きか及び歯の生る薬はありませぬか(たき子)

(答)それは「レプトヽリキスブッカリス」といふ寄生黴菌の爲でありませうから、早々歯科醫に請うて抜き取るがよし、其後は良好の歯磨粉で度々掃除するが肝要である。歯の生る薬はありませぬ。

(問)頬及び其他の筋肉の肥え過ぎてゐるのを少し痩る法はありませぬか。(映子外三名)

(答)これは薬劑療法よりも寧ろ生活法を變換するが可い、即ち大に勞働して主に蔬菜豆類を食する樣にして御覧なさい。

(問)ニキビを治し及び色白になる方法如何。(愛知のＴＨ生)

(答)常に冷水にて洗ひ毎晩寢際に左の薬を附けて
沈降硫黄　偶利設林　石鹸精　各五瓦
毎朝洗ひ落しなさい顔色も自然に奇麗になります色白薬は用ゐぬ方がよし。

(問)硫黄軟膏或はイヒチオール軟膏の色は一は飴色一は少し黒くありますが面部へ附けて差支無きか敎へて下さい。(讃岐の寄女史)

(答)差支無し。

(問)月經時の支度法を敎へて下さい。(何子外一名)

(答)最も宜しきは海綿を適宜に切り百倍石炭酸水にて洗ひ能く搾りて之を膣中に挿入し其上陰部に清潔なる

綿をあて男子の犢鼻褌様の物にてとめておくべし。

(問)皮膚の洗滌に用ゐる石鹸を問ふ。(京都のあや子外三名)

(答)硼酸石鹸といふのが最も良いです。

(問)肺患者の呼吸より本病を傳染するものでありませうか。(京都の不安女)

(答)吸氣よりは傳染しませぬが呼氣より傳染します危きに近寄るべからず。

(問)月經不順には昨年誌上に掲載せられた一日醫者欄の月經閉止の服藥療法で宜しいでせうか又月經不順の者は姙娠しませぬでせうか。(右不安女)

(答)然り其の服藥及び療法でよし。さうして姙娠せぬとは限りませぬが比較的少いです。

(問)顔面に豆粒大の火傷痕跡あり右は永久去らぬものに候や。(赤坂の百合子)

(答)深淺の度に依りますが一年餘も經てば大抵治しませう。(但し直に療治して)

(問)妙齢の身にて白髪の有るは如何其の療法を敎へて下さい。(大阪の美代子)

(答)原因にも依るけれど大抵は其の原因が分りませぬ故に其の療法は無いと諦めねばならぬ。

(問)顔に多く毛が生へてなりませぬ除く方法は無きや。(多毛少女)

(答)毛に長毛短毛贅毛の三種あり長毛とは髪、短毛とは髭、贅毛とは俗にいふウブ毛なり多毛少女のは何れが生えたのですか、まさか長毛でも無いでせうし、又短毛が生へたのでもありますまい、されば身体薄弱なる所からして贅毛が生へるのです故に强壯法を施すが肝要なり。

(問)頭を大きくする藥は如何。(なぎ子)

(答)殆んど無いと言つても可いでせう。

(問)私の妹は寢小便で困ります療法を敎へて下さい。(越後のはく子)

(答)明治三十七年六月の女學世界糸氏一日醫者欄に詳しく療法から經驗談まであります。

(問)さる人が膀胱加太兒で惱んで居ますが何か良藥はありますまいか。(遠州少女)

(答)原因及び輕症重症又慢性急性に依つて其の治療を異にしますから診察せざれば確と答へがたしされど更に答へぬもすげ無い様であるから左に一つ丈書いておきます。

單寧酸　三瓦　白糖　五瓦　をよくませて六包に分け一日六回、一回一包宛服むべし。

(問)冬分でも鹽辛き物酢き物を食すると顔に汗が多く出ます何か惡い處があるのですか。(仙臺少女)

(答)それは當然です心配には及びませぬ。

(問)癖毛縮毛を直す方法及び口中の惡臭を除く良法を敎へて下さい。(常陸のみち子)

(答)癖毛縮毛には卵を附けて洗ふが善しなど言ひ、或は何藥或は某法等誇大に廣告する山師もあるが何れも一時的で決して根治出來るものでは無い欺され玉ふな。口中の惡臭を去るには硼酸二瓦を溫湯半合で溶し含嗽するがよし。

(問)齒齦しまり齒滑くなる法を問ふ。(相模の一乙女)

(答)矢張前法で含嗽し良好の齒磨粉で磨きなさい序でに齒磨粉の製造法を敎へて上げませう。

炭酸麻倔涅叟謨　二匁　沈降性炭酸加爾叟謨一　匁

食鹽　半匙　薄荷油　一滴

右よく混せるのである。

(問)髪に「アルコール」を附けても差支無きか(或少女)

(答)差支無し。

(問)腦神經衰弱症は不治の病なりや治療法あらば御示敎を乞ふ。(越後のよし子)

(答)輕重に依るが槪して不治の症に非ず即ち。(福井縣內藤正八氏)の答を守り玉へ。

(問)頭髪の淸潔法を問ふ。(御尋讀外四名)

(答)加里石鹼或は硼酸石鹼にて度々洗ひ

酒精　倔里設林　をよく混せてつけ玉へ。

(問)にきび、そばかすの療法を問ふ。(越後　女)

(答(愛知のTH生の方法で治せぬなら。

安息香酸　五瓦　依的兒　十五瓦　酒精　三十瓦

右にて洗ふのであるTH生も前法で治せぬならこれを試みて御覧なさい。

▲家事顧問▼

(問)硝子が曇つたのは、何で拭いたらよいでしょうか。(とし江)

(答)軟かな木綿の切に、アルコールを少し浸し、裏表から叮嚀に拭へばどんなに曇つた硝子でも、清潔になります。又アルコールの代りに、酢を用ひたり、石油を用ひたりしても、やはり透明になりますし、又硝子磨粉といふ打粉のやうな粉でみがく法もありますから、使つて見て便利なのをお用ひになるがよいです。硝子鏡もこれで拭くのがよいのです。

(問)淺草紙は衛生上害があると聞いてゐますが、塵紙はどんなのでも大丈夫ですか。(淺草　玉子)

(答)左様塵紙はどんな質のでも、淺草紙のやうな害はありませぬから、安心です。併しあなた方が塵紙と仰るのは、どんな紙ですか、普通東京の市中などで、塵紙と稱へて賣つてゐるものなら、その中にはいくらも淺草紙と同じ質のが混じてゐます、ことに塵の少い軟かな、色の白いものが、危険です、なぜならば、淺草紙はもと古反古を水につけて、晒して漉き返したものですから、その中には「紙屑ひろひ」の拾ひ集めた、極て不潔なのも交つてゐるので衛生上恐ろしいと申すのですが、此の色の白い軟かな塵紙も、やはり同じ原料でこしらへるのです、たゞこれを石灰、晒粉又は硫酸のやうなもので、晒して色を白くする分の事です、これ斗りでこしらへたのは「白ほ」といひます、これに眞實の塵紙の原料にする、楮の上皮や椏の上皮を加へて塵紙らしくしただけですから、危険はやはり危険です、眞に安心の出來る塵紙は木の皮のやうな塵がはいつてゐない紙質も少し硬く色も茶色のです。

(問)布巾が鼠色や、茶色になりましてどんなに毎日洗つても直らないで、始終奥様に無性だと叱られます、どこの家でも古い布巾は鼠色と定つて居りますのに、どうしたらよいですか。(木仕女)

(答)それはあなたの心得ちがひ、古い布巾が鼠色といふきまりは決してありませぬ、鼠色になるのは、それ

だけ不潔物がついてゐる證據です、それで食物を盛る物を拭つては、却てきたなくなる位ですから、布巾は何事を置いても、眞白に洗つて置かねばなりませぬ、世の中には顔を拭ふハンケチが、鼠色だといつて氣にする人は多いですが、鼠色の布巾を氣にする人は少いのです。それでまづ布巾が破れるまで、眞白にして置くには、毎晩灰汁か洗濯曹達を溶かした水で家中の布巾を煮るのです、鍋は土鍋でも、鐵鍋でも何でもよろしい、十分間も沸騰させたら、後清水に晒して、堅くしぼり布巾掛へ掛けて置かねばなりませぬ。又朝飯の後片づけのすんだ時、水でよく濯ぎ出し、日光のあたる所へ乾すのが肝要です。かうして置けば破れるまで眞白になつてゐます。

(問)衿垢のついたのを、手輕に落とす工夫はありますまいか。(山口縣　みよし)

(答)まづテレビン油、揮撥油の類を白い切の端に浸し、これでその衿垢のある所を叮嚀にぬぐふのです、そして垢が十分取れたならば、緩い火の上に遠くからかざして、その油分を揮撥させてしまへば、あとは何も殘りませぬ、天氣のよい日ならば、日光に曝してもよいのですが、絹物などは日光にさらすとよくないのがありますから、氣をつけねばなりませぬ。又襦子類などですと眞綿を火にかざして、熱くしこれで拭きとつても多少とれますし、又軟かい餅を燒いて、その中を割り粘つた所を少し空氣中において後、これで押し附けて垢を除く法もあります。又食麪麭がお手近にありますなら、これの軟かな所でやはり押しつけて衿垢を取るのも簡便です。何れの方法も、ひどく衿垢がついたのは、思ふやうに淸潔になりませぬ、何でもまめに不斷心がけて、少し不潔になつたら、すぐ取るやうにせねばなりませぬ。

(問)揮發油にて洗ひたるもの丶惡臭を去る法をお敎へ下さい。(家政女)

(答)番茶を火にくべその上へ揮發油で洗つた切地をかざせば暫時にして惡臭は消えます。

(問)「いんにく」の付ましたをおとします法をお敎へ下さい。(家政女)

(答)まづテレビン油で洗ひ油氣を除きそのあとへ朱色墨色の殘りしは水飴又は飯粒の如き粘りつよき物をもみつけて後よく淸水にて晒ぐべし大概は拔けるものなり長く日數を經たるものは拔け難し。

家庭叢談

玄海沖の悲劇

敵艦に遭遇せる常陸丸

日露戦争開始以來わが軍連戦連捷の勢なりしかば戦況の報道は常に喜悦と伴ひたりき、然るに今回測らざりき玄海不慮の遭難を見んとは、我等は千秋の遺恨を以てこの事實を迎へ、千行の悲涙を濺らして以てこの情况を報ぜん。

我が運送船常陸丸は六月十五日午前六時三十分馬關海峽を通過して豫定の航路を進航すること約三時間十時頃玄海洋上沖の島の南方七八哩の處に達したる折しも海面霧深くして遠望明かならざりしが、北方より二隻の露艦忽然として顯はれたり、是れぞ浦鹽の隊艦隊にして有力なる装甲巡洋艦ロシヤ、リユーリツク（いづれも一万噸以上）なり二艦我が常陸丸を距る一千米突の處に接近し來りて止まれの信號を成したり、常陸丸が停止せんとする一刹那兩艦より二十數發の砲彈を發射したり、爲めに常陸丸は數十名の殺傷者を出すに至れり、斯くて敵艦は三四哩を遠かり他の二砲艦の位置に就いて徐ろに本艦の沈沒する有様を監視しつゝありしが、敵彈の命中したるは五六發にして損害少く本船は依然安全の狀態にあるを認め、ロシヤ號は更に五百メートルの距離まで進み來り一時に五十六發の砲火を注ぎたり、この砲撃によりて常陸は機關部に大損傷を受け船の自由を失ひたり。是より先常陸丸は敵艦の現出するや各兵員は輸送指揮官の命により、何れも其の居室に靜座して命を待ちしが第一回の砲撃を受けて戦友に死傷者を生ずるや初めて甲板に上りたり、第二回の砲撃によりて到底爲すべからざるを覺悟したり。

▲神聖なる聯隊旗

是に於て聯隊長須知中佐は兵士をして悉く上甲板に登らしめ沈痛なる語を以て曰く「事玆に至る今は如何んとも詮なし各自獨斷擅行せよ我本國は彼方なり」とて

指示し訣別の辭を述べ終りて後更に聯隊長室に入りぬ室には中隊長長尾大尉、同橋本大尉等の將校十八名と兵士十三名ありて肅然中佐の來るを待てり、是れ潔き最期を共にせん爲にして悲壯の氣は聯隊長室に充ち滿てり。

此時聯隊長室に在りたる旗手步兵少尉大久保正氏は中佐の來りて座に就くや否や聯隊旗を捧持して中佐の前に進み慨然として曰く「我運命は定まれり畏けれども聯隊旗は小官之を寸斷して而して嚥下せん」と、中佐首肯きつゝ靜かに之を止め聯隊旗に就ては余適宜に處置すべし暫らく待てと中佐の言終るや否や巨彈忽ち聯隊長室を貫いて爆發せり。

敵彈の聯隊長室に爆發するや即死するもの十二名大久保旗手も其中に在り血は迸り肉は飛び凄慘の狀を極む長尾大尉同じく負傷したるも死に至らざるを以て憤然として帶劍を拔き見事に割腹し橋本大尉は拳銃を以て自ら咽喉を貫き枕を並べて死し其他六名の將士も傷き無事なるは中佐と兵一人のみ。

是に於て兵は聯隊長室を出で丶上甲板に上りしに死屍算を亂し流血淋漓として足辷り步行も容易ならず更に聯隊長室にとつて返せば中佐は自ら聯隊旗を燒き盡し更に旗竿を折りて燒きつゝ其の半ばに及びたる時なりしが軈て全く燒き盡されし一刹那巨彈再び此の室を犯して破裂し破片は中佐の胴腹を穿ち中佐終に斃る。

聯隊長の最期を見たる一兵士は直ちに甲板に上りて身を海中に投じたるが此の時相前後して二百名計りの兵士同じく海中に投じ浮きつ沈みつ波間に漂ひつゝありしが其の中に大友軍曹あり海上に漂ひながら大聲を發して『討てや懲せや露西亞國を』と朗々軍歌を唱へたるより他の兵士亦之に和し軍歌の聲は玄海洋の濤聲と混じて悽絕又壯絕なりき。

一兵士は波間に漂ひながら顧れば敵艦は約二百米突の處に在り甲板の上には露兵各々双手を開き凱歌を唱へ居るが如く見え無念は實に骨髓に徹したりしが軈て我戰友は或は沈み或は流れつゝ最も悲慘の最後を遂げたりき。

▲屍の山、血の海

斯くて海中に飛込める者は死力を盡して游泳し、傷けるは溺死したり、されど本船は容易に沈没せざるを以て敵艦は更に二百メートルに近き來り、砲彈三百發を亂射し船内並に海中に浮べる兵士、船員等を亂殺す、甲板上死屍山を築き海中に血潮を漲らす其の惨狀言ふべからず、而して船の全く沈めるは午後二時半頃なりし敵の射撃は頗る猛烈にして第一回の砲撃には一彈の下に田所軍曹以下十七名死傷したるが、軍曹は



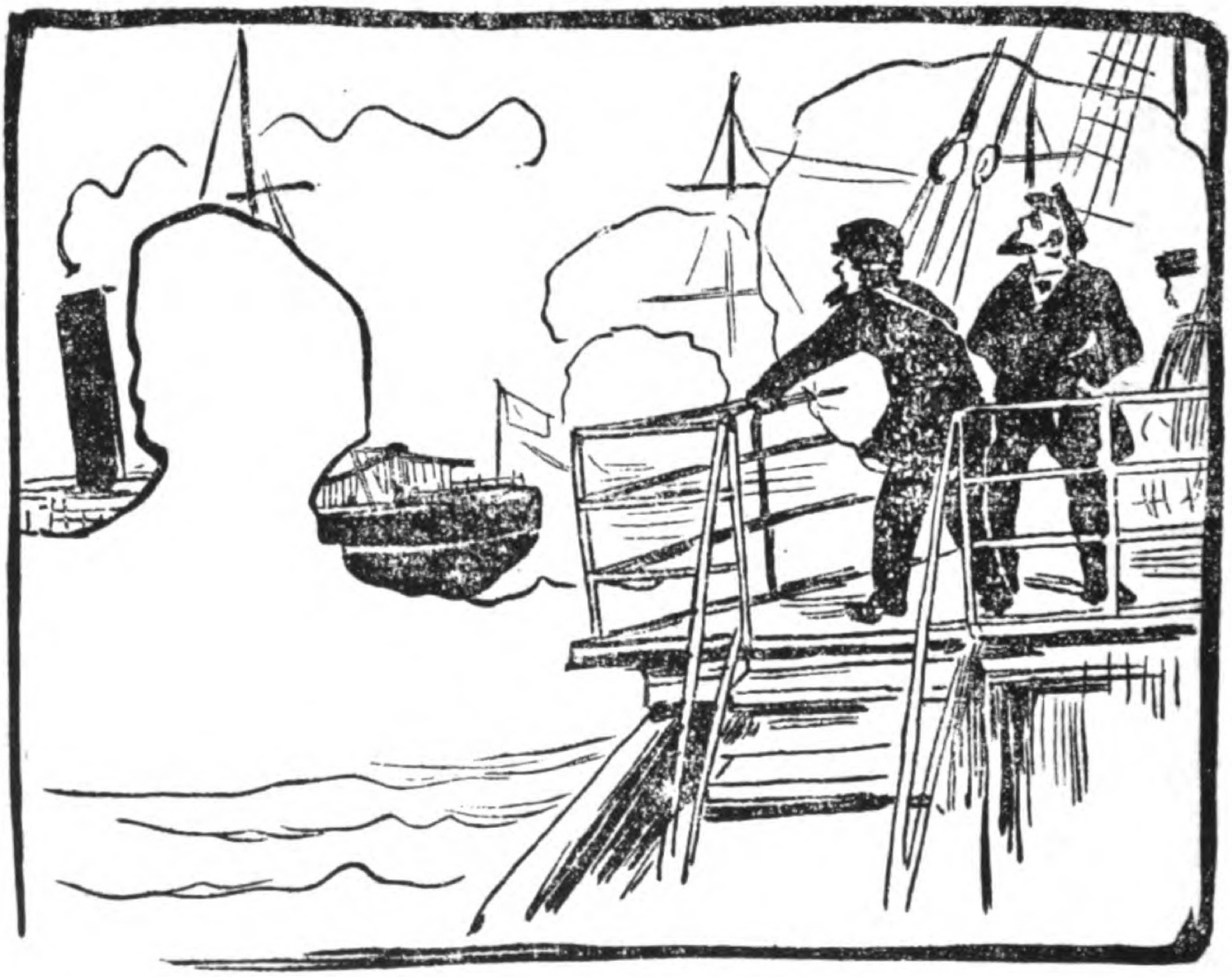
到底救ふべからざるを知るもまづ自から負傷者に繃帯を加へて最後の決心を整へたり、然るに各武器は一所に整頓したれば急卒の際自己の兵器を得難く自盡するに道なく第二の砲撃後飛込みたりといふ。情況この如く敵艦は咫尺の間に迫りて亂射したれば我が乗組の殆んど全部は撃殺されたり、一發の砲彈二十名を倒せる様の猛烈なる特に機關部に命中せる際の如きは實に二百名の死傷者を出せり。而るに此の勇壯なる兵士は、始終萬歳を高

唱し盛なる萬歳聲裡に千古の恨を呑みて、玄海の藻屑となりぬ嗚呼悲しむべし。此際萬死を遁れて生存せる者三十七名多くは漂流して漁船に救はれしなり。

遭難餘聞

常陸丸遭難の狀況は以上の如くなるが、猶生存者の一人火夫山瀬某の實話によれば午前九時三十分より十時迄の間に於て不幸にも敵艦に出會せることを認め、其進退を思考する間もなく、敵は空砲二發を放ちて航行の停止を命じたり、此時敵の艦數は四本煙突のもの二隻二本煙突のもの一隻にして其空砲を放ちたるは將官旗なき四本煙突の方なりき、左れば常陸丸は咄嗟の間に沖ノ嶋指して其進路を轉換し機關部全員下への命令ありたれば、我等は直に持場に駈付け、前後四個の汽罐には死力を出して火力を增し、罐も裂けなん許りに焚出せしが何分にも我の全速力は僅十五海里にして敵は二十海里を有する有樣なるより、航行約一時間にして既に間近まで追跡し來られたり、是れより先き敵は先づ其二本煙突の方より第一の實彈を發射し、夫れより各艦共續々發砲し、果ては二百米突位の間近に來り中腹目掛けて亂射せし爲め、船內各所の被害は殆ど名狀すべからざる程にて、其第一彈は幸に船尾を掠めて波濤の間に墜ち、次も船首の船橋に當りたるに過ぎざりしかど、間もなく放てる一彈は機關室に命中し、續いて火藥庫を爆發せしめ、船は非常なる爆聲と共に漸次浸水し、約二時間にして全く沈沒するに至りたり我等は汽罐の破裂に先だち甲板に上れとの命令に接して漸く甲板に出でたるが、此際火夫五六名は其儘遂に無慘の最後を遂げたりき、後に聞けば自分と同時に甲板に出でたるは油差二名、火夫五名、倉庫番一名にて火夫一名と倉庫番は何れも湯傷を負ひ居たり。見渡せば二等運轉士は自殺したるにてもあるか上甲板の左舷に斃れ居りて其傍なる一名の將校は殆ど面部の大半を砲彈に削られ、又頭部を掠められたる一等機關士の屍體は船橋の下に墜ち、其他廚夫ボーイ等死屍累々たる間に腰部其他に負傷して横れる凄絶の慘狀は

今更何と形容せんか殆ど其辭なきに苦しむなり、夫れより我等は自由行動を採るべく命ぜられたれば、自分は先づ救命帶を襯衣と股引との上に着け上等室なる抽斗の一を抱き投海せんとて、左舷に赴きたるに、憐れなる水心なき人々等は覺束なくも左舷の階子、繩其他の物に縋り付き、今にも救助船水雷艇等の來るあるかと、頻に陸上を凝視し居れり。此際同船の將に沈沒せんとするに方り敵艦にては頻に喇叭を吹きつゝ鬨然と歎呼して彼方



に立去りたる事なり、我等は斯く生死の間に浮沈しながらも、歡呼の聲を聞きて忌々しく出來得る事ならば彼等に喰付き遣りたき心地したり、兎角する中無情なる強風起りて浪さへ高くなりたれば怒濤のまに／＼漂ひ去られたる折柄漸くにして山口縣の漁船に出逢ひ救上げられたり。

其二

次に生存者石井子之吉の談によれば我々は常陸丸の最下層に居りましたので敵艦に遭遇した事は暫

く知らずに居ましたが其中霧の中から怪い船が見えて來たと申します。敵艦だらうと云ふ者もあれば我軍艦だと言ふ者もありました、我々は船長室と機關長室との間の窓から覗いて見ましたが慥に敵艦である事を認めました、愕然とする間もなく我船は俄に船首を轉じ全速力を以て馳走すると、直ちに一發の砲聲が聞たえ、續て上甲板に「氣を注けイ」と云ふ號令が聞えると思ふ中に、又一發の砲彈が我々の居る舷側に中つたがカンと云ふ音響がしたのみで刎返つたやうでした夫を始めとして續けざまに數十發の亂射をされる甲板の上から我々の居る處へ鐵片や木片や鮮血滴る手や足や首などがドシ〳〵と飛んで來る、之は丁度十時五十分頃の事だつたらうと思ひます、我々は直ちに甲板へ出て見ると兵四人と馬四頭とが斃れて居る、負傷者は數が知れません、時に一旦遠ざかつた敵艦が今度は更に近寄つて更に猛烈に砲撃し始めました、然るに口惜しい事には副官が彈藥入れの鍵を持つて戰死しましたので、銃は取出しても射撃する事が出來ません、此上は已むを得ない如何して乘船を敵艦の舷側につけて貰ひ拔劍で斬込まふ抔と相談して居る間に、一彈飛び來る每に五六人六七人と一度に斃れて、見る間に死骸の山が出來て、乘船は次第に傾斜するのです、既早施すべき手段なしと見て上官は命令を傳へました、各々獨斷擅行せよ根限りに泳いで如何にかして其狀況を報告せよと云ふのであります、すると同僚の一人は聯隊旗を持て行うと云ふので、此事を山縣少佐に申上げると、少佐は自殺の準備を爲されて聯隊旗は須知中佐の手許にあると申されます、で直ぐに中佐殿の處に伺ひに出ると聯隊旗は既に火中された後でした、其中に各將校は自殺するやら、敵彈に斃れるやら誠に勇ましいとも悲しいとも申されませんでした、我々も最早之れまでと言ふので四百餘名裸になつて一度に海中に飛込みました。

佐渡丸遭難記聞

生還者　星野少佐の談

我が佐渡丸は常陸丸と相並んで進行し、六月十五日午

前九時頃左舷甲板を逍遙中常陸丸は遲れて進み來りしが、妙に回轉する如く見えしかば、人々怪しみて或はコンパスの試驗をなせる爲ならんと評議し居たるに、突然として左舷陸地の方約二千メートルの處に、大なる軍艦の波を蹴立てつゝ進行し來るを認めしも、マサカに露艦とは思はざる内砲聲一發常陸丸に向つて射擊せしものゝ如く、又簇々として亂發せしかば、愈露艦なるを知れり、間もなく敵艦二隻は我佐渡丸の左右を圍み、一隻は常陸に向つて砲擊し、孰も檣頭に止れの信號旗を揭げ居たるが常陸は舳を轉じて免れんと試みしに、我に向ひし敵艦の一隻は、急遽常陸を砲擊せり。敵艦は愈進んで我に近づき、射擊愈急なり。されども敵も公報に示す如く、未だ彈丸を命中せしめず、我船の前後を亂射せり、我船長は逃れ得るだけ逃れんとせしものゝ如く、是も舳を轉じて逃げ出せる時敵彈一發機關部に命中して進行する能はず、時に敵艦より船員は其船を去り非戰鬪員は我艦に來れとの信號ありたれば、監督將校は單身敵艦に赴き、之と行違ひに敵艦より將校一名水兵數名を乘せたる端艇我に向つて來れり。

▲敵將の來船

時に我々將校等は食堂に集り、種々協議中なりしが、中には敵艦に突進して最後の運命を決せんといふものあり、又は來船せる敵の將校を血祭りになし、各自殺せんといふもあり、評議區々にして船中の混雜一方ならず、皆々會議室に押しかけ來り爲めに靴上着など亂雜しありしかば、若し此有樣を敵に見られなば頗る恥辱なりと思ひ、取片附方を命ずれども混雜のため誰一人應ずる者なし、依つて予等二三の將校は散亂せる物品を海中に投じ、室内を清めつゝありしに、敵將は兵二名を率ゐて舷門に到れるを、便乘者中のダルニー居留民長梅田潔は露將を迎へ、上甲板の船長室に導き談判しつゝありたり、暫くして梅田は我々の居る會議室に來りて、敵は四十分の猶豫を與ふべければ、非戰鬪員は速に此船を去り、將校は我に來れといへりと告ぐ。

▲非戰員救助の談判

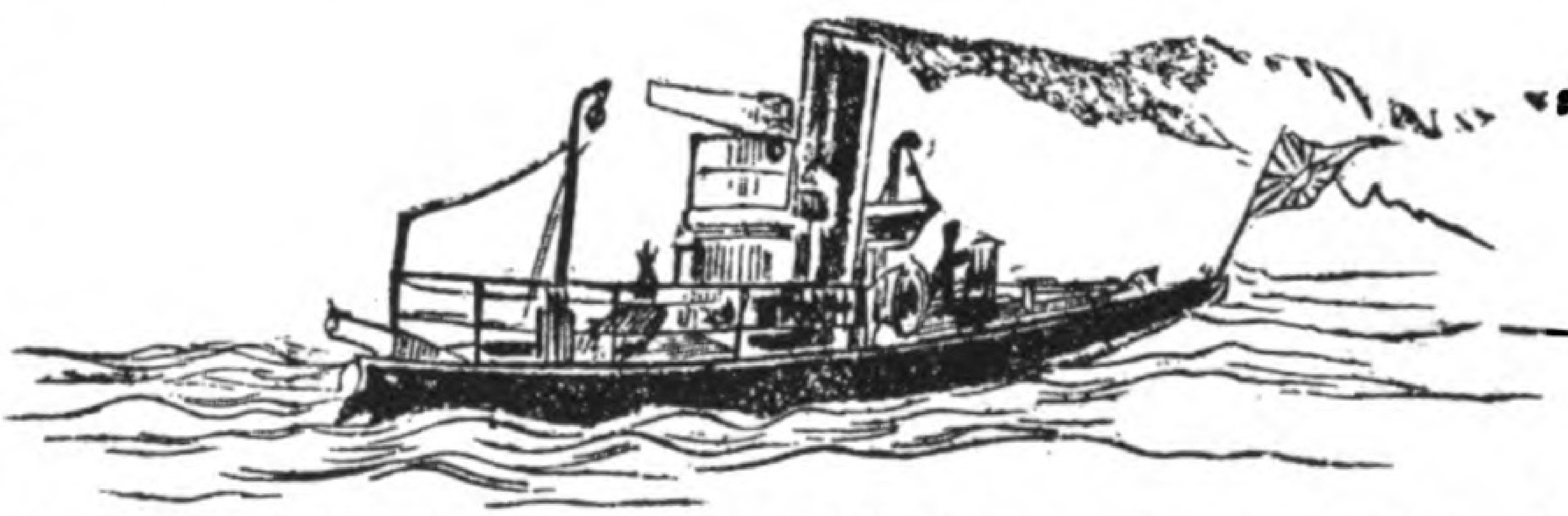
予は蹶起し梅田を拉しつゝ船長室に到るや露兵一人其入口に看哨し居れり、依て一ッ脅かし呉れんと思ひ突然大聲にて我は士官なりと怒鳴りたれば露兵驚いて捧銃の禮を行ひしは頗る滑稽なりし。船長室に入り見るに、露將は船長と談判最中にて、其擧動ソワ〳〵として落着かざるもの丶如く、其容貌を見れば年齢三十五六と覺しく、鼻下に赤き疎髯を蓄へ折襟の黒き軍服の肩章に金筋二條ありしを以て、少佐たりしを知れり、依て予は獨逸語にて自分の官職を名乘り、握手をなせる後、汝は獨逸語を知れるやと問ひしに、彼は知らざるまねす、依て梅田を通譯として左の意味の談判をなせり、曰く本船には非戰鬪員多く搭乘し居れば之を救濟せざるべからず、然れども僅四十分の時間にては如何とも仕がたし、故に今少し猶豫を與へよ、且本船には端艇も少なければ、人數の上より見て汝の艦隊よりも救助船を出すべし、彼曰く我々も今や敵地深くに在れば、自衛上救助を出すの遑なし、且つ猶豫時間は茲に制限して延ばすこと出來ざれば、可成早く逃れよ、又將校は我艦に來れと。

▲敵の横暴

於是予は怒髪冠を衝き大喝一聲して曰く、日本武士に斯る腰拔なし、汝等の捕虜となるべき軍人は日本には一人もなしと喝破せり。彼は再び四十分の猶豫時間を言ひ殘して匆惶去らんとしタラップの處まで進みしかば、予は今少し彼を止め置かんと再び獨逸語を以て話しかけしに、先きに獨逸語を知らずといひし彼は明快なる獨逸語を操りたり、思ふに獨逸出身ならん。然して彼は傍に在りし佐藤中佐に向かつて共に我艇に行かんことを勸む、中佐亦大に怒つて馬鹿をいへと拳を固めて今にも打つてかゝらん勢を示せしと、且つ腰間の日本刀を見てイト恐しげに逃げ去りたり、此時梅田は彼と同行せるもの丶如し。

暫時にして敵艦二隻は我左右を扼け、敵將校の本船を離れたるを見るや四十分の猶豫もあらばこそ、第一發の水雷は放たれクル〳〵と水を切りて進み來り、横腹部に命中し、船は非常の激動を起し左舷に傾きぬ。是

に於て予等將校は辭を盡して非戰鬪員を諭し、速かに逃れんことを勸め、端艇を卸して一同を乘移らしむる等混雜せり。時に常陸丸も敵の水雷を受けたるにや左に傾けり。而して我靜間工兵大尉は必死となりて船の損所に手當を加へ竹内工兵中佐は總員を督して力を盡さしめたり、第一の水雷を受けてより約一時間の後第二の水雷は發射せられ、同じく機關部に命中せしも最初の砲彈及二發の水雷は同一所に命中せしことゝて、浸水少く沈沒の模樣なし。此時の激動は非常にして、靜間大尉は甲板より室内に刎ね落され、全員總て轉倒したり。予は最早萬事休すと覺悟し、逡巡して敵手にかゝらば千古の不名譽なれば、此に持ち居る此鉛筆にて（此時鉛筆を示さる）遺書を認め軍刀を拔いて將に自殺せんとする所を、同僚より刀をもぎ取られ、モー少し待て死なば諸共にと止められて、其言に隨ひたり、是より一同最期の酒を酌み交はさんとて食堂に密集し、シャンパン酒を拔き呑まんと欲するも、コップなければ罐より口移となし　天皇陛下の萬歲を唱へ居る裡、露艦は北方へ逃れ去れりとの報告ありたれば、甲板上に出で見るに敵艦は既に二千メートルの北方に走りつゝあり。而も船の沈沒に至らざるは天祐なりとて再びシャンパンを擧げて祝し合へり。



第一水雷は十五日午前十時五分第二水雷は十時五十分頃なりしが、是より船は海上に漂よひ、翌十六日の午後三時に至り、一帆船の通過するを認め之を呼び止めて三十餘名を救助せしめ、予も報告の任務を受けて之に乘じ、午後七時本船を離れ萬歲聲裡に送られて陸に向かひしも、風なくして速力頗る鈍く、一時間僅に二浬を走りしのみ翌十七日午後二時に至り救助船伊勢丸に會し、遂に日の丸に助けられ門司に着きたり云々。

家庭談叢

カイコの一生

一記者

人の手鹽に育てらるゝ蠶兒の一生程幸福なものはありませぬ、桑の葉芽ぐむ穀雨の節を以て天より生命を賦與せられてより、五の齡を經て繭に籠るまでの間、人より食糧を給與され、四度眠起の世話を爲て貰ひ、巣を作る時にはマブシといふ足代迄をも拵へて貰ふといふやうに、手厚い養育を受くる事は他の蟲には無い所で、眞に幸福な虫と謂ふべきであります。而も又



た蠶の一生程光輝あるものはありませぬ若くして克く食ひ、克く眠り、老いては繭を營み、剰さへ死しては錦繍の美を殘して養育の恩に酬ゆるのですからよしや其の生涯は短しとでも、夫

の徒に醉生夢死する蟲類に比し、生涯の榮辱霄壤も啻ならずと申して可いので御在ます、我が日本で金高の一番上る國産は生絲であつて外國へ輸出する價額だけでも年々五千萬圓以上となつて居ります。五千萬圓といへば一等戰闘艦が五艘も出來ますが、これが二寸に足りない蠶が産出すものと思へば實に恐るべきものではありませんか。我々は蠶に向つて大いに感謝してよいと思います。因て茲に私は蠶兒一代の有樣と養育の概畧を大なる興味を以て御話致す次第であります。



蠶兒の發生

春四月淸明の節、蠶兒の發生を萌す頃になると、養蠶家は飼育の準備として蠶室を掃除し、必要な道具類を支度して置きます、扨て時熟するや、卵紙（蠶兒の卵を産付てある板紙）を貯

藏箱（卵紙な藏めたる桐製の箱）より取出し、之を蠶室に持來り、設けの棚に載せ置き、温かい外氣に觸れしめて發生を促します、かくて十日許經つと、卵殼中に在る蠶兒は漸く孵化を始め、体を包む紫色の膜を喰ひ破つて了ひますから、蠶兒の体は穀の外に青く透徹る樣になり、之が爲め卵紙の面が總体に青味を帶つて來ます、養蠶家は之を

▲催　青

と言ひ、蠶兒發生の兆として喜ぶのであります。すると間も無く毛子（蠶兒の幼名）が自ら穀を破て這出でますから、卵紙の上は眞黑く、蟻が群た樣に成ります、尤も先頭第一に飛出したもの凡そ百頭丈は不便ながら掃棄て丶了ひます、是は全体の健康を計る爲めに一部を犠牲に供する次第で、已むを得ない處置なのであります、ソコデ後續部隊が濫に卵紙の外に這出すを拒ぐが爲に、發生前、其の卵紙を白紙に包んで、藁座（藁を飯櫃入の蓋の樣に丸く編みたるもの）の上に載せて蠶架へ差込で置きます。

▲掃　立

毛子が悉皆出揃て包紙に這上つた頃を見計らひ、先づ掃立紙（美濃紙四枚を繼合せたるもの）の目方を計つて置き、扨て後包紙を開いて見ると中は一面に產れ立の毛子が眞黑に群つて居るから、烏渡指を觸るべき所丈を羽箒で掃つて、ソコを摘んで前の掃立紙の上に持て行て、包紙の裏をポン〳〵と指先又は羽箒の柄にて輕く叩いて、毛子を下に落します、而して尙ほ落ち切れぬ所は羽箒で以て掃き落すのであります、ソコデ悉く掃立紙の上に落ち終つた所で、再び掃立紙を秤量にかけ、得たる目方の内より前に計つた掃立紙の重量を引き去つて、殘の量即ち毛子の体量を知るので御在ます。期うして計つた生れたての

▲蠶兒の体量

は卵紙一枚に就き凡そ四匁强といふことです、而して其の頭數は三萬頭乃至五萬頭にも及ぶといふことです、此の重量を計り數量を知るといふ事は養蠶家に取つて肝要なことであります、如何となれば桑葉の見積

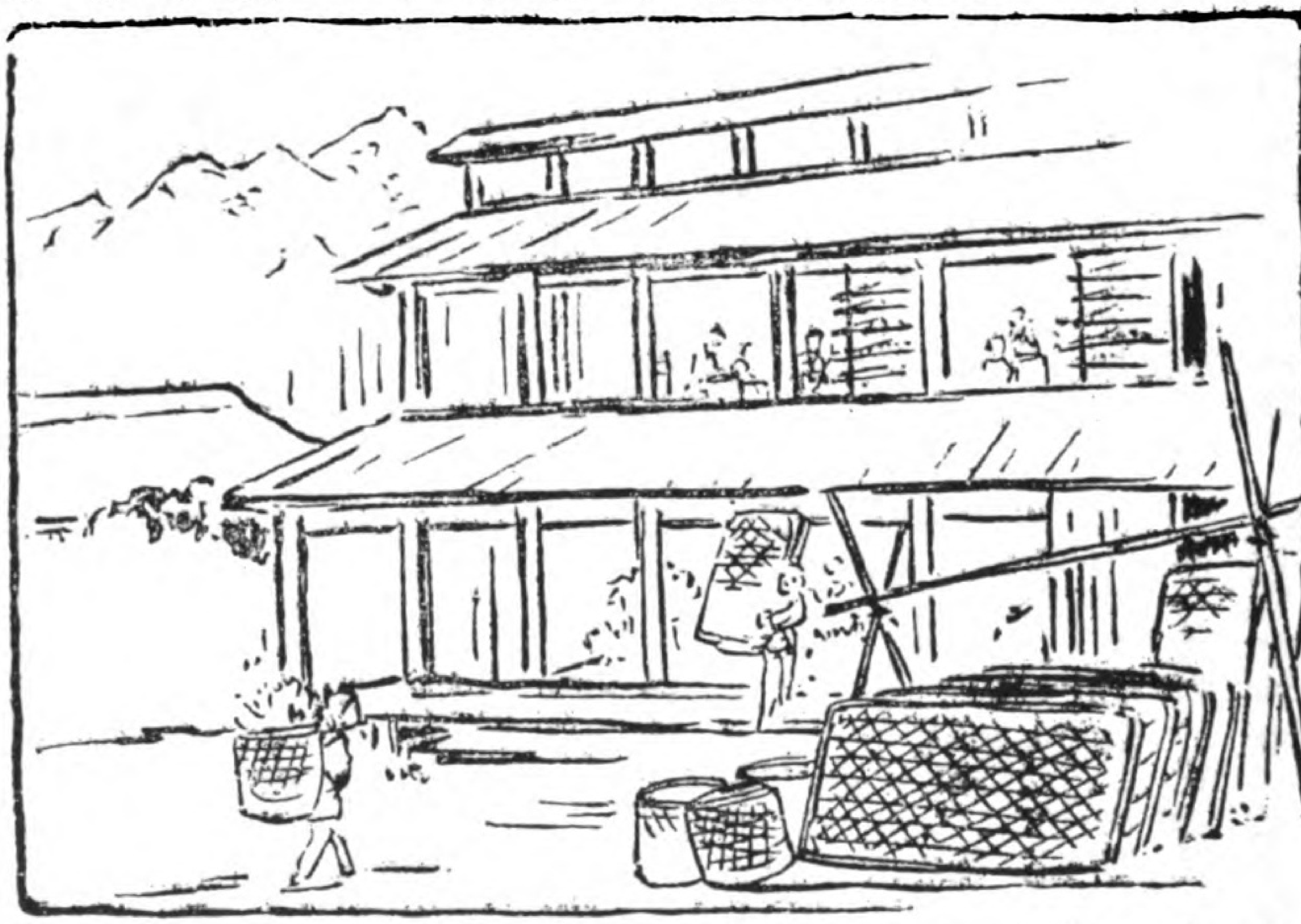
人手の差繰、蠶具の用意等総て之を標準として割出すのでありますから。

第一齢中の手當

斯て体量を計り終れば、掃立紙の上に、籾糠を毛子の体の沒する位の加減に振り撒き、兩手を以て蠶兒諸共軽く攪拌し、別の紙の上に取分け、丁寧に擴げます其の擴げ方は蟻量一匁をば一坪（一尺四方）に充たすのを法としてあります、此時用ます

▲籾糠

は臼にて細かに砕き、篩に掛たもので、兼て用意して置くのであります。籾糠は濕氣を吸收し惡臭を防止し、且つ蠶坐を温むる等の効がありますから、蠶兒の育つ上には必要欠く可からざるものであります。斯くて凡そ二三十分も經ちますと、毛子が籾糠の上に這上て來ますから、その悉く籾糠の上に頭を擡げて脊揃をする頃を待つて、始めて第一回の給桑、即ち


養蠶家屋の外景

▲喰初の桑

と云ふのを與へます、桑は實に蠶兒の爲めには唯一の食料で、筋となり、血液となつて体軀を形造る原であるから、最も大切なものであります、殊に此の第一回の給桑に在ては蠶兒が食物といふものに初めて有り付く時であるから、十分多量に喰べさせて、且つ過不及なく全体に行

渡らせて、食ひ逸れや食ひ遅れのないやうに氣を付けて遣ります、而して此時は人間なれば漸う〳〵箸を握つた許の幼兒で、消化機關も整はず、歯も弱いのでありますから、桑は可成く柔かいのを撰んで、細に刻んで遣らねばなりませぬ。

▲桑の切方

は六ヶ敷もので、蠶兒の小さい時は小さいなりに、大きく成た時は大きいなりに、蠶軀に合せて刻まねばならず、且つ寸法を揃はせねばなりませぬから、餘程熟練を要します、即ち發生第一日には桑の葉を一分の大さに切り、三日目には一分五厘に切り、五日目には二分に切り、蠶兒成長して、二齢三齢四齢と進むに從ひ三分五分七分と順に分を殖して行かねばなりませぬ、熟練なる刻手が桑を切る所を見ますと、先づ澤山の桑の葉を取つて桑切臺の上に積重ね、其の眞中を左手にて抑へ、右手に庖丁を取つて積重た桑の左右の兩端を切落し、其を拾上て左手の下に積み、再び前後の兩端を切落して之を又た積上て、四角の柱の樣にする、而して其の小口からソク〳〵と庖丁を入れてゆくと、桑の葉が望む所の大さに刻まれて、其の周圍は堆高くなります、斯う云ふ巧者の切つた桑は恰も器械にでも掛たかのやう分角齊整として不揃のものがありませぬから、篩を用ふるにも及びませぬけれど、不馴の者にさせると兎角細大不齊の虞がありますから、篩を用ゐて切桑の寸法を揃へなければなりませぬ、ソコデ一分篩二分篩三分篩などゝ大小幾干の篩を備へて置く必要が起るので御在ます。

▲給桑の回數

蠶兒の發生は大抵午前五時頃に始まり、其より悉皆出揃ひますまでには六時間を費しますから、掃立後、藁坐に移す時分は、彼此十一時で御在ます、此時第一回の給桑を致しますと、蠶兒は喜んで桑に喰付き、三十分を經て滿腹した所で、食を中止し、其より休息と運動に一時間を費し、十二時半に成て腹の減いた所で再び食事を始め、三十分を經て滿腹し、其より一時間休息し、又た運動すること前の通りであります、斯くて

午后二時に二回目の給桑を致しますが、此時も矢張り前と同じ順序で喰べたり休んだり致します、即ち蠶兒は三時間に一度の食事を二回に分けて喰べるので御在ます、其より四時に三回目を、七時に四回目を十時に五回目を與へ、是にて此日の給桑終、喰納めと致します。扨て發生第二日と成りますと、拂曉第四時に桑を與り、尋で七時、十時、一時、三時、五時、八時、十一時、都合八回給桑を致します一齢中の給桑は仕舞まで此の時間と回數を用ゐて行くので御在ます。



桑を剉む處

▲給桑の注意

蠶兒に桑を給るには一定の時間に一定の分量を與へねばなりませぬ、然るに不馴の養手は濫に分量を加減したり、時間や回數に頓着しなかつたり、外から見ればハラ〳〵する様な無茶な事を致します、中にも猫可愛がりの人などは、桑さへ給れば善いかと思つて、まだ齒も固まらぬ稚蠶に向つて無暗と桑を食はせ過しますから、其の結果は蠶坐を冷却して蠶兒の發育を妨げ、多くは頽蠶にして了ふのであります。

我々蠶は人の手に養はれ、言語通せざる爲め苛い目に逢ひます、或は飢て食物を與へられないこともありますし、飽て食物を強いらるゝことも御在ます、之が爲に往々疾病者を生じまするは、誠に迷惑な事で御在ます、我々の欲する桑の量は、第一齡の折に於て原紙一枚の同族四萬頭の頭に壹貫四百四十四匁といふ所です、之より殖ても困れば減つても困ります。とは實に蠶兒が未熟なる養育者に向つて訴ふる所の不平で御在ます、其柄畑から摘んで來た許りの桑は水分を多く含んで居りますから、斯ういふのを直ぐに蠶兒に頬張しては宜しくありませぬ、先づ第一齡中の稚蠶を養ふべき若桑ならば、午后に給する分は午前に、午前中に與ふる分は前日の夕方に摘んで來て置くやうにするのです。

給桑



▲分箔

第一齡中の第二日目、即ち喰初后八回許桑を食つた所で、蠶兒の坐席を擴げて、今迄一坪で在つたものを二坪にして遣ります、其柄三日目には三坪にし、四日目には更に擴げて五坪にして遣ります、之を養蠶家は分箔と申します此の法は藁座に籾糠を撒き桑を與へて、之を手に取り別の藁座に移して擴げるのですが、其の手續に至ては除沙と同じですから、詳しい事は次の段を御覧に成れば解ります、尤も養手に依つて此の分箔に加減あり、薄飼と云つて廣い場所に蠶兒を疎に置くものは分箔に重きを置き、狹い面積に蠶兒を密に置くものは分箔を輕んじます、

所で両者の得失を稽へますと、後者は前者に比し、手數を省き、桑も多くを要せずして經濟上には得あれど蠶兒の衛生上には宜しくありません、或る厚飼好の人に養はれたる蠶兒一日北の蠶座の身動きも成らぬ群集の内より辛うじて首を擡げて曰く、我々は御覧の通り窮窟な生活を致して居ります、幸ひ我々は達者だから重圍の内を這出したやうなもの、孱弱な奴は慘澹な者です、御覧なさい達者な奴の下に敷かれて了つて桑を食ふことも出來ずに、ジッとして我々の去くのを待つて居ります、ですから上に居る奴は十分桑を食ふことが出來ますけれど、下に成つた奴はヒモジイ腹を抱へて、口許モグ／＼して居ります、然う斯うする内に上の奴が去いて餘地が出來たから、今度は俺等の番だと這上て見ると、最早疾うに喰盡されて了つて桑も何も有りはしません偶々有るかと思へば萎びてゐるぢやナありませんか、恁んなことでマゴ／＼してゐる内に、飢死んで了ふ奴が何程出來るか知れません。



蠶沙を除く所

と先ア斯も話さうかと想はるゝ程ですから、極端な厚飼は蠶兒の爲に無慈悲極ると言つて可ので御在ます。

▲除沙

斯くて六日目に成た時、蠶兒の排泄した糞や、喰殘しの桑屑を掃除して頓て眠期に入る蠶兒の爲めに、床を新しくして遣ります、此事を蠶沙替と申します、地方に依ては床易とも、裏替とも、跡立とも、いろ〳〵に申します、此の蠶沙易を行ふには最初先づ籾糠を蠶座の上に蠶兒の隱れる位までに撒いて、其上に剉桑を振掛ける、すると蠶兒は籾糠の間から這出して頭上の桑に取附きます、ソコデ次の桑を與ると、蠶兒は悉く其上に這上つて了ひますから、此の時蠶沙の持上らざるやう注意して、手で以て籾糠の部分より桑と蠶を一緒に捲き集めるので御在ます、すると元來糸に成る位のものですから、蠶にも桑にも糊氣があるので、相粘着して海苔巻の鮨を巻くやうにクル〳〵と捲けて了ひます、所で之を小盆か又は木鉢の樣な物に取つて、更らに他の新しい蠶坐に移すので御在ます、而して蠶兒の爲めの舊宅なる元の蠶坐に附着した糞やら、桑屑やらを叩き落すので御在ます、此の一齡中に於ける蠶兒の糞を見ると、其の大きさは精々煙硝位のもので、手には摘めず、眼にも這入らん程のものであります、要するに此の蠶沙易の事は恰も我々が梅雨前に於て椽下の掃除もしたり、下水の浚渫もしたりするのと同じ譯合のものであります。

▲獅子の休

此の第六日目の蠶沙を取替ゆる前后は第一齡中最も食慾の盛んな時でありますが、頓て第七日目に成りますと、食慾漸く減じ、徐々眠を催して來ます、かくて第八日目の朝に桑を與つて、之を第一齡中の喰ひ終ひ即ち桑止と致します、すると蠶兒は活動を中止して一寸一ト休息と言つた体で眠に就きます、之を養蠶家の通語で初眠とも獅子の休とも申します、此の折蠶兒の有樣は何うかと言ふに、蠶沙に糸を吐いて体に纒付け、而して足の爪を之にかけて躰を支へ、稍々頭を擡げたなり靜坐して身動きも致しません、斯くして翌日の午后に至るまで凡そ一晝夜といふもの何も食はずに、殆ど熟睡した樣に成つて居ります、其故眠ると申すもの

の實は此時に於て蠶兒は蛻皮を脱し新皮に脱代はるので御在ます、ソコデ愈々脱皮せんとする折は、膜質の部分に丁字形の裂目を生じ、軈て二三回躰軀を伸縮つて頭を出すよと見る間に、胸足を脱いて胸部を露出し遂に全身を脱出し終り、玆に再び活動を始めるのであります、故に人之を見て起ると云ひ、是より後の蠶兒を一眠起とも申します、此の脱皮は蠶兒に採つての大厄難でありますから、養蠶家は此の期に於て大なる注意を拂ふので御在ます。

第二齢より第四齢



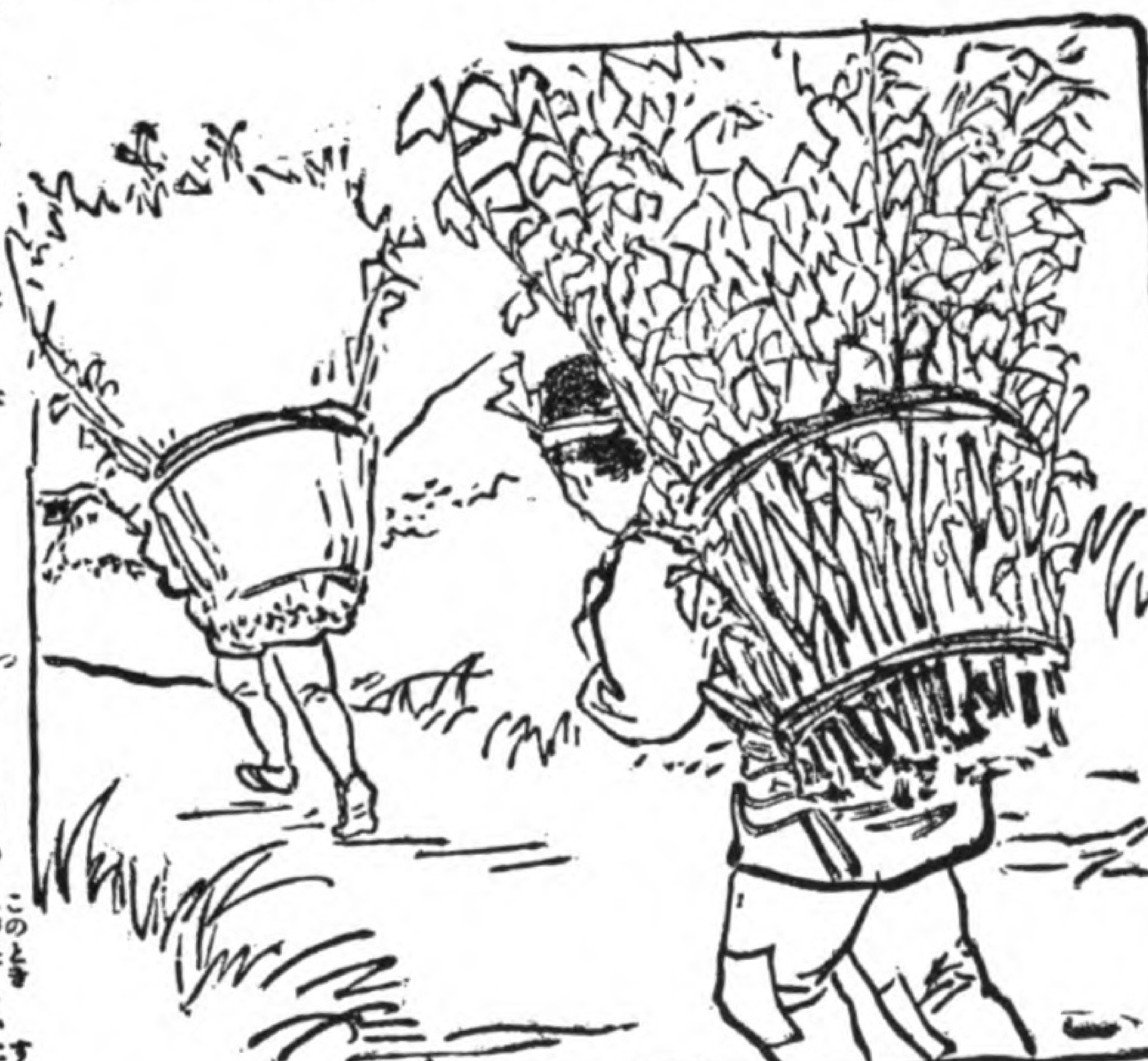
網を用ゐて蠶沙を易ゆ

蠶兒が獅子の眠より起て後六日間の生活を第二齢と申します、で先此の起き出でた時分の蠶兒の狀態を見ますと、第一齢中眞黑に、蟻のやうで在た躰軀は全く形を變へて藤紫色を呈し、其の大さは長さ二分幅六厘位に育ち、掃立當時よりは殆ど三倍も大きく成り殊に口は目に立つ程大きく成つて居ます、扨て蠶兒一同が起揃ふ頃を見計つて、眼醒しの桑を與へる、之を此道の語で桑附と申します、大抵午前四時前に起揃ふやうに成りますから、正四時に此の桑附といふを致します其より八時に給桑し、十一時に給桑し、か

くて午後二時に給桑ずる時に。

▲起　除

といふ事を致します、是は起きて匆々床を除き易へるの謂でして、即ち第二齢に這入つて初めての蠶沙易であります、其の法は第一齢中と同じ手續ですが、但だ此時より藁座を廢して竹籠の蠶座を用ゐます而して之と同時に分箔を行つて、藁座四枚の蠶兒を八籠の蠶坐に取分けます、斯くて午後五時と八時と十一時と都合七回に給桑を行ひます、第二齢中は何處までも此の回數と時間とを推して行つて宜しいので御在ます、ソコデ第三日目の午前十一時に成つて



桑を荷ふ處

▲中　除

といふ事を致します、是は起ると眠るとの中間に於てする蠶沙易の謂で、同時に分箔を行つて蠶坐を十二枚に殖します、其より五日目に至ると漸く二回目の眠を催して來ますから、桑の分量を減じ、例の籾糠を與つて蠶沙を取替へます、此頃は最早大分成長して居りますから、蠶の大さも菜種の粒か針のメド位に成つて居ります、で此の眠る前の床易を養蠶家は、眠除と申します、すると蠶兒は第六日目の午前四時の給桑を喰止めに、靜かに二眠の休息即ち。

▲鷹の眠

に就きます、此時は既に體軀も出來て居りますから、靜坐の模樣、脫皮の有樣等も初眠の折よりは一層明瞭

に見え、其の停食期間も廿四時間の長さに及びます。扨て此の度の眠より覺めて後を

▲二眠起

といひ第三齢と數へます、此時には餘程可愛らしくなり掃立よりは八倍の大きさに成りますから、桑も三分位に切つて與らねばなりません、且つ此頃より桑を食する分量も多く成るから、迚も摘んで居ては間に合ひません、因て畑より枝桑を刈つて來ます、其故此頃野良を歩いて見ると、桑の枝の殆ど六尺も有らうかといふのを繩で括つて、脊負子に掛て、體をヽの字形にして、ノソノソ歩つて來るのに遭遇します、或は又た枝桑の大束の地に引摺る位なのを馬の背に結ひ付けて手綱を長く引張つて通るのに逢ひます、因に桑の直段を話さうなら、此の馬の背一駄三十六貫建が今年の相場で最も高い時二圓五十錢したと云ふことであります、養蠶の本場へ行て見ますと、桑の取引所といふものが有つて、坪方より持ち込む數百駄の桑を仕切て之を養蠶家の需要に應じて夫夫分配して遣りますが、實に盛なもので御在ます、扨て三齢中七日間の手當を雜と御話しすると、先づ給桑時間は五時、九時、十二時、三時、七時、十一時の六回で、其の二日目に蠶沙（起除）を易へて蠶坐を十六枚に殖し、三日目より桑を四分に切り、四日目より五分に切り、此日三



桑扱器械

時に中除を行つて蠶坐を二十四枚に殖し、六日目に眠除を行ひ、七日目に桑止をして蠶兒を眠せ付るので御在ます、此の三回目の休息を舟の眠と言ひ、眠りより起て後を

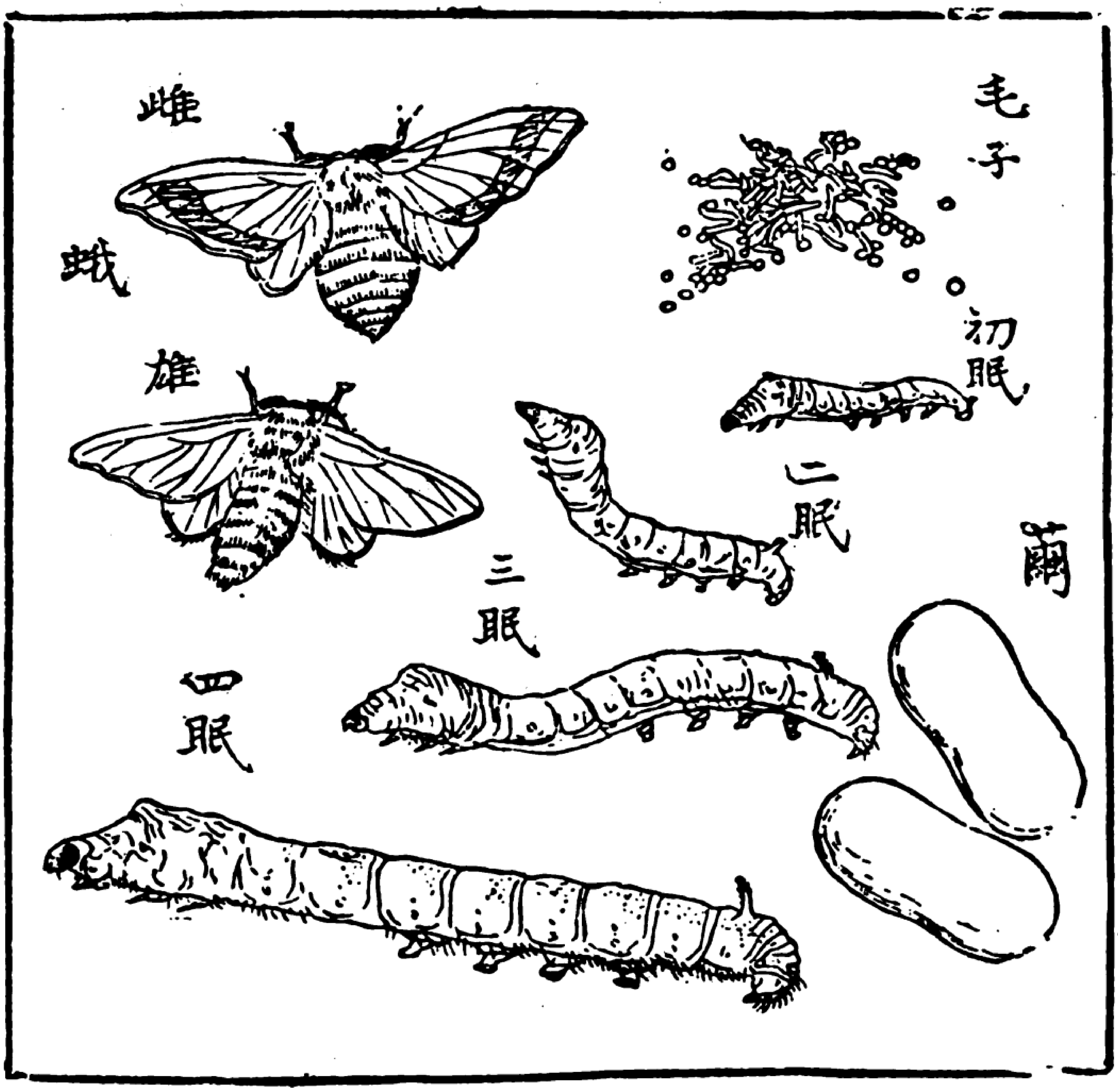
▲三眠起

といひ、第四齡と算します、此の期間の重なる仕事は、五時九時十二時三時七時十一時の六回に給桑する事、桑を七分に切る事、二日目に分箔して籠を三十二枚に殖す事、四日目に中除を行ふと同時に籠數を四十八枚にする事、七日目の午前九時に桑止をする事等であります、此等の仕事を終へると、蠶兒は七日目に午前十時頃より第四回目の休息なる庭の眠に落ち、翌る八日目一杯を夢の内に暮し、殆ど四十八時間といふものを停食して居ります、茲で一寸申添えて置きますが、第一齡より第三齡に至るまでの間は、蠶沙を取易へます時分に籾糠を用ひましたが、四齡以後は籾糠の代に網を使つて手數を省きます、此の網は絹糸、麻苧、又は木綿の撚糸、藺等を竹籠形に編んだもので、之を蠶坐の上に敷き、桑を撒布すると、下なる蠶兒は網の目を潜つて桑の方に這上りますから、其の悉く桑の上に乘り終つた所で、左右より二人の者其の兩端を持ち、蠶兒を連れて之を別の坐に移すので御座います。

第五齡より上簇（養蠶中最も繁劇の時）

四眠より起きて、齡を重ぬる事五つ、日を經ること三十日と成れば、蠶兒の体軀は發達して其の身長一寸七分、胴廻六分に達し、從て桑を消費することも多量であるから、養蠶家は非常に多忙を極め、臨時に雇人を增しても尙ほ手が足りないで、殆ど每晩徹夜を續ける位であります、先づ第一日の午前十時に蠶兒が四眠の夢より覺めると、桑附をするが、最早此時は剉桑なぞと言つては居られないから、又た實際其の必要もないから、切放しのものを與へる、其柄第二日目には籠を六十四枚といふ數にし、之に五時、十時、三時、七時、十一時の五回に十分桑を與らねばならず、而して

毎日の様に蠶沙を易へて與らねばならず、第五日目頃よりはボツ／＼簇の仕付もせねばならずといふやうに仕事が一時に立込んで來ますから、其の忙しさと言つたら、眼も眩かん許であります、主人は庖丁を持つて桑切臺の上にマゴマゴし、細君は桑籠を抱へて蠶架の周圍を天手古舞し、娘は蠶糞を頭に浴びたまゝ家中を驅



蠶兒生育の變化

摺廻はつて手傳の男と顏合せをするといふ騒動、忙しいにも忙しいが亦た仲々陽氣なものである、斯くして第八日目の十時に至つて最後の桑を與へ、最後の蠶沙を取易へて遣つて、養育の爲納めとすれば、蠶兒は之を生涯に於ける桑の食ひ終ひとし、恩の受納めとして、愈々有終の美を濟すべく最後の作業に取掛るの

であります。

▲簇

蠶兒發生より三十九日にして成熟の域に進み、扨其より簇に上つて最美の作業を營むので御在ます、今少しく簇の事に就て語らんに、簇は蠶兒が繭を結ぶ時其の支柱となり足代となるもので、是に種々の種類があります、其材料にも菜種、麥稈、竹枝、オドロ、鼠モヤ、大豆殼、稻藁等の數種あり、構造にも幾多の區別がありますけれど、最も進歩したる形は島田簇、折簇、百足虫簇の三種であります、島田簇といふは藁を苞の樣に折つて其の先端を括り、頭の所を輕



まぶし

く叩いて平たくし、中を脹らめたるもの、折簇といふは藁を折つて連續せしめ、之を籠に仕付る時は蜿蜒波狀をなすもの、百足虫簇といふは讀んで字の如く一條の繩に藁を横に纒はして、百足虫の形とし、籠に仕付る時とぐろを巻かしむるものであります、是等は春季農事の閑暇なる節々豫て造り貯めて置いて、蠶兒の上る十數日前より、日當善き軒下に吊して十分に乾燥させ、扨愈々蠶兒が成熟した所で之を籠に取付るのであります、さらば如何にして蠶兒の成熟を知るかと言ふに、五齡の終に成りますと、體色が透明る樣になり、蠶糞が次第に柔軟に成て來

る、けれども之を見分くる事は一寸困難である、即ち其見方は最初咽喉の部より透き始めて、一關節又た一關節と順に腹部まで透いて來て、尻の所に蠶糞の一粒が黒く殘つて居るのが見える位を適度として、之を手にて蓋の上に拾上げ、萱を選んだ所で、設けの簇に入れて遣るのです、然るに若し鑑別を誤つて早きに失すると、未だ食が欲しいから、其處中をマゴ／＼して居て、ほんの繭を作る眞似事をして斃死れて了ひます、其から老熟するまで取上ずに置くと、其のまだ蠶坐の内に在る頃より無駄に糸を吐いて勢力を消耗さして了つて居るから、折角簇に上つても巣を營む事が出來ないのであります。



繭の摘取

▲結繭

蠶兒が簇に上つて糸を吐く時の有樣は手を以て場所を求め、筋肉の作用に依て吐糸管を動かし、網の目のやうに左右に糸を吐き掛け吐き重ねるのであります、溫度順良周圍快適なれば二晝夜を以て此の作業を終り、累々たる純白の美果を簇の内に結ぶので御在ます、蠶兒は繭を結んでより又た二晝夜にして黄白色の蛹に化し、後又た二晝夜にして鳶色に化し、かくて七日目頃ともなれば、皮膚强固となるにより、此時を待つて摘取るのであります。

▲收繭

ソコデ繭を掻取て見ると、簇六十四籠即ち原紙一枚の掃立に對して最上作一石四五斗、上作一石二斗、中作八斗、下作にて六斗位の繭を獲らるゝ、而して此の粒數を數へて見ると、一升に就き普通三百粒であるから、中作八斗としても二万四千粒はあるので御在ます、ソレデ是丈の繭を作る爲めに何程の桑を要したかと申しますと、掃立より上簇前に至るまで桑を給する事百九十四回、此の總量二百三十貫目と註せられ、殆ど畑にして一反歩の桑を食ひ盡して了ふのですから、何と驚くべきではありませぬか、而して之を賣却すると、今年の相場(八升四圓三十錢)にして、中作四十三圓、好く出來れば六十圓以上にもなります、ですから少し、勉强して原紙五枚も飼へば、僅々五十日内外の骨折で以て二百圓以上の報酬を得るので御在ます。

序でに申して置きますが、絹布を着るのは贅澤だといふのは大に理由のある事で、まづ繭一升から生糸が幾許取れるかといふにざつと十匁より十七八匁位而して一升は大凡三百粒の繭がある、それ故皆様の小袖を一枚造るには凡三百二十匁の糸を使はなければなりません、三百二十匁の糸は三斗三升の繭を煮なければ取れません。假りに一升三百の繭があるとしても三斗三升の繭は約一万粒となります。掃立から上簇まで一ッ一ッ丹精して育てた蠶を一万粒殺さなければ一枚の小袖は出來ません。これを思ふと絹布は實に奢侈の骨頂で絹を着る毎に我々は養蠶者の辛勞を想ひやらねばなりますまい。

▲蠶兒の命

多くの蠶兒は繭を營み蛹と成るや軈て製絲家の手に渡つて乾燥室に入れられ、死して光輝ある糸を殘さん爲め、其の身を犧牲に供して了ひ生を享くること僅に五十日内外で御在ますが、中に或る少數の者は同族殘後二十餘日の生命を存らへ、蝶と化つて、此の光輝を永久に傳へん爲め子孫を遺すの大役を勤めるので御在ます。

(完)



戰場の天使

現米國赤十字社長
クララ、バートン女史の事

小野田花子

我が忠勇なる大和益荒男の戰場に於ける壯烈なる働きは、眞に歴史があつて以來の事柄で、万國の人が共に賞賛する所です。ロシヤでさへ一度は干戈に訴へて見たもの丶、今となりては眞に心細い次第でありませう此の申さば嚴の樣な日本魂に、更に美はしい花のやうな飾りを附けたのが、軍國婦人の涙ある心根から湧き出た同情の事業であります。中にも赤十字の事業はよし其の源を外國に發しては居りましても、今では忠勇なる男子の働と共に賞賛されて今度の日露戰爭が初つてから、外國の各赤十字社よりも、出來得る丈力を添やう看護婦を派遣しやう、物品を贈らうなど丶親切に申込でくる向もありますが、日本では十分機關が整ふて居るから御親切はありがたいが、物品や金錢ならば兎に角、人を派遣して下さるには及ばないと斷つて居るとの事です。夫に就いて米國の赤十字社からも社長のクララ、バアトン女史が態々手紙を贈つて其の好意の次第を申込まれました。クララ、バアトンといへば、慈善事業家として世界到る所知らぬものはなく、此度遙々我國にこられたマツギー女史や、英國のリチヤ

ードソン女史に比較して、劣らない有名な慈善家であります。實にクララ、バアトン女史が、どれ程まで慈善事業に熱心し、且つどんなに大きい成功をなされたかといふ事を知らば、誰しもかよわい婦人が斯くまで偉大なる事業をする事が出來るかと、驚嘆しないものはありますまい。ザット女史の事業を申しますと女史は内亂の際に病院内で働きました。普佛戰爭の時にはセルボーンに於て革命の爲めに捕はれた婦人の監督者となりました。それから露西亞に於て虐待された婦人を救濟するに力を盡し、次で米國の、ミシシッピー川に大洪水があつた時に、其の水難者を救ひ、又南大西洋岸に大颶風遭難者があつた時に援ひました、そして土耳其が虐殺を致した時に、其の同胞の爲めに骨を折り、又米西戰爭の際には、自國の同胞は勿論、戰役に加はらざるキユバ人に對して其の身を惜まず働きましたなど實に枚擧に暇ありませぬ。

女史は西暦一千八百三十年即ち我が天保二年を以て、米國マサチユーセッツ州北オックスフォルドの地に生れ、本年七十四歳の高齢でありますが、今日なほ熱心に赤十字事業の爲めに働いて居ります、女史が若年の頃には教育に身を委ねましたが、どうも健康が勝れないので辭職を致しました、其の後休養の爲めに暫時華聖頓に居られましたが、健康も回復したので、專賣局の一員となつた。しかし斯の時から何か感ずる所があつたと見え、一生慈善事業に身を委ねやうと決心して專賣局の方を斷つて、傷病兵の看護を致す事となり少しも報酬を受けずに働きました。是れより世人は女史を『戰場の天使』と呼ぶやうになりました。ジエムスに設けられた陸軍病院も、女史の管理する所となつた。

其の他女史の事業として最も貴重すべきものは、聯合軍の廢兵の爲めに記錄所を設けた事であります。是れは捕虜收容所及び病院の記錄其の他葬儀の紀事を編纂する爲めに設けたものであります。女史は斯の事業の爲めには、四年の歳月を費し、又さほど豊かでない財産の中から、一万弗の自費を抛ちました。其の後、議

會は女史の事業に對し其の費用を償還しやうと決議を致しましたが、女史は之を斷りました。此の點から見ても、女史がどのくらゐ慈善事業に其の身をいれて居るかといふことが推し量られます。

涯りのない慈善心で、限りのある身體をつかふことは到底出來ませぬ。衰弱は慈善家の名譽の冠であります女史は又もや過勞の爲めに健康を害し、之を養はんとて歐洲に旅行しましたが、折しも普佛戰爭が始りまして、左なきだに何か善い事業がないか、何か此の身を

戰地書信(一)



敵前の歩哨

殺しても他人の爲めになる事はないかと、病人の身ながら考へて居つた女史の事とて、之を傍觀するには忍びませぬから、負傷兵を看護せんが爲めに自ら戰場に赴きました。慈善家としての女史の名は其の事業と共に益々博く世に知られ、女史が人道の爲めに盡したる其の功勞を彰表さんとて、各國の王公から贈られた勳章は、其の數實に多くあります。

晝夜を別たずに過勞されましたものですから、女史は又もや其の健康を害し、遂に亞米利加に歸り、是れよ

り米國に於ける最初の赤十字社長となりました。女史の如き慈善家の名は、彼のフロレンス、ナイチンゲールの名と共に永く世の歴史に耀くでありませう。實に「戰場の天使」は美はしくも亦女史にとりてふさはしき名と言はねばなりませぬ。

壯烈美談　薩摩の乙女

根岸文子

世は刈菰と亂れたる王政維新の前年、天下の志士は皆京都に集まりました。その目的は云ふまでも無い、幕吏は厳しくこれを捕へて、それ〴〵苛酷な刑罰に處するので、志士の方では劍呑で堪りません。

こうなつては危險だと云ふので、皆々密々と集まつて將來の大計を計畫して居ました。所が幕府の方では油斷無く、猫が鼠を探すやうに中々草を分け雲を披いて愈々綿密に探索しますので幾多の志士は風の音にもヒヤリとし、木にも草にも氣を置くやうに成ました。

特に志士の首領株たる薩摩の西郷南洲、長州の木戸孝允など云ふ名士の身の危險さは、中々で何時も背後に暗殺者がつき纏ふてゐる樣でありました。けれども時勢は此等の名士をして、身の危險を思ふ餘裕を與へしめませんでしたので、今夜は此處、明日は何處と其の中を潜つて密議を凝して居ましたが、幕吏の探偵如何にも厳しく、最早一寸の隙も無く成つたので、一同は清閑寺の本堂の床下に潜んで、近き將來に於いて實行すべき商議を密々凝して居りました。

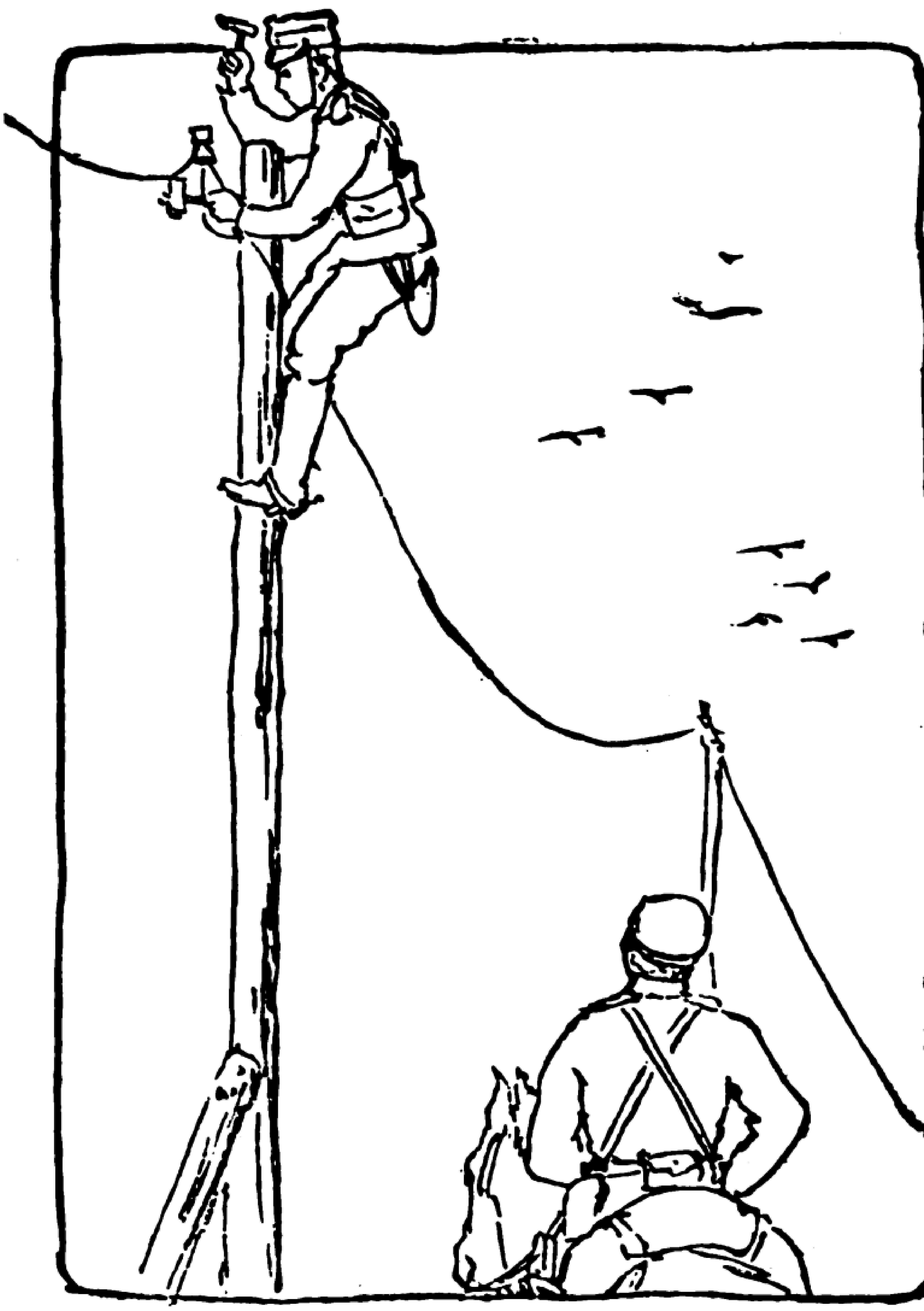
するとこの頃薩人志士の一人の女に美智能と云ふ十七八の烈女がありました、然るに父何某は、不幸にして幕吏の手に捕はれて、無惨々々と刑場の露と消えましたが、美智能は心賢しくして、まだ一處女の身ながらも大いに期する所あり、直ちに亡父の遺志を繼いで、志士の仲間に加はり、國事に奔走して居りました。

西郷南洲は、その志の堅いのを見て取つて、同志の間に機密を通ずる使ひにこれを使つて居ました、所が美智能は、男子と違つて、捕吏の目を引くこと絶へて

戰地畫信（二）

無く、常に其大任を全うして居りました、南洲一派が尤も危險を極めた淸閑寺床下時代の頃も、美智能は乞兒に姿を變へて急を要する時は合圖を以て一同に知らせる爲に日夜その境内を去らず、忠實に見張をして居たと云ふことでした。

然るに幕府の捕吏は何時しかこれを知つたものと見へまして或る日淸閑寺を襲ひましたが美智能は早くもこれを知つて、一同に急を告げて、幕吏の來より前に他に移らせて仕舞ました



工兵の電線架設

するとこの事が又何時しか捕吏に知られたので、美智能は或る日京極邊で捕吏の手に捕へられました。丁度この日美智能は町家の娘に姿を假裝して、或る使命を帶びて小室邊まで行く所でありましたが計らずも此處で最期の運命に接したのでありました。

捕吏に捕らはれて行きながら美智能は途中で竊かにこう思ひました。「男子と違つて自分は今日まで、唯の一度も捕吏に尾けられたことはないのに、今日に限つて知られ

たといふのは誰か様子を知つてる者があつて、密告したのに相違無い而て見れば最うこれが運の盡だ所詮遁れる道は無い。假令何んな憂目に遭つても一大事は明すまいとその決心の堅きことは金鐵もはづかしき程で美智能は少しも動ずる氣色無く、捕吏に捕はれて行く所まで行きました。

　それから捕吏頭の前に引かれまして段々と糺明されて志士一同の在所を明白に告げよと迫られました。「存知ません」と膠無く答へて美智能は微塵恐れる色もありませんでした。

　捕吏の頭は聲を勵まし「イヤさうしら〳〵しい事いふなその方が今日までの振舞は、最早殘らず證據があがつて居る西郷一派の輩は、彼の清閑寺から何方の方角へ行たぞ」

「存知ません」「イヤ知らぬとはいふ事はない。サア有体に白狀しろ」

「イヤ何んと仰せられても私は存知ません」

「默れつ」捕吏頭は、屹度乙女の面を睨みつけて、「いよ〳〵知らぬと云ふか」美智能は神色自若として、「ハイ存知ません」「オイ〳〵美智能さん、モウお前さんが幾何隱しても駄目だ。サア慘な思ひをせん中に白狀して、偏に御上のお慈悲を乞ふのがよからう」

といはれて、美智能は何思はずふいと振向くと遉はイカに昨日は同じ仲間の乞食、今日は捕吏の手先の七助と云ふ丹後生れの可惡奴でありました。

「さては此奴が」と、その凛々しき眼に美智能は睨みつけました。

「サア、これでも未だ知らぬと云ふか」捕吏の頭は嚴しく疊みかけました。

　最早遁れぬ所と、美智能は凝然と俯向きました。

「サア有体に」と捕吏の頭が迫りますと、兩手を膝にして俯向いて居ました美智能の口からタラ〳〵と血汐が流れました。

「ヤア！」捕吏の頭は怪しんで凝然と見あげると。美智能は色白く、肉豐らかな頤の邊に血汐の流れる面をあげて、凝然と捕吏の顏を覗まして、最早どんなに責

詐んでも其の効驗はありません云ふまでも無く美智能は此の時既に我が舌を食切つて居たのでありました。

容貌花の如き加之も妙齢二八の乙女がこの壯烈なる振舞に及びましたので捕吏の頭は荒肝を挫がれて乙女の手前も恥かしい程見苦しく狼狽しました。

けれど美智能は膝も崩さずに居ました。併し死の影は、はやその顔を掩ふて來ました。けれども只の一聲も苦痛を漏らしませんでした。



この悽惨なる光景に、流石の捕吏も眉をひそめました。

最後に美智能は、はや眞蒼に變て來た面をあげて並居る一座の顔を見渡し、一同の腹の底まで染込むやうな淋しい笑顔を示しましたが、やがて吹き來る一陣の風諸共に十八年を一期として、可惜烈女はこの世に於ける最後の息を静に引き取りました。

世界大戰 婦人壯烈談

戰時に於ける婦人活動の實例

女子大學教授　松浦政泰

一　スパルタの母

スパルタ(希臘古代の聯邦の一)の母が、其子を戰場に送り出す時、『楯を挾んで歸るか、さなくば載せられて歸れ』との、健げなる語を贐とせしとは、能く人の知る所なるが、茲に又一條の佳話あり。年尚若きスパルタの一靑年、出陣に臨み、巳が帶べる劍を取出し、『御母様これでは短かくッて困りますよ』といひしに、母は勵聲一番『なに外の者より一足前へ踏み出せば、いいではないか』と答へたりと。(註古代の戰爭に於て戰死者は皆楯に載せて運びたり)

二　篤志なる寡婦の從軍

ナポレオン一世世界に勇を揮うて各國を征服せし時佛國に年老いたる寡婦あり。合戰毎に出陣し、鐵の霰鉛の雨の降りしきる中をものともせず、傷つけるを勦勞り病めるを慰めたり。鷹の如く雄々しき中に、鳩の如く優しき所ありければ、上は將校より下は兵卒に至るまで、之を敬愛せざるはなく、又啻に味方のみか、敵をも少しの區別なく、看護り慰藉めしかば、魯國も澳國も又普國も、皆名譽の十字架を贈りて、感謝の意を表したり。本國よりも、何がなとて勳章など與へんとしたれども、巳が主義に背くとて、固く拒みて受けざりしを、武官等は益々其志の高きに感じ、其儘に棄て置くことを好まずして、百方周旋し、時の軍務卿に向ひ、此女の德を紀念せん爲、毎年二人の死刑の宣告を受けし者を放免せんことを請願して、其許可を得たりけり、嗚呼之れが爲に年々特赦の恩に預かりし幾多の罪人は、夫の老寡婦に對して、如何の感をや抱くらむ惜い哉、此老女の名を逸せり。

三　毒を吸ふて夫を助く

(十字軍の逸話)

英王エドワード一世（一二三九—一三〇七）十字軍に將として、今の小亞細亞の地に下り、パレスチンにありし時、或戰にて敵の毒矢に射中られぬ。此儘にして打棄んには、王の生命は瞬く中なり。皇后エリノルは痛く之を嘆き、終に己が死を冐して、傷口に口をつけ、毒を吸ひ出だせしぞ健げなりける。天も此皇后の憐れの心を嘉し給ひけむ。王の傷も程なく癒へ、皇后も何の害をも受けざりき。王此德を忘れずして後皇后の崩御の時、リンコンシャイヤよりウエストミンスターに至る間、苟くも棺車の休みし處には、十字標を建て、特に夫の美はしき行を紀念したりき。

戰地畫信（三）



河川の徒渉

四　皇妃節に死す

又英王ウイリヤム一世（一〇二七—一〇八七）の長男ノルマンデー公ロバートは、元來寛仁の性質にして、人の氣受もよかりしが、或時の戰に、敵の毒矢に中りたり。吸ふより外に治療の道なしと、侍醫のいひしをロバートは、他人の命を危うして己が生命を助かるも本意ならずとて誰にも之を許さゞりしに、皇妃シビラは之を聞て心も心ならず、其熟眠せるを伺

ひ、己が口もて潜かに之を吸ひ出したり。かくて皇太子は危うき命を助かりしも皇妃シビラは憐れや爲に命を殞したりき。

五　ナポレオンの名言

マダム、キャムパン一七五二一八二二は、佛國の女敎育家にして始ルイ十五世の三皇女の養育掛を勤め、次に皇后アントワネットの女官長たりしと二十年、後ナポレオン一世の撰に與り、特に女學校を設けて、高等武官の令孃の敎育を命せられたる人なり。キャムパン曾てナポレオンに向ひ、佛國人民の中、最も必要なる者は何なるやと問ひしに、ナポレオンは、千軍万馬の間を奔走する猛將勇卒とは答へずして、單に母なり母なりと答へたり。

六　寶玉を軍資に宛つ

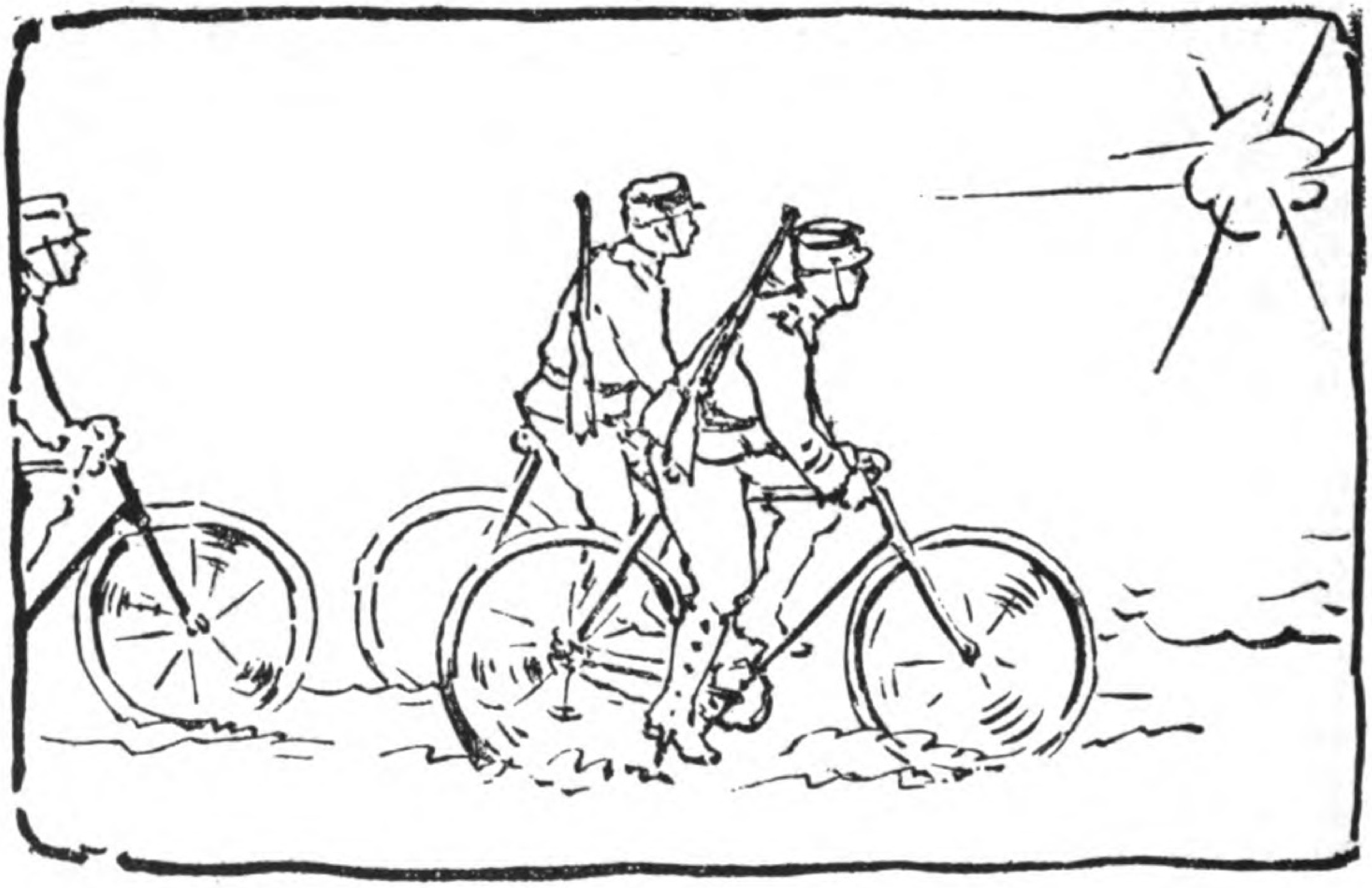
（ウォートルルーの戰爭）

ナポレオン、エルバを遁れ歸りて再擧を計り、ウォートルルーの一戰に、一生の運命を賭せしや、兼て交情いと濃かなりし其妹ポーリンは、心も心ならず、我身男なりせば、兄が旗影に立んものをと、詮なき愚癡を滾すも憐れ。終に心に決する處やありけん、衣裳簞笥より取出す數多き衣服。色に色添ふ萌黄琥珀に、金絲銀絲もて樂器を織出したる上衣は、新婚の夕に用ゐしものか。露を含める紅梅色の下襲は、そも何人の贈物にや。ポーリンは何思ひけむ、此の衣より取り放す金剛石、夫の裳より解き棄る紅寶玉、さては光輝燦爛たる髮の飾、四邊映ゆき珠の指輪。そを一箱に納めつゝ、兄の許に送致しは、軍用金の一部に宛てんとの、優しき志なりけり。かくてウォートルルーの夕に將星殞ちて奈翁の御したる車は分捕られ、倫敦にて衆庶の人の観に供せられしが、車中に滿載したる寶玉は、光彩陸離として大に人目を引きたり。嗚呼是れ兄が妹の好意に感涙を灑ぎつゝ、之を遞送せんものと、計りしより、事の茲に至りしなりとぞ。

七　妻女を慰藉す
（米國獨立戰爭）

砲雷轟き劒電閃きたる七ヶ年の米國獨立戰爭の間、將軍ワシントンの老母メーリーは、フレデリックスバルグに住ひしが、此地は南北交通の要路に當りしをもて戰地の風聞は善となく惡となく逸早く此地に傳はりぬ。曰く某砲臺を陷る、曰く某將軍戰死す。傳令使來りて『我軍大勝利』の喜報を齎らし、擧村祝杯を擧ぐる間もなく、忽ち馳せ來る一個の輕騎は『敵兵猛進』の兇事を傳へて、一同煩悶せし

戰地畫信（四）



傳令使

ことも少なからず。かくの如く一勝一敗我軍の運命は石上の累卵も啻ならざりし間にも、ワシントンの母は全く運を天に任し、泰然として周章てず騷がず、『愛する子や夫を戰場に送りて、心を痛むるは、人情の常とは云ひながら、彼等は人類の權利の爲、世界の自由の爲に、名譽の戰を戰へるにあらずや。其母たり妻たる者如何でか徒に涙に咽び、無益の配慮に日を費すべきぞ』と、他の心弱き軍人の妻女を鼓舞したり。

八　國の爲に我家を燒く

同じ米國革命戰爭の時、英吉利方にてモット城の指令官なるマッファルソン大尉は、今しもモット夫人の新築間もなき廣びやかなる邸宅を占領し、石を積み材を列ねて、要害堅固に堅めたれば、味方の勢は近寄ることすら叶はずして、旗色惡しく見へにける。荏苒空しく日子を費せば、敵の援兵來り加はる憂あり。さりとて早く之を陷れんには、燒き拂ふより外ぞなき。夫の巍々たる大廈高樓を、むざ／＼一炬に灰にすること、惜しきが上にいと惜しと。マリソン、リーの二將軍は聊か躊躇の体なりしが、モット夫人は頻りに之を促したり。「一個の邸宅と一國の運命と、孰れか重く、孰づれか輕き。此の良人が起臥したる家屋の燃ゆる火が、愛國の士の心を溫むるに於て、寸毫の益だにあらば、運拙くして壘の上に死にたる良人も、貴き愛國の旗影に功名を現はしたると同じこと」と、自から印度より輸入したる弓矢を持ち來り、爆藥をも添へて只管決行を迫りたり。折しも燒くが如き正午の太陽は、赫々として甍を照らし、屋根は乾きに乾きたり。時分はよしと、大將號令の旗を振れば、燃ゆる硫黄と松脂を裝置したる矢は、マリソン配下の一兵、ナサン、サヴェージの弓を放れて飛び行く、第一の矢も第二の矢も、又第三の矢も、甘く的中して火を起す。敵將マッファルソンは、急ぎ兵士を家根に上げて、消防の術を盡したり、されど勢いつける味方の一磅の巨砲は、忽ち烟を吐き、見る／＼うちに兵士は血烟立てゝ、屋根より轉び落つ。左右する程に彼方此方より渦巻き上る黑烟の中に、紅の焰の舌はぺろ／＼と、棟又棟を舐めてゆく、瞬く內に、邸內は此世からなる阿鼻焦熱、叫喚の聲四邊に響きて凄し。流石の城將も、之には敵しかね白旗を揚げて無條件にて降服したり。

九　敵味方の將校を饗す

御國の爲とはいひながら、我が家に火を放ち、良人の紀念を燒き盡せしモット夫人の心事や、大に察すべきものあり。血ある者は熱せよ、涙ある者は泣けよ。嗚呼是れ實に私益を殺て、公益を計れる道德的豪壯の一

的例にあらずや。モット夫人は尙之にも飽き足らず、直に已が僑居に一大盛宴を張り、敵味方の將校を招じて、日頃の疲勞を犒らひぬ昨は生死の衢に劍を交へし者、今は一堂の下に握手談笑す。世界が漸く未開半開の域を脫しつゝある明證はと問へば斯かる例をや引ぬべき。夫人が此の宴會に於ける態度は、威ありて猛からず、敬すべくして又愛すべく、一擧一動慇懃にして肺肝より出で、一言一句諄々として溫情掬すべく、己が家の燒かれたるとは、全く打ち忘れたるが如く、只管敵の將士が捕虜の逆境に在るを慰藉したり。

戰地書信（五）



突貫の姿勢

十　戰後一家の經營に苦心す

此一條の物語すら、モット夫人の非凡を證し得て餘りあれども、倘別に其氣概に富み、堅忍事に當るを證するに足る、一個の佳話あり。其良人が一身を賭して從事したりし事業は、革命戰爭の爲に、殆ど全く失敗に歸し、其揚句には、良人が逝去といふ、重ね重ねの不幸。貸せしものは返らず、借りしものは返さ

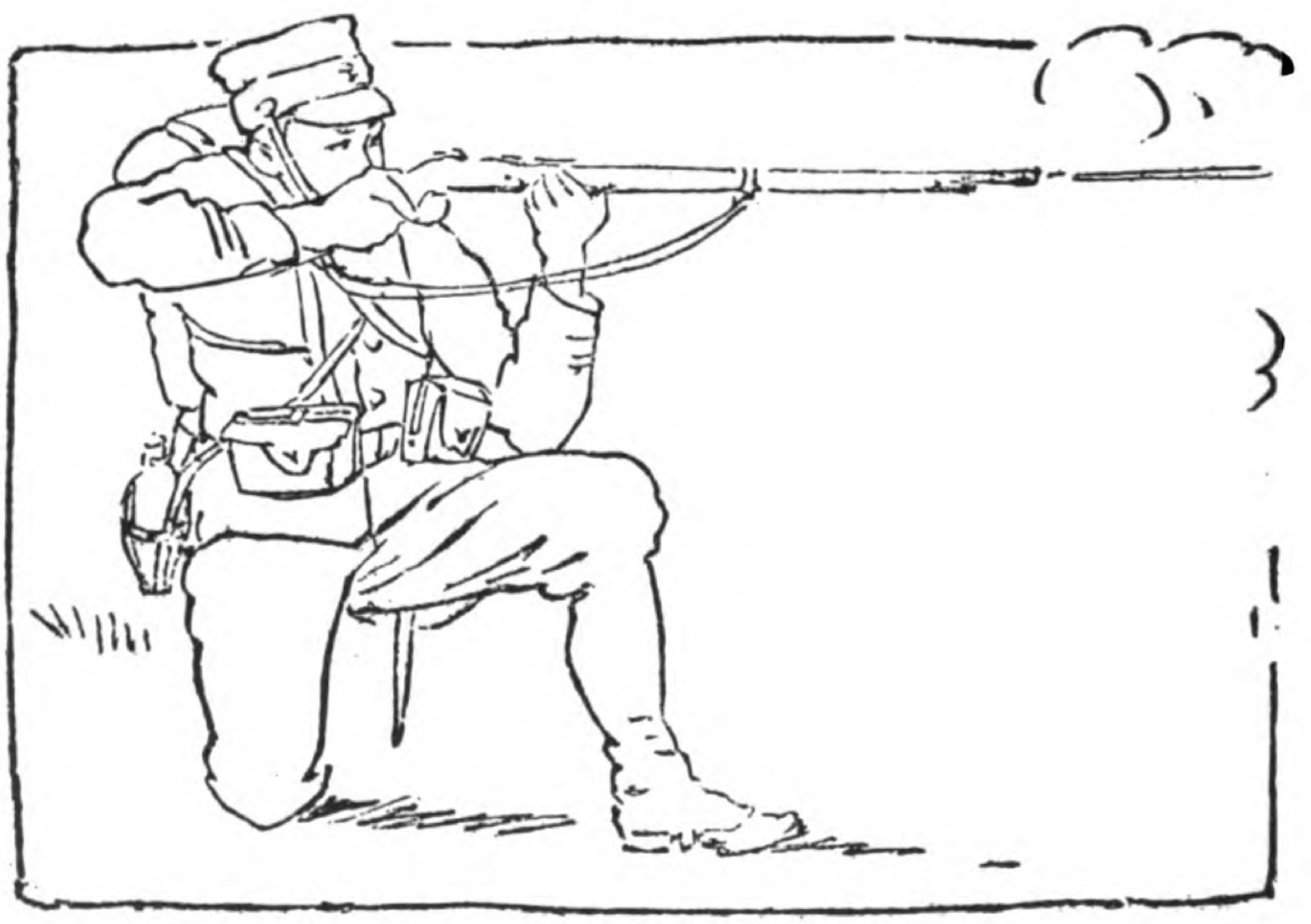
ざるを得ず、實地に就て貸借を計算すれば、忽ち山の如き負債は現はれぬ、之が爲につい人々に迷惑を掛けては、良人の名折なり、殊には良人のものは、妻のものたり、夫人は全く之が返濟を己が責任として、之を引受け、全く其殘んの生涯を之に費やさんものと、決心の臍を固めぬ。親戚も云へり友も云へり。『纖弱き一本の腕もて、何條斯かる山なる債を返濟し得るものぞ徒に狂氣じみたる痩我慢を張りて、世の胡盧となる勿れ』と。されど夫人は義理を柄に取て、少しも其忠告を容れず。『盡すべきだけ盡さずては、一には亡夫へ不貞、又一つには己が良心が許さず。』と久しく大厦高樓の裡に起臥したりし身を以て、今は漸く膝を容るゝ侘住居。麥粥に口を糊し、襤褸に身を包み、屈せず撓まず、日夜汗水を流して、日に厘を貯へ週に錢を殘したる結果は——嗚呼小かなる忍耐も積り積れば、恐しきものよ——啻に良人の巨萬の負債を償却し盡したるのみならず、其子孫の爲にも相當の財產を遺したりき。

十一　二兒を犧牲に供す

紀元千三百卅二年の初夏に、英王エドワード三世は數多の軍兵引具して、蘇格士蘭の要害なるツウイード河上のバルウイク城を取圍みぬ、王は糧道を絕て、持久の策を講せしかば、城兵殆ど饑餓に逼り、城將アレキサンダー、セトンは、到底抵抗する見込立たねば、五日間に降を軍門に請ふべきことと、其場合には住民の生命と財產を保護せらるべきとの二條件を揭げて、五日間の休戰を申し込みぬ。此請求終に容れらるゝ所となり、蘇軍より數多の人質を送りしが、其內にセトンの長男も加はりたり。曩に次男は城門を開いて突進せし折、運拙くて捕虜とせられたりしに、今又長男も質として敵軍に行けり。國の爲とはいひながら、親の心や如何ならむ。嗚呼理不盡なり、エドワード王、一旦男子の口よりして、堅く約せし言葉を反古にし、尙舌の根も乾かぬに、人質を受け取るや否、忽ち掛け合ふ手詰の談判。直樣城を明け渡すか但しは城將の二人の子息を、今眼の前にて絞びらんか、二つに一つの返答と退引ならぬ掛合に、流石の子爵も色靑ざめ、子を思ふ親の情の切なさは、ナハヤ兜を脫がんとせるに、頻り

に強き語を並べて、必死に之を諫むる者あり。「惡くきは無道のエドワード。若しむざ／＼と二人の子息を殺さんには、殺さるゝ者の不憫さは、言ふ迄も無きとながら、一方より考ふれば國家の爲に殉じたる忠勇義士又先だゝるゝ者の苦しさも五臟を割るゝ思あれど、いづれにしても長からざらん浮世の果敢なき生命。されど之が爲に阿容々々城を渡さんには、私の爲に國を賣りたる汚名は逃れじ。殊には末代までの子息の名折。』斯くも健氣に言葉を放し、者は、勇將にあらず猛卒にあらず、誰れあろう子息の母なるセトン夫人なり。其の鐵をも碎かん剛膽と、水

戰地畫信（六）



中立射擊の姿勢

の流るゝ雄辯とには、古のスパルタの母も三舍を避くべく、羅馬の貴女も辟易やせん。一坐水を打ちたる如く、いと物靜に又凉しくぞ見えにける。軈てツウイード河の彼方の岸。城將の眼の下に縄附の儘引き出さるゝ二人の若著。はや絞首臺に載せられたり。城將之を見るよりも、熱鐵を飲む苦しさつらさ、又もや辟易の色見えしを、傍に在るセトン夫人は、すつくと立つて良人の手を取り、一間の内に押し入れたり。

かくて其夜凄き片割月は、兩個の白き屍を照らせしがツウイード河の水と共に、淸き譽れは後の世までも殘りける。（完）

珍書解說

通俗源氏物語　夏季學校

水原翠香

源氏物語一班解說

源氏物語の和文として最優の書なるは、洽く世の知る處其名文大作たる事古人既に定評あり、今更喋々を要せずと雖、漢文に所謂楔子襯染照應頓挫抑揚伏線波瀾正對反對段落諧調等の文法、一として具備せざるなく、和漢の書籍及び佛經の文をも引來りて、縱横自在に書得たる、其筆才の至妙なる、男子と雖多く得べからず、況や婦女に於をや、然雖其世にては、是が通常の言文なりし故に、今の小說を讀が如く、凡々の婦女幼童も愛讀して、面白がりし物なれど、物替り星移りては、漸々耳遠き詞となりて、其意解し難く、爰に於て世々の學者、是を註解する者續々出で、其數を知らず、湖月抄の如きは諸註を集て鼇頭とし、本文の傍にも處々字を以て註し、一目瞭然殘る處なし、源氏を讀は、湖月抄にしく物はなし、然るを夫すらも、猶師の說明に依賴する如き、明治今日の女學生には、到底理解力乏く、且長編に倦て、全編を通讀する者鮮し、抑源語は、好色淫猥の書なるが如きも、著者の本意は然に非ず、當時藤氏の權勢比類なく、上流の淫風盛にして、憚る處なく至らざる處なく、動ば貴婦人の身を愆つ事ありしを、式部は甚く慨歎し、目前に見聞して、心に餘る事共を、小說に作りて世を諷したる物也故に其人と實名はさゝねど、物語中の男女が行動は、すべて其世の光景事實なる由、處々に云へり（元來物語なれば、一人の事を兩三人にし、又數人の事を、一人に集めたるも有べし）されば克讀味はへば、閨門の訓誡、因果應報の理を微細に說示したるものにして苟も婦女として知らずんば有べからざる書なれば、是を今日の婦女子の解すべく、成可簡短に意譯せよ、との注文もだし難く、己も好む處なれば彼式部か爪の垢斗もなき身をも省みず、おほけなくも筆を採りつ。

扨按ずるに其本文を擧て、傍に註せんとすれば、本卷同様の長編とならざるを得ざれば、止を得ず本文に拘はらず、只其意の違はざるを旨とし、勉て詞を短くしたれば、彼演劇の筋がきに似たる處も有べし、之を讀て其事柄を、知了したる上にて、湖月抄を讀て其文章の妙を味はゞ、筋がきを讀て劇をみる如く、一入の面白さを感ずべき也。昔より名文と、學者の感賞したる處々は、除くが惜さに成べく其儘用ゐ、又餘りにくどき處は、除きたるも有り

此物語を讀に付て心得べき事

中昔と明治の今日と、風俗習慣の甚相違せる事多し之を心得ざれば、此物語中の事、総て不思議に感ぜられて、其意を解すべからず、爰に其概略を摘出ていはんに、即左の如し

天皇の御正妻を后と稱し奉るは、昔も今も替らねど、既に后の御座す上に又中宮と稱して、后と同等に重んぜらるゝ在り其次に又女御と稱するが數人在り其次なるを更衣と稱す、皇子を生奉れば御息所と稱す又内侍督と云ふは役局也、されど是御手がゝりとなるあり、朧月夜の如き是也すべて一夫多妻にて、大臣を始下々迄、男子たる者妻一人を守る事なし、尠くも兩三人在るを常とせし也。

聟取といふ事有て、嫁入といふ事なし、男女の配偶は、各々自由也殊に男子の自由也先始に男より戀歌を贈る事數回にして、女の父母之をみて、可と思へば女に返歌をなさしむ、雖然女諾せざれば强ていはず、或は女兒もてる親、其聟を撰びて、此人と思ふあれば、親より其男に歌を贈りて、其意を通ずるも有、何れにても、双方合意の上日を撰びて、男より女の家に至れば、親懇に饗應して後、女の閨に入らしむ、是婚禮の正式也、即聟取といふ是より毎夜男より通ふ也、子をも生み多年の後都合にて女を男の家に迎へて、共に住む有り生涯別居するも隨意也、女美人なれば、多くの男競爭し、心を盡して、其女の侍女を誘らひ、共謀して女の閨へ忍び込あり、今よりいへば、有間敷猥風なれど、是を却而男の志深切なる故として、女方にては、必然有べき宿因と諦らめ、父母も免して其儘通はしむ、又親

の許さゞる女を謀りて誘ひ出し、巧に其跡を晦せば、父母は歎き乍戸籍法も何もなければ、爲方なくて止む總て昔は萬大らかにて、朝廷の公事儀式等の外、定まれる掟なく、各自の品行の如きは、敢て咎めざりしと見えて、就中女色に亂るゝの甚き、有夫姦をすら敢て爲て憚らず、紫式部是等の事を、甚く慨歎するの餘りに、此物語はかきたるもの也。

中昔は佛法の盛なる事、今の洋學の流行に等しく、男女共に佛道に入らざるはなく、苟も心ある人々は、出家遁世を心掛るを以て智者の事とし、少壯より佛に歸し、經文を誦す、女も又、尼と成を賢とす然ど悉頭髮を剃に非ず、肩の邊にて切揃へて、後世喝僧といふ者の如くし、鼠色の衣を用ゐる物とす。

病ある時は、醫藥よりも先有驗の僧に依賴して、祈禱を專とするを習慣とす、病はすべて物の怪といひ、生靈死靈の祟也と迷信し、才學比類なき博士も、又然りとす、其祈るに假托者なる者を設て、愚なる少女等之に物怪を移して調伏す、假托者我知らず、種々の事を口走り、怨靈の名を告などす、後世の狐狸等の憑たる者の如し、上流程、此祈禱の事騒がしく、御産にも祈に依而皇子降誕有とす、故に天台座主阿闍梨等の、尊信せらるゝ事比類なし、今よりみれば馬鹿々々しさの極み也。

宮中は勿論、總て上流の婦女は、父と夫と實子の外男子に對面する事なし、兄弟又我子にても、實子ならぬには、簾を隔て、机帳の蔭に隱れ居て談話するを例とす、女同士にても疎きには、檜扇を以面を掩ひ、すべて女は、人に面を視らるゝを耻たり。

車とあるは皆所謂御所車にて上野博物館にあるもの大なるは六疊敷程あり、牛をかけて牽かしむ、今の馬車俥の如き輕便なる物に非ず糸毛、檳榔毛、網代など、種々の名稱あり。

文通は悉く後世に所謂消息にて、文章と歌のみにて宛名はかゝず、飛脚郵便など云ふ者なければ、皆態々使者を遣はす也、文は引結びて、是を其折と事柄に適へる、木艸に附けて贈る、內密の使と雖も同し、唯其

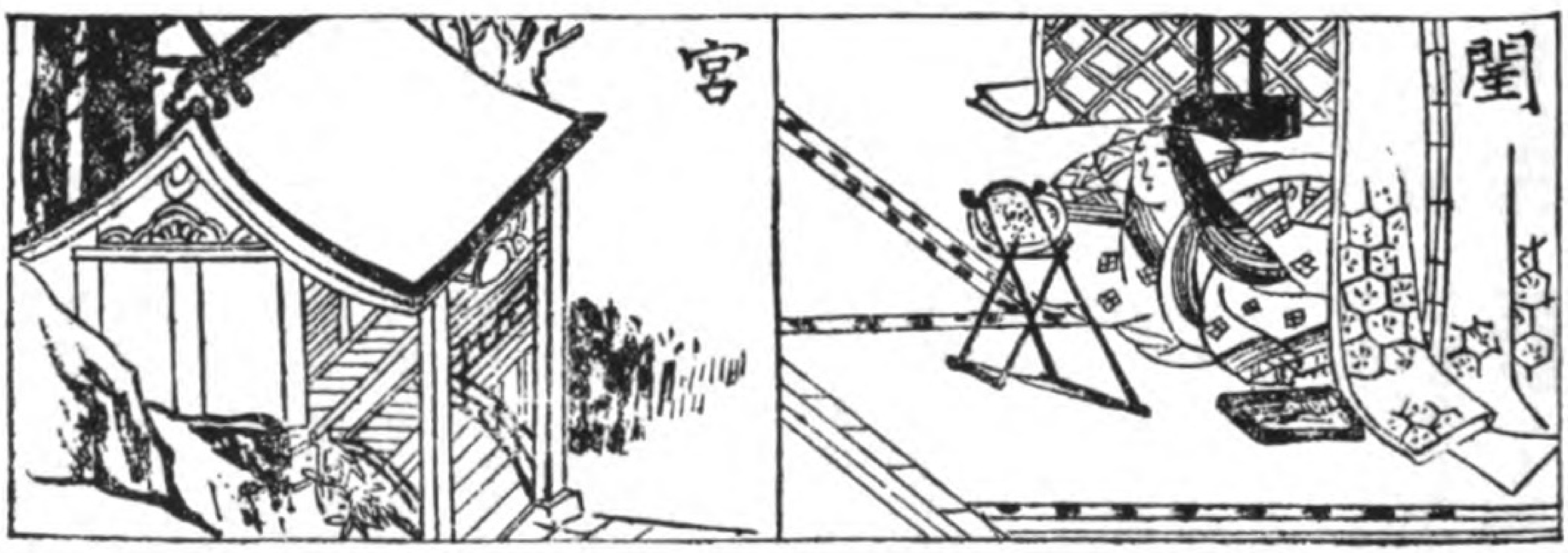
使に旨を含めて、誰よりと其名を告らするのみ文は其處に要ある文句のみをかきて、餘はいはず、是省筆の法也古歌も又同じ、或は一句又上下句のうち、一のみを出すあり。

御遊とは管絃音樂の事にて、後世いふ遊ぶ事に非ず扨其遊は雅樂と催馬樂にて、尤古雅なる物、明治のわれ等、もし見聽事あらば、唯優美也と感ずるのみ、其歌句は高尚にて、何の意とも解し難く、更に面白くも何ともなかるべし。

物語中ともすれば、落涙すといふ事多し、女はともあれ、男にして如斯涙もろきは、餘りに女々しと思はるれど、是昔の人情厚く、眞心の深きにて、後世程薄情冷淡に成行事知べき也。

女房とは侍女を云ふ、今いふ妻の事に非ず。

王朝の風俗（一）



人名は悉稱號にて、實名をいはず光君といふも高麗人の附けたる稱號也、桐壺更衣を寵幸ありし故に桐壺帝と稱し奉り、又更衣も官名也此外、葵上紫上など、其歌により擧動によれる稱號にて、一も實名に非す此卷中を通じて、實名をいへるは、男子にては惟光、義清のみ、女にては、右近が初瀬にて、玉葛の名を留璃君と云へる只一ツのみ、總て此頃は、實名はいはぬ習慣なりしと見えて作物語ならぬ、紫式部清少納言も、何子といふ實名有しなるべけれど、しるしたる物なければ後世には傳はらず。

方違是又迷信の一にて、天一神とて地星の靈在て、中央に立つ故に中神と云ふ此神四方に四日、四隅に六日宛巡行す、其在方を犯せば崇る故に塞といふ、譬ば禁裏より、左大臣家は塞にあたる故に、

方角違の紀伊守が家に一宿して、左大臣家へ歸れば塞を除、是を方違といふ、御物忌といふも同し出る者は入らず、入たる者は出ず、故に其間に御用有べきを計りて、其宵より參り居るを、御物忌に籠るといふ也（今にても、方鑿を忌れ祈禱などを依賴する、迷信家なきに非ず）

すべて如斯、好色と迷信のみにて、馬鹿氣切たる事多し、其人情をうがてるの妙は、今とても表面を飾樣なれど、亦自然仁慈忠孝貞實又處世の心得と爲べきればこそあれ、心中を顯出さば同じかるべし、其馬鹿馬鹿しき點は未開の世の事と見て、文明の今日に生得たる、有難さを思ふべき也。

作物語にはあれど、朝廷の公事古實等は、一も虚談に非ず實に如斯有し也、されば昔の儀式風俗を知るには最よき書也。

第一　桐壺

（此物語の發端源氏君が出生より十二歲元服葵上と婚する迄を說たり）

何の御宇にか、女御更衣數人奉侍中に、最上流の女に非ざるが特寵を得たり、之に依始より吾こそ第一と、傲然たる后を始、同等下等押なへて、猜忌大方ならず、朝夕何彼に付、衆人嫉妬の執念一身に負ふ故にや、病身と成て實家がちになるを、帝飽ず不便に思召、人の譏をも憚り賜はず、或時は御朝寢にて其儀、局にも下らせず、強に御前去らずと做賜ふ等、餘りの事に公卿殿上人等も、眴して唐土（今の支那）にても、如斯例より世の大亂と成たれと、楊貴妃の事杯引て私語、宮中唯此噂にて、聞痛き言多けれど、忝き御志一ツを賴に日を送りぬ。父は按察大納言にて亡なり、母北方古き有識家なりければ、双親揃ひて權勢ある人々にも劣らず儀式事をも、遜色なく行はせたりしかど、權門の後見なきは事ある毎に依賴方なく心細氣也。前世の御契深かりけむ、皇子降誕あり、其容貌實に白玉の如し、第一皇子は右大臣の女御の御腹なれば、無論儲君たるべしと人々奉仕すれば、上も外戚に憚りて、鄭重には爲賜へど、普通にて、此君をば特別に寵愛限りなく、母更衣を御息所に昇されて、益々寵幸甚ければ、坊（儲君の御宮居）にも此皇子をと思召ならむと后は疑ひ賜ふ、他

より先に入内有、皇子皇女も生み父は大臣也、傍此后には帝も御心措賜へり。惶き御蔭に依るとはすれど疵を求る人は多く、身は尫弱薄氷を渡る心地して、我局淑景舎より參進道遠く、多くの局々の前を通るに内橋の橋渡殿處々に、汚穢物を撒て裾を汚させ、又は他に道なき處の戸を、双方より閉鎖などして冷笑し、仂なきことのみ積れば、甚痛う苦慮たるを、憫と叡慮を廻されて、後凉殿（清凉の御座の隣に有）の更衣を他に轉せしめて、上局に賜はる、近く成しは宜きも、又其更衣の恨一層を重たり。

皇子三歳の春御袴着、一皇子の御時に劣らず、美々しく行はる、之に附ても譏る人多けれど、此皇子の美貌と怜悧とには、何人も驚嘆せぬはなし、其年の夏、御息所病耐難く成て御暇を乞と雖、年頃常病人なれば例の事と思召て勅許なし、唯四五日間に病革りぬ、母君泣々奏して退出させんとす、美貌痩て彌美に尫弱として生死孰の容躰なれば、輦の宣旨有、又入御賜ひて、死ば共にとこそ契つれ、朕を捨て先へは死さじと宣ふを、女も忝と見奉りて

限とて別るゝ道の悲きに
（定却ニテワカレ奉リ御歎チカクルガカナシサニ）
生かま欲きは命なりけり
（ドウカシテイキテヰタケレドモハヤイタシカタガナイ）

息も絶々に奏して、亦何か申た氣なれど、苦さに得いはず、此儘愛にて終らせ度思召せど、今宵より始る御祈速々と急せば、泣々許し賜へと、御心も空にて如何如何と御使頻頻なり、其夜終に絶果賜ひぬ、帝今更の樣に御悲歎の餘り、唯忙然と御涙に沈て籠り御座、皇子も生母の忌服なれば退出させ奉る、何事とも辨へなき幼心に、父帝を始人々の泣を奇氣に見給へる、尤哀なりける。

葬式の日勅使立て、贈三位の宣命讀む、女御といはせず成ぬるが殘念さに、せめての御志なるぞ、哀なる。母君空骸をみても猶死せりとは思はれねば、灰に成を見て諦めむと、御送の女房車に強て乘りて、愛宕火葬迄到たるに、火の登るを見て、同じ煙にと車より落ぬべく狂ひ給ふ、斯とは思ひし事よと、女房達もてあましぬ。

御方々も寵を爭ふ故にこそ猜みも爲たれ、其人柄の温順く情深く、女だに慕はしき容貌なりしを思出て惜みあへり、況て上の女房達は、泣かぬ人なかりけり、亡てぞ人はとは如斯折とみえたり（ある時は有のすさびにたらはでなくてぞ人は■しかりける。）

程經ても猶爲方なく悲しくのみ思召て、御方々の宿直も絶てなければ、死後迄も他を妨ると、弘徽殿には猶猜み給ふ。萬に附ても御涙のみ先立を、見奉る人さへ露けき秋也。一宮を御覽ずるにも若宮の戀しう覺されて、毎度御使を遣さる、今夕又靭負命婦を、夕月夜の有趣程に出發させて、其儘詠おはします、如斯時には御遊音樂の事等、爲させ給ひし、琴も上手なりし、歌も一節ある事を讀出たりしと、其俤髣髴として、闇の現（メニサカブ）にも猶劣りけり（うば玉の闇の現は定かなる夢に幾らも増さらざりけり。其やみの現よりも、まだ劣るとの意）命婦彼處に着て、門曳入るゝより光景哀也、寡なれど体裁克繕ひて在しを、悲歎に沈みて何事も打捨られしにや、草は高く茂り暴風に荒たる心地して、月影計ぞ、八重葎にも障らず差入りたる、南面に御して、母君[illegible]には挨拶も得せず、かゝる御使の蓬生の露分入賜ふに付ても、生殘たるが恥かしと、絶入計泣給ふ　命「參りては痛はしさ堪難と典侍の奏しゝが、實と、暗泣にやゝ躊躇て勅諚を傳ふ。

「暫時は夢かとのみ疑られしを、漸思靜まるに付ても、彌悲歎の情を語合たきに、内密參れかし、若宮の御事ど宜ひも敢す、更返らせ賜ひて、餘りに御心弱しと、人も思はむと、憚らせ給ふが心苦しさに、承りも敢す退出侍ぬとて、御書奉る　母「眼も見え侍らぬに、斯畏き勅を光にてと押頂てみるに、御愁傷を細々宣まへる末に

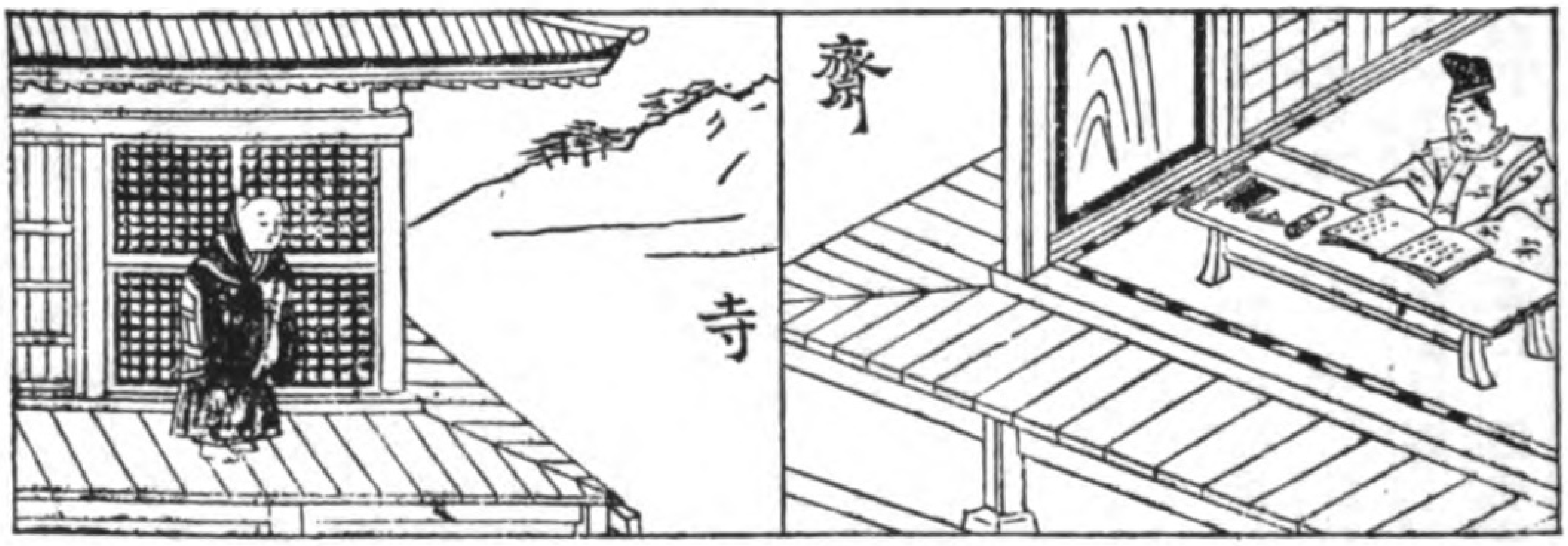
「幼人如何と思ひやり乍諸共に育ぬ覺束なさを、今は昔の形見と御覽せよなどありて

帝「宮城野の露吹結ふ風の音に小萩が本を思ひこそやれ。（宮中の事ヲ名所ニカケタリ　子ニカケタリ）

讓も果ず命長きぞ、最つらき、松の思はむ事も恥かしきに（いかでわれ在と知られじ高砂の松の思はむこともはづかし）最憚多き身なれば、參内は御免を蒙るべし若宮は御忌果なは早速參内爲させ

奉るべしと勅答す
命「宮を見奉りて、御容体委細に申たけれど、御寢なれるを如何せむ、上の俟御在可に、夜も更たれば御暇申さん
母「君は（命婦を云）來年面目ある時にのみ來訪賜ひしを、如斯御使にて對面せんとは、心の闇（人の親の心は闇に非れども子を思ふ道に惑ひぬるかなの）片端聞て賜はれ、彼女は生し時より、成人の後は宮仕爲せんと定め置侍し、故大納言の臨終にも、其事のみ呉々遺言し侍りしかば、父親なき交際は憖ならむとは思ひ乍、父の遺言を違へじと思ふ計に奉りしに、身に餘る寵幸を忝うして、人々の猜忌深く、終には横死の樣に死たれば、今は却て寵幸の甚しかりしを恨にと、云ひ掛て哽返り忝や（勿體なやと云ふ意）と泣く程に、夜も更ぬ。
命「上も然り、朕些も人意を曲たる

王朝の風俗（二）



事は無と思ふを、唯彼故に人の恨を多く負ひて、今將心も亂る計の悲歎に沈むも、前世の因緣にやと憂愁てのみ御坐在と、語りて罄せず、夜彌更ゆけば、今夜中に御返事奏せではと急く、月は入方の空淸く澄渡り、風凉しく吹て、叢の虫聲催貌なるも、いと立離がたき草のもと也

命「鈴虫の聲の限を竭しても
オハナシハイツマデシテモツキマセヌ
長き夜あかずふる涙かな
鈴チフルニカケタリ
コノ秋ノナガキヨヲナキアカシテモマダアカヌナミダカナ

母「いとゞしく虫聲しげき淺茅生に
元ヨリ泣テバカリヰルアバラヤヘ
露おき添ふる雲の上人（命婦を云）
一シホナミダノツユヲチツヘルオンツカヒデハアルカナ

母「私にも又訪はせ給へ、（公ノ御使ナラデ也）彼御遺物にとて、御裝束一領御髮上の調度（道具を云）取添へて賜ひぬ○命婦歸り參るに、未大殿籠らせ（ヤヨシン）

賜はず、御前栽の草花の盛なるを叡覽ある樣にて、有情女房四五人侍はせて、此頃明暮御覽ずる、長恨歌の御畵、（長恨歌の事後に註す）亭子院（宇多天皇）の震筆にて、伊勢貫之等に詠ませ賜へる、歌も詩も只其筋（寵妃の死別）のみ御目止る也けり、命婦哀なりし光景委細奏して、御返書捧げ奉る、母「最も畏きは置處も侍らず、如斯勅掟に附ても掻くらす亂心地になむ（すべて消息は奚に入用の文のみかきて餘は省けるが雅文の法也）

荒風ふせぎし影の枯しより小萩がうへぞしづ心なき

（大切ニオソダテ申べキ母オヤノナクナリマシテハ私ハ老人デ先ミジカケレバ皇子ノ御ヿチオアンジ申バカリデ何ノカヒモアリマセヌ）

手も顫亂たるを憫とみそなはす。

帝「故大納言の遺言愆たず出したるも、末榮よとの望なるを、仇と成しは是非もなし、若宮成人せは、自然吉事も有へし、祖母よ長命なれなと宣はして、彼遺物御覽するに（是より以下悉て長恨哥の句に依たる文章也後の注と對照して其意を解すべし）亡魂の在處尋て得たりけむ、標の簪ならましかはと覺すもいと甲斐なし。

帝「尋ねゆく幻もがな傳にても魂の在處を其處と知るべく

（長恨哥ニアル如キホシヤ人ツテニテモカレ人ナラバイカニウレシカランナ）

楊貴妃の姿は、妙手の畵工も、筆限有て繪がき得ざりしとか、長恨哥に大液の芙蓉未央の柳と形容したれど、朕が御息所は、花鳥の色にも音にも比類すべからず、噫比翼連理と契しも、空しき夢と醒にけりと、唯悲しくのみ感じ賜ふに、弘徽殿には久く上の御局にも參進給はず、今宵の月に深更迄管絃し賜ふ、帝甚失敬と聞召、殿上人女房も、皆傍痛と晌せり、最強情執拗后にて、帝の御歎を物とも爲賜はず、態とかく擧動賜ふなりけり

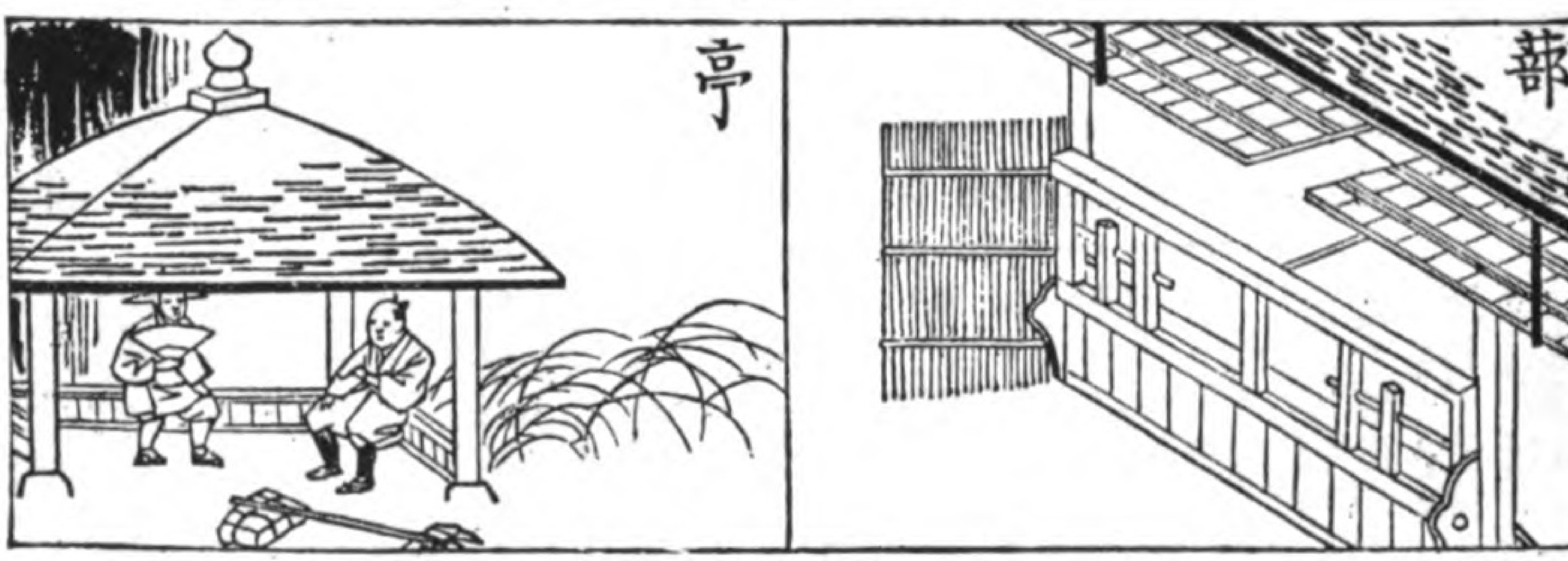
帝「雲の上も（禁中）涙に曇る秋の月のいかですむらむ淺茅生の宿

（彼ノ母ハドノヤウニシテヰルヿゾ草ダラケノアハレナヤドデ）

燈を挑盡して起坐す、右近衛の宿申聲するは、丑に（一夜の）成ぬる也、人目を憚て、寢殿に入御在ても、眠給ひ難し、且に起させ給ふにも、明も知らでと思出るに、猶朝政は怠らせ賜ふ、朝餉（御飯）氣色許召上られて、

大床子の御膳は御手も觸させ給はず、陪膳に侍ふ限り心苦と歎く、人々如何御宿因にてか、彼御事には世の識人の恨も憚らせ賜はず、今將かく政事をも、癈たる樣に成行くらむと歎合けり〇月日經て若宮參内あり久く見賜はざりし間に、いとど此世の物ならず、淸らかに美しく御智もまし賜へり〇翌年の春立太子の定るに、最超越たく思召せど、御後見の外戚なく、又世の承引ましき事なれば、却て危險と思し憚りて、色にも顯し給はずなりぬるを然許思召たれど、限こそ有けれと世人もいひ、弘徽殿も安堵し給ひぬ。彼祖母君慰む方なくて早く死たしとのみ願ひ賜ひし驗にや、終に死亡給ひぬ、宮六歳なれは此度は泣慕ひ給ふ、祖母君さへ失給へれは、今は内裏にのみ侍らひ給ふ、七歳にて讀書始爲させ給ふに、聰

王朝の風俗（三）



明なる事恐ろしき迄なりけり、母なき兒也今は誰も憎み賜ふなとて、御方々へ渡らせ賜ふにも、召連て御簾内に入賜ふに實に仇敵なりとも、之に向ひては打笑まれぬべき愛敬あれば、さしもの弘徽殿すら憎み賜はず、御方々も隱れ賜はず愛はやし賜ひけり、文學のみならず、管絃にも才賢くて、何事にも御歳より勝れて見え賜へは、帝深慮ありて、其頃來朝の高麗人に、（今の朝鮮）觀相を克する者在由叡聞に達しければ、右大辨何某に仰含めて微行鴻臚館に（京都七條朱雀に在今停車所の邊　玄蕃寮とて外國人を取扱ふ所也）將て奉り、辨が子として見するに、相人驚て曰、奇哉此人、國父と成て無上位に登の相有、而して亂憂の恐あり不如人臣と成て攝政たらむには、榮花限なかるべしと申す、此辨學才ある博士なりければ、筆談して詩文等贈答す、宮も御年に

似氣なく、天晴なる詩句を作り賜へるを、限なく感じて、今日明日歸國に臨て、如斯有難き貴人に値遇するの怡、生涯忘難しとて、種々國產物を捧げ奉る、公よりも物多く賜りて、出帆したりとぞ。帝聰明兼ての叡慮に符合すれば、御心決定し就ては無品親王の外戚なしにては漂はさじ、臣下となして朝庭の補佐たらしめむと、爰に源姓を賜ふ、（是より此皇子を源氏君と稱す）故御息所の御事を忘兼賜ふ餘りに、君紛るゝやと、然るべき人々を召試み（俗に云お目見也）賜へど、擬ふべきだになくて、疎ましくのみ思召たりしに、殿上に侍ふ典侍は先帝の御時の人にて、彼后宮にも親く參り慣たり、姫宮（第四の宮）の幼時より見奉り、今も折々參るが歸參りて申やう故御息所程の美人を、三代の朝に給仕すれど未だ見在しに后宮の姫宮こそ、奇しくも酷似賜へりと奏しければ、誠にやと御心止りて、即ち懇望有けり、母后嗚恐哉、弘徽殿の最嶮くて、桐壺の滄弄られて命さへ縮めたる、例も忌々しと御請なかりける程に、ふと急病にて母后失賜ひぬ、上よりは唯朕が女王同樣に爲むと、度々懇に內勅有ければ、御兄の兵部卿宮後見達等、かく心細く御在よりは、內住爲賜はすこそよけれとて、入內させ奉りて、藤壺と稱す、實御容貌態度迄、奇くも酷似たり、彼は（桐壺）人々許さゞりしが、是は（藤壺）皇族なれば、人も貶しめ侮らねば、得々然慊ぬ事なし、思紛るゝとはなけれど、自然御心移りて、殊外嬉しと思召す、源氏の君は御傍去り賜はぬを、況て繁く渡り賜へば隱れ給はず、御方々我他に劣らむと覺すやはある、とり〴〵に挑み賜へと、皆老成人なる中に、藤壺獨若う美艷人哉と覺すに、母君は影だに覺え給はぬを、酷似賜へりと典侍が申しゝより、慕はしくて常に參らま欲し、上も限りなき御思ひ同士にて、帝「奇しく彼が母に似賜へれは、母子といはむも似合し、子と思ひて愛し給へ、母と思ひて仕へよと仰あれば、一層童心に泌みて、何彼に付ても志をよせ實母の如く睦み給ふに、弘徽殿は又此宮とも御中反目、元來の憎さも再發して、源氏をも失敬と覺したり源氏君の容貌光るやう也とて、彼高麗人が光君と稱

しより、世人も然申壺藤並びて榮寵賜へば、輝日宮とぞ稱しける。

源氏十二歳にて御元服あり、一とせ東宮の御時に劣させ賜はず、處々の饗、内藏寮禁中の御藏也穀倉院公の米藏也年中要諸の事を司る等に、特別の命令有て、限ある事に事を添させ賜ふ、御坐殿清涼殿日の御座の東庇東向に倚子建て、冠者の御座とす、引入大臣冠を奉る時其髮を引入る役後世烏帽子親と云ふに同じの坐、御前に在、申時刻夕源氏參進、鬟結給へる容貌、樣換給はむ事惜氣也、大藏卿藏人、理髮仕奉る、淸らなる御髮を刮心苦氣也、上は御息所の世に在らばと、懷舊の情に耐兼給ふ、冠爲給ひて、御休所に退出、御裝束を改め、下りて拜し奉り給ふに、人皆感涙を落す、帝は况て耐敢賜はず、如斯幼弱なる程は、上劣もやと疑はれしを吃驚ビツクリスルコト美嚴添ひ賜へり、引入の大臣の宮腹に皇女を娶て生子を宮腹と云唯獨の寵育女、東宮より御氣色有をも、辭退有しは、此君に奉らむの底意也けり、前に天意を窺ひ賜ひしに、然らば此折にと內勅下りしかば、事準備あり、侍所に退出て、親王達の末に源氏着坐、御酒行はる、程、含意申賜ふ事あれど、若少含羞てキマリワルキ應答賜はず、內侍宣旨傳へて、左大臣御召に依參上す、祿物上命婦取て賜ふ、白大褂御衣一具例の如し、天盃の序に

帝「幼き初元結に長き世を契る心は結び込つや 若年ノ元ブクニモ其方ガ女ヲメアハスト云コトヲ心ニハシラセタテアロウノ

左「結びつる心も深き元結に濃き紫の色し褪ずば」と奏して長階より下りて舞踏爲賜ふ、 オホセノ如クロ、ロデヨメテ申上マシタ不肖ナ女デモ末長ク御目ヲカケ被下ナバ有ガタク存奉ル

左馬寮の御馬、藏人所の鷹居ゑて賜はる、御階下に親王達上達部連て、祿品々賜はる、其日の折櫃籠物籠に櫃物を數て五葉なしる五葉とは柑橘栗杼梨をいふ彼右大辨承れり、屯食下等に賜はる強飯也鳥子紙に包故に包飯ともいへり鮑唐櫃、所狹き迄、東宮の折にも增りて嚴重かりけり。其夜左大臣の邸に、源氏君を迎へて、婚儀作法世に珍らしき迄鄭重也、女君は少し更十六賜へば男君の若きを似氣なく恥しと覺たり、此大臣の權勢有が上に、母宮は今上の同后腹也、此君源氏さへ加はりて彌盛大なれば、東宮の御祖父にて、終には執政た

る べき右大臣も壓され給へり、左大臣の男兒多き中に宮の御腹は藏人少將にて、優たる人柄なれば、右大臣ノ君に配偶て、劣らず寵敬たり。源氏君は常に召纒されて、心易く邸住も爲給はず、意中には藤壺を比類なしと思泌て、如斯人をこそ妻とはせめ、大臣の君寵育たる人とは見ゆれど、心にもつかず、少年の一向心に、唯藤壺を忘難く、苦しき迄思續け、元服の後は、男と成給へる故に、今迄のやうに簾内に入れ給はず、唯管絃の折々、琴笛の音に聞通ひ、仄なる御聲を慰めにて、內住のみ好ましく、五六日も侍ひては、大臣家に二三日と絕々なれど、內裏にて生立賜ひし君なれば然もこそと罪なく覺して、御方の女房をも、尋常ならぬを撰調て侍らせ、御心に適ふべき遊戲をし、心を竭して營み奉仕給ふ。內にては母御息所の淑景舍を（桐壺の別名）御曹司にて、舊き人々も退出散らす侍ふ、邸宅は（母の舊宅二條院也）修理職內匠寮に宣旨下りて、改造あり、舊より庭の面白き處なるを、池を弘め樹を植添へなどして造り騒ぐ、かゝる處に意中人を置て住まばやとのみ歎かしう思し渡るとぞ（是紫上の事を云ふべき伏線なり）

▲清涼殿　天皇ノ御坐所　▲夜御殿　天皇御寢所清涼ノ內ニ在大殿ゴモルトハ御寢成也

▲弘徽殿　皇后ノ御局清涼ノ北弘字コート不引コト讀　▲後涼殿　清涼ノ西隣納殿トテ献上物ヲ納置處アリ

▲桐壺　別號淑景舍日華門內宜陽殿ノ東清涼迄多數ノ內橋渡廊ヲ經テ至　▲長階　庭上ニ下ル階段也

▲長恨哥　唐玄宗帝楊貴妃ニ別テ悲歎ノ情ヲ云是編詩也更衣ノ死悉之ヲ擬シテ書ケル也

▲證の簪ならましかは　臨功ノ道士幻術有蓬萊島ニ至リ貴妃ガ仙宮ヲ訪テ帝ノ志ヲ傳ヘ其證トシテ金釵鈿合二品ヲ贈ラル然モ猶是世ニ類有ル品願ハ帝ト妃ノ他ニ知人ナキ語ヲ聽テ證トセン

▲比翼連理　天ニ在ラハ願ハクハ比翼鳥ト作地ニ在ラハ願ハクハ連理技ト爲ラン此言ヲ以告

▲大液芙蓉未央柳　大液ハ池名未央ハ宮名也芙容如レ面柳似眉ト其妃ノ美ヲ形容シタレド更衣ハ夫ニモ增テ花鳥ノ色ニモ音ニモタトヘガタシト也

▲明も知らで　春宵苦短日高起從是君王不早朝寵妃ノ爲ニ朝寐ナリシモ今ハ歎ノ爲ニ猶朝政ヲ怠ルト也

▲燈を挑竭して　夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未レ能レ眠　以上スベテ長恨哥ノ句也

▲右近司の宿直申　左右近衞刻限ヲ定メテ時ヲ報告スル也　亥一刻左近衞夜行官人初テ時ヲ奏ス　子刻ニ至テ終丑一刻右近衞宿直申事卯一刻ニ至內豎亥一刻ニ宿簡ヲ奏ス

桐壺巻畢



生理衛生

美人の肌膚

糸左近

私はこれより『生理衛生』のお話をいたそうとおもひますが、世間には此の事を述べた本が澤山あつて今更私が繰り返す必要は無いやうなれど、何れの書物も、目に觸れぬ骨格や細胞などからコツ〳〵說いてある、故に專門に學ぶ醫學生等には適せんも、普通の方には何うも分り難いのみならず、何の興味も無い、そこで私はこれでは不可ぬと一工夫をいたし、何でも身體の外部に表はれてゐるもの、即ち皮膚から述べて、次に目鼻口耳などより、段々と、肉骨、內臓、神經といふ順序にしようと思ふのである。

偖又何人にも衛生の大切なることはいふまでも無いが、其の衛生は生理の大体を心得て居らぬと、眞に了解出來ぬものである、故に夫等を面白く分り易いやうに書く積りである。

されば、啻に普通一般の方ばかりで無く、產婆看護婦乃至は醫者にならうといふ心がけの方も、一讀せられたならば、必ず爲になるといふことを、自ら信じてゐるのである。そこでまづ

▲美しい膚

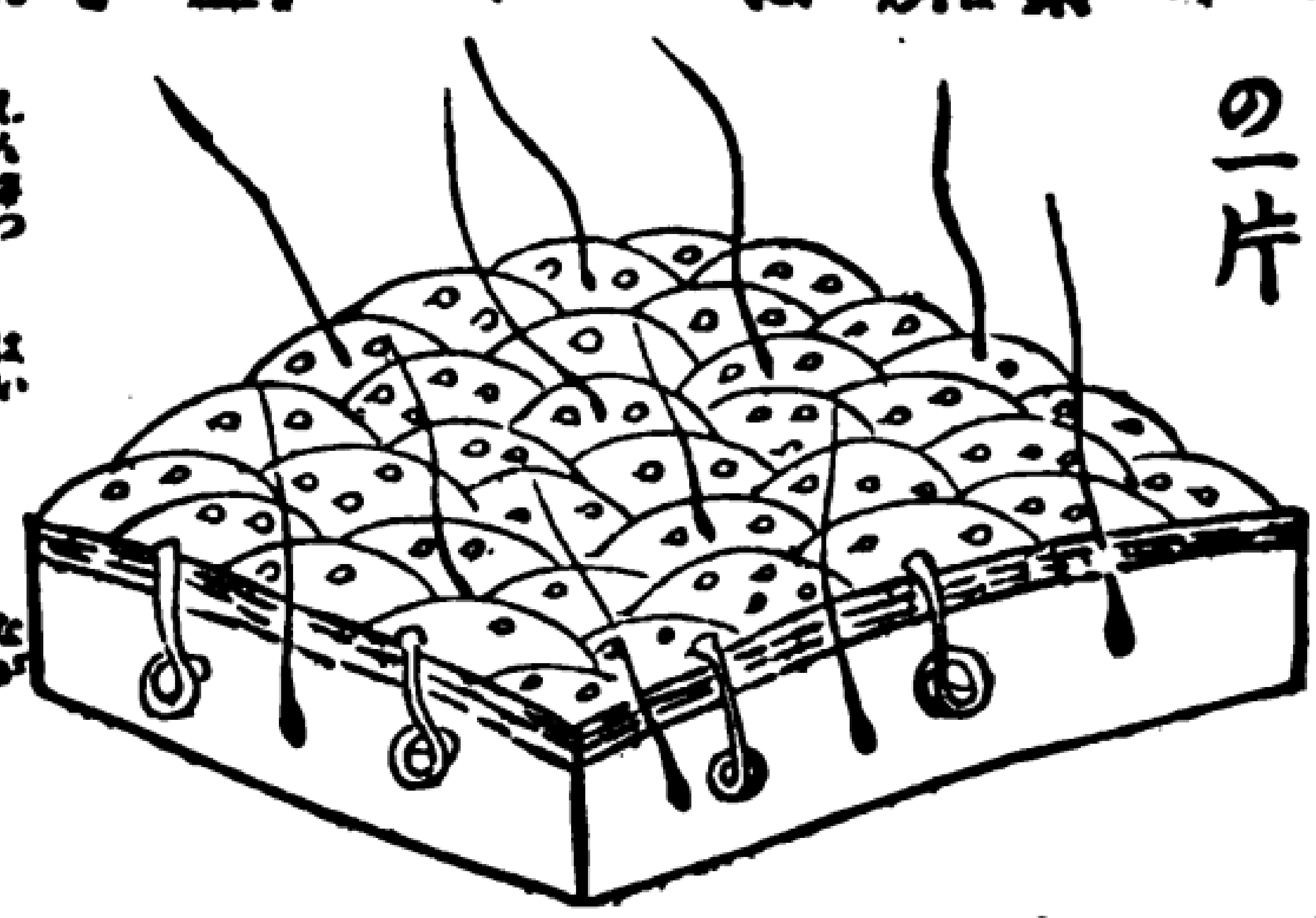
と題目を掲げましたが、私の述ぶるのは彼の玲瓏た玉の如く雪の樣な膚ばかりを指すのでなくて、衛生生理上でいふ美人の皮膚を說くのである、衛生生理上のは、白い黑いに拘らず、唯つや〳〵と光澤があつて脂こくすべ〳〵と滑らかで、何時も温かい皮膚をいふのである、昔から『色の白いは七難隱す』など〻、白いのを尊びますが、唯白いばかりで光澤も無く、脂も無く、コセ〳〵と所謂鮫膚で、其の上冷たく、しかも感冒を

ひき易いやうなのは、昔の美人かも知らぬけれど、二十世紀の美人では無い。

抑々皮膚といふものは外部の傷害を内部に傳へぬやうにし、冷い空氣が當れば收縮して体溫を洩らさぬやうに保ち、暑い時にはドシ〳〵汗を出して溫熱を放ち、其の汗と共に体内の老廢物を流し出す、それから又斷えず皮脂といふ脂を出して、皮の表面を滑らかにし、外部の磨擦を防ぎ、及び毛の色を奇麗にす、故にこの天然の脂に富んだ人は、彼の梳油などをコテ〳〵附ける必要は無い、又皮膚は大切な空氣を呼吸す、その外吸收作用とし、外物を内部に吸ひ込む役目もある、故にこの皮膚の強い弱いに依つて、大いに健康不健康の差があるのである、第一皮膚が強ければ、感冒に罹らぬ丈でも如何程人生の幸福かも知れぬ、將來の人は、女とても、深窓の下に男子をばかり賴みにして居れぬから、太洋の潮風に皮膚を吹かせて、北極探險と出掛る位で無くてはなるまい、それに就いては先づ皮膚を強くする方法を講せねばならぬ、併しそれを講するには講ずる前に、皮膚の解剖生理から說いてかゝることが必要であらうと思ふ。

夫れ皮膚は一寸外部から見たところでは一枚の皮のやうなれど、實は表皮、眞皮といふ二層から出來てゐて表皮は身体の最も上を被うて、其の外面は常に空氣に觸れ、眞皮は其の下層をなし、筋肉に接してゐる、さうして其表皮は又角層、中間層、粘液層　粘液層のことを一名Malpighii氏層といふ　の三層に別れ、眞皮は又乳頭部網狀部の二部に區別せらる、角層は扁平な細胞「細胞とは顯微鏡で見れば分らぬものでこれが身体を組み立つる單位の小塊である身体は此の小塊が集つて骨なり筋肉なりを造るのである所が其の部分々々に從うて細胞の形も異なり普通のは球形で中央に一つの核即ち「タ子」を有つてゐるけれど中には細長い纖維になつてゐるのもあるし又扁平なのもあるし又色々の變形物がある」が鱗の樣に重つてゐて、常に雲脂となり脫げ落つるものであるが絶えず下部の眞皮内を循環する血液から滋養分を取り、又新たに生へて之を補ふ。中間層は多角形の扁平な細胞が角層の下にあるのであるが、併し何處にでもあるので無くて、唯手掌足蹠等の如き厚くなくてはならぬ處にのみあるのである。粘液層は圓形の細胞で中間層の下に在り、圖の如く眞皮の乳頭間を

埋めてゐる、さうして其の深部には色素を含んでゐて皮膚上に色を現はし、其の色の工合に依つて、各人の顏色が違ひ、又人種に依つて其の面色が異なるのである、又この色素は日光に多く觸るゝ人と左程觸れぬ人とに依つて大いに違ふ、彼の土方や車夫の膚と華族の姫君の膚とは墨と雪即ち別種の人間の樣に異るやうなものである、又色素が何かの原因で一つ處に多く集るときは所謂母斑となるのである、偖又表皮の上部は前に述べた通り、次第に落ち去るけれど、最も深い部はさうで無いから、此處にある色素は幾年經つても消え去ることが無い、故に人工で深い部に入墨をすると一生涯歷歷たる跡を殘すのである實に野蠻の風習と謂はねばならぬ余れ嘗て優しさうな一婦人を診察し背部を打診しようとすると全面五色の龍を彫つてあるには何となくゾッとする感覺が起きた。次に眞皮は主に纖維から出來てゐるが、其の乳頭部と網狀部との區別は判然あるのでは無い唯乳頭部は網狀部より疣の出來た樣に高く隆起して表皮の粘液層內に出てゐるので、網狀部は其の質網の樣になつてゐるのである。


皮膚の一片

表皮は血管も無く神經も無く、唯內部を護るまでの効用をなすのみである、若し血管神經が此の部にまで布かれてゐるものとせば、少しの物に觸れても直ちに血が出で嘸や痛さに堪へぬであらう。これに反して眞皮は血管や神經が普ねく亙つてゐるから之を傷つくれば血も出れば痛さも感ずるのである、然るに若しも此の部までが表皮の樣であつたならば、無神經の植物的で、實に一方ならぬ不都合なものであらう。

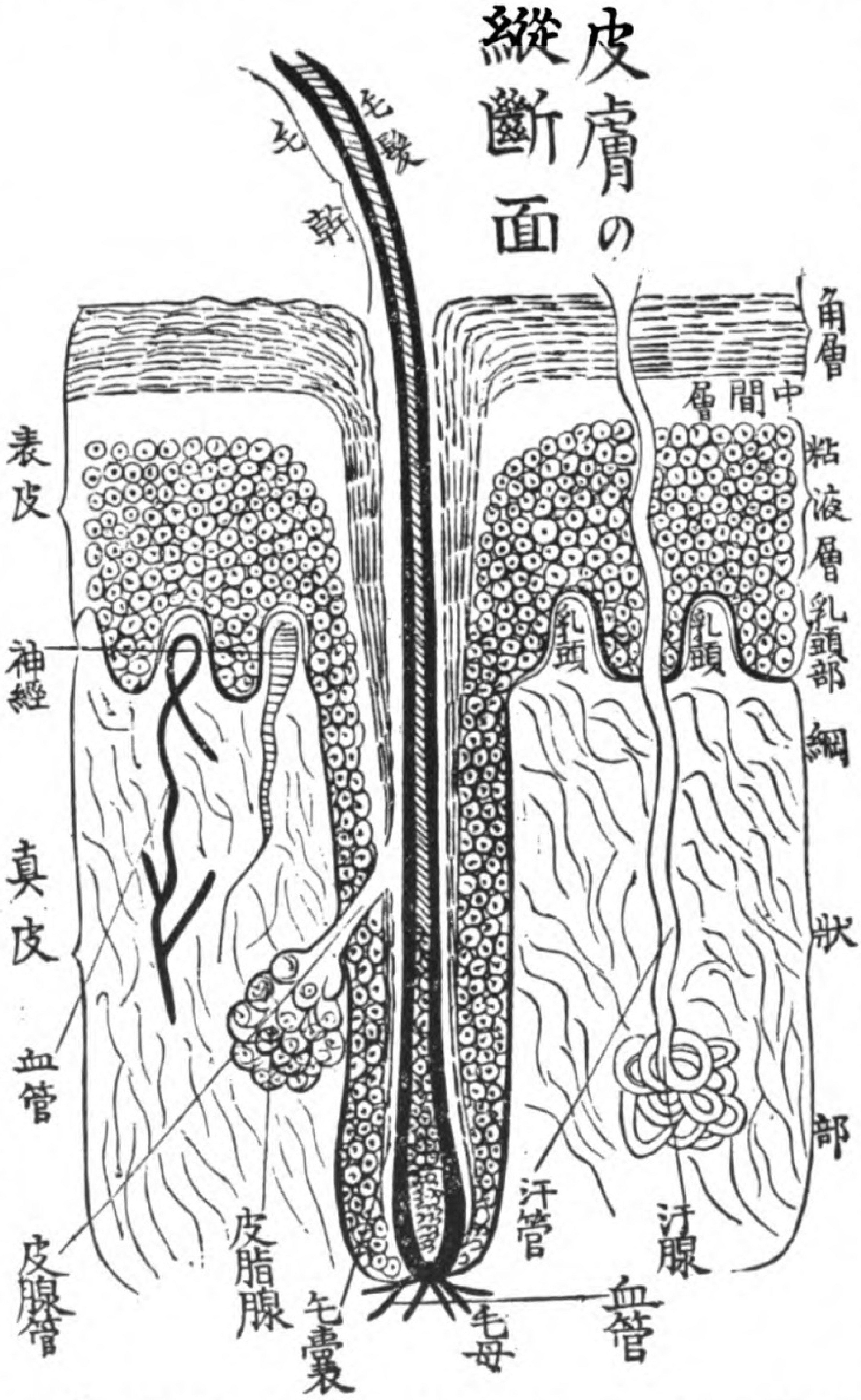
次に汗は汗腺から出て汗管を通り皮膚の表に流るゝのである。其の汗管は漏斗形を存して廣い口を皮膚上に開いてゐるが其の管は螺旋狀に彎曲して下り、眞皮の網狀部中に至ると、恰も手毬が、糸を幾重にも纒うてゐる如くに卷いてゐる、其の卷いてゐる部

を汗腺と名づくるのである手掌は此の腺が殊に多くあつて一寸四方に殆んど二千八百個もある。若し凸面レンズを用ゐて手掌を眺めたならば汗管の口を開いてゐるのが澤山見ゆるであらう。又此の汗管から汗腺に酸素を吸ひ入れて血管に送り血管から炭酸を受け取つて皮膚上に放ち肺臓の用を助くるものである、これは人間には甚だ少いが、或る動物に至つては、殆んど皮膚呼吸で活きてゐるものがある。偖又汗が皮膚の面に出るや否や忽ち其の水分を蒸發し、更に汗の痕跡をも殘さぬを不可見汗或は潜發汗と云ひ、晝夜四季に拘らず出てゐるものである。汗のタラ〱球になつて出るのを可見汗といふ、何れにしても体内の老廢物を流し出し、同時に体温を調節するものである、試みに疾く走つて御覽なさい身体が温まると共に冬でも肌着を濕すでせう、されど身体が温まら無いでも出ることがあるそれは苦悶の時或は死に臨む塲合である、嗚呼彼の憶病な露兵の逃ぐる時は其の汗の量果して如何、察するに餘りありである、汗は又精神とも大いに關係するもので、「冷汗流す」などは其の一例である。

皮膚上に出るものは前にも述べた通り、皮脂といふ脂も出るこれも網狀部中にある皮脂腺といふ所の、言はば小嚢が葡萄狀に聚がつてゐる物から出るので、其の管は皮脂管と名づけ、短かく毛の根本へ口を開いてゐる、顔の皮脂腺は他部分よりも大きい、同じ顔の中でも鼻の部分は尙大きくある、若しも其の皮脂の出るのが或る原因の爲に妨げらるゝことある時は固くなつて黑色を呈はし俗に言ふ粉刺を造るものである、身体不健康な人及び榮養食物に不足な不幸者はこの皮脂の分泌が少いから皮膚が枯れ燥いてしかも其の色蒼白いものである。

皮膚上には毛髮及び爪といふ物が顯はれてゐるこれは表皮の變形物で各々身体の其部々々を保護するために生えるのである、然るにクリ〱坊主に剃るなどは、無常を觀ずる世捨人ならばいざ知らず斷じて望ましいことで無い。毛髮は其の形に依つて長毛短毛及び小毛とに區別せらる、例へば頭髮は長毛で、眉毛は短毛毳毛は

小毛であるやうなものである、何れも其の部に依つて毛根毛幹と命が附く、毛根は眞皮の毛囊内にあつて其の末端は少しく凹み毛母を含んでゐる、毛囊とは角層粘液層が毛根を包んでゐる部の名、毛母とは毛囊の底にある處で、血管神經に富み毛を養成する場所である故に毛母を傷めぬ限りは幾度拔いても再び生ふるけれど、此の部を傷むれば一生涯ランプ頭で居らねばならぬのである。毛幹とは毛が表面に出てゐる總てを名づく。次に毛の内容は如何なるものかと縦斷して見れば、皮質と髓質とから出來てゐる、皮質とは扁平な細胞から成り、毛幹の外部を造り、髓質とは毛幹の中軸で脂肪色素及び空氣を含んでゐる處をいふ



毛髮も亦血管神經の無いものである。夫れ毛髮の赤く或は白く變色するのは、令ひ療治をしても大抵元の色に復ることが無い世には白髮染などいふ賣藥はあれど恐らくは硝酸銀或は鉛を含んだる毒物で健康を害するものであらう。上來述べたことゝ此の圖とを能々照し合して讀む

といふことが大必要である。

爪は手の指と足の趾との背に生へ仲々堅い丈夫な角質のものである、その効用は一方ならぬ莫大なもので、これあるが爲に、ゆび尖の軟かいしかも他の刺戟を受け易い部を護り物を撮む用を爲し、色々の手工をするに都合が善い、琴を彈ずる者はこの天然の爪の上に假人工のを嵌むるのを見ても爪の用は如何といふことが考へらるゝであらう、斯樣に大切な物なれど餘り長く延しておくと他物に觸れ外傷を蒙るばかりで無く其の間に垢が溜り、不潔な至りと謂はねばならぬ、時々剪つて其の跡を木賊で磨くが可い。

又皮膚は身体の諸々の竅即ち口、眼などの入口に至れば、赤い色の濕つた感じの軟い部に移り變る、けれども矢張皮膚の續きで、其の組み立は少しも皮膚と異なる處無く、即ち血管神經の無い外層と、血管神經のある內層とから成つてゐる之を粘液膜又は單に粘膜とも云ふ。これ等の皮膚及び粘膜は何れも數多の小孔を有つてゐる網の樣なもので、其の小孔から老廢物や榮養物を出入せしめてゐる靈妙な器械である。

次に皮膚に吸收作用のある例を擧れば膏藥を貼けて腫物を治し、傳染病者に觸れて其の毒に感じ、海水に浸したる衣服を着て渴を消す如きである、故にこれから考へても鉛分を含んだ白粉を塗つては不可ぬといふよが分るであらう。

右の如く皮膚は汗や脂を出し呼吸吸收の作用を爲すものであるから、垢を溜めぬやうに清潔にせねばならぬのである抑々垢は何うして溜るかと云ふに、絶えず出る汗の中に含んでゐる鹽類や表面から剝がるゝ表皮や外界から來る塵埃などが皮膚の表に出る脂の粘着力で積り着くのである、故に垢が溜れば色々の大切なる作用が止り病氣を惹き起す原因となるばかりでなく遂には此の世を去らねばならぬことゝもなる嗚呼實行すべきは皮膚の清潔法である。

然らば皮膚の清潔法は如何と云ふに冷水浴、溫湯浴、雨浴、乾浴の四通りである、冷水浴とは冷水に手拭を浸し、輕く搾つて身体中を摩擦しながら垢を落すので

あるがこれは清潔になるのみならず血液の循環を盛んにするものである、抑々皮膚には反應とて温めた後は冷え、冷した後は温くなる作用がある、その所以は冷された爲に血液は心臟に逃げ歸る、心臟は血液が續々來るから、其の刺戟を受けてこゝに運動を盛んにし、來た血液を再び皮膚に追ひ歸し、斯の如く交々轉流する中に温暖を感ずるのである、又冷浴は是等の効能に止ら無いで、皮膚の抵抗力を強くし容易に感冒に罹らぬ豫防法ともなるものである、序でに今一言したきは抗抵力を強くする法である、深窓の下に爐を圍み十分に衣服を重襲し冬といふものは那邊に在るかといふやうな奥方と、破れた行列然たる物を着、硝子の破れはありませぬかと殘酷な北風に訴へて歩く賤の女と何れが感冒に罹り易いかを比べて見るに奥方の敗北たるは云ふまでも無いこれその抵抗力の強弱如何に在るのである、故に「纖弱き女の身」などゝ自任し無いで、滿洲の野に寒氣を敵としてゐる武夫を思ひ出し、櫛風沐雨的の養生法とまで出來ぬとも責ては冷浴なりとも實行せられたいのである。

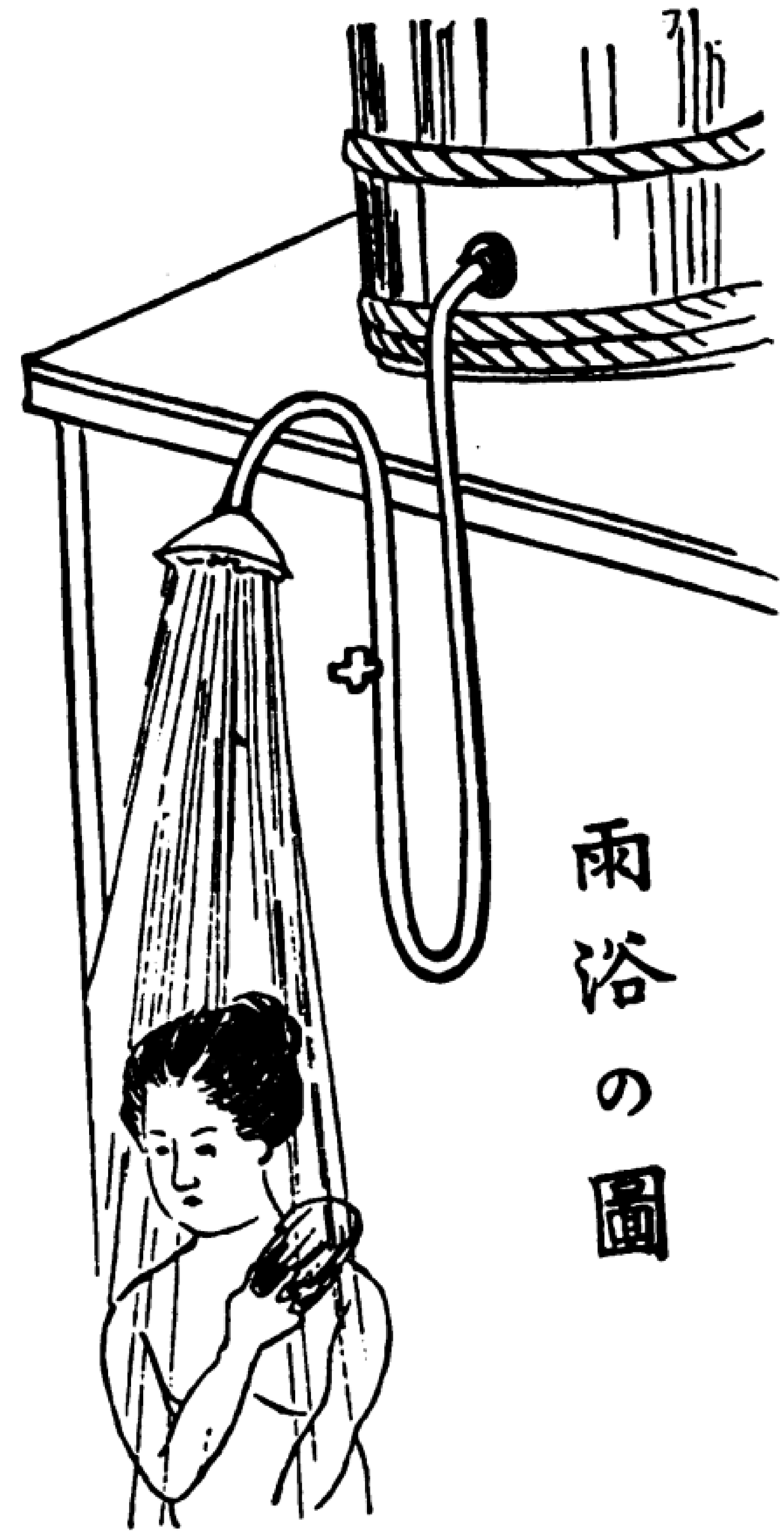
温湯浴は天然の温泉に浴すれば甚だ氣持の善いことではあるが、國旗的に戶々之を設くる譯にもゆかぬから沸湯を以て滿足せねばならぬ入湯は矢張反應の道理で湯冷のするものであるから其時に一種の不愉快を感ずる、殊に東京の朝湯など來たら攝氏五十度の温熱であるから恰で身体を煮るやうなものである實に野蠻な習慣を堂々たる帝都に保存して衛生の道を妨ぐるものと謂はねばならぬ、して又數多の人が混浴するのであるから中には「流板の溝へ小便するを禁ず」といふ貼札を睨みながら湯中に放尿する無法者も澤山あることは午後六時過ぎの湯の臭ひで確かに證據立てらる、されば入湯よりは冷浴を守るが善い、されど垢を溶解して身体を清潔にするといふ點のみから論ずれば勿論湯は水よりも數等上である故に冷浴を毎日實行する人は入湯は一週一回位を度とすれば可い。

雨浴とは左圖の如き仕掛を以て温湯或は冷水の細滴を身体に注ぎつゝ摩擦するのである、これは温冷の感覺

が弱く當るから愉快なものである可成これを採用した方が可い、が併し婦人の方には束髪の外は些と都合が悪いであらう。

全体湯の温度は体温と同じく攝氏三十七八度が理論上此の上も無い適度なれども實際はさうで無くて四十二三度が一般の人に快く感ずるのである察するに之は動すべからざる先天的の習慣となつたのであらう。

乾浴とは温湯や冷水で垢を洗ひ落すのでは無く、唯新らしい衣服を屢々着換へて其の垢を衣服に付け移すをいふ、怠惰不經濟と云はうか贅澤と云はうか兎に角採用すべき清潔法では無い、されど重病の人や高老者には之を行はねばならぬことがある。孝道に厚き讀者方は其の御兩親の爲には新らしき衣服を屢々取り換へて上げらるゝは言ふまでも無く年若き身とても沐浴清潔の外に尙衣服の清潔法を夢怠り玉ふなよ。(尙衣服衛生に就いては昨年の誌上に村上文學士と共に倫理衛生と題目を附て講じたれば今は之を略す。)



雨浴の圖

今は昔「身体中に漆を塗らば嘸や温かくて感冒をひかぬことだらう」と實行して其の儘往生した馬鹿者もあるし、大佛の眞似をして身体中に金箔を塗り直ちに眞の佛になつたイヤ鬼になつた阿房者もある、これ皆生理を知らぬ結果である。希臘の古聖ソクラチース先生は「知らずして犯す悪は知つて犯す悪よりも心に耻づることが無いから其の罪尙深し」と戒められたのは千歳の下朽ちぬ金言である嗚呼學問せねばならぬ殊に生理衛生

を研究せねばならぬ。
終りに臨んで尚一言したきは皮膚教育のことである、前圖にも示したる通り、眞皮の表面には身体中至る處に乳頭が有つて其の乳頭に頒布せる神經は外部の刺戟を脳髄に取次するとは電信よりも速い、之を觸覺といふ。これあるが爲に皮膚の上から能く物の硬い軟かいや大小形狀性質までも知り得るのである、さうして此觸覺は教育熟練に依つて益々鋭敏になり、遂には目の用までもなすに至る、彼の醫者が外部から内臓を撫でつ壓へつして其の疾病を知り、盲者が白い黒いの色までを判斷するとは教育の効亦莫大なものと謂はねばならぬ。嗚呼教育なるかな生理衛生なるかな、衛生の道を守れば皮膚は厚く强くなつて滑澤に美はしく而かも感冒や小なる外傷を受けぬやうになり、教育すれば鋭敏になる。嗚呼造化の靈妙なること實に驚くより外は無い、吾人は益々身体を强壯にして眞理を研究し智力の戰爭にも亦彼の西洋人に勝たねばならぬ。
次號には「顔のはなし」と題して眼鼻口耳などの生理衛生に骨相學までも打ちませて益々面白く說く積りである。
質問は遠慮無くして下さい。「私を鐘と思召せよ」小さく敲けば小さく鳴る、大きく敲けば大きく鳴る何うか破るゝまで敲いて頂きたい。

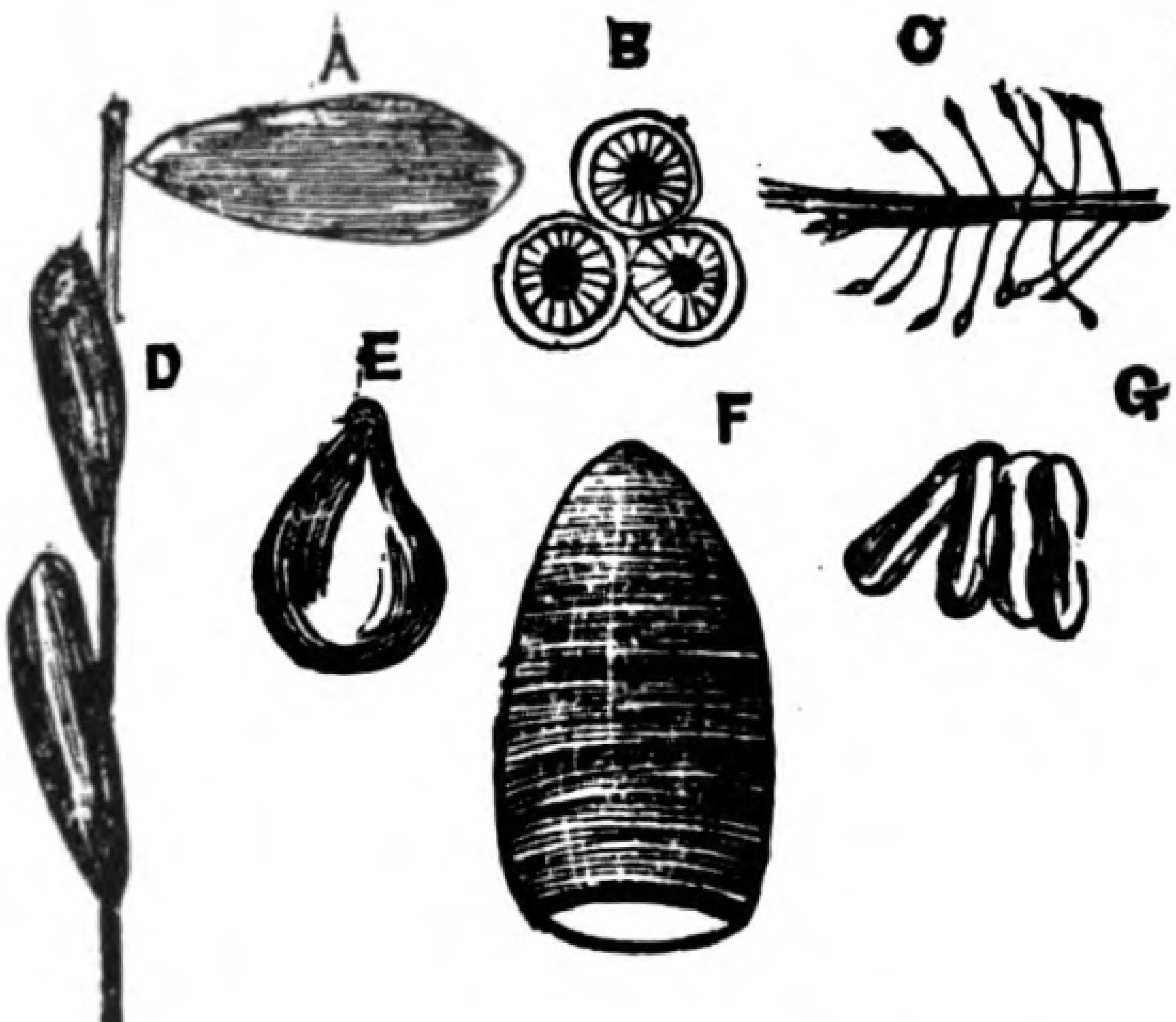
博物小話　蟲の學問

農學士　鈴木眞吉

昆蟲とは花園に翩々と飛でゐる蝶やら、臺所に襲てくる蠅、又は夏の夜讀書をしてゐる際に我々を苦る蚊、其他露を宿せる叢の螢、蚤、蝨等の總稱で、六本の脚、即ち三對の脚を持てゐる虫をば昆虫と申します、よつて一名六脚虫、又は六足虫とも申します。
同じ虫の内でも、蜘蛛、蜈蚣の様に三對以上の脚をもつてゐるものは昆虫ではムいません。
それで昆虫は平素も、同じ形態をしてゐて、春は朧の櫻時、夏は凉しき木下闇、紅葉する木間にも、葉のな

き木の空洞にも年が年中、同一形でゐるのかと申せば決してさうでは厶いません。我々人類が呱々の聲を上げた以來、体軀こそ大きくなれ、其形は毫も變らないけれども昆虫は決てさうではありません、虫は他の動物の如く年が經つて大きくなるのでは無く、四季折々の時節に因つて其形態が全然と變るのです(中に往々變らないものも厶ります)こゝが即ち虫の虫たる處で這麽に昆虫の体軀が時季に由て變るのを、昆虫の變態と申します、昆虫の形態は眞個に不思議な面白いもので、山の芋が鰻になり、雀が海へ入つて蛤となるとの昔噺の樣に奇妙な變り方をするのです。でこの變態を研究するのは至極趣味ある事柄です。

第一圖　昆蟲の卵子



(A)浮塵子の卵
(B)夜盜蟲の卵
(C)くさかげろふの卵
(D)馬蠅の卵
(E)もんしろてふの卵
(F)紛蝶の卵
(G)芫菁の卵

前にお話致しました通り昆虫は時節に由りて形を變へますが、さて、何の虫も一樣な變化をするのでは無く人の性質の同一でないやうに、虫の性狀と種類とで差うのです。さてその變種には三種厶います。

▲其一　不變態類

この種に屬する虫は卵から孵化つて成蟲になる迄、月日の經つに連れて大きく成りますが、其の形狀は舊來の儘、少しも變らないものの總稱で、彼の衣服幷に書籍の害をなす、衣魚は此の種に屬する昆虫です。

▲其二　不完全變態類

此の種に屬する虫は、蟬、蜻蛉、椿象、の類で、形態を變へます、けれども不完全なものです、即ち卵子より孵化して、幼蟲となり、その幼虫が成虫となるのに

明確な蛹の時期を經過せないものを申しますのです。

▲其三　完全變態類

蝶、甲蟲、蜂、蠶、蛾等の樣に、卵、幼虫、蛹、成虫の確乎に四期を經過致す所の、虫の總稱です、この種のものを一に完變態とも申します。

以上は普通の變態ですが、此の外、芫菁、地斑猫の樣に異形變態を致すものもムります。

今左に夫れ〳〵變態の形に就て申上ませう

▲卵

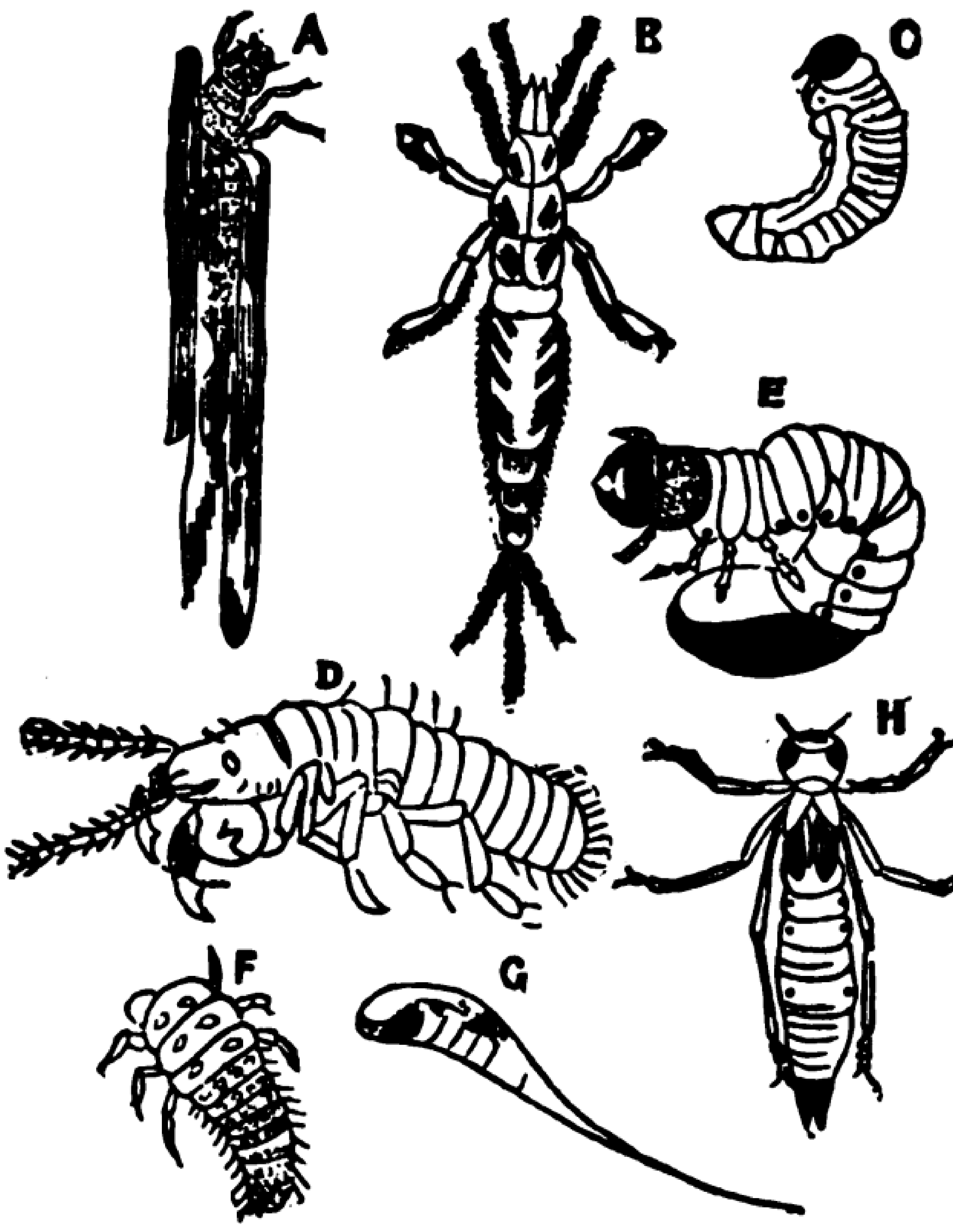
卵は普通、膠質の物質で蔽はれてゐて、其數は種類に因て異ひ、少きは數十、多きは數万位、何の昆虫もおしなべて同一ではムいません。

形狀も第一圖の通り、虫に因て異つてゐます。甲虫の卵は卵面が滑であるけれど蛾の卵の面は粗雑です。其他Fの樣に溝條のあるものもあり何れでも一定してゐるのではない。そして産卵場所も、或は葉下に樹幹に、又は地中に、稍上に虫の種類で異つてゐます。

卵は普通雄虫の精液を受けて孵化する能力があるものですが、稀には單性生殖と稱へて、受精せないでも發生するものもムいます。又蚜虫の樣な昆虫は人間と同じ胎生でムいます。

第二圖

昆蟲の幼虫



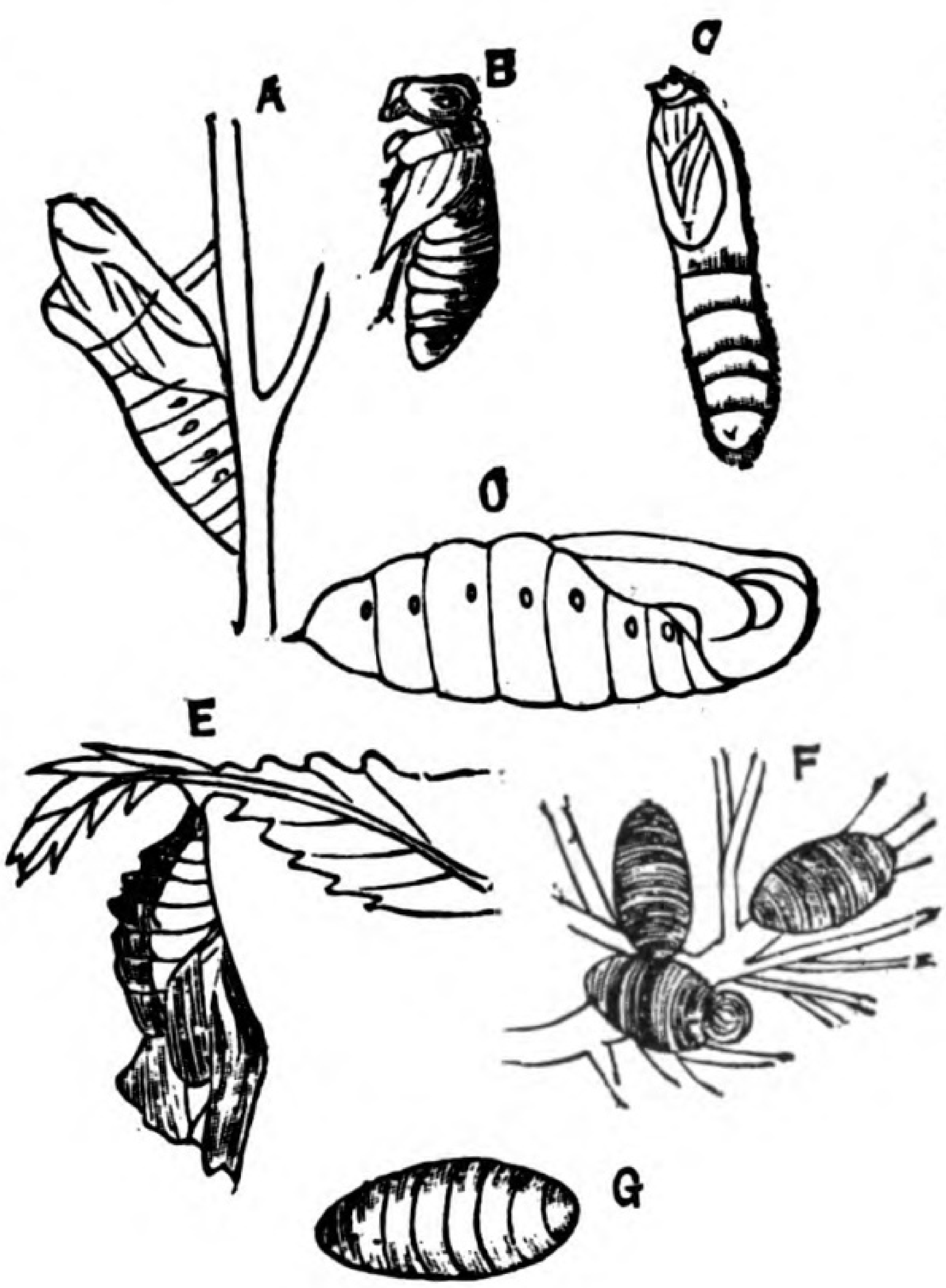
(A)とびけらの幼蟲　(B)かげらの幼蟲　(C)象鼻蟲の幼蟲　(D)蟬の幼蟲
(E)こがれむしの幼蟲　(F)瓢蟲の幼蟲　(G)蝿の幼蟲　(H)とんぼの幼蟲

卵期は普通十日前後、併し卵の有樣で越年するものもあれば十ヶ月もかゝるのがあります。兎に角、昆虫の卵の構造は、如何な卵でも、二個の皮膜に纏はれ、外皮は「キチン」質で硬化されてゐる、卵殼は取も直さずこれです。卵殼の下には薄らな膜が厶います、名けて卵黄膜と稱へ卵黄膜は卵黄球、及び脂肪球で充實されてゐます

▲幼虫

幼虫も亦た卵同樣、虫の種類で、其の大小形狀色澤の異つてゐる事丁度第二圖の樣で、要するに色澤は、日光に觸れてゐる幼虫ですと、赤、青、黄の色どり鮮に彩色せられてゐますが、日光を嫌ふて深く土の中に棲でゐるものは總て皆白色です。

第三圖　昆蟲の蛹



(A)鳳蝶の蛹 (B)甲蟲の蛹 (C)虻の蛹 (D)地蠶の蛹 (E)ひをどしてふの蛹 (F)姫蜂の蛹 (G)蠅の蛹

幼虫期は種類の異なるに連て異つてゐます。即ちイナゴの樣に數日位のものもあれば、針金虫の樣に三年を經過するもの、金龜子虫の樣に、四年を過すものも厶います。

完全變態をする昆虫の幼虫は、普通十二環節の胴部よりなり、第一より第三環節は成虫の胸に相當し、一對の脚が厶います、で矢張り胸部と申すです、殘餘の九節は腹部で、之には二双——八双の足が厶います。尾脚は尾端に位する脚の名

で。蠶兒等で御存知の通り、尾脚の背上に突起物が厶いませう。これを尾角と申します。

不完全變態の幼虫は成虫と稍々形を同じくするものと異つてゐるもの丶二種が厶います。併し假令似寄てゐるものでも翅のないのが普通です。彼の蠶といふ虫は桑を喰つて繭を作るまでが幼虫の時期です。

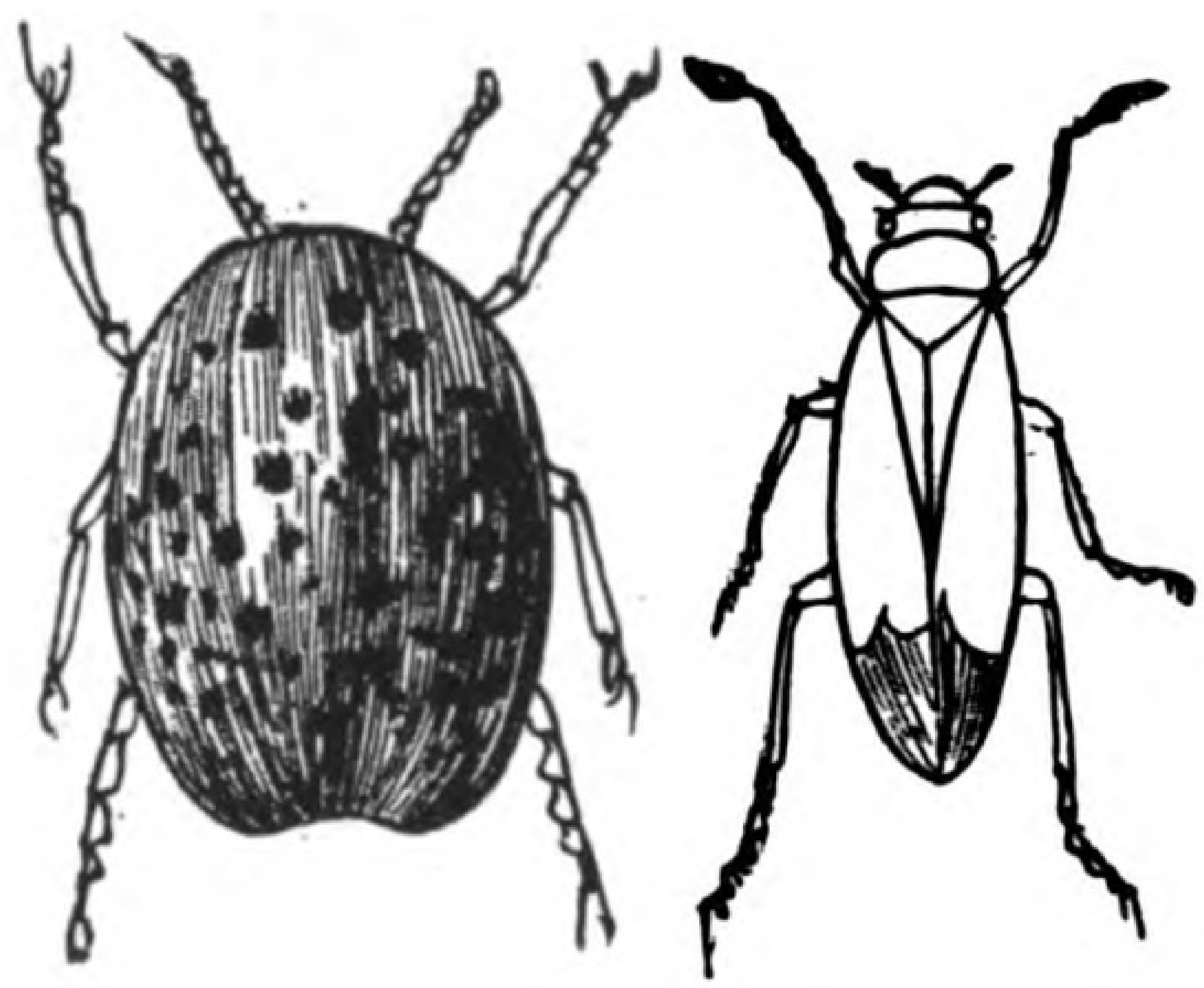
▲蛹

幼虫が漸々老熟して、食餌を(蠶ならば桑を食ふ時)止めて、間もなく形を變へます。その形の變つたものは、即ち蛹なので、換言せば蛹は幼虫の老いたものです。

蛹も鳳蝶の様に(所謂お菊虫)秋の爽な氣につ丶まれ、薫しき香が鼻をうづ「菊の一重は八重に咲き亂れる雛で、自体を糸で縛つてゐる奇妙なものもあれば鋸蜂のやうに、葉の下にぶら下つてゐるものもある、其の他、樹梢に繭を造つて、其の中で潜んでゐる蛹、樹幹に殻を造へて住でゐる蛹、樹の空洞にゐるもの、等が厶います。

其期間は大抵三日から三ヶ月、其儘越年するものでも六ケ月以内で厶います。蛹には、被蛹、裸蛹、囲蛹の三種が厶りまして其の形は、俵狀をしてゐるものもあれば紡錘の狀をしてゐるのもある、又棘狀といつて棘の形をしてゐるのもある。

第四圖　成虫



つまぐろよこばい(成蟲)(害蟲)

廿八星瓢蟲(成蟲)(益蟲)

▲成虫

成蟲は蛹から出たもので、此期に達せば如何な無脚の幼虫でも整然と、定まつた様に三双の脚と一双又は二双の翅が出來ます。

成虫は、これ以上毫も大きくならず、又變化もしない

が、專ら子孫の蕃殖を勗め、花間の露にあこがる間も、風に翅をとらるゝ時も、梢に翅を休る際にも、始終蕃殖に勗めてゐる樣子で、つまり、成虫の、此の世に生れて來た譯は、子孫蕃殖の目的なので厶います。だから蕃殖し易いものは短命で、蕃殖し難いものは長命。これぞ造化の精妙なる處でせう。

成虫の年齡の長短はかく蕃殖の如何によつて異いますが、けれども發生の回數は決して蕃殖等に關係が厶いません。つまり回數は、食用草木の如何によるもので喬木を食餌としてゐるものは、概して回數少く、之に反して草木を喰べて生てゐる昆虫は、どうしても回數が多い。即ち大抵の昆虫は一年一回、又二三回のものです。

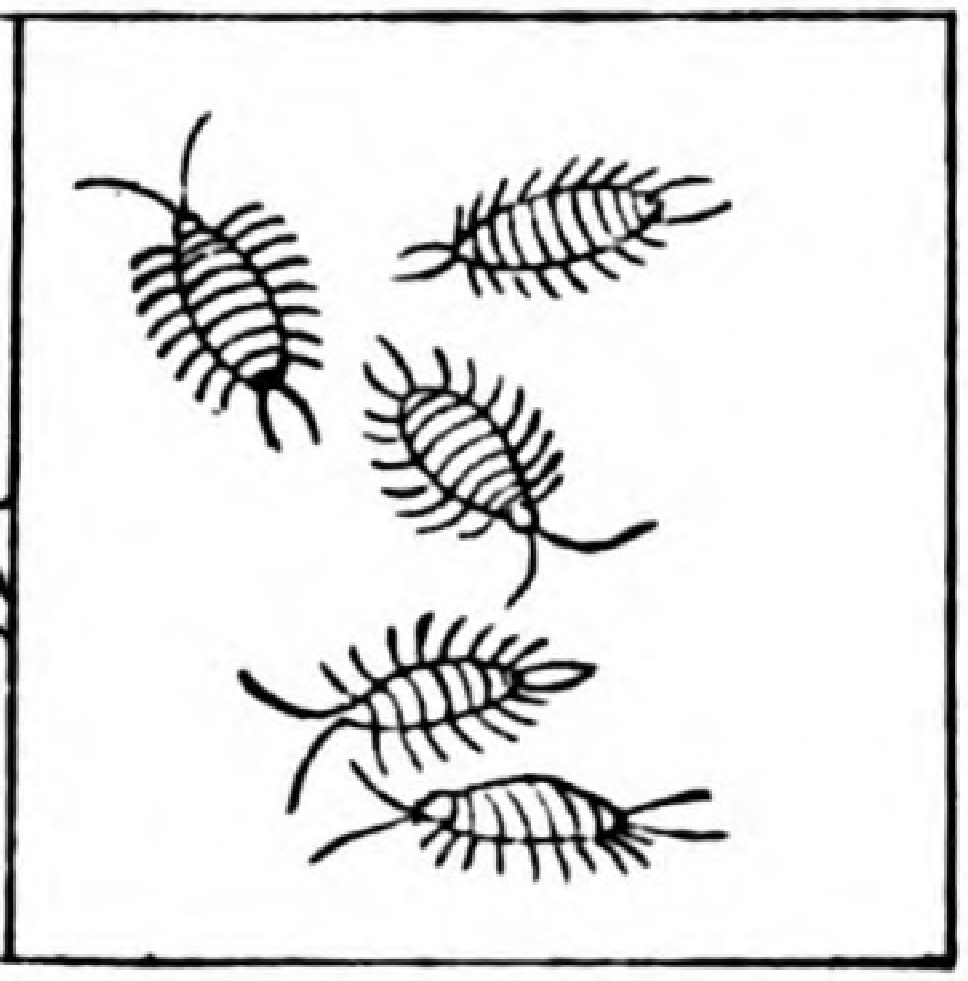
斯樣に昆虫は時節の折ふし、形態を變へ、前とは異つた形で生活致すもので厶います。

今、昆虫を飼養器に養ふて、この變化に就き研究するのは、如何に趣味のある事でせうか。拙者は、動物學の素養が少い日本國民に一般の學識を普及させる爲め、男女の何れを問はず、こんな遊をするのは、大によいことゝ考へてゐます。

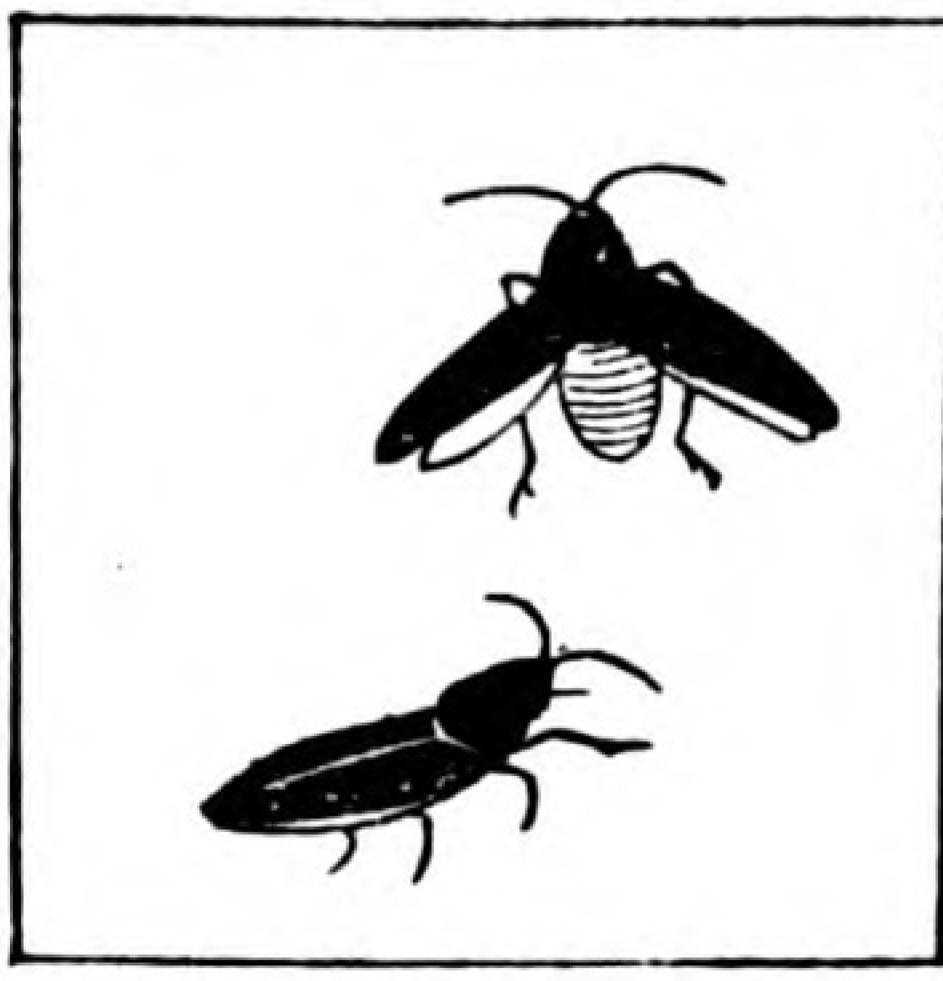
終に臨んで蟲の保護色といふ事に就て一寸書き加へて置きませう。動物界はすべて保護色の天則によつて生を全ふするものでありますが、蟲類に至つて尤もこの保護色の天則が行はれて居ります、一例を申すと綠色の叢間には綠色のきりぎりす、蝗、ばつた、かまきりなどが居ります。又赤褐色の田園山地には赭色のこほろぎ、金鐘兒が居り、土色の庭園内には土砂色の蜘蛛螻蛄などが居、壁、板戸などには壁色の壁虎が居ますそれから春の野に出て見ると、菜の花には黄金色の蝶が居て、大根花には同色の白蝶が居るなど尤も著るしい例でありますこうして蟲類は鳥の餌食となるのを避けて居ります。即ち自分の住む所の自然界の色と同樣の色を帶びて自分の居所を紛らして仕舞ふのであります。

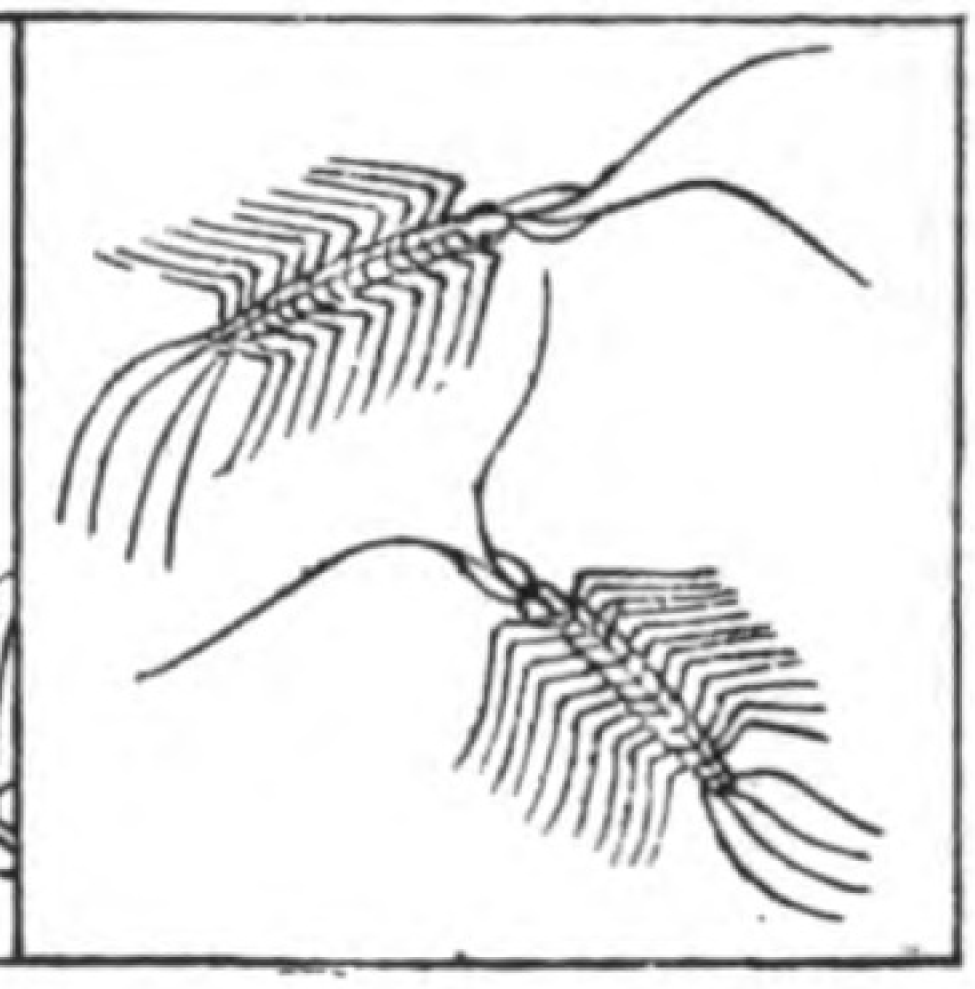
（完）

昆虫十二種

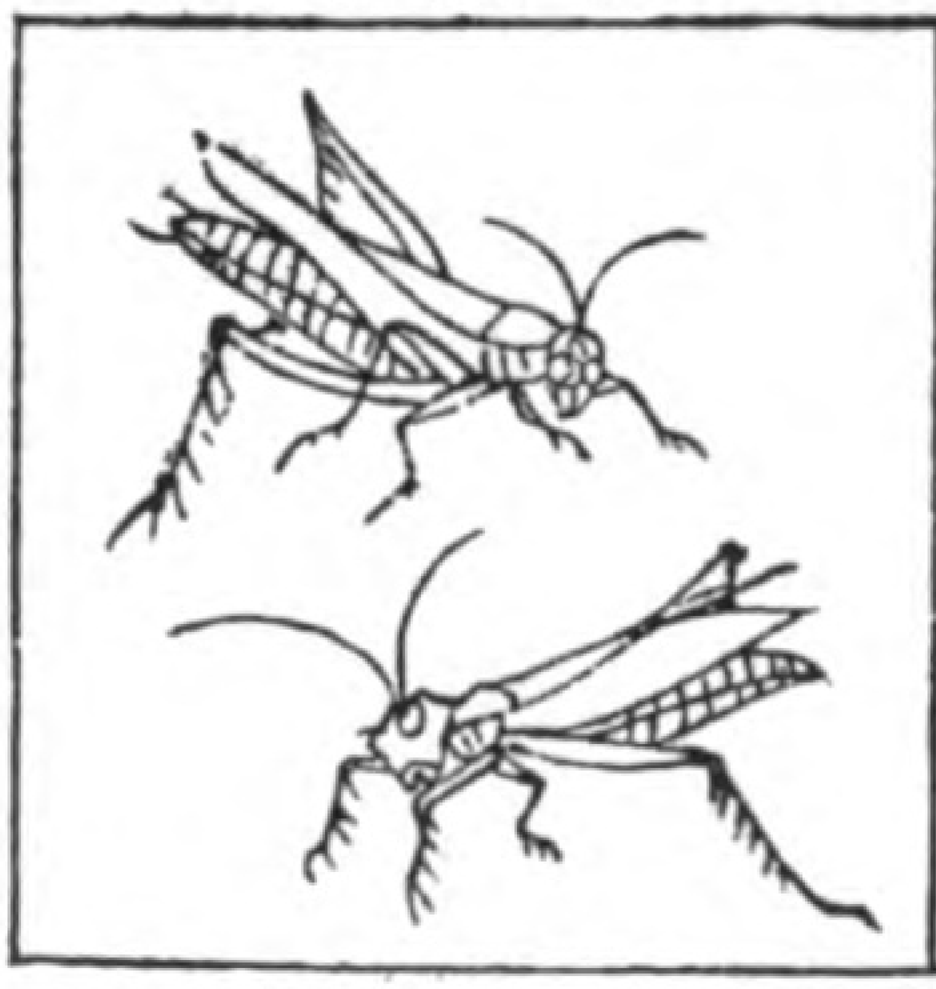

ワラジムシ


マルハチ


コメツキムシ


ゲジ


カマキリ


イナゴ


ハタオリ


ケラ


クマバチ


キリギリス


ヒトリムシ


カミキリ

通俗化學

素人紺屋

好染翁

俗に「紺屋の明後日」とまで申す位で染物ほど出來上りの不確なものはありますまい、其れも先づ耐へるとした處で、チヨットした色揚げものとか又た染め直しなどを、ツヒ立派な店へは面倒だと思召して近處の紺屋へ遣はされませう、處が小さい店ですと染瓶が十分に揃つてないから、中々此方から申した色には染めて呉れません、之れなればと御定めになつてドンナに立派に出來上るかしらと心待ちに待つて居らつしやる、十度十五度も催促をした上句漸く出來上つてヤレ嬉しやと開て見ると、注文したのとは取つても付かぬ色に上つて居る、オヤ〳〵と思つて紺屋へ聞かせに遣りますと、ヤレ天氣が惡かつたからとか、彼の色の方が御爲めによいとか、イヤ彼れにしないと前の模様が拔けぬとか申して、結局若し御意に召さずば染め直しませうとは申すもの丶、染め直しに遣つて又た永く掛つてはといふ弱味があるので、大抵は仕様ことなしに泣寝入りとなります。

其故新規に反物を召して染に御遣はしになるときは格別ですが、細かいもの丶色揚げや木綿もの丶染め直しなどは、一ト通り染め法を呑み込んで置けば、一寸御慰みになり又た實用にもなりまして其上自分の好みの色に出來上りますゆゑ大層重寶です、尤も當節では早染の粉も御座りますが、矢張ホンノ素人だましのもので、迚も甘く參るものではない、又西洋の染粉を用ひる染方もありますが、之れは重に毛織物類には宜しいけれど、絹、木綿などにはドーしても和染の方が宜しう御座ります、其れに和染の方で御座りますと餘り毒になる染料を用ひませんゆゑ、口へ這入ましても皮膚に附きましても害にはならぬから從て過ちも御座りません。

ソコデ眞正に和染をするのには大小に拘はらず藍瓶が是非一箇入用です、紺屋の上手下手は全く此藍瓶の

作り法にあります、紺屋に永年奉公致すのも唯だ此藍瓶の作り法を覺える斗りだと申す程で、何れの紺屋でも之れは秘傳としてゐます、併し何を染めるのにも此藍瓶が一番基になるのですから、世間の紺屋へは極内々で其製法を御知らせ申しませう。

染汁の原料

▲鐵漿水　これは俗に「かね」又た「おはぐろ」と申すものです、釘の折れでも鍋の片破れでも何んでも鐵器のものを水へ入れて置きます、尤も此水は堀井のものが一番宜しい、之れは何にを染めるにも入用ですから平常澤山貯へて置いて、入用のときは上汁を取りて遣ひ、其後へは又た水を足して置く樣に致します。

▲酢　之れは入用のときに成るたけ上等のものを求めます、酢は食物にするよりも染料に用ふ方が遙かに夥いと申します、酢は染の褪色を防ぐのみならず又地質によりて乘の惡きをよくするものです。

▲豆汁　之れは紺屋の符帳で「ご」と申します、太豆を水に浸して置いて、摺り砕いて漉して用ひます、これは地合を締めて染色を止めるものです。

▲石灰汁　青白色の極上石灰を水に攪ませまして沈澱した處を上水だけ用ひます、石灰の分量は適宜でよろしい。灰汁も又酢と同樣の効能あるものです。

▲苅安　之れは薄の樣な草です、藥種店で賣ります釜に入て能く煎して用ひます。

▲夜叉五倍子　俗に「やしや」と申します、山榛木の實です、丸のまゝよく煎じて冷えた處を用ひます。

▲桃皮　之れは楊梅の皮です、細末にして煎じて貯へて置きます。

▲茅　染草としては尤も廣く用ひます。

▲梔　之れも染料を賣る店に御坐ります。

▲棗　漢藥に用ひるのです、剉みて煎じて用ふ。

▲鬱金　之れも藥種店に御坐ります。

▲唐藍　一晝日も水に浸し置いて用ひます。

▲紅　俗に細工紅と申すものでよろしい。

▲藍瓶　之れは前にも申す通りで染物には尤も大切

なもの、又次に申しますのは普通紺屋の製する分量の十分一にして御坐りますが猶ほ之に準して多少とも加減されて宜しい。

▲瓶　は水三荷程入る位の能く藥の掛つて居る無疵のものを、都合よい處へ埋めて置きます、扨て其中へ

○藍玉　半俵　よく細かに粉にして
○重あく　二升五合
○石灰　一升
○水　一斗づゝ四日に入れる、

手桶などで水一斗の分量を定めて置き毎日一斗づゝ入れます、ソコデ五日目から

○薄藍　五六升　三日間毎日に入れる、
之れは藍を水で薄く解て入れます、
○麸　一升　煮て漉た汁を入れる、

之れですと大變に厖掛の樣ですが、始め一度手を掛て置けば、隨分永く使へましてドノ位重寶か知れません。

藍瓶が出來上れば、藍掻棒で度々掻廻はします、之れは手數を掛ける程よいものになります。

是れで大概揃ひました、餘は刷毛と籭の二三十本もあればよろしい、籭は布の巾によりて違ひますから、竹で大中二た通りも作つて置きます。又た刷毛は引染と申して染料を布に引いて（即ち引染）染める事もあるから、成るべく大きいのを二三本用意します。又た染草は何に依らず貯へて置いても決して惡くなりませんから、染るときに急にないなどゝいふ事のない樣にして置きます。

各色染め方

道具が揃ひましたら次に申す樣な工合に致せば何んでも御望みの色が出來ます、尤も始めは小切れか何にかで試めして見てから、彌々御染めになる方が宜しう御坐ります。

（一）素鼠　灰墨　少々　之は酢で溶めて次に水で解て
　　明礬水　豆汁
（二）藍氣鼠　灰墨　少々　藍蠟　少々
　　明礬水　豆汁
（三）湊鼠　藍蠟　蘇枋　墨　極少
　　からし水　豆汁

(四)藍鼠
唐藍　墨　極少
石灰水　豆汁

(五)唐土鼠
之れは前のへ　桃皮を薄くして一度引く

(六)茶氣鼠
蘇枋　唐藍
桃皮　からし水へ入れて

(七)藤ねずみ
蘇枋　水等分にして　少々　唐藍　少々
鐵漿　極少々　桃皮　石灰水へ入る

(八)葡萄ねずみ
蘇枋　で六遍染めて、次に　桃皮で四遍
鐵漿　を水等分にして

(九)しめねずみ
刈安
鐵漿

(一〇)濃ねずみ
墨　極少
石灰水

(一一)茶ねずみ
刈安
桃皮

(一二)染汁ねずみ
夜叉　水等分にして
鐵漿　水等分にして

(一三)鳩羽ねずみ
夜叉の中へ　蘇枋を少々入れて
鐵漿　水を割らずに

(一四)柳ねずみ
唐藍で二遍染めて
鐵漿水けし

(一五)薩摩ねずみ
茅　一遍染めて次に
鐵漿水　と酢　で染める

(一六)こげ茶
桃皮　で三遍染めて次に
鐵漿七分に水三分の汁で染める

(一七)媚茶
桃皮　で二遍染めて次に
鐵漿水等分にして染める

(一八)丁子茶
桃皮　で三遍染めて次に
蘇で一遍染める

(一九)白茶
茅　で一遍めて次に蘇を引く

(二〇)御召茶
薄藍　で下染して次に茅の中へ夜叉を極少々
入れて水等分にしたものと鐵漿水等分で染る

(二一)鶸茶
茅　を濃く煎して裏表へ二遍づゝ引き染める

(二二)薩摩御納戸
極薄藍で下染めして次に
茅、鐵漿、酢で染める

(二三)御召御納戸
下染め濃淺黄、次に
茅の中の夜叉極少々　鐵漿水等分酢で染める

(二四)鐵御納戸
下染め空色、次に　夜叉(水等分にして)
鐵漿(水割らず)酢で染める

(二五)藍御納戸
中染め中色、次に
夜叉(水等分にして)鐵漿水等分酢で染める

(二六)錆鐵御納戸
下染め濃花色　次に御召御納戸と
同じもので染める

(二七)鳶色
蘇枋　裏表へ四遍引いて次に
明ばん、鐵漿、夜叉、で染める

(二八)紅鳶
蘇枋、水等分にして裏表三遍づゝ引く次に
明ばん水で

(二九)黒鳶
鐵漿(水を入れずに)夜叉　蘇枋で裏表三遍
づゝ引く次に
明ばんと水を七分三分にして染める

(三〇)紫　鳶
下染め空色にして次に　蘇枋を裏表三遍づゝ
引き次に　明ばん水と酢で染める

(三一)萠黄
茅　を裏表二遍次に
藍で染める

(三二)鶸萠黄
茅、濃く煎じて裏表へ二遍づゝ次に
あいけしで染める

(三三)花萠黄
茅、裏表三遍づゝ次に
濃藍けしで染める

(三四)栗梅
蘇枋、濃茶、からし水、石灰汁、豆汁、

(三五)草柳
唐藍、すみ、明ばん、蘇枋、石灰汁

(三六)栗皮
石灰汁、からし水、鐵漿七分水三分

(三七)樺色
鬱金粉、紅、酢、濃淡は加減すべし

(三八)鬱金色
うこんの粉、酢

(三九)浦和柳
夜叉の中へ藍極少々、鐵漿水

(四〇)革色　薄藍色で下染めして次にしぶき(染草)の中へ夜叉を極少々と酢と鐵漿

(四一)御召鐵　藍色で下染めして次に、夜叉としぶきを等分に鐵漿(水等分にして)染める

(四二)紺　豆汁の中へ墨を入れて染め次に礬を引き次に藍染め

(四三)花色　豆汁の中へ墨極少々入れて染め次に藍染め

以上四十三通りは誰れにでも手輕に染められます、それで前に申した何遍ぞめとあるのは一遍染めては干し上げて又た染める事、引くと申すのは刷毛で引き染めにすることです。

右の外にまだいろ〱の染め方や小紋の置き方などありますこが、又機を見て申上げましやう。

數理合點　臺所算術

竹貫直人

前號に掲げてあつた人間一生の食糧と云ふ數學的記事、誠に面白く拜見しました。仰の通り、數學ほど世の中の人から無味乾燥あつかひにされる學問はありますまい！面もなか〱に其必要はあるのに、斯く疎んぜらるゝと云ふのは、畢竟、數學の問題が、充分に教へて居ないからでありませう、料理法が其當を得て居ないからでありませう。と、私はマア思ひますので、次に二つ三つ、日常ありふれたる事物に、數理の庖丁を加へて見ました。併し素より怪しい腕前、到底お座敷へ出されるやうな品の出來やう筈は無いので御座います。

▲米櫃の容積

此米櫃は何斗入りだらう？との問題が胸に浮んだ時諸孃は如何これをお解きなさいますか、必らずや確とした答が得たいと思はれるでせう。此時、其方法を若し知らなかつたら如何なさいます？乾度内心窃に自分の數學的智識の無いことをお歎きなさるでせう。正乎に斯樣な容易い問題に對しては、左樣なことも御座いますまいが、

併し順序上、極く卑近な、斯樣いふ例から説明して參ります。此米櫃の問題を解くには、先づ其大さから

研究して行かなければなりません、大さを測るには日本では曲尺を用ひます。此曲尺で其米櫃を測つて見ました處、縦幅が二尺五寸、横幅が一尺八寸、深さが二尺あつたとします。尤も此寸法は、皆な内圍で測つたので、外圍で測つたのではありませんから、實際お米が入る場所、即ち米櫃の木の厚さを除けた内部の大さであります。

▲計算の方法

其處で之を計算するのに、御承知の通り、縦と横とを乘けて、25×18として、底の面積を450と出す。此數は何の數であるかと云ふに、二つの數を相乘したものですから平方です。即ち四百五十平方寸、又は四平方尺五と云ふ數、之に深さの二尺を乘ければ、初めて立方の數となつて、此米櫃の容積となるので御座います

450×20=9000平方寸

さて、之からは一寸心得がなければ出來ないのです。容積は九千立方寸とは出たもの丶、之を如何して升數に直して可いか分りますまい。其處で誰しも一寸困るのです、而も一升桝の容積は六萬四千八百二十七立方分であると知つて居さへすれば何でもないのに……即ち求め得た數を64827で除れば升數になるのであります。此處では九千立方寸でしたから、之を分の立方に直して、九百萬として、答を出しますと、

9000000÷64827=138.8餘

一石三斗八升と八合餘りとなつて、此問題は解き得られたのであります。

▲桝の寸法

一体、この、桝の寸法は何程であるかと云ふに、一升桝の大さは、縁は四寸九分づ丶で、深さは二寸七分なので御座います。ですから其容積は、四十九に四十九を乘けて、それに二十七を乘けた答の64827となるので、數の名は立方分、位取は能く氣を注けなければなりません。

序ですから、種々の桝の寸法を御覽に入れます。

▲一合桝——縁は二寸一分、深さ一寸四分五厘。

▲五合枡――縁は三寸八分八厘、深さ二寸一分五厘。
▲一升枡――縁は四寸九分、深さ二寸七分。
▲一斗枡――縁は一尺五分、深さ五寸九分一厘。
尤も一斗枡には斜に一本斗梁がありますから、其大さも其の少し大き目になつて居ります。何れにしても、數學上の規定は一升枡が基となるのですから、左樣御承知置きを願ひたいのです。

▲秤と枡

お米は、日本では枡で賣買いたしますが、西洋では目方で遣つて居ります。私の考へますのに、之は如何も目方の方が宜しいやうです。何故と申すに、水や油やお酒などは、量り法に上手下手はありませんが、お米などは量りやうによつては、非常の違ひがありますからで、之は諸嬢も乾度お氣付きになつて居ること丶思ひます。それから八百屋物では、豆やお芋、之を枡賣に致して居るやうでは、日本も未だ文明とは云はれません。殊にお可笑きは里芋の枡目、山盛りに積む位なら、初めから量るにも及ばんではありませんか、抱腹絶倒の至りです。尤も薩摩芋だけは、普通の枡には一寸入らんものですから、目方で遣つて居るやうですが……之が正當でせう。其處へいつたら支那は開けたもので、北京の都は知らず、遼東半島では、鯛も平目も太刀魚も、左樣なことには一切構はず、魚は一貫目何程と云つて商賣して居ります、社會主義の先生方が喜びさうなことです。

▲手桶と水

話が飛んだ枝葉に移りましたが、今度は手桶と水のことに就て、少しばかり申上げませう。內側で測つた寸法で、徑八寸、深さ一尺の手桶は、何升の水が入るかと云ふと、此計算の仕法は、徑の寸の八を自乘してそれに七・八五四を乘けると、圓の面積となりますから、それに深さの一尺を乘ければ、其手桶の容積となりますので、

8×8=64平方寸

64×7.854=50.2656平方寸

之に深さの一尺即ち十寸を乘けると、五百〇二立方

寸、六五六此數を一升桝の容積六十四立方寸八二七で除れば水の入り量は分るのであるが、併し一々64827と云ふやうな面倒な數で除つて居ると、得て間違ひを生じ易い。其處で便法として、斯樣いふことを爲る。それはで、64827 除る代りに .155 と云ふ數を乘けるので、即ち、

502.656×.155=77.91168

七升七合九勺餘りと分るので御座います。答は合の數で出ます。

此便法の間違ひ易い點は、位の取りやうで、隨分飛んだ失策を仕出來すことがありますから、氣を注けなければなりません。猶ほ詳しく云へば、容積は何時も立方寸の數であつて、それに.155を乘ければ、合の數が出るので御座います。

▲水、酒、油

それから水一升の目方は何匁あるかと云ふと、四百八十一匁ださうで、左樣しますと、手桶に充滿に入れた水は、手桶ともでは先づ四貫目程になる勘定です。併し理窟で云ふやうに、充滿は到底入りませんから、實際は之より輕いこと勿論です。

水一升の重さが四百八十一匁と分れば、一貫目の水は何升なりやの問題も直に解くことが出來るでせう。答二升と八勺ほど。

また、酒類一升の重さは四百四十匁ほど、石油類一升の目方は四百五十匁ほどです。

斯う材料さへ揃つて居りましたなら、石油罐(二斗入)一個の重さも、四斗樽のお酒の目方も、大槪の見當は付きませう。

▲種々の器物

猶ほ少し容積のことに就て記しますが、四角の重箱や丸い蓋物の計算は、何も左樣六ケ敷いこともありませんが、お釜や、水瓶のやうな形は、一寸面倒になります。

先づ釜の形を數學的に分解して見ますと、それは、圓筒と球缺とを取合せたものであります、其處で圓筒形の容積を求める例は、前に申上げた手桶の計算と同じ

で御座いますから、爰では省きまして、球缺の容積を勘定する方法をお話いたします。

球缺と申す形は、つまり球を切り缺いたものですから、其切り口の半徑と、球缺の高とを使つて、次の如くしますので、

{(半徑×半徑×3)+(高×高)}×高×0.524

斯樣して出した容積に、圓筒の容積を加へれば、即ち其お釜の容積になるので御座いますが、併し實際はソウ／＼充滿に入れられる譯でもありませんから、單に何升焚きであるかを見る位なら、圓筒だけの容積で可いのです。

それから水瓶の容積を出すには、之も精密に計算しやうとすると、なか／＼面倒で數學的に分解すれば、圓筒と頭を截つた球缺とですから、其計算の方法も、前のお釜の例からお考へになると直にお分りになるでせうと思ひますから、殊更に爰には申上げません。

▲澤庵石と障子紙

石と紙とを一所にしてお話するのは、ちとお可笑う御座いますが、漬物の押石に普通用ふる處の石は、大概は相州石と云つて、色の青い石で、相州石の重さは一寸四方のものでもつて、十二匁としてありますから、一尺四方のものでは、十二貫目の重さがある譯で御座います。

左樣しますと、爰に楕圓體をして居る相州石の押石があつたとして、其長い方の徑が一尺二寸で、短い方の徑が八寸であつたなら、其石の重さは、何貫目ありませうか？

之を計算しますには、先づ楕圓體の容積の計算法を知らなければなりますまい。其方法は次の如くしますので、

短半徑×短半徑×長半徑×4.19

此式が規則でありますから、此問題では、

8×8×12×4.19＝3217.92立方寸

となります。其處で之に一立方寸の重さ十二匁を乘ければ、即ち三十八貫六百十五匁ほど出ます。斯樣な押石は到底一人で持上げることは出來ません。

それから障子の紙の寸法は、縦九寸五分、横一尺三寸五分と云ふ大さです。其處で普通の障子を一枚張るには、障子紙が何枚要るでせうかの問題も、屢々起ることゝ思ひます。此問題を解するには、何うしても障子の大さを知ることが必要ですから、爰に其寸法を記しますが、先づ大概の障子は、高さ五尺六寸、幅三尺と定つて居りますので、尤も之は紙の張る場所だけの寸法でありますから、これで直樣計算が出來ませう。

併し詳しく考へますと、障子の棧の上は紙が重なる譯になりますから、少々の餘分を見ねばなりますまい。

▲炭俵の杉積

之は昔からよくある問題ですが、一寸面白いと思ひますから、お話を致します。

杉積みと申すのは、三角形に積むので、一番下に八俵の炭俵を置いたら、其上には七俵、其上には六俵と云ふやうに、一俵づゝ少なくして行つて、一番上には一俵を置くのです。俵數が少なければ、如何數へても譯はありませんが、多くなると一寸面倒で、勢ひ數へ違ひなどが起りませう。

其處で、之を計算する方法は、如何すれば宜しいか、問題を設けて説明いたしませう。

一番下に十五俵置いて、杉積にした炭俵は、悉皆で幾俵でせうか。そして炭屋が此代金として六十圓を請求しましたが一俵何程の炭でせうか。

杉積の計算の方法は、何時でも下の數に一を加へて、それと下の數とを乘け合して、其答を半分にすれば可いのです。ですから、爰では

$15 \times 16 = 240$　　$240 \div 2 = 120$

百二十俵となります。此代價が六十圓であれば、一俵は五十錢。之は普通の除算ですから説明する迄もありますまい。

▲時局の問題

時局の問題と申しましたとて、何も八釜しい議論ではない、私のは、時局に鑑みて諸嬢に考へて頂きたい算術の問題で、此問題は決して答を求める方法を尋ねる

ばかりでなく、別の意味を含んで居るので御座います。一等白米一斗の價は一圓八十八錢五厘で、五等白米は一圓六十一錢五厘ですが、毎月八斗づゝを喰べる家で、一等米を止めて五等米を喰べれば、月に何程の儉約になりますか。斯樣な算術の方法は、極く容易いでせう。たゞ願ひたいのは答を出して見た上で、其上のお考あらんことをです！

男女の壽命

男女の出產比例は本邦に於ては女百人に對し男百五人強に當つて居ますが實際生き殘つて居る男の數は多少減少して女百人に對し百一人強になつて居る、之れは旣に男の短命なる事を證明して居るのであるけれども、尙ほ老齡者に就て之れを檢すれば近年になつて老齡者の數は一般に增加し明治二十一年には八十歲乃至九十歲が百人中〇、五二で、九十歲乃至百歲が〇、〇二であつたが三十一年には八十歲乃至九十歲が〇・五一に增加し、九十歲乃至百歲が〇、〇四に增した、然らば素と男が女より多いのであるから老齡者中にも男の方が女よりも多くなければならぬ譯だが實際は然らず、五十歲乃至六十歲までは槪ね男の方が女より多いが夫れ以上になると突然女の方が男より多くなる、三十一年だけの數を擧げて見れば五十歲乃至六十歲は百人中男四人三五、女四人一九であるが、六十歲乃至七十歲では忽ち顚倒して男二人四五、女二人六五となり、七十歲以上八十歲では男一人一四、女一人四三、八十歲以上九十歲では〇、二〇、女〇、三一、九十歲以上百歲では男〇、〇一女〇、〇三で女は男の三倍多數の長壽者がある譯です、本來男子よりは少數の女子にして長壽者は男子より三倍多いといふに至つては女子は正しく男子よりも長壽の傾向に在るものである、是れは何故であるか、要するに男子は生存競爭の激烈なる結果其エネルギーを消耗せしむる事多く從つて夭折するに至るものである。

裁縫手引

東京裁縫女學校教員　井上はつ

花なめでし春ははやくも過ぎて、いつしか鑠金の夏とはなりぬ、常ならば暑を海濱に避け勞を山間に慰めんものなど時事に心を痛むるもさることなから今や我忠勇なる軍人軍屬が寒暑を冒して身を國事にさゝげ屍を山野にさらして顧みざる時に當り國民たるもの徒に暑を避け勞を慰ふべきにあらず、さはいへ國家の盛衰は國民の意氣の消長に關し國民の意氣の消長は其が心身の健否に關すとかやましてて四面環海の島國に生れたるもの獨り男子と云はず海國男子の母たるべきもの常に海を愛し海に親しみ海事の忽にすべからざるを知ると共に、時に海濱に遊びて心身を慰め浩然の氣を養ふ亦報國の一助にあらずとせんや、乃ち海水浴衣の仕立方を示して聊か意を寓すとしかいふ。

▲婦人海水浴衣の仕立方

海水浴衣を仕立つるに當りては先づ著用者の身體に就き各部分即ち身丈、股上、胸廻、腰廻、首廻り等の寸法を度り夫れに相當のゆるみ及び縫代を附けて裁つべし是より普通大人に相當する寸法に依り積り方裁ち方縫ひ方等に付き順次之を記さんとす。

扨之に要する布帛の地質は通例白キヤラコを用ゆ尙上等にすれば白メリンスを用ひ下りては白天笠金巾等を用ゆ、其外木綿縮にて製する事もあれと、縮の性として濕る時は收縮するを以てよろしからす。

▲積り方　今假りに袖丈一尺　身丈二尺八寸　ヨーク丈九寸五分　裳(Skirt)の丈二尺　長さ五尺と定め之を二尺巾の布にて製するとして、其用布を積る時は先づ袖丈一尺の二倍即ち二尺と身丈二尺八寸の二倍即ち五尺六寸と尙之れにヨークの丈九寸五分と裳の丈五尺とを加ふれば一丈三尺五寸五分となる、是即ち用布なり之を算式にて示せば次の如し。

袖	身	用布
袖丈	身丈	袖　身　裳
10.×2=20.	28.×2=56.	20.+56.+50.=135.5

▲裁ち方　先づ裁合せの大體を示せば一尺三寸巾二尺を切り取り之を左右の袖とす、次に一尺六寸巾二尺八寸を一枚切り取り之を前身頃とす、次に九寸巾丈け九寸五分を取りてヨーク(Yoke)とす殘り二尺巾五尺の布を裳とし殘りの切にて四寸巾二尺取り帶(Belt)とす、尙殘り切にて見返し其他の附屬品を裁つ可し。

▲各部分裁ち方

(1)袖(Sleeve)の裁ち方　一尺三寸巾二尺の布の丈を二ツに切り、二枚重ねたるまゝ巾を二つに折り輪を向ふに裁目を手前に下に置き、左の端にて自分の向ふ即ち輪の方より裁目の方へ四寸二分と標し、次に左方より右方へ巾二分入りたる處にて袖口四寸として、四寸二分の標へ斜に標をなし、次に右の手前の端より左へ二寸と標し、袖附六寸五分の中間より二寸の標に向ひて外部へ圓形に標を附け、其標より袖口四寸の處迄斜に標を附け、之を裁ち切る事第一圖の如し

(2)前身頃(Forepart)裁ち方　一尺六寸巾二尺八寸の布を巾二つに切り二枚重ねて第二圖の如く下に置き先づ左即ち衿肩の端より右へ一尺の處に胴の最も細き處の標を點線にてなし、次に同じ左方

より二尺の處に袴の止まりの點線を附し、左方手前より向ふへ見返し巾一寸と標し二尺の點線の處迄眞直に假りに線を引き、二尺の點線の角より左へ五寸上りたる處より二尺の標の處手前角へヅボン下等の如く内方へ圓形に標をなして、之を切り其止りより見返しの縫代を二三分殘して圖の如く形を附けて之を切り、次に左方一寸の標の處にて左より右、アゴぐり二寸と標し、同處より向ふへ衿肩二寸二分と標し衿肩の標よりアゴの標迄圖の如く内方へ圓形に線を引き次に衿肩二寸二分の處より向ふへ肩巾三寸五分と標し、其處にて左より右へ肩下り五分と標し、巾三寸五分の間斜に肩巾の標を附け次に左より右へ丈七寸の處にて向ふの端に袖附の標を附け次に胸巾を五寸と標し肩巾の止りより胸巾の標を通して袖付止迄圖の如く線を引き、次に肩より一尺下りたる處にて向ふより手前へ一寸と標を附け、胯上の標に向ひて圖の如く丸く脇の標を付け次に右方向ふ角より手前へ五分と標し、其より胯上の止りの標迄斜に線を引き、右方裾口の巾を向ふより手前へ六寸五分と標し夫れより手前胯上の標に向ひて斜に線を引き標通りに裁ち切る可し。

注意　點線は假りに附したるもの故切るべからず、以下之れに倣ふ

(3)後身頃 (Backpart) 裁ち方　一尺六寸巾二尺八寸の布を巾二つ切り落とし圖の如く、下に置き前身の通り左方より右方へ一尺の處及び二尺の處に標を附け、次に左の方にて向ふより手前へ七寸と標し同じ向ふ角より右へ袖附七寸と標し、其標の處にて手前の方へ巾六寸五分と標し一尺の標の處にて向ふより手前へ巾六寸と標し胯の止りの處は巾一つぱいにして、此四點を標準に圖の如く脊の標をなし、次に脊の標の處にて左より右へ丈三分と標し、同處より向ふへ衿肩二寸と標し、其間を圖の如く少しく内へ丸く標を附け、次に肩巾を三寸五分肩下りを左より右へ一寸と標し、三寸五分の間斜に線を引き、脊巾を四寸五分標し肩巾の止りより袖附の止りへ圖の如く線を引き、次に左より一尺の標の處にて向ふより手前へ一寸と標し、前身頃の如く脇の形を附け次に右方にて向ふより手前へ五分と標し其標より左へ八寸の處即ち胯の止りの向ふ角に向ひて、斜に標を附け次に裾口巾を向ふより手前へ七寸と標し、手前の方胯の止りに向ひて斜に標を附け之れにて標を附け了りたれば其標通り裁ち切る可し。

(4)ヨーク裁ち方　巾九寸丈九寸五分の布を巾二つ折りとなし、巾の輪を手前にして下に置き、手前の方左より右へ二寸五分と標し、左の方向ふより手前へ巾二分の處に縫代の標をなし、其標より標へ斜に點線を引き其間にてヨークの方へ五六分の處に標をなし、其標を通して圖の如く丸く標を附けて之を裁ち切る可し。

(5)裳の裁ち方　巾二尺長さ五尺の布の長さを二つ折りとなして、前後と前裳丈を眞中にて上より三寸五分切り明くるなり。

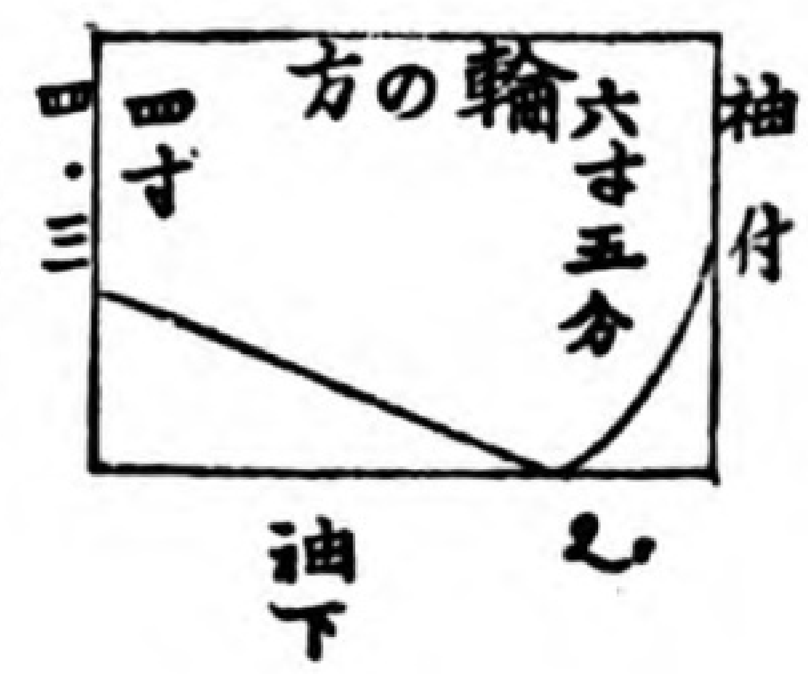
(6)帶 (Belt) の裁方　巾四寸五分丈け二尺の切を切り巾を二折となして二つボタンとなすも又は兩端を劍形に裁ち巾一寸五六分の仕立上となし一つボタンとなすも可なり、其他都合に依り帶丈を五尺となして着用の際に引き締め結ぶもよろし。

(7)見返し (Fly) 裁方　巾五分丈け一尺三寸を斜めの切にて一枚裁ちヨークをつくる時の見返とす、次に巾一寸丈け二寸五分の切二枚を取りて帶を止むるときの紐とす。

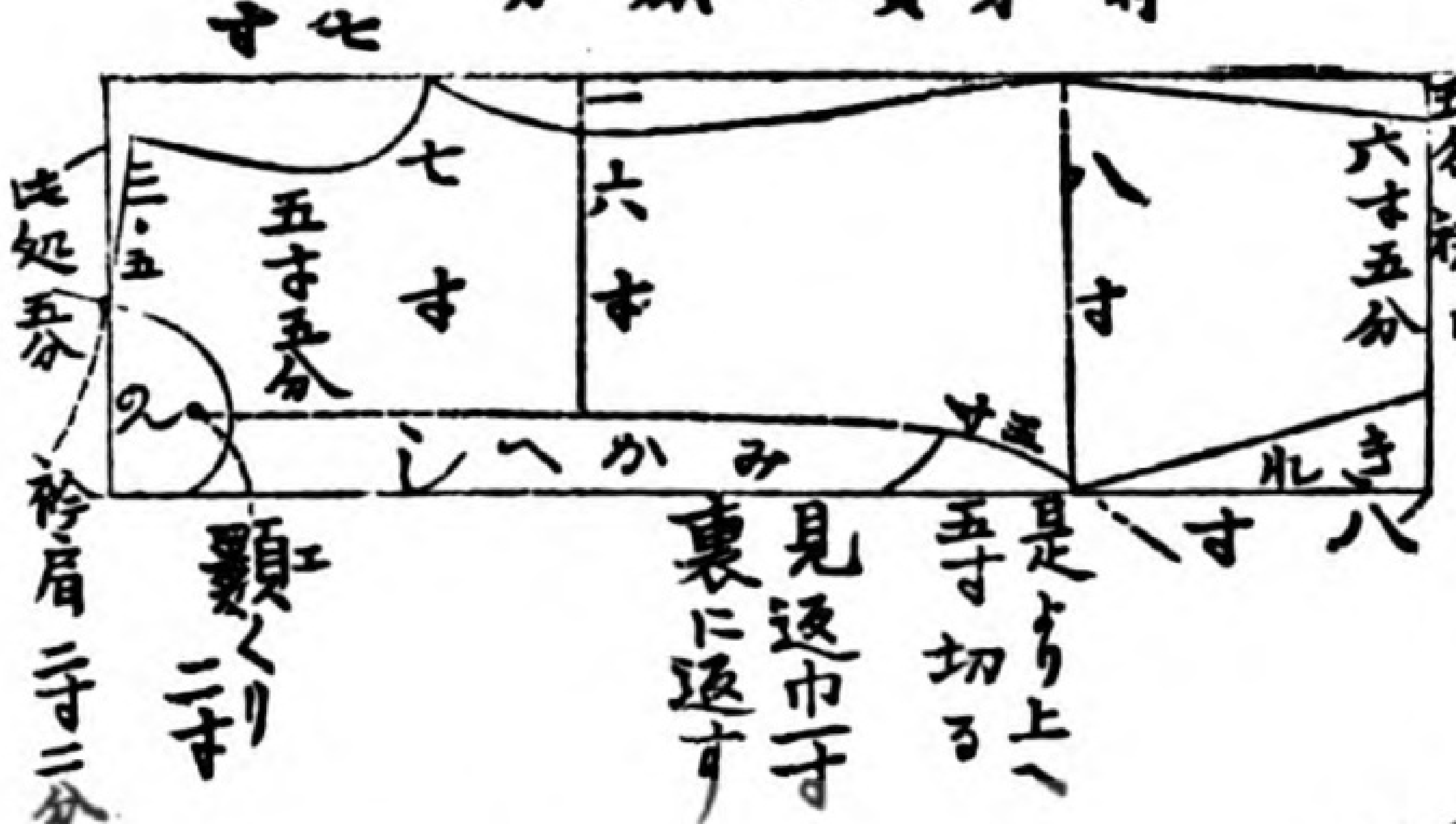
▲縫方順序

第一に袖口を縫ひ二分だけ表へ折り返し、其折り返へしたる上に毛繻を附けて兩端に返し縫ひをなし、次に繻の巾だけ間を置きて更に一

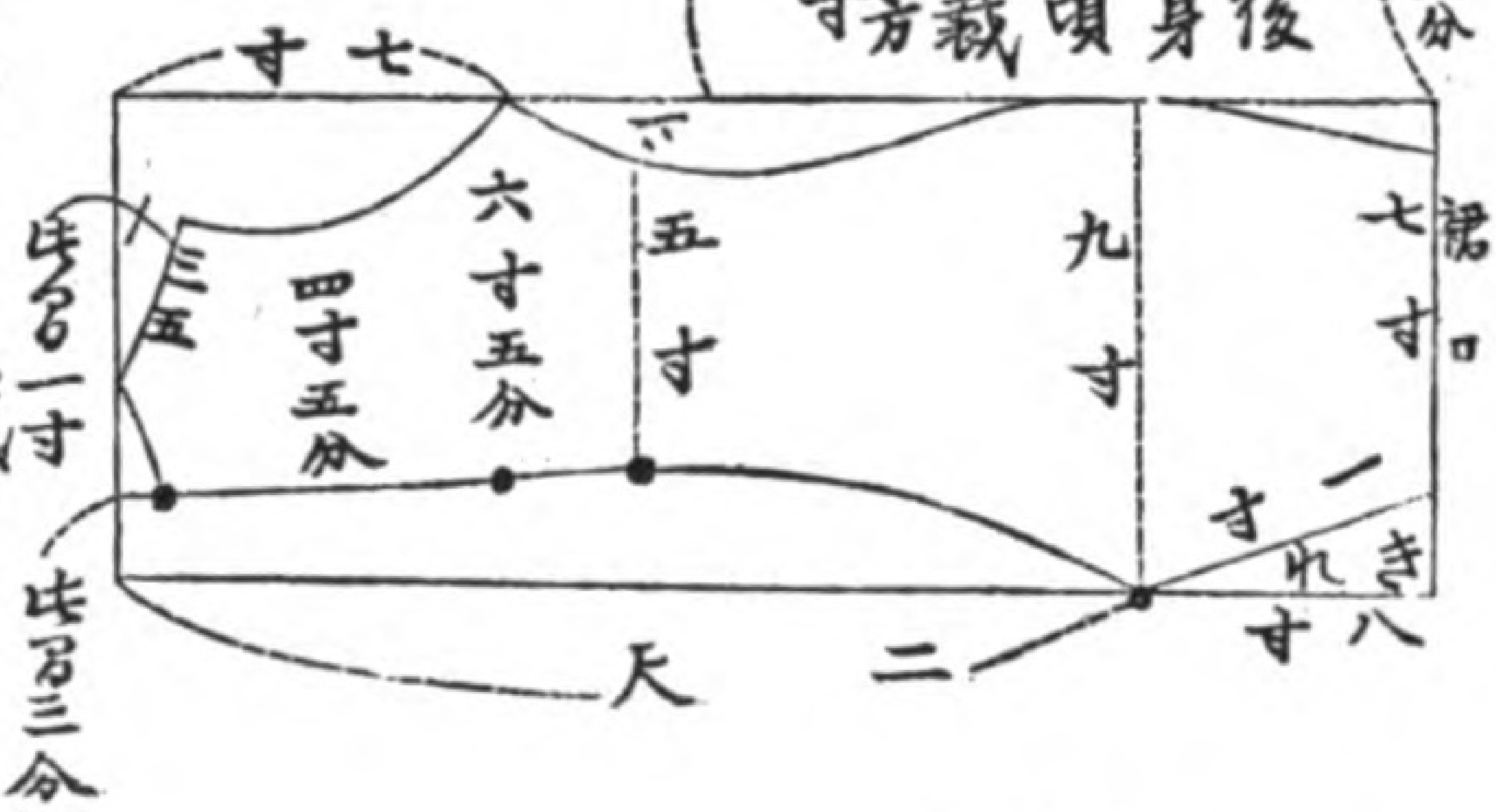
第一圖 袖の裁方



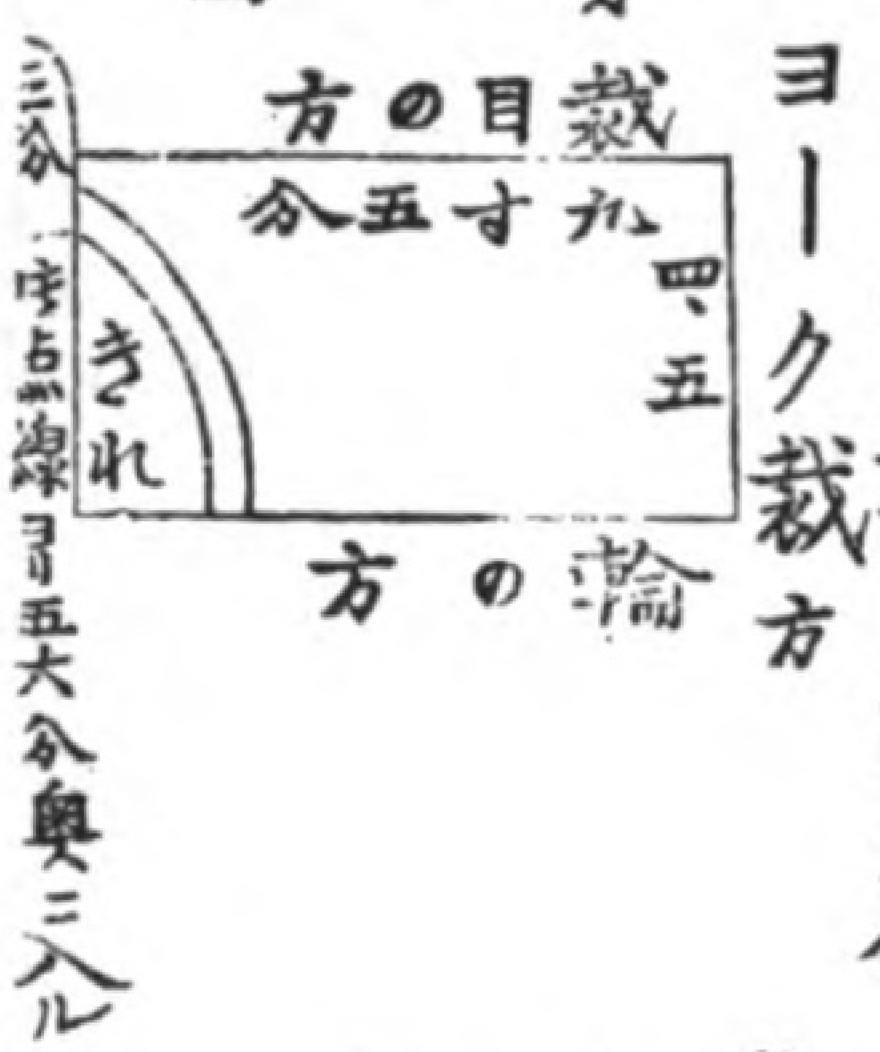
第二圖 前身頃の裁方



第三圖 後身頃裁方



第四圖 裁目の方



仕立上前圖



裳及帯を省きたる圖



仕立上り後圖



本毛縁を附け前と同じく兩端にミシン縫ひをなすべし、（以下毛縁を附くるごとに兩端にミシン縫をなす事同樣なれば之れを略す）次にヨークの上方を殘して三方の廻りを縫代だけ表に折り返し、其上に毛縁を附け（但し左右の角には毛縁に襞を取る可し次に夫れより毛縁巾だけ間を明けて奥の方に又一本を附く。

次に後身頃を出し衿肩を右に持ちて衿肩より脇の止り迄脊を返し縫になし、縫目は左右に開き縫込の端を折りてマツリ附け次に前身頃を出し脇下の止りより上部へ五寸の間返し縫になし、其縫目を左右へ開き縫込の端を折りてマツリ附け、夫れより上部見返しは上前下前共裏の方の方へ折りて其巾を八分上りとなし、假りに躾にて押へ置き表の方より其廻り一分入りたる處に返し縫をなす、次に後身と前身の肩巾三寸五分の處を縫ひ合せ、其縫目も左右に開きてマツリ附次に左右の袖を附け其折目は袖の方へ返し縫代の端を折りてマツリ附け、次に左右の袖下及び脇縫をなすべし、其縫方は下前は後身を自分の方に縫代を一分深くして袖口より裾口迄返し縫になし、上前は裾口より袖口の處迄下前の如く後身を見て返し縫になし、其縫目は左右共前身頃の方に折り返し其端を折り返してマツリ附く。

次に前後の脇下を縫ふ其縫方は後身頃を自分の方にして一方の裾口より他方の裾口迄返し縫になし、其縫目は前の方へ返し縫入を折りてマツリ附け、次に裾口を二三分の巾に三つ折りになしてマツリ附け、

次にヨークと見返し切を出し、ヨークの裏の眞中と表の脊縫とを合せてヨークの表の方に見返しを當て衿肩の廻りを三つ縫になし、其折目は見返しの方へ返し、見返しの左右の端を折り、其巾二分出來上りになして身頃にマツリ附け、次に前身頃の衿肩より下へ眞直に折りを附け肩の縫目より六寸五分下りたる處より縫始め一尺下りたる處にて五分の縫代に夫れより二寸下りたる處にて縫消ゆる樣に乳クセを取り、其縫目は前の方へ折り返し置くなり。

次に裳の切を出し裾の衽代を六分取り置きて夫れより一寸八分上りたる處に毛縁を附け、更に毛縁の巾だけ間を置きて上の方に又一本を附けて裳の切を輪に縫ひ、其縫目は前の方に折返し縫込の端を折りてマツリ附け、次に裾口を三分巾に三ツ折りにしてマツリ附け、次に三寸五分の前明きを一分巾に三ツ折りとしてマツリ附け、其止りを一分程重ねてカンヌキ止をなし、夫れより裳の上部を裏の方へ三分程折返し其廻りは三本程グシ縫をなし衿肩より一尺一寸下りたる處の前後の身巾だけに糸を引きしめてギャザー（Gether）し裳を身頃に返し縫にて縫ひ附け、脇上の止りにかんぬき止をなし、次に帶を絎け其端に穴かゞりをなし、

次に長さ二寸五分の紐を二三分の巾に二本絎け脇縫の處に裳の附きたる止りより上にのせ兩端を折り表より返し縫になし其内に帶を通すなり、之れにて縫ひ了りたれば上前に穴を明け下前にボタンを附け置くなり。

穴の明け方は見返しの上に横に一つ夫れより二寸宛下りて順次下方に横に明け、之れをかゞり丁寧に仕上げをなすべし。

備考　仕立つる時飾りに用ゆる黑の毛縁（Braid）に袖口廻りヨーク及び裳に用ゆる長さは凡そ二丈を要す、此毛縁は仕立るに先だち裏より糊を附け置きて伸び縮みのせぬ樣になし置きて用ゆべし、男子海水浴衣は其裁方大體は前述の如くにして裳及び帶を省くのみなり、從て用布に於ても裳の切五尺を省き、袖丈及び身の丈の二倍とヨークの九寸五分との和即ち八尺五寸五分にて可なり。

夏季雜題十二種

（兒童教育白墨圖畫）





英國皇室の社會事業

鸚鵡主人

英國皇室の一特色は高貴の方々が一身を捧げて學術に技藝に文學に慈善事業に其の他の社會事業に力を盡され偏に臣民の福祉と平和を進むることに御骨折遊すことで御在ます。乃で英國皇室は九重の雲の深きに鎖されず、一般人民の生活と接近して上下融合して居りますから、臣民は啻に主權者として之を尊重するのみならず、師とし友として之を敬愛し奉るので御在ます。

私は今其の一例として玆に最も趣味ある皇國美術裁縫學校の事を述べて、同皇室の社會上に御盡力ある一班をお話致しませう。此の

▲皇國美術裁縫學校

は南ケンシントンといふ所に設けてあつて、今帝がまだ皇太子にておはす時に起工式を擧げました。學校の創設者は先帝ヴイクトーリヤの第三女、即ち今帝エドワード陛下の第二の御妹クリスチヤン公妃殿下で、爾後此方の御盡力で今日の盛大を致したのです。此のクリスチヤン公妃と申すは獨逸聯邦シユレスウイグ、ホルスタインのクリスチヤン公に嫁せられてよりの御唱で、御名はハレナ、オーガスタ、ヴイクトーリヤと申し、西暦千八百四十六年の御誕生であるから、今年は五十八歳に渡らせられます。種々公共の事に御盡力あり、常にウインザー宮に御住居あつて獨乙へは餘り御出でにならず、英國では最も御信望あり御發明な方であります。

▲二大目的

此の美術裁縫學校は千八百七十二年即ち今より三十二年前の創設に係り、殿下が之を起された目的といふは一には美術裁縫即ち刺繡術の漸く廢れんとするを興し

又一には此に因て婦人に生計の道を得させんとの御趣意でありましたが、善くその目的を遂して、創業以來知名の意匠家や建築家等が裁縫上の意匠、校舍の設備等にも尠からざる助力をなし、敎員も生徒も其の技を勵み、又一方には多くの婦女がその技を習ひ覺えて愉快な獨立の生活をなす道をも得たので御在ます。

近世美術裁縫の技泰西の女子間に復興したのは一は此の學校が先鞭となり摸範となつた位で、國内は固より米國や歐洲大陸の諸國、又英領 各殖 民地の遠い處からも各々總代を出して、此の學校の實況を視察させ、又此等の地に新たに起つた學校には此の學校の卒業生を招聘するといふ程盛大になつて居るので御在ます。

▲學校の維持法（補助を仰がず）



此の學校も始めは左までの成功を期せず、極く小仕掛にスローン街に一校舍を開いたのでしたが、三年目には其の狹隘を感じて南ケンシントンに移り、尋で一大校舍を起すことになりました。校の會計は始めより獨立して政府よりも誰よりも補助を仰がず、生徒に裁縫させた物を賣て、それで學校の維持をもし又生徒へも小額ながら月々極つて賃料を得させ、生活の費用に充てさせたのでした。言はゞ始めは一箇の授産所でありましたが、其れが今の刺繡敎授の學校となつたのは創業以來二十年ばかりの後の事です、此の頃からして純然たる學校組織となり生徒に系統的敎授をなし、卒業者は外に出して職業を求め得させるやうに致しました。然しながら十分に規摸整ひ裁縫刺繡の各科に渉つて學級を設くるに

至つたは千八百九十五年の事で、此より生徒の之を本職として生活せんとするもの、或は教員となつて身を過さんとするものは皆此處に入て勉強する事になりました。

毎日の課業時間は一年中午前十時から午後の四時までで、修業年限は二年と三年との二種に分ち、二年の終りには得業證書を與へ、全三年勉強して全科を卒業した者には卒業證書を與へる事に成て居ます、ソコで二年卒業の方の授業料は一年二十磅（二百圓）で、三年卒業の方は一年十磅（百圓）で、あります、此の卒業證書は世に貴ばれて之を所持するものは急度好い報酬を得られます、現に此の卒業者で米國の大市府の裝飾協會々頭に聘せられ高給を得てゐる者が五六名からしてあります。

此處では時々有名な學者專門家を招聘して有益な講演をして貰ひます。近年は夜業を開いて刺繍と共に意匠をも教授し、此を以て生計を立てんとする貧民の婦女には一月僅かに二志六片（一圓ばかり）の授業料を徴し、富家の子女にて慰み半分に學ぶ者には稍々高い月謝を取つて教へます。此の夜學も亦好成績を得ましたから倫敦府の實業教育局からは之に對して一年百五十磅（千五百圓）の寄附をなすことになりました。

こゝに入學するには六箇敷はないけれど一寸試驗が要ります、先づ認可美術學校の自在畫證書と倫敦普通裁縫術獎勵學會の普通裁縫科證書とを得たものは入學資格ある者として學期の終に簡易なる試驗を行つて入學を許し、又此の二の證書なきものは先づ此の二科を修めしめ、其れから更に試驗を行つて入學を許すので御在ます。學校には附屬の展覽室があつて、此處で生徒の製作品を賣捌きます、夫は色々の刺繍が眩きまでに陳列てあつて、古代摸樣に摸した窓掛や、神壇の被や、幕や、服地や誠に手際なもので、其の出來の新しく形の全きといふ點を除くの外は古代物と寸毫の見別が附かぬ位です。學校では又古代物のぼろ〳〵になつたのを繕ろう事もさせます、で其の繕ろつた物を見ると些とも細工の痕迹が見えませぬ。古代の書籍裝釘法

に倣つた綴ち工合なども見事な物です。此他凡て刺繍術に屬する日用の家具裝飾品、如何な物でも此處で求め得られます。

此の外に古代の裝飾品をも陳列して賣捌く。古代物を買はんとする人は此處に來り求むれば贋物を掴ませらるゝ憂がなくて一番便利です。言ふまでもなく此等の賣上から得た錢はみんな學校の維持費に充てられるのです。

乃で此の學校は今日では決して單に皇室の博愛事業といふでなく、一國の美術を奬勵し保存し進捗せしむる一箇の大機關となつたのであります、而して斯る隆盛壯大を致したといふも全くクリスチャン公妃殿下が創設督勵の御力に由ることとで御在ます。

▲英國皇室の威化

以上述ぶる所を以ても畧此の美術裁縫學校の性質組織を知り、殊に英國皇室の社會事業に御盡力あることを推し得らるゝことゝ思ひます、扨て此からは更に汎く英國皇室の如何に社會上に威化を與ふるかに就て御話致しませう。

萬民平等を大義とする共和政體では夢にもみる事が出來ませぬが、君主政體の國に至ては皇室の威化が下萬民に及ぶことは非常なものです、英國皇室に於かせられても此に思召し及ぼされて偏に人民の儀表となり師導となり良友となるといふ御趣意を以て統臨せられましたから、上下融和して醇良の風俗を馴致致しました殊に、

▲先帝ヴイクトーリヤ

は淑德の御譽高く、皇配アルバートも亦賢明の御性質であつたから共に深く國事に心を寄せられ、身は貴女紳士の摸範として宮廷の御事にも御注意遊ばされ從來の不淨分子を一洗せられました。折しも英國は富の增殖益々加はり貴賤の區別益々廢れんとする時に際してゐたにも拘はらず其の威化の推し及ぼす所は實に大したものでありました。

先帝が斯く萬民に尊重せられ給ひたるは宗教に御歸依深く淑德高かつた故でもありませうが、一は能く下情

に通じて同情の念渥く臣民とその悲喜吉凶を共にされたといふのが大原因で在たらしいです、乃で宮中に召使はる丶官女等が結婚すれば慶んで共に祝はれもし、病に苦めば其の病床に往て懇ろに問ひ慰められもし、又基督降誕祭には毎年オスボーン宮に降誕祭樹を立てますが、此の日此處に参る者には上下の區別なく御手づから其の枝を折取て下し賜はるのです。前年トランスヴアールの戰爭には、出征軍人を犒らひ、傷病者を勞り、戰死したる軍人の遺族を慰め給ふなど御高齡の身を以て一方ならず御盡力遊ばしました。

▲皇太子としての今帝

去りながら先帝は四十四歳の御時皇配に先立たれ給ひしからといふものは深き御嘆きに沈まれ、自から世と遠ざかり給ひて、社會上の事は概ね皇太子ウエールス宮殿下即ち今の皇帝エドワード陛下に御一任遊ばしました。併し政治は御親ら御覧んせられて皇太子には一向御相談も無かつたから、一昨年十月廿二日先帝崩御の後を承けて踐祚あつた六十一歳の御時に至るまでは、唯だ／＼社會上の職務にのみ一身を傾けて御勵精あつたので御在ます、皇太子の御少壯の時は御品行の上に就て兎角の御評判も立ち、皇太子の御遊仲間といふ一種の御友達もあり、一種他人を容れざる倶樂部さへあつたのですが兎に角御氣力万人に勝れ、御性質溫柔にして憐憫の御心深く、偏に國民の平安福祉といふことに御心を注がれた結果、社會万般の事に皇太子の渉はり給はぬは殆ど無かつた程で御在ます。

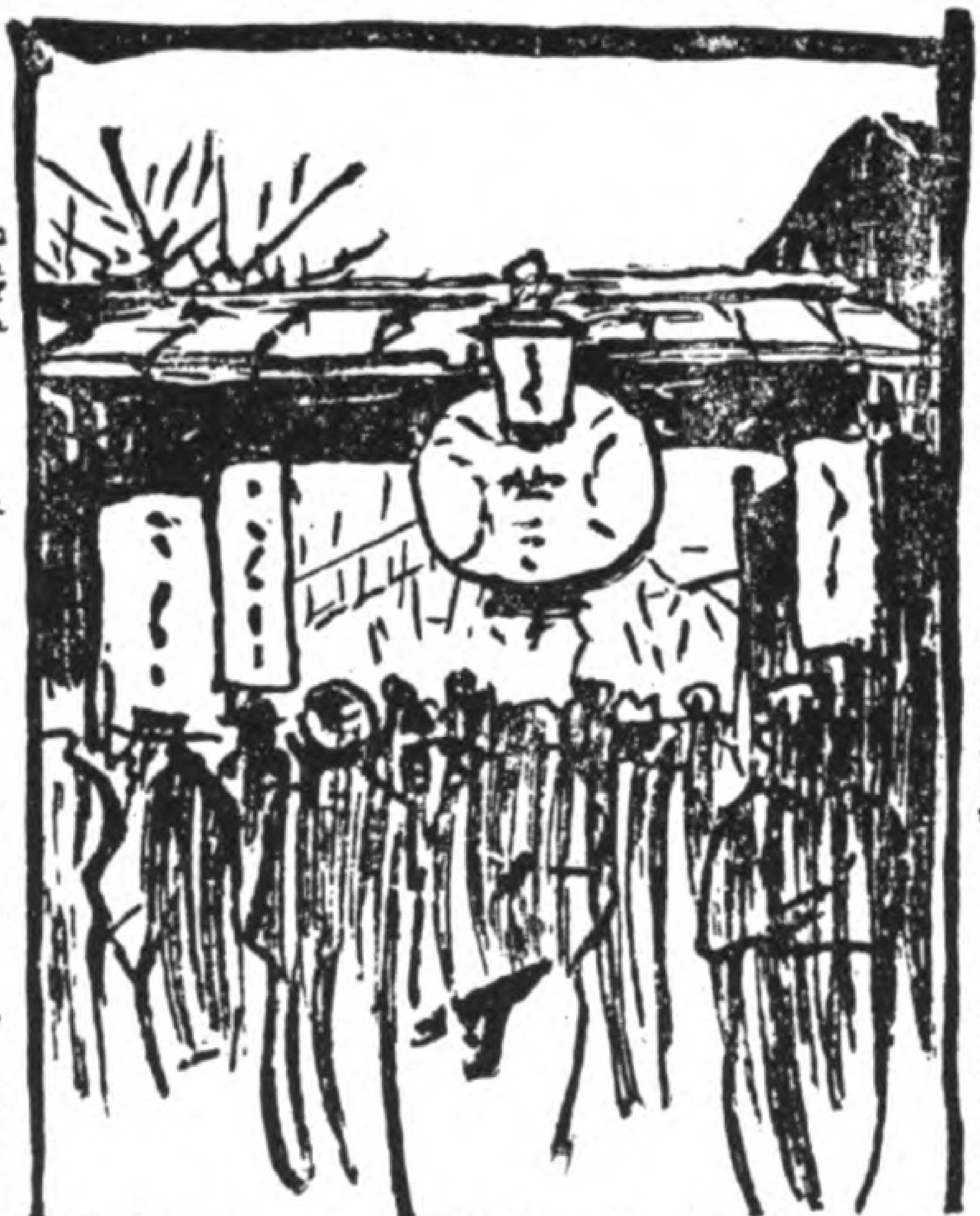
▲其の御勵精

皇太子は決して之を一遍皇族の義務として眞の機械的になされたといふ筋ではない、眞實自己の職務として務めさせられたから、人民と皇室との間には尊卑の別以外に親愛友情といふ温かい情が溢れたのであります今皇太子が如何に御勵精であつたかといふに、其の頃の新聞を見ると出てゐるが、其は／＼御忙がしい事でありました、所謂倫敦季節になると今日は内閣大臣の園遊會、明日は各皇族方の接見と其の他美術展覧會、競馬會音樂會、軍隊の宴會、學校卒業式、何の起工式

與の開通式と、臨御に日も是れ足らず其の間には御自分の御遊覽、接客等があるので餘人には到底務め得られぬほど多忙を極めさせられたのです。

皇太子は又た皇國音樂學校を創設し玉ひ、且親から臨時校長となりて斯道の發達に務められ、又毎年同校評議員會を開いて親ら會長となり、又英國及び各殖民地の總代をも召集せられて斯道奬勵の會議を開かれました。

それからマールバラー宮やサンドリンガム宮では常に朝野の名士を招いての御饗宴がありますが此の時御案内に與つた人々の名前はみんな新聞に出て而して、十五六年前までは其の人數二千人に限つて居りましたが時には六千人にも登つたことがありました。此の園遊會には



▲皇太子妃としての今の皇后

が一々來賓を迎へさせられます、此の皇太子妃は御妃として御母として一點間然する所ない方で御在ました塲内の裝飾は美麗を極め興を助ける爲には何時も軍樂隊の奏樂あり、内外の貴賓多く集り、先帝も臨御あつて設けの天幕に入らせられて打興せさせ玉ふのです、其の節は皇太子は先帝を御案内あり、先帝は皇太子の肩に倚らせられて群衆の中を通御あり誠に母子の御情愛見えて參朝の人自から首を低め襟を正したといふことです。

此の席に招かれる者は何職何業に拘はらず其の道の名士で而して此の日は無禮講であるから、儀式は只皇帝が通御の時に一列に整列して帽を脫して敬禮するといふまでゝ、其の他は知人三々五々手を相取て園内を散歩し談笑の聲高く樂み興じても妨げないのです、加之ず、

皇太子も竹の園生の方々も貴族社會の人々も皆其の爵位光榮を抛つて同等の地位に立ち、面白可笑しく交際するが故、此等の會合が社會の上に及ぼす感化は誠に春の海の洋々たるものある樣に想はれます。

▲今帝の御兄弟

先帝幷びに今の皇帝の御勉勵此の如くであるから他の御兄弟方も皆な公共の職務といふことに御心掛が厚い先帝ヴイクトーリヤの第三子、コンノート公は御勇敢なる武人で印度に埃及に數度の戰功がありました第二子エヂンバラー公は海軍々人として令名ある方で、露西亞より來られた妃の君も公の率ゐ玉ふ艦隊の各將校に毎度慰問の御沙汰を賜りました。

前に申した先帝の御三女、クリスチャン公妃と申さるる方は慈惠事業の別名でもあるかのやうにウインザー宮附近の人民に敬慕されて居りますが、此方は女子の高等教育を進めることに御注意深く種々の學校を起し玉ひ、また音樂の道にも御心寄せ深く、美術裁縫の術廢れんことを慮りて、其の學校を起された事は前述ぶる通りの次第であります。抑看護といふ事が疾を治する一方には患者の心を慰めるといふ一箇の高等の術として、近年其の大進歩をなしたるも妃の力と今の皇后の力に由ること多しと申します、妃の長子ヴイクターは一昨々年南亞弗利加の戰爭で御戰死なさいました先帝ヴイクトーリヤは、御鍾愛淺からざりし御孫の事とて殊の外に御落膽あつて崩御も爲めに早められしやに言ひ傳へられてをります。

第四女アーガイル公爵夫人ルイスも倫敦交際社會で學藝美術の奬勵に務めさせらるゝを以て御名が聞えて居ります。第四子アルバニー公は御兄弟中最も文學に嗜みおはしたる方であつたが不幸にして三十歳を以て御夭折遊ばしました。もし御壽命あつたら皇宗と詩家文人との間に今一層の緣を厚くした事だらうと思へば惜しい方で御在ます。獨逸先帝に嫁せられた第一女故フレデリツク皇后も發明の聞え高き御方で御在ました。

以上述ぶる所に由て英國皇室の感化下に及ぶことの深きを推し得らるゝことゝ想ひます、前いふ通り英國皇

室は英國人の社會生活の一成分をなすので、其の方方は孰れも早くより踏みも習はぬ社會公けの事業に御身を委ねられて、而して滿幅の精神を凝め心力を盡して御勉勵あるので御在ます、泰西民主々義の盛んなる中に在て英國皇室の尊嚴益々著しく光榮益々加はるは誠に故あることゝ察せられます。（そはり）

支那婦人の習俗

在清國大冶　西澤好子

昨年の春清國に出張を命せられたる夫に伴はれ、湖北省大冶縣に駐在すること一年餘、此間多數の貴夫人令孃と共に公會の席上、或は私宅の訪問等に依て屢々快談し、親しく其表裏の風俗習慣を觀察せり殊に本邦の官舍は此地方に唯一個を存するのみなるを以て清國の婦人は物珍しき人情の常とて、私宅の訪問往來は殆んど間斷なく是を以て婦女子の風習に就ては比較的精細なる觀察を遂ぐることを得たりき加之外國婦人も又屢々一所に會合したるを以て彼我習慣の差異に就て日、清、歐三ヶ國を同時に對比するを得たるは無上の幸福なりき、今此等觀察中に就て二三の所感を左に列記し以て同胞姉妹諸子の參考に供せんと欲す但し文章の拙劣なるは汗顏の至りなり。

△年長者に對する尊敬

何れの國を問はず其年長者に向つて敬意を表するは一般の習なれども、支那人程年長者を尊敬し又是れに向つて一種の特權を與ふるは其例を見ざるべし、然れば何れの場合を問はず或事柄に就て議論を闘はすことあるも、多くは年長者の斷定に唯々として服從し、事理の合不合を問はざること多し、されば婦女子に在つても各其年長者を敬ひ、其命に服從するは自然の勢にして、長幼相爭ふこと稀なり、總娘等の其母に奉仕することの鄭重なるは日本婦人の想像の及ばざる所なり。母の命令なれば如何なる難事も快く之に服し唯

唯諾々曾て逆ふこととなし、其極一種の畏怖心を生ずるに至れり、試に是れを日本婦人とすれば、容易に母に言ふべき常事も支那女子は之を言ひ能はざること屢なり之に就て一奇談あり、我が交際せる令孃は其母に請て衣服髮飾を調製したき事あるも母の機嫌を窺ふて直接之を請ふ能はざるを以て態々之を我れに打明け我と其母との會談の機會を俟て間接に其必要を説かしめて目的を達したることありき、されば飲食衣服其他如何なる品と雖も先づ其母を第一として充分之に供給したる後にあらざれば他の家族は決して之を私用するを得ざるの習慣なり、所謂孝は百行の基なるものならんか、又途上妙齢の娘等が見ず知らずの老婦人に遇いても必ず路を讓りて進むが如き美風は支那に於て多く見るを得べし、殊に支那は女尊男卑の風習甚だしきを以て男子の年長者よりも女子の年長者は比較的に強大なる、權勢を有するが如し、一家内に小兒相爭ひ又惡戲をなすの場合に於ても老翁の叱責よりも、老媼の訓戒が更に大なる効力を有するが如し、設令ば一家の老婦は、尅其家の令息令孃を叱責して時々其命に服從せしむることあるが如し、然して此塲合に於て令息令孃等は自家の召使の言なりとて決して輕視すること無く又その父兄も之を默許し敢て意に介せざるが如きは、必竟年長者を重んずる習慣の結果ならん。

▲住室の排置

前述の如く長幼の秩序正しきを以て自ら家庭の圓滿平和を見るの割合多き筈なれども玆に最も注意を要すべきは一家中に於ける房室の排置是なり、試に一家族中數多の夫婦同居するものを見るに父母は勿論甲夫婦乙夫婦丙夫婦の三者皆多くは兄弟従兄弟等多く房室を異にし令息令孃又各自一個の室を有し必用事を辨ずるの外自巳の室を出て勝手に他室へ出入することなし、從て器具衣匣の如きも各自に於て分擔保存するが故に、使用の塲合に決して混雜を惹起することとなし、唯食事の際、及來客を接待する時、其他饗應、祭祝日の時は家内擧て一室に集中し、談笑喜々一家團欒の快樂を

得るものとす支那人は一日二食の常習あるを以て少くも一家內は一日二回一室に會合し、同一の食膳に同一の快味を試みるものなり、之を本邦中以下の家庭に對比するに、其差異同一の談にあらず、殊に淸國に於ては如何なる下等の人民と雖も悉く寢臺を用ふるを以て室內の區劃は自ら截然たるべき理なれども、寢臺を使用する風習は又不便の點尠しとせず、設令は突然遠來の珍客ありたる場合に寢臺を裝置せざる可らざるを以て豫め簡易寢臺の準備を要し、又室を要せざるべからず之を本邦人の一室に數人合宿の簡易なるに比すれば寧ろ煩累の大なるものといふべし。

▲教育の不充分

近來淸國各省の總督は競ふて日本人を雇聘して學校を興し、士民の多數に正式學科を學ばしむるの方針なれと之に應ずるものは極て少數に止まり、大半は猶舊式の寺子屋敎育に依るか、若しくは自家に敎員を傭ひ設き四書、五經、習字、詩賦等の數目を脩學せしむるに過ぎず、故に今日普通一般に在つては殆んど完全の敎育を求むべからず、湖北武昌の如きは現今日本より數名の女敎員を聘し、女子に對して亦文明的敎育法を開始せしも、日猶淺くして未だ其効果を收むるに至らず予の親友なる官吏の妻女令孃等にして巧に詩を賦し、文章に精通せるものは十中一二に足らず、多くは唯簡易なる文意を解し、卑近の時文を草するを得るのみ、其甚しきものに至ては其身大官高位の令室として他人より厚き尊敬を受くる身にして殆んど目に一丁字をも解する能はざるものあり、近來日本人と交際すること頻繁なるに及んで稍學文の必要を悟るに至る然れども男女七歲にして席を同ふせずとの聖賢の敎を墨守し男子より直接に敎を受くることを潔しとせざるの風ありて、敎育の發展を阻碍すること多大なり、普通に行はるゝ風習は家にまづ一敎師を聘し其の敎員先づ家の男子に敎授し男子は其習得したる一般の文字を自巳の姉妹に傳授するの方法なりとす其手數の繁雜なる推して知るべし、普通讀書的の敎育に於て巳に然り況や科

學的教育に於てをや、理化數學の如き文明的學科は到底女子が近き未來に於て熟達し能ざるべし、從て種種なる偶像敎を迷信し卜筮に依て事を判斷するの弊風各地到る處に盛なり。

▲婦女子の日課

支那大官人の婦人に在つては每夜深更（午前二時）に臥床に入り、翌日午前十一時前後に至りて起出るを常とす、一日二食即午後二時及七時食卓に就くの例なり、而して婦人の多數が一日何等の仕事に依て日を消過するやは極て考察すべき問題なり彼等は二食の外午前八時前後に粥を食するものあり、此習慣ある人は大抵食後再び臥床に入るものとす、十一時起出で顏を洗ひ口嗽ぎ、然る後更に化粧に取掛り、少くも半時間以上は顏面の粧飾に時間を消費す、而して支那婦人化粧の特色は極て多量に白粉、臙脂を塗抹し、掌裡にも又紅粉を點して染むるの風なり、故に彼等の素顏と粧顏とを對照すれば殆んど別人の如き觀あり、如何なる緊用の場合と雖も粧色を施さずして外出すること稀なるのみならず自己の室內に臥起するも亦常に紅粧を怠らず、故に化粧は支那婦人の日課中貴重なるものとす、さて粉粧終るの後、或る婦人は例の阿片を喫するものありされども其數は多からず、而して其每日殆んど一定の仕事と稱すべきは自己及小供等の靴の製造是なり靴は木綿又は絹布を以て作り、之に刺繡をなすの風なるを以て婦人の室內業務には極めて好適せり、彼等は時々水煙を喫して休息す、水煙は水煙盃と稱する白銅製の煙管にして煙草の烟は一旦此煙管中の水中を通過して多量の脂質を溶解し然して後口中に入り來るものなり、十五六才以下の小女と雖も時に之を嗜好するものあり、而して食物料理の一事は殆んど男子の業務にして、女子は之に關せざるは奇といふべしされば家々皆男子の料理人を使役して以て食卓一切の献立を委托す、然れども親類緣者或は極て親密なる朋友の來訪ある際には、特に家中の婦女其料理の一部分を負擔することあり、但し貧賤者に至ては婦女自ら炊事を掌

ること多し、又上流人の洗濯物に至ては、是又常傭の老婢に一任し、一切を放任せり、故に小供の多き家に在ては此洗濯婆は中々多忙なるものなり、衣服裁縫の一事又男子の業務にして婦女子は決して之れにたづさはる事なし貧賤の婦女も亦然り、是實に本邦人の眼より見て奇とする處なり斯の如く支那婦人の日課は單純なるものなり日本婦女の平常仕事は、支那に在つては殆んと男子の專有に歸せり、粉粧の外に常務なく室内に閑居して安逸せるのみ然かも又女尊男卑の待遇に浴す支那婦女の境遇は果して幸か不幸かこれ容易に斷言すべからず。

△不潔不衛生

支那婦人の房室は多少の裝飾を施すと雖とも概して陋卑ならす、上流紳士の婦人室の稍洋風を摸擬するものに至ては清潔にして立派なるものあるも其は極て少數にして、其大多數に至ては室の四隅に塵埃堆積し、室內の器具又垢膩に汚染せるを見る、其床板に至ては水煙臺の吹殼、各所に飛散し板面に塵痕を止め、又室内の至る所痰唾に汚されたり、支那人の風俗として客人の面前にて時々擲ことあり、唾壺の備えある洋風應接間に入るも尚此不体裁の風を改むることなし、殊に乳兒をして床板上に放尿せしむることあるは普通にして又彼等が常食とするものは殆んと大概油質を多量に含有するを以て器具は固より衣服等に至るまで皆油垢に汚るゝを見る、飲料水（水は專ら揚子江の濁水を汲む故なり）は、明礬を用ひて清澄せしめたる清水にして、其水面にも亦油類の浮遊せざることなし、故に最初支那に入りし本邦の人は一度此狀態を目擊せば嘔吐を催し數日の間は充分の食事を爲すこと能はざるを常とす、卓子器皿等に又油塵を附着するも之を清拭するの意なく、偶々之を爲すも其拭巾既に塵埃垢汚に依て汚穢せらるゝを以て反て不潔を增加するに過ぎす元來支那婦人は多年の習慣として更に其不潔汚穢たるを意に介せざるが如く、日本婦人の特別に清潔を好むを見て反て一種の不思議的感念を懷くが如し、其厨房内

の不規律、不整頓、不潔、不淨の狀況に至ては實に言語に絕せり、又室内に直接日光の入射するを怖るるの風習あるを以て、常に窓戶を閉すに依り、濕氣床板を透して陰鬱の氣室内に充滿す、從て空氣の流通惡しく一種の臭氣鼻を衝くも　支那婦人は更に痛痒を感せず、不快を覺えさるが如し、多數の婦人室は日中尙暗黑なるものあり蓋し婦人の顏色蒼白なるは以上の原因に基くものならん、入浴は夏時は多少之を試みるも冬期に至つては殆んど全身の浴澡をなすものなく、只顏面及手掌を洗ふのみこれを除けは、垢膩の滿身に附着するを知るべし、又臥床に特別の寢衣を用ふることなく、日中常用の衣服の上着を取り去り直に臥床に入るもの多きを以て其衞生に害あるや知るべきなり且つ蒲團の如きも日光に曝乾することなきを以て、濕垢の附着すること多し支那人の習慣の久しきに由り斯かる汚穢の爲に特別の病源を醸すことなきが如きも、日本人をして斯る室内に數日を暮さしめんか、直に一種の病痾を發するに至らん、又入浴に就て支那婦人の不便を感するは列の三寸的小脚にあり、設令全身浴を試みんとするも小脚を外部に露かさるべからさるを以て、日本風の桶風呂に入ることを得ず、盥浴を用ふる外他に方法なしと云へり、此三寸小脚、即纏足の步行に不便なるは言を俟たず、其纏布の裡に汚垢の附着すること多量なるを以て惡臭を放ち衞生的不潔なること甚しきものとす、斯く述べ來れは不潔に就て支那人は殆んと先天的無神經なるが如きも其入浴に際して特風を有せりこれ二個の手拭を用ふること是なり即一は顏面首部胸部等を摩拭するに使ひ他は其下部足部等を洗ふに用ふるものなり、斯る不潔好なる支那人にして滑稽にも日本人が入浴の時唯一個の手拭を用ふるを見て其不潔を笑ふことあるに至ては亦是一笑に價すべき奇談ならずや、便器は各自一個を有し日々之を清洗せり彼等に取て唯一の淸潔風とは先つ是等を稱すべきか。

△禮式服裝の美麗

支那婦人中下等のものは一年中時を定めず隨意に外出すると雖も、上流社會に在ては外出すること殆んど稀にして、其親類を訪問するは端午、仲秋、正月の三大期節に止まる、固より親類間にて臨時の吉凶、往賀往吊は別として彼等が正式的往問、賀辭を述ぶるは上記の三回なりとす、出入には必ず轎子を用ひ設令其親類の住居が隣家にあるも徒歩することとなし、門の出入は例の爆竹、花火にて之を祝するの風あり、中門を入りて轎子を下り、客室に入る、上流に在つては下婢の數人必ず轎子に扈從して主人の必要物品を携帶す、水煙臺化粧道具の如きは此物品中の要用なるものなり談話中若し水煙を喫せんと欲せば下婢を呼び、水煙臺に煙草を塡めしむる等一切の手數は一々下婢を勞して始めて事を了す日本人の眼より之を見れば此緩慢なる御大名的行爲は迂遠にして、齒痒く感ずれども、支那に於ける上流者に於ては是れか即ち一の品格を保つの方法にして成るべく萬事に尊大ぶりて細事と雖ども一切自分の手に成さゞるの習慣なるを以て、一人の婦人に對しても人手の掛かること夥しきものなり、且つ相互に坐を進め、茶果を呈するが如きも、其應對の言辭身体の動作極て鄭重、謹嚴を貴び、孔子の遺風に依て起座進退を規するが如し、婦人の服裝に至ては實に立派なるものにて頭髮を飾るに、眞珠珊瑚翡翠等の寶玉金製の指物を以てし、指環、腕環の華美なるを以て一層の光彩を添ふ、殊に其衣服に至ては男子の大禮服と殆と同形にして、胸部背部には方形にして龍を畫ける刺繡の紋章あり、又男子の位記と同しく首に念數樣の環を掛け、衣服の緣邊は悉く銀白色の獸毛に依て裝縫せらるゝを以て、殊に華麗の觀あり、縱不然粧粉の妙を得たる支那人にして、此華麗なる禮服を纏ふたる時は眞に言ふべからざる雅致を表はし自ら大國の遺風を顯章するか如し、歐裝したる日本婦人は此盛裝支那婦人間に雜居して左まで異樣を感せざるも黑紋付を着流せる婦人の唯一人が華美の裝束せる數多の支那婦人の中に介立するを見るときは餘り其衣服の單純にして蕭條たるの感あるを免かれず、近來淸國滯在の日本

婦人は多く海老茶袴を着するに至れり、是れ清國住宅の構造既に日本服の着流しに適せず、又歩行に不便なるに基くものなり。

英佛獨 三國婦人の價値

ミセス、バートン
S、T、生 譯

△品格と責任を重ずる風

私が曾て倫敦の一教會で或る婦人團体の爲めに述べました趣旨の中に十九世紀の下半期は世界に於ける女子が最も其の特質本能を發揮した時代であると申しました、併し其の特質本能と申すのは女子に取つて圓滿なる價値であつて、家政の整理者、家庭の主宰者、健全なる母、和順なる妻といふ意味であります、將來の社會が世の婦人に希望する處ろは恐らく此の以外に出でないのでありませう。婦人が如何なる大なる功績も、兒を育て、家を修むるの上に出づる事はありません。

此の點に於て英國の婦人は最もよく其の地位を知り、其の任務を知り、其の天職を知つて平素よりよく其の身を捧げて居る事は獨佛の婦人よりも數等の上かと存じます。英國婦人は他の二國の婦人に比して男子より尊敬を博する事が深い丈けにそれ丈け自分の品位と責任の大なる事を自覺して居るのであります、英國の婦人は總てに渉つて圓滿の智識を集めてゐます、寧ろ淺くとも廣く何事にも趣味と注意を向ける事が出來ます成程英國の婦人は獨逸婦人の如く音樂の妙技を欠くかは知れません、又佛國婦人の如く料理に巧みなる技倆を欠くかも知れませんけれども、英國婦人は何事にも相應の智識を持ち、何事にも行き渉つた常識を有つて居るのであります。即ち家庭の整理、育兒、衛生、娯樂、道德の高き事公共心 博愛心に富んでゐる事など他の二國婦人の到底及ぶ處ろではありません。今日英國がこの如く世界に雄飛したのは全く婦人が内に居て内顧の憂なからしめた結果であります、其證據には英國の膨張は十八世紀の下半期からであつて婦人の智德

の進んだのも全く其頭からの事であるのを見ても知られます。

△世界第一の料理人

佛蘭西の料理は歐洲中で、伊太利を除けばまづ世界第一と言つてもよい位です、御承知の通り佛蘭西人は上流より下は貧民に至るまでも食物は非常に奢つて極めて美味の料理を撰びます、尤も奢るといつても何も莫大の金錢を費やして奢るといふ譯ではありません、諺にも英國の女子が無駄にした料理殘りで佛國のコックは立派な食品を拵らへるといふ事がある通り佛國人は極く僅かの費用で立派な旨ひ食味を料理する儉約な調法な國民です、併し其他の點に於ては衛生に注意が欠けて居る樣に考られます。

△婦人と衣裳

佛國の婦人は御承知の通り美麗で柔和で其の衣裳の如きも、互に華美艶麗なるを競ふて世の流行を逐ふといふよりは寧ろ銘々に如何なる衣裳がよく自分に似合かといふ事を知つて居るのであります、故に其衣裳はよく婦人個々に適合して色の濃淡といひ、配合といひ、全体の意匠といひ、すべてが美術的で佛國の婦人否佛國全体の美術心に富める事は伊太利人に一歩も讓らぬと思はれる位です、併し佛人全体に就て其の

△裏面の欠點

を擧ぐれば何事も眞面目でないのは佛國一般の傾向で又世界文明國中尤も道德の低い國と言はなければなりません、何故かと申せば、原因は數多ありませうが、其の主因と云ふべきは、むかし同國にはプロテスタント宗の尤も勢力のあつた人が政權を採つて國政整理の任に當つて居ました處ろ反對黨の爲めに殺され、續いて同宗の人の多くは他國へ遁逃した事があります、其以後、同國は自然の反影で眞面目の宗敎を輕視する樣になり、隨て政治社會なども不道德な事が行はれ國民の道念はいよ〳〵不德に陷つて文明國の紳士として

耳にすべからざる行爲のある事は深く其國内に踏み込めば是れが證據を取る事はいと容易い事であります、さて今まで御話した事をすべて申上ますれば、現時の狀態では獨逸の男子が其國の女子よりも勝れて居る樣に佛國の女子は其國の男子よりも勝て居る樣に思はれます。故に我々は佛國の婦人よりは學ぶ事が數多あらうと存じます。殊に節儉と質素は佛國婦人の最大なる美德で、今日佛國が、彼の印度のやうな大殖民地も持たず、又亞弗利加のやうな寶庫を持たずしてよく英國と拮抗して其の國威を保ち、其の名聲を墜さないのは一に

△婦人の勤儉力

の然らしむる處と言はなければなりません、御存じの通り巴里は世界の遊樂場であり、世界の銷金窟でありますから、表面は頗る華麗奢侈を見せかけては居りますけれども、其れは遊樂場としての政畧上唯外面丈を飾つたもので、其の裏面へ這入つて見れば實に節儉の美德は三歲の小兒の頭腦へまでも染み込んで居るのであります。是れ皆佛國婦人の無意識に奬勵した結果であります。其證據には

△初めて巴里に遊んだ人

が大商館の婦人番頭などを見て定めし多額の給料を得て贅澤な暮しをして居るだらうと思ひますけれども實際はそうでなくて是等の商館へ住み込める番頭の給料は大槪一ヶ月三十法から七八十法（一法は我が四十錢）位までゝ既に商館の番頭たる以上は衣服も淸潔でなくてはならぬ、故每月の被服料にも多額の費用を要し四十法や五十法では生活の道が立ちません、然るに彼等が立派な服裝をなして優然として居るのは何か秘訣があるかといふに、別に秘訣はありません。唯日用の生活費を節儉して之に充つるのみであります

△獨逸婦人の眞相

獨逸の婦人の地位は英國の婦人と比較すると餘程低く

且つ劣つて居ります、英國の婦人が其男子より受くる禮節は誠に鄭重なるもので、十分の敬意を顯はして居ますが、獨逸の婦人は其國の男子よりさして尊敬されて居りません、言ひ換ゆれば英國の男子が英國の婦人に示す處ろの禮節は獨逸の男子が獨逸の婦人に示さぬほど異つて居る、其れは何故かといへば、

△獨逸は尙武の國

である、獨逸は元來武を以て建國の第一義として居るので、擧國皆兵といふ有樣で、身体の壯健な勞働に堪へ得るものは悉く兵士になつて仕舞ふから、婦人の取るべからざる勞働も勢ひ獨逸では婦人がしなければならぬといふ有樣である、タトヘば農業の如きも婦人がするので、かゝる事は英國などでは到底見るべからざる事で、これはつまり獨逸婦人の重せられぬ原因の一つでありませう。

△獨逸は教育の盛んな國

獨逸は教育の發達し進歩して居る事、實に非常なもので、世界列國の中尤も教育の旺盛を極むるは何處かといふに、まづ獨逸を以て第一位に置くも愧かしからぬ程であらう。併しこれは專ら男子の教育で、婦人の教育に至つては極近年までは進歩して居りませんかつた。實に獨逸は

△婦人に教育上の特權

即ち女子が自由に大學に入り、或は高尙の學問を修むる事は許されなかつた爲め婦人は早くより學校を退いて、家庭に婦人の任務を取らなければならなかつた。故に獨逸の家庭を見ると一家の主人が學者で該博なる智識を備へて居るに引かへて其の妻君は比較的低い教育を受けて、時としては我が下婢よりは少しは勝つた智識を備へて居やうかと思はれる樣である、故に獨逸に於ける男女の間の教育の差違は彼の英國に比較すれば實に非常な相違であるこれも獨逸婦人の男子に重せられぬ原因の一つである。

△先覺者の誘導

いづれの國を問はず、いづれの事業を問はず、其國にある事業の進歩發展するのは決して偶然に起るものではありません、必らず是れが先覺者の出でゝ、熱心に忠實に奨勵し、指導し、誘掖、提撕するからであります、タトヘば英國の女子教育の發達したのは、其むかし一世の輿望を負ふほどの高尚の教育を受けた婦人等が先導者となつて社會に向つて女子教育の必要を呼號し、而かも其方法が善良であつたが爲めに單に其人一身の榮譽ばかりでなく、英國全般の婦人の品位價値を高め、遂に今日の盛運を來したのである。然るに獨逸は是に反して女子教育に就て四五人の先導者が起つて女子に高等の教育を授くる爲めに非常に熱心に唱導し盡力をしましたが、其手段方法が惡かつた爲めに世間からは非難される、一般の人からは擯斥される、痛く社會の攻撃を受けた結果は、其の事業の上らぬは愚か遂に獨逸全般の婦人を言ふべからざる不得意の地に沈めて仕舞つた。併し時勢は何時までも獨逸の婦人を斯る境遇に滯らしては置きません、機運は次第に向いて來て茲、五六年前よりは非常に位地を回復し、女子の大學も出來れば、高尚な學校も續々設立せられて、是等の學校には幾多の女子が群集し、今日では前年とは見返すほどの進歩を示して居る、私は隨分數多の獨逸婦人にも遭ひ其内で最も

△學問ある賢婦人

も二三人認めましたが、概していへば智力の點に於ても、創作の方に於ても趣味の點に於ても是等の尤も學問のある婦人ですらも、英國の婦人に比較すれば餘程劣つて居る樣である、殊に人と談話する時など、兎角ギクシヤクして一向に面白味を感せず、事物を考案し意匠を企つる力などは餘程乏しい樣である。獨逸の男子は其家庭に於ては非常の趣味を持つて居ます、此の點は英國よりも勝つて居ますが、併し、

△家庭の整理

に至つては遙かに英國に劣つて居ます、第一衞生の點に於て、第二食物の點に於て、第三料理の點に於て第四室內裝飾の點に於て、いづれも獨逸婦人は英國婦人よりも劣つて居る、獨逸の食物は非常に重くるしい割合に滋養の少いものを用ゆるから、自然料理も其の通りで蛋白質の物に乏しい、又室內の裝飾などは餘程古めかしく殆んど英國の五六十年前の圖案を其儘用ひて居るかと思はる樣で食物と同じく裝飾までが、極めて重くるしくて美術的でない、英國の室內裝飾が、最近五十年の間に長足の進歩をして居るにも拘らず、獨逸の裝飾は其園藝美術の濃厚なるが如く如何にも重くるしく古めかしく美術的でないのは所謂新進國の總てが絢爛でまだ平淡の域に進まないのであらう。さればといつて獨逸人に美術思想が無いのかといへばそうではありません。獨逸の家庭で最も誇るべきは

△獨逸人は非常の音樂家

であるといふ事です、實に獨逸人は男子と言はず、婦人と言はず、音樂の價値を了解し其の趣味に富みたる事、世界列國の中いづれの國民といへどもトテモ企て及ばさる程で、大概の家では嚠喨たる奏樂の音は響き嫋音なる唱歌の聲はきこゑ、他所の見る目にも、さも其の家庭の樂しそうな事が想像されます、誠に音樂は家庭に非常な趣味を與へ、價値を有するもので是れが爲めには一層和樂の情を增し、快活の念を惹き起すなと家庭に於ける音樂の價値は無限無量といふべし、斯る趣味に富みたる獨逸人は實に羨ましく思はれます。要するに世界文明國の國民は獨逸の男子よりは學藝の點に於て智識の點に於て、又その外の點に於て模範として得る處ろがありませう。併し獨逸の婦人からは

△現在の狀態

では比較的學ぶ事は少からうと存じます、何故かと言

ふに、既に記せる如く、近年に至るまでは男子と同等の教育を受けざりし爲めに他の歐米の婦人に比較して非常に劣つて居るからではあるが、今後若し男子と同等の教育を受くる機會に接した曉には、隨つて擧ぐる事は澤山あらうと思ひます。

戰雲譚海

磨劍生

▲陣中の盆栽

仙臺朝顏會の會員に陸軍一等看護手久保節氏なるものあり、氏は斯道の黒人とて、旭日に開く此の花の姿を品評し、又は手づから丹青して同好の士に示すを道樂とし居たるが、今や風雲騒しく、軍籍にある身の悠々庭上の花を賞するの時ならざるより、銃劍を帯して出征の軍に從ひ、虚空に爆裂するすさまじの火花を目前にして、腥風血雨の衢に奔走する事となりたり、去る程に或る日進軍の砌、ふと傍の人家を見れば、朝顏の未だ芽をふきたる許の卵葉、籬の許に生え出で丶、心なき支那人の仕業とは見えぬまで珍らしきに、例の數奇心押へ難くて、主人に請ふて十株許の苗を讓受けたるも、戰地の事とて適當なる鉢も見當らざるより、有合す缺皿に移し植えて、掌の玉といつくしみ居れりと同氏の音信に見えたり、明朝の日光をも待たで散るを覺悟の戰塲に在て、猶は此風流韻事ある事、日頃の素養も思はれていと床し。

▲武性軍曹

南山の役第三聯隊第三中隊より選拔されて彼の地雷火踏の決死隊に加はり、遂に名譽の戰死を遂げたる軍曹長妻金次郎氏が五月十三日附を以て、戰地より京橋川口町の養家に送たる消息の内に、戰塲の生活を詠じて

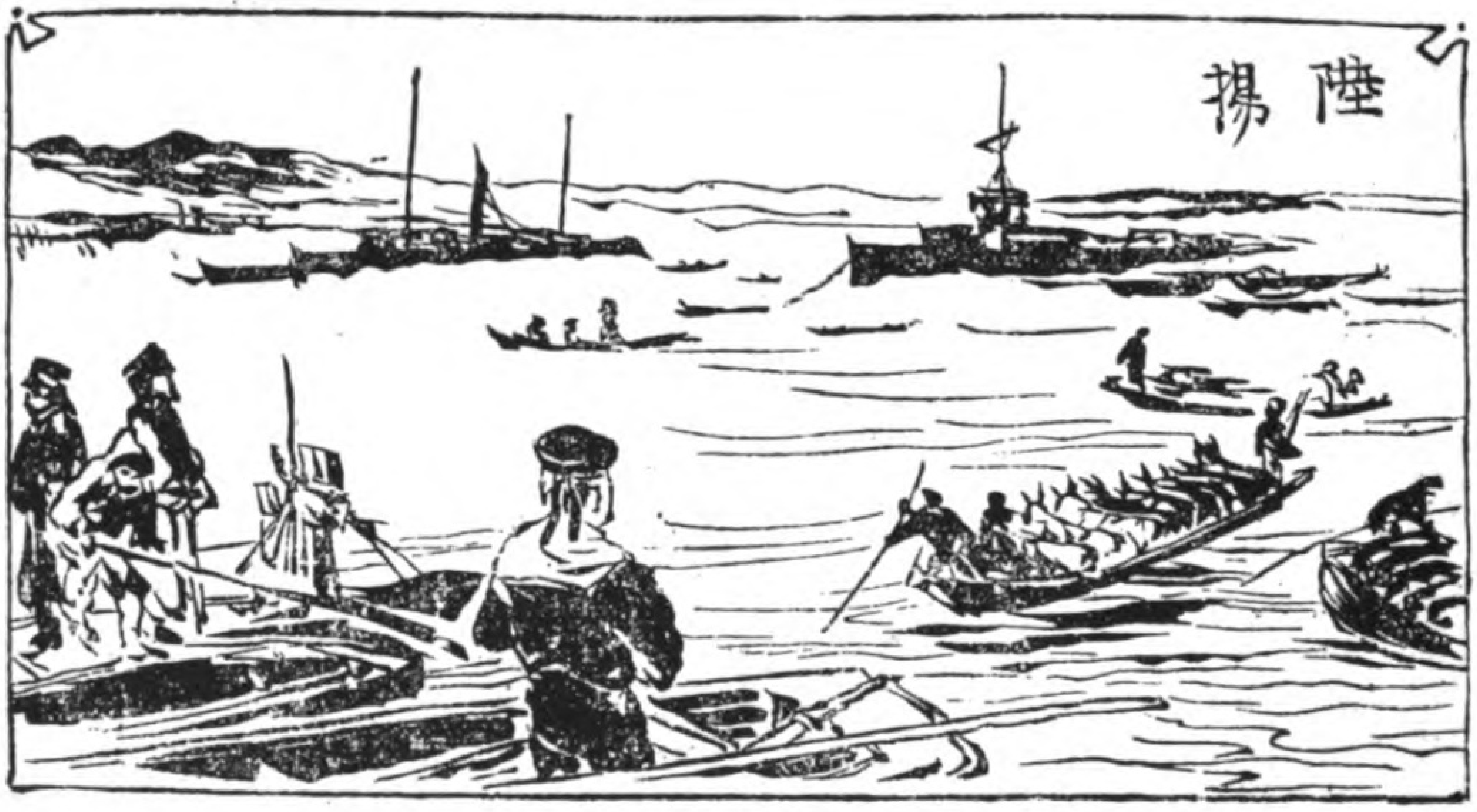
　有がたし君のみ君の露營とは
　　武性者にはこの上もなし

とあり、あゝ此の歡苦中樂を認むる武人氣質を詠じて餘情殊に深し、而も君のみ君のまゝ露營したる君は、

遂に着のみ着の儘にて戰死し、また着のみ着のまゝにて骨を異境の地に埋むるに至る、われ等は武性軍曹として君の名を記憶すると共に永く此の遺詠を愛誦せんかな。

▲日夕給仕の盆

是も南山の役に戰歿したる第一師團附屬一等卒秋元萬吉と云ふは、府下大井村の出身にて、平素より稼者として孝行者として郷黨に評判高く、入營后も休暇日には家に歸りて父母を慰め、尙ほ時間の剩すあれば、軍服を野良着に着替へて耕作を手傳ふといふ程の心掛よき若者なりしが、今次召命を受けて出征の途次、廣島より嚴島產の盆四五枚を小包にして親元に送り屆け、且つ書信の端に



自分は今を限りに父母長上に給仕する事もならぬ身の上なれば、食事の度に此の盆を用ひて自分の面影を忍び呉れよ、

と必死の覺悟を認めありしに、越えて一月餘り、果して南山の土となり、隣村出身の兵加藤榮吉といふものより、彼の遺物なる毛髮及び所持品を送られ、且つ奮戰當時の狀況に關する巨細の報告を受取りしかば、彼の遺族は戰友の厚誼に感涙を流し、扨て彼の盆を取出しては、若しも悴の死顏が此の盆に映りて見えもやせんかと、左視右睹、悲嘆にかき呉れしとなん、何ぼう哀れ深き話ならずや。

▲兄弟戰地に遇ふ

一たび故郷の山水に訣別を告げて

萬里長征の途に上るもの、生死を共にする戰友の外は如何なる朋友にも逢ふべしとは思ひ設けざるべきに、何ぞ計らん、肉身の兄弟ゆくりなくも戰地に面を合せて、且つ驚き且つ喜びたりといふ奇談あり、茲に歩兵少尉添野精一氏といへるは、栃木縣下都賀郡絹村傳左衞門氏の次男にして先に出征し、長兄宗太郎氏も亦た程なく召集され、砲兵輸卒として戰地に赴き、共に遼東の野に轉戰しつゝありしが、或る日の進軍に不圖面を見合せ始めて我兄我弟の等しく此軍中に在るを知り、剩さへ郷里にて徴發されたる我家の馬匹さへ再び元の飼主なる長兄の手に屬し居る事を見て、奇異の思ひをなし、早速此の趣を弟少尉より國許なる末弟信氏に宛てゝ書き送りたるが、文事の素養も淺からざる人とみえて、筆致仲々に趣味あり、曰く、金州の北某地點に於て偶然長兄宗太郎に邂逅仕つり候不可思議なるは人の行末生きて再び逢はじとまで思ひ切りたる長兄に八重の潮路を隔てたる遼東の野に相逢ふさへあるに而も長兄が扱へる馬匹は是なん年來手しほにかけ飼ひ馴らしたる我家の栗毛駒にて候事にて長兄の物語にも初めより手しほにかけし我馬の再び我手に入るべしとは夢にも思ひ設けざりしも圖らず栗毛に逢ひしとき彼が一聲我を見て高く嘶きたるときの嬉しさ飛立ばかり狂喜して直ちに長官の許を受け斯くは戰地にも起臥を共にすること不思議と云ふも愚かなるに今又た汝に逢ふことの如何に不思議に候はずや御身は少尉我は輸卒、役こそ異れ御互に國に報ゆる奉公の念慮に相違ある可からず努め生還をば期し給ふな去らばと許り一揖して兄上自ら、栗毛に鞭ち添野少尉御達者での一言を殘して相別れ候時は我ながら夢かと許り暫時惘然として自失仕候」と、あゝ此兄弟、此の栗毛、戰塵濛る備に期せずして相逢ひし時の喜び抑も如何許なりしぞ、扨ても奇縁とや云はん奇遇とや云はん。

▲陣中の芝居

六月二日、我が第一軍が鳳凰城を距る里許の康家堡子に於て九連城以來の戰死者招魂祭を執行したる折、式後の餘興として兵士間に素人芝居の催しあり、舞臺は

蛤蟆塘の激戰に名譽の戰死をなしたる故牧澤大尉留守宅の塲を見せたるものにて、大尉の從卒某が九連城陷落後故鄕に歸りて大尉の留守宅を訪れ、未亡人や子息の前にて戰塲の模樣より大尉が戰死當時の壯烈なる有樣を涙ながらに物語るといふ筋にて、種々の軍用品を用ゐて巧みに道具建をなし、書割萬端も遺漏なく整ひ未亡人に扮するもの、從卒に扮するもの孰れも芝居氣あるものを撰びたることゝて中々素人の催しとは思はれぬ出來なり、殊に從卒が主人の最期……悲絶壯絶の光景を物語るあたりは、忠臣藏の平右衛門もどきなれど、其よりも舞臺が大きい丈一層立派にて見榮あり、而も演者は身當時の活劇を經來りし勇士の事なれば、其の所作眞に迫るの妙を顯し、見物の將校達も覺えず戎衣の袖を濕し、當時の大悲劇を想起して、感慨無量のものありしと。

▲筐は唯だ煙草の吹殼

水雷敷設隊臺北丸に乘組み旅順港口に任務執行中爆發の厄に罹りて戰歿したる海軍二等兵曹松田歌次郎氏の遺族を京都市上京區千本通一條下る西中筋町の家に訪ひたる人の話に、氏は昨年五月兩親に請ひて呉海兵團に入團したるが、昨年十二月二十四日午後七時頃、向ふ十日間の歸休を許されたりとて歸省し「古着の襯衣も洗ひたし、久々であるから此水兵服で見物旁々世話に成つた親族に禮廻りもするつもり」と、臺所に來りて妹達が襷掛の姿を眺めながら卷煙草を吸ひ居たるが、軈て其三本目を喫み盡したる頃、突然「電報」は投込まれたり、披き見れば即時歸團せよとの命令なれば、歌次郎氏は夕食をも認めず、支度そこ〳〵姉さと女に見送られて京都驛より乘車したるが、此の二三本の吹殼こそ實に氏が生家に殘すの紀念物とは後に至つて知られたれ、されば訃報に接するや、母親せい女は涙に呉れて、歸ると直ぐの電報に、顏をも碌に見はせず、優しい言葉も交す間も無く、立たせやりしはいと痛く殘り惜しけれ、誠に煙草の煙よりも果敢ない別離となりましたと、弔問の人毎に語りしとか、理切めてあはれは深し、親御の眞情。

▲奇特の遺言

あはれ優しの乙女なる哉、茲に埼玉縣人尾崎虎之助といふ人に今年十五歳の娘あり、女の身として軍國に盡すは赤十字社の看護婦となるに若くなしと聞けば、いかで已も其の一人となりてんと殊勝なる志の程を願ひ出でしも、年齢不足の故を以て願意を受理されざるに、悶々として樂ます、遂に病を發してみまかりしが、臨終の際の遺言に、十五年の長の月日、養育の御恩を外にして先立つ不孝は御詫びの爲樣もなし、されど斯くて果つる妾可愛しと思召さば、妾亡き後、親戚や友達より贈らるゝ香奠は擧げて赤十字社の救護費に寄附して宿望の萬分の一を果さしめられたし、是ぞ妾が此の世に於ける最后の願ひ、是非に御聞届け玉はれかし、とありければ、實父虎之助は右の趣を具して金十五圓を赤十字社に寄附したりとぞ。

▲露軍に在る女武者

歐露より極東に輸送せられたる露國軍隊の中に婦人の騎馬武者あり、花にも比へん可憐の姿を嚴しく武裝して、逞しき滿洲馬に跨り、サツト乘り出でたる氣配は、勇氣滿々として三軍を叱咤するの慨あり、抑も彼は芳紀正に十九歳、其の名をアントニーナと呼び、歐露ナラートフ市の住人なり、幼くして父母に別れ、兄弟を失ひ、孤獨寂寞の身となりて便るべき方もなく、困苦の中に身をも心をも鍛へたる程ありて、世の常の少女とは違ひ心樣雄々しく、豫て事あらば國家に盡さんと思ひ居たる折柄、今春日露戟を交え本國より戰地に向ふもの多ければ、女ながらも義勇奉公の念は人には後れじと、郷里より出發する第二十六狙擊聯隊の第三大隊に從軍を請ひ、飄然汗馬に鞭打ちて郷關を出でたり、元より貧苦に育ちたる身なれば、出發に臨みても一身の外携ふべき旅具とても無く、着のみ着のまゝにて出立ち、行手はてなき東亞の地に向ひしも、途次、昔に名高き西伯利の飛雪は繽紛として紅顏を打ち、朔風は頭髮につれなく當りて、其の困難名狀すべくもあらず、而も身に蓄儲なければ貝加爾湖すら徒歩にて渉り、備さに櫛風沐雨の辛酸を嘗め、辛うじて哈爾賓には到着

したり、然るに司令部よりの命令にて此地より先へは女子を伴ふべからずとの事に、アントニーナの失望落膽一方ならずさりとて、此儘郷里に引返すは面目なし・切めては劍戟銃砲の間に赫々の武功を樹て得られぬまでも、野戰赤十字社の看護婦になと爲て伴ひ玉ひてよと願ひ出でたるも、是れ亦た公の資格なければ協ふまじとの答に、彼女は今や進退玆に谷つて行きもならず歸りもならず、天涯漂茫の寒野に取殘されて訴ふるに所なく、意氣は日に消沈して愁雲眉を閉ざし、今は唯だ死して怨を地下に呑まんずるより外なきの苦境に陷りたりしかば、曩きに彼女の從ひ來れる第三大隊の一士官之を見て其



の心中を察し、百方盡力の末、哈爾賓駐在赤十字社支社の衞生部隊に入勤せしめたれば、アントニーナも漸う心を安め・救護部隊の前進を待つて戰地へ向ふこと丶なりしと、クリミア新聞に見えたり、あはれ我國には此少女を驚かすべき女丈夫はなきか、あはれ我が同胞中より幾多の巴、板額出でこよかし。

▲別れの音色

由來名手の顔合に面白き話多し、玆に大阪市土佐堀裏町後藤某方に、東西二個の尺八吹奏家がゆくりなくも邂逅ふて、妙なる音色を合せたる話あり、其の一人は大阪の名手中尾都山氏の高足の門弟と聞えたる北原篁山氏にて、他の一

人は東京隨一の指南家宇田川作董氏とて彼の風流艦長八代大佐の師匠なり、二人は互に奇遇を喜び・初對面の辭儀終るや、胸襟を開いて談は斯道の奧儀より八代大佐の妙技に及び、感興涌きて盡くる時なし、軈て篁山氏は形を正し、小生は軍籍に在る身なれば、近日召命に應じて戰地へ行くやも知れずと言ひ出でたるに、作董氏また、形を改めて曰く、そは男子の本懐と申すべし、隨分功名を建てられよ、我れ今君の爲に餞別の意を表せんとて、やをら歌口濕しつゝ、自家の秘曲なる「さんや」の一曲を見事に吹きすましぬ、流石は名手の音色とて嚠々切々、續くが如く斷るゝが如く、或は太く勇しく、或は細く哀しく、梁上の塵も爲に動き、空飛ぶ鳥も爲に翅を休むるかと思はれたるに、耳傾げたる篁山氏、痛く感に堪へ兼たる面持にて、小生等の到底及ぶ所にあらずと謙遜し、扨て後、八代大佐が仁川沖にてものせしといふ千鳥の曲

　鹽の山さしでの磯に住む千鳥、君が御代をば
　八千代とぞ鳴く……八千代とぞ鳴く

を吹奏せしに、作董氏亦たいみじく其の技を賞め稱へ、頓て一封の書狀を認め、君他日戰地に赴くことあらば、海陸塲所こそ異なれ、不思議の機會を得て八代大佐に逢ふこと無きにも限らじ、若し其の折あらば、何卒この書狀と共に秘曲の「さんや」の譜を傳られよと賴みしにぞ、篁山氏は快く之を諾し、己が不斷息を吹き入れ居る手馴の尺八一竿を作董氏に贈り、小生今君と此處に別れては再會を期せず、願はくは之を小生の紀念とも思召して斯の道の人々に吹き傳へて給はれ、よしや小生逝き異域の土となるとも、君に吹かるゝ尺八の音色こそ千部萬部の讀經供養にも增して嬉しかるべしとて潔く袂を別ちしとなん。

▲新高砂尉と姥との和歌

京都聖護院熊野神社境内なる老松の許に手づから箒を取つて日毎朝淸めする老夫婦あり、されば此のあたりの人々は是ぞ高砂の尉と姥の再來にて、紅梅殿に往きかひし其の世の樣もかくこそと噂し合へるとなん、抑も此の尉といふは當社の宮司岸本業壽翁にして、從四

位岸本維明翁の五世の孫に當り、今年八十四才の高齢に達しながら尙杖を用ゐず、矍鑠として最まめく〵しく社務に鞅掌し居らるゝをもて、人々有繋に百三十六才迄長壽を保ちし維明翁の子孫よとたゝへ合ひ、又た姥は翁の配にて時子といひ、已に七十九才に及びたりといへど、尙ほ鬢髪黑くして腰も屈まず、遠路の往來にも車を用ゐしことなき程の壯健なれば、世の婦人達之を見て芽出度き人々かな、我等も斯くこそありたけれと羨む、扨て二人は朝毎に甲斐々々しく出で立ちて境内の彼方此方を掃き淸むるを例とせるが、二月宣戰の詔勅降りてよりは皇軍の連勝を祈り奉りて一日も怠る事なく、且つ戰勝の和歌をものして、之を氏子中に示し、案を打ち膝を撫でゝ大笑する有樣、誠高砂の尉と姥との面影も偲はれて、氣高くも亦尊く覺ゆるとかや。

老夫婦のうた

八十四翁　業壽

六十餘りとし若からば我もまた
御はたの本にたゝましものを

仇をなすゑみしさだむる皇軍の
勝をいのらぬ日はなかりけり

御軍の勝をふれ行鈴の音の
四方に聞えていさましきかな

七十九媼　時子

もろこしの海山かけて日のみはた
なびく光りやまばゆかるらむ

しべりあの雪も氷も解ぬらし
御はたの日かけ照りかゞやきて

▲御詠帛紗　去五月八日府下の新聞雜誌社に於て奮起奉行したる凱旋提灯行列の際特に海軍省樓上より御覧ぜられたる　兩内親王殿下には御感詠を下し給へるは東京市民は勿論全國民の紀念とすべき事柄なりとのことより今回三井呉服店に於て右御詠を謹寫し尙其事由の大略を付記したる精巧なる縮緬帛紗を調製賣出したり。

彙報

▲兩内親王殿下の御仁德

高輪御殿に在す常宮周宮兩内親殿下には時局に對し大御心を煩はし玉ひ御仁德を垂れさせ玉ふ事は毎度承り及ぶ所なるが、去六月三日芝區三田君塚町外十八ヶ町の有志三千餘名が祝捷提灯行列を行ひ高輪御殿に參候して兩殿下の萬歲を祝し奉りし折も兩殿下には御玄關端近まで成せられ一同へ慰勞として金五十圓御下賜の命ありて有志總代之れを拜受せしが有志等は其後該恩賜金にて何か紀念品を造らんものと協議中なりし處今回愈よ美事なる聯隊旗十五旒を調製して各町三旒宛を備へ以て兩殿下の御仁德を永久に仰ぐ事にしたりと云ふ。

▲東京婦人教會々員

は曩に赤十字社へ晒木綿七十反を寄贈したるが更に去月廿二日午前九時より築地本願寺對面所へ會員五十二名集會の上各々熱心に負傷者用のキャラコ帽子を裁縫し其出來數五百を取敢へず赤十字社へ寄贈せり。

▲篤志看護婦會

に於ては各宮妃殿下を初め各會員の調製したる患者用夏衣千七百五十箇を廣島豫備病院へ二百五十箇を呉海軍病院へ二百五十箇を佐世保海軍病院へ孰れも此程寄贈の手續を了したる由。

▲在外婦人の寄贈

在布哇ホノルヽ齋藤領事夫人豐子は同地愛國婦人會を代表して金一千百八十九圓六十七錢を篤志看護婦人會戰時救護費中へ寄贈せられたりとぞ。

▲麻布產婆組合の美擧

麻布區内の產婆業者組合五十餘名は去月十八日麻布區役所に會し一名五十錢宛を醵出し出征軍人家族に對し寄贈する事並に家族の產事には無料にて取り扱ふ事を決議せりと。

▲軍人家族授產婦人會

にては役員協議の上麻布區廣尾町一三七の會場を赤阪檜町十元愛敬小學校跡に移し、尚ほ黑木百子夫人の盡力にて陸軍省に交渉し軍隊の裁縫を引受くることになし、目下卅餘名の出征者家族毎日出席して裁縫に從事し居れり、同會の內規は始十錢を與へ、伎倆の進むに從ひて賃金を增加し、又た幼兒携帶の者は其子を同會にて保護する事になしありと。

▲外國婦人の軍隊接待

神戶居留地にテーラー氏なる米國人あり久しき間スミスベーカー商館の支配人として人望ありし同人の妻は同じく同米國人なるが豫て奇特の行爲あり、先般第十師團出征に先ち同地滯在中日々市街を兩休にて行動の折から同氏宅の門前空地にて休息をとり、或者は石に腰を掛け或者は地上に坐し、而かも日中樹蔭も無きに、同夫人は此の有樣を見兼ね己が廣き庭園に樹木の繁茂し居るを幸ひ是方へ來り休ませ玉へと隊長に申し進めたれば、同隊の人々は其の好意を謝して直ちに入りて一時間餘の休息を取りし由、加之兵卒等には卷煙草二箱宛を與へ上官には相應の饗應をなしたる由なり、其後一週間餘りの内に數箇の中隊も同樣の取扱を受け其の人員千五百人に達し且つ紀念の爲に寫眞を撮映して、之を各將校に送致したる由、奇特の事といふべし。

▲倫敦と日本婦人

近頃英國衆議院に於て議事堂修理委員會開かれ堂内の換氣法其他に就き種々討議ありたる際曾て香港に漫遊せるとある議員ウエーナ氏起ちて曰く議事堂內に充滿する塵埃黴菌等の微細なる有害物は皆是れ議員が靴の儘にて昇降を敢てするより生ずるものなれば宜しく日本より二名の年若き美人を雇ひ來り議員の玄關に來りて先づ玄關に入る前其日本美人をして議員の靴を脫せしめ之に代へて草履或は上靴を穿たしむるを日本の習慣に於けるが如くすべしと眞面目に論ぜしかば滿堂の喝采哄笑暫し堂を撼かさん許りなりしと。

又た日本の國威赫々たるより英國人にして日本の國籍を得んと欲し歸化の手續きに就き日本公使に問合すもの少からざるに至れるを以て公使は之に關し稍や諧謔を含むの勸告をなし此際外國人が日本人となるべき最も容易迅速にして且最も愉快なる方法は日本婦人を娶るにありと云へりしと。

▲戰地被保險者の注意

生命保險被保險者が戰爭其他の變亂地に赴く時

は豫て特別保險料を拂込み置かざれば保險會社が保險金支拂の責に任ぜざるものあり或は保險金額を減少するものあり尤も各會社の多くは保險約款に之を規定せるも中には約款中何等の規定なきものあるに付軍人たると否とを問はず總て戰地に赴く被保險者は豫め特別保險料を拂込置て契約の安全を圖るを最も肝要なり。

▲暑氣と流行病

鳳凰城附近に於ける昨今は日中八十五度以上に上り時としては九十度に達することもあり夜間は六十度内外に下り衞生機關の整頓に拘らず相當の病兵を出しつゝあり頃日は一部地方には流行病に侵さるゝものを見受くるも格別激甚ならず殊に右翼方面は絕ねず小衝突あり一地に駐留せる爲めにや最も病患影なく搜索警戒等の勤務最も頻繁なる騎兵隊の如きは殆と病患なしといふ。

▲露國赤十字社の腐敗

露國内部の紊亂甚だしきは人の知る所なれども世界的博愛事業たる赤十字社内部に此事ありとは實に露國の爲嘆ずべき次第なり露國國母陛下の特に信賴を垂れ賜ひ「露國の忠福者」と稱せられたるシウエドーフ氏は株式相場に手を出し遂に自己監理の赤十字社々金の中百万ルーブルを費消したる事實此頃に至り發覺し國母陛下には頗る此事を憂慮せさせ給ひ御手許金より右費消額を償はれたるも目下此事件の責任問題露都に起りガーリチン侯及びラムスキー伯の兩人が不注意の廉を以て其責任を負ふ事となるべしとぞ。

▲瑞西婦人記者の從軍志願

瑞西の女記者ミセスツルセンガーは有名なる平和論を著はし佛國博覽會に際して喝采を博したる婦人なるが此度瑞西國の六大新聞の依賴を受け戰地通信員として來航するに付赤十字事業の創立者たるヘンリデウナの懇切なる委任を受け戰地に行て親から赤十字看護婦たらんことに決心し十赤字社と外務省とに願出でたる處我が當局者にては都合上其の出發を謝絕したる由。

▲女學校寄宿生の中毒

栃木縣下都賀郡立高等女學校寄宿舍生の全部百名内外及び敎師三名は去月十八日晚餐に銅製鍋にて煮たるものを食し悉く中毒して苦しみ出したるを同校にては秘密に附し置きしに本日に至るも全快せず爲に授業を休止するに至りしといふ。

▲女子高等師範專修生募集

東京女子高等師範學校は來る九月入學せしむべき私費數學、物理化學專修生二十六名を募集するに付志願者は八月二十五日迄に願書を提出すべしとなり。

▲音樂學校生徒募集

東京音樂學校にては今回豫科三十名、乙種師範科二十名を募集するに付志望者は八月二十日までに入學志願書に履歴書を添へ同校へ願ひ出づべしとぞ。

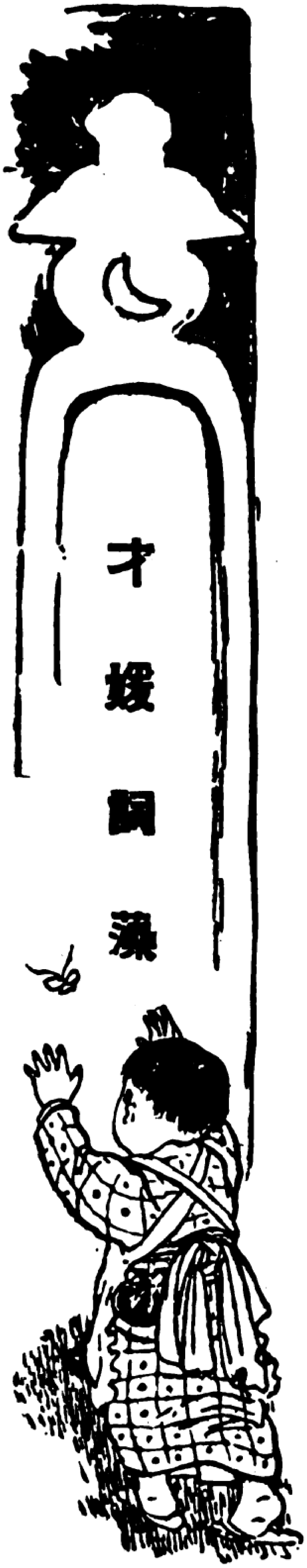
新刊紹介

▲家庭十二ヶ月料理法　赤堀峯吉氏著　大倉書店發行

この書は當時割烹の大家赤堀翁が女子大學を始め各女學校に於て敎授せし日本料理法を詳細に記述したるものにて普通一般の料理法は勿論、精進料理、會席料理、儀式の献立、菓子の製法等大凡割烹に關する智識は一切網羅してこれを四季十二ヶ月に分ち家庭の實地に試み得るやうに說明を施したるものなり。近來女子教育の隆興に伴ひ、割烹に關する書籍の上梓さるゝもの頗る多くして料理を學ぶは極めて容易なるが如きも其の呼吸と方法とを說明したる書少きを以て讀者は常に遺憾とせり、然るに本書は遉がに其の一代の名家が多年研究の餘に出でし事とて其の順序方法を說くこと極めて叮嚀にして分量、加減、體裁、等一々明示して如何なる素人も一目の下に了解首肯する樣說き明したるは本書の價値ある處なるべし。殊に卷頭の圖解幷に食品分析表の精細なる他の尋常料理書に類なき處ろなり(定價上下二冊合して金壹圓)

▲男女の研究　大鳥居弃三氏著　光風館發行

生理の研究は進んで人類の研究となり、人類の研究は又進んで男女の研究となれり、本書は生理上より、男女の研究をなし進んで生活上より論究し、生殖器に及び男女の關係に及び、雌雄、陰陽の理を推究して吾人に一種微妙の感想を與へんと期したるものゝ如し、卷中其の生殖器を說く處ろ普通醫學書の企て及ばざる處ろあるは此の書の特色といふべし(定價五十錢)



才媛詞藻

（天）綠陰讀書　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　奥田くに子

夏をよそに詩集讀むなり古へは
　　そみな、え入らぬ山の木蔭に

暑中休暇に學友打連れて避暑旅行を試み、其の昔は女人禁制なりしと傳ふ靈山の奥にまで攀ぢ登りて、綠蔭樹下に讀書吟咏を樂にするの快を表面の本とし、尙ほ明治の女子が盛代に生れ合せたる御蔭には、昔の婦人の曾て窺ひ得ざりし學問の道にも奧深く分け入らるゝ事を裏面に含めたるもの、意至り調至りて克く要點を盡せり、而も風致を最も懇切に讀み出でたる手腕に至りては、凡手の能くする所にあらず、

（地）軍隊慰問狀の端に　　　　　　　京都高倉御池上ル　四辻清子

君のため捨つる命といよゝなほ
　　まさきくゐませ大和益良夫

曾聞共に嫁し、甚れ死を期する軍人に向つて犬死を戒め、願くは生きて永久に武勳あれかしと祈るもの、婦人の至情を歌ひ得て餘情無限。「いよゝなほ」の一句最も力あり、

（人）夏海　　　　　　　　　　　　　　鹿兒島市　やす子

磯草をゆする夕風香たえて
　　沖べにもゆるいさり火の影

平和なる漁村の光景見るが如し、「磯草をゆする」の語、最妙あり、

秀逸

○夏海　　　　　　　　　　　　豐前門司小森江　兒玉悦子

日の御旗樹つる島根の家見えて
　　朝霧晴るゝ夏の海かな

開戰の當時、所謂日本晴の景色を描へたり、

○軍隊慰問狀の端に　　　　岡山市吉田町高野村山西　早瀨壽滿子

幼子は我れあづからむ君はたゞ
　にくき荒鷲とりひしぎてよ

情味可掬、島の心掛ありて初めて後顧の憂なし、

◦○綠蔭讀書　近江國神崎郡南個荘村川並　外村とみ子

清水めぐる青葉の下の草の庵に
　白衣の翁ひとり書をよむ

雅致高し、

◦◦◦○軍隊慰問狀の端に　山城國紀伊郡伏見砂川　今村しやう子

からくにの虎ふす野邊に根をしめて
　とはにかほれや大和撫子

着想奇警、末段涼し、「根をしめて」原作には「咲きそひて」とあり、

◦○綠蔭讀書　三重縣安濃郡新町　神谷よし子

釣垂れし人は徴されて我一人
　かはらぬ木蔭に文を讀むかな

感慨無量、

◦◦◦○軍隊慰問狀の端に　備中玉島新町　大西美佐尾

島の國は女守らむ男の子等は
　進めよ撃てよ大陸の敵

斯の如きは、我が島帝國婦人の面目、眞に人意を强うするに足る、

◦◦○夏海　北海道旭川町　藤本鳥羽子

夏の海に靜かに走る舟見えて
　夕月淡し磯のまつ原

畫に似たり、

◦○綠蔭讀書　岐阜縣大垣町　上田君子

城跡の松の根方に讀書する
　翁のうしろに日は斜なり

表情細叙、城趾といひ、松といひ、翁といひ、讀書といひ、斜といふ、用語の妙亦た至る。

○夏海　牛込中町十三地　田上小金

沖は暗く曇りながらも磯の邊は
　七村かけて夕日かげらふ

面白し、

◦○夏海　京都三條大橋東三丁目　西澤梅子

汐あみて子等の歸りし浪の上に
　月唯だひとり浮きつ沈みつ

妙、

◦○綠蔭讀書　津市玉置町十番曾招方　永田靜子

畔の邊に牛を放ちて里の子が
　ひとり文よむ合歡木の下蔭

詩趣饒し、

○軍隊慰問状のはしに　君子

大君のたのませ玉ふ我身ぞと
　深くも思へますらをの友

無難の作なり。

◐○夏の海　備前土道町 西大寺町　河本英子

いくばくの罪もなやみもあやしみも
　消えて跡なき夏の海原

何等の清爽ぞ。

○夏の海　越後　しげ子

さら〳〵とよせては返へす白浪の
　底には夏の神なかるらし

涼を言はずして而も涼味を覺ゆ、佳作たるを失はず、

◐◐○夏海　京都三條大橋東三丁目廿九番　西澤まつ子

大船の帆柱の上に月出で丶
　涼しくなりぬ夏の海原

好畫趣、構想規模大なり

◐◐○綠陰讀書　河内北河内郡川越村　櫻井喜子

詩集手に昨日の君や又も來し
　若葉を洩る丶諷咏の聲

雅意を得たり。

○軍隊慰問状の端に　河内國北河内郡交野村私部　矢寺はぎ子

もろこしの野邊の醜草なぎつくし
　かくはしき名を家苞にせよ

無難の作

◐◐◐○綠陰讀書　淺草平右衛門町一七内山方　那須美佐保子

青葉影涼しき窓に孫よびて
　戰記よみきかす髯白き翁

巧みなり。

佳調

（夏海、綠陰讀書、軍隊慰問状の端に）

● 夏の海靜にくれてわらぶきのあまの苫屋に月まどかなり　神戸　山下とめ

● 青葉吹く風に心もさそはれて暫し夢路を辿りける哉　和歌山　ふき子

● 都なる伯母が贈りし「ハンモツク」釣りてひねもす書をよむかな　岩代　菅野和子

● 谷水の音もすゞしき松かげに暑さをさけつゝ文を見るかな　東京　白萩

● 綠葉の茂れるかげにそみてふみよむ身こそ樂しかりけれ　栃木　横田千代子

● みつ枝さす若葉青葉の下かげに文よむをとめ聲の涼しき　長門　杉山きくの子

● 肥前 紅渓女史
青葉かげ今年もつりし「ヘンリエッタ」文讀むぬしはあらなみの上
● 島根 はな子
磯の邊に小石拾ひてたゞ一人波の歌きく夏の夕暮
● 尾道 野田なほ子
うつ魂の音のひゞきのそれよりも高きほまれをあげ給へかし
● 備中 荒木米
夏の日に露かとまがふ白浪のひまより眞帆の見ゑかくれして
● 越後 すみれ
行くからはあと慕ひますな益良夫よ君に捧げし命なりせば
● 肥前 わき子
日の本のみはたさゝげて君行かばみづから消ゐんしこ草の露
● 三重 神田みよし子
あらかれのとくる暑も海原は涼しき風のふき渡りつゝ
● 佐渡 さくら
白金のさゞなみゆらぐ港江に夏をよそなる舟の中かな
● 美濃 山田愛子
神の國は女守らむますらをようてや十年の恨ある國
● 京都 永松政代
敷島の日本心をまた今度くちぬ功に示せますらを
● 美作 登志子
見渡せば海原遠く白帆見ゐて夕風涼し大磯の濱
● 京都 香絆女
古郷はみなことなくて過しつゝきみのほまれの便りをぞまつ
● 長門 江木しか子

消いゐし絵たすけて青海原ながめて踏るますら夫のうへ
● 熊本 大童春子
夢らしき森のみどりをたてとして文よむ窓に蝉の音のそふ
● 秋田市 小瀬まつ子
しかりとて人に後ろなまさきくて歸り來まさんことは祈れと
● 磐城 鈴木紫子
帆を揚げて沖へと急ぐあま小舟舟歌涼し鹽竈の浦
● 和歌山 阪口志希子
なみ清く月かげ長き海原にしばしこぎ出て夏を忘れん
● 安藝 松阪梅子
沈みたる艦のマストに白鷗のとまれる見ゐて夏の雨ふる
● 和歌山 皆川露子
綠濃き青葉の陰をたどりつゝ文の林の奥に遊ばん
● 栃木 眞弓渓子
風添へば綠露ちる木の下にしばし讀書のおもしろき哉
● 近江 鳥居露子
しげりあふ青葉のかげのつり床に書よむ時ぞ夏なかりける
● 京都 永松八千代
こゝろあかで書を讀むなりまた今日も青葉若葉のかげをしたひて
● 牛込 林ふみ子
月きよみ舟をうかべてこぎゆけば濱風涼し夏の海原
● 博多 太田とも子
白布のながきおもひを巻き込めておくるや賤のたゞこゝろやり
● 佐賀 春子
夏木立みどりしたゝる下かげのいすによりつゝをとめ文よむ

● 佐賀　まつ

みどりなす松の精の下かげに書を友とし身の世わすれむ

● 下総　吉田治子

君見ませ夕立ちはれし海の上雲しづまりて虹たち渡る

● 駿河　斎藤武子

夕立の晴れし磯辺をさまよへば月ほがら〳〵波に頭ふ

● 埼玉　松木るい

草枕旅寝の月にみそなはせふうじこめたる撫子の花

● 佐賀　小林みつ子

うちましゝその功績をたゝへむにあまりに細き細き筆かな

● 曽川　前田きみ子

しけりあふ青葉が木に文よめば我あらひがみに涼風のふく

● 備中　高月静子

暁の身もつくす心はをとらじな君がほまれを侍へ聞ては

● 長野　輿澤　なんしん

風もすむ木の下蔭の苔の上に文よみながら入日ながむる

● 備中　武遠静枝

里はなれ家居も見ねぬ木がくれに文よむ人の架のやさしき

● 鶴木　安田文子

磯松の涼しきかげに釣たるゝ君は知らじ夏の暑さを

● 本郷　佐藤ふぢ子

聞くたびにこゝろいさめる勝いくさたちもつ君は如何にあるらん

● 四谷　山村ゆき子

夜網つり青葉のかげに文読めば夏もよそなる心地してけり

● 栃木　大島定枝

人々になくれなとるなむして我は祈らむ君の武運を

● 武蔵　木村こま

しばしとてふみふところに裏山の松の木かげにけふも暮しぬ

● 越後　中川とわ子

涼風と砕けさ波を友として今年も夏をよそにくらさむ

● 下野　可久子

晴れて木かげ涼しき芝の上に見ぬよの人を友とするかな

● 和歌山　曽川雪子

惜しけなく衣はし折り乙女子の濱の花つむ夏の海哉

● 播磨　郡　留子

青柳の下かげすゞし弟の釣するひまをいざ書よまむ

● 青葉女

競走にまた遊泳に集つりに遊ひはつきぬ夏の海かな

● 備前　片上星子

川そひの大木がもとに宿かりて文をかたへにれむるをさなご

● 肥前　古谷よしゑ

夕日さす浦戸の濱の末晴れて空よりかへる夏のつり舟

● 京橋　鈴野千代子

天地の耕やとりまさむ國を思ふ増夏武夫がきゝさ心に

● 愛媛　中村芬

他所になき風さへふきて海原の夏の夕そすゞしかりける

● 東京　白萩

なか〳〵に春にもまさる心地せり日毎ふみよむ楽園のかけ

● 佐賀　立石数子

今日も又青葉の蔭に文よまん妹の蓆をむしろにはして

佐賀　梟　菊

大君につくす大和の武夫よさきくていませ満州の野に
埼玉　馬場よしぎ

家の事かへり見はせで一とすぢに盡せよ我背益夫の道
深川　遠藤たみ子

なにわねのあしのはわけの風うけて釣する舟の二ッ三ッ四ッ
石見　宮内豊美子

國の為君の御為のますら夫はいつち行ても神やまもらん
河内　大矢たれ子

み心の誓ひもあれとわれは吾君まさきくと祈りつるかな
伯耆　柏木幸子

みどりせるさくらが下の釣床にひすゞしく文をよむなり
秋田　静子

世の人はいかに讀めん夏の森われは千草の初編なぞ思ふ
信州　なみ子

おく深き青葉の里に文よめばすゞしき風のふきそ通へる
伯耆　相木すけの

たねかたき暑さをよそに脚かけ文よむ窓も涼しかりけり
熊本　羽田豊子

夕立は浪の上疾くすぎさりてにじうつくしき天草の瀬
備後　金原俊子

悠々と白帆の舟のゆく見ねて入江静かに夜風の吹く
プール女學校　森戸初子

闇はれてみどりしたゝる水の下なすゝみがてらに乙女書よむ
石川縣　きく子

水浴びる人のかつ見えかつ消ねて夏の海原今風もなし
美濃　波　米子

たゝかひの其たゝかひに打まさる暑さ暑さに戰はせ君
芝　川井喜久子

高麗の枇杷の木陰に父君と文よみたりし昔戀しも
神奈川　川井あさ子

月影もともにくだけて荒磯の岩うつ波の音ぞ涼しき
攝津　今木繁子

夏の夜を棹さす舟の月にふけて小唄にもとる和田の海原
豊後　大島きく

緑なす若葉の庭に文讀みつ遠き征途の兄君慕ふ
島根　愛子女史

青葉若葉庭涼しき夏の日を文讀み居れば君たづれくる
静岡　佐藤千代子

しばしとて取出し文を繙へぬれどなほ去り難き森の下陰
静岡　佐藤千代子

夕立はあしとくすぎて涼しくも白帆がゝれり磯の松原
静岡　高富安子

うす墨の繪の島遠くもやもなくむもひろき夏の海原
信州　山田きく子

谷川の清き流れにそふ松の涼しき庭に讀書するかな
大阪　中尾愛子

深緑そよぐ木陰にやすらひて文見る頃は夏なかりけり
埼玉　高島國子

かくはしきいさをゝたてゝ恙なく歸り來まさん時をこそまて

● 下野　戸田靈珂子

みづ枝さす木の下かげにやすらひて書見る袖に白き蝶舞ふ

● 肥前　宏　子

浮世さへ忘らるゝかないと清き絲の瀧に文繙けば

● 大和　しげる

風靜の磯音たかく海暮れて漁燈舫に涼風渡る

● 越後　内藤花子

海士が歌ふ舟歌とほくたそがれて月たゞ白し天草の灘

● 京都　永松入代子

忘れ貝今日も拾ふか郷人去年の渚わに夏を忘れて

● 京都　木田たつ子

濱松の涼しきかげにやすらへば夏を忘るゝ心地こそすれ

● 東京　松木かほる

何となく清き心になりにけり青葉のかげにふみよむ頃は

◎ 伊豫　眞鍋ゑつ

漁船行く小島のあたり雨晴れてすゝしさそふる夏の海かな

● 播磨　みどり

木枝さす庭の木立のあひだより妹が讀書のこゑきこゆなり

● 筑前　大坪貞子

波の音松の響も相和して白帆濃ふ夏の海原

◎ 伊豫　杉田文子

夕立に清められたる島の上をあきつ飛びけり海青くして

● 靜岡　鈴木ゆき

室してよ大君の爲國の爲やがては光りそはん其身を

● 熊本　安田文子

暑き日を神にたゆたふ釣舟はからき世渡るたつきなりけり

● 岡山　橋本芳子

いはかげに釣竿たるゝ人見ゑて夏の海原靜しづかなり

● 大分　加藤房子

木精く若葉茂れる下かげに上帝のたまひし讀書論する

● 長崎　松籟

あな床し花の姿の乙女子が青葉の影に詩集繙く

● 筑後　山口たけの

鍛てよりねりにねりたる日の本の太刀のきれ味示せ大丈夫

● 新潟　内藤ゆき子

千年ふるみさをぞ高き松の下に文よむ人の肩なつかしき

◎ 山梨　小林まつよ

なり〳〵は舟にひれうつ魚も見ゑて夕風涼し和田の海原

● 豊前　泉　ケサキノ

美くしき大和櫻を外國にさかして來ませ益荒男子よ

● 埼玉　高麗照子

よむふみも青味を帯ひてみゆる初夏もよそなる葉櫻のかげ

● 芝　秋浦紗子

潮あひてかへる乙女の袖すゝし夕日きらめくなつの海面

● 本所　天沼ますゑ

千萬の仇うちはらひ大君のみいつを四方にあげよ益荒雄

● 熊本　安田文子

若葉さす影もすゝしき窓の内にひもとく文の心よきかな

◎ 信州　鮎澤さち子

神守る我がつはものゝ太刀風に拂ひつくせよ醜草のつゆ

●文なみゝそでにもつゆのたまちりて夏をよそなる松のしたかげ　京都　服部千鶴子

◎去年の夏共にかたりし木の下に一人淋しく文を見る哉　神戸　岩松まさ子

●青桐の幹にもたれて今日もまたうたの集見る夏休みかな　京都　三の宮つゆ子

●釣網にちこれむらせて綠陰ゆかしき君よ詩集よみゐます　熊本　愛子

●風の色も青く涼しき木の下はひもとく文のおもしろき哉　越後　しげ子

●網引する海人はあつさをよそにして舟うた涼し夏の海原　相模　細川廣

◎伊勢の海波しづかなる夕暮につりする舟のをちこちに見ゆ　相模　吉原あい子

●かちどきの聲もとゞろに古里へ歸りきませや手柄たてつゝ　越後　しげ子

◎うつせみのうきを忘れて若緣すゞしきかげに書をひもとく　羽後　幸子

●滿洲の野にはひこれる醜草を苅盡してぞ君歸りませ　大坂　平生しつ子

●花散りて青葉となりし下蔭に君と樂しく文を見るかな　佐渡　元

◎夕されは秋もかろく打むれてけふのあつさを語る磯蔽　甲斐　石原登代子

和歌兼題

夕立　（〆切七月十五日）（披露八月五日）

瓜

世界八景

（ヒマラヤ山、ゴビ砂漠、ナイル河、アルプス山、ナイヤガラ瀧、セントヘレナ、赤壁、長白山、）

注意（世界八景は出詠者の隨意にて内一種だけ御撰みの上投ぜられたし）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲五行文

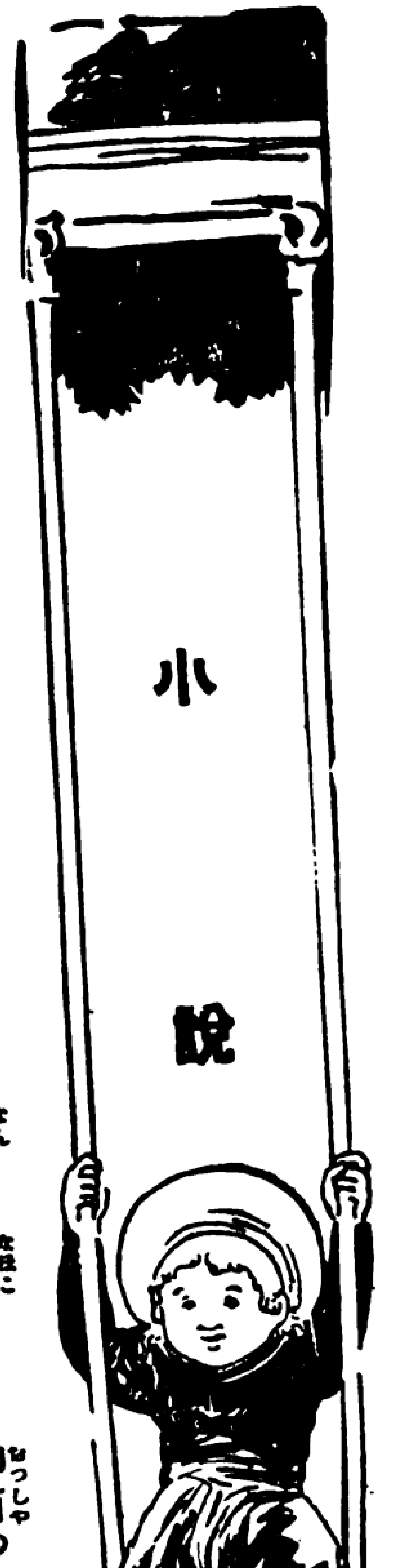
（村な家庭及び學校に採りたるもの字數二十字詰五行以内に限る）

▲寫生文

（〆切七月十五日）

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は原紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投寄原稿は一切返却せず



軍事小説

家の櫻

巖谷小波

中　寄宿者の密談

鹿島侯爵家の庭園で、恤兵園遊會の開かれてから凡そ六週間ほど經つてからの事である。或日直子は、操と寄宿舍の一室を共にしながら、真顔に成つて云ひ出した。

「平松さん！　私貴女に、此間から聞き度い事があるのよ。」

と、常とは變つて、何とやら意味ありさうな言葉に、操も容を改めて、

「何なの直子さん！　仰有つて下さいな！」

「そんなら云ひますが、ねエ操さん！　貴女此間から何だか私に隱してらつしやる事がありやアしなくツて？」

「貴女に？　何を私が隱しませう？」

「いゝえ、それがもう隱して居らつしやる證據よ。——貴女は此間から、時々梅田さん處へ入らしやるでせう。」

「アラ、そりやアちつとも隱しやしませんワ。一々貴女にも話してるぢやありませんか。」

「ですから、何もそれを隱してるたア云やしません。けども、その梅田さんへ、度々入らつしやる事に付いて、何か隱してる事があるでせう。」

「アラ……貴女もをかしな事云ふのねエ。梅田さんはお國の方で、此間も話した通りですわ。以前の先生の所ですもの、度々上がつたつてい丶ぢやありませんか」

と、辨解切りに勉める中に、はやその頰の染まつて來たのは、友の誤解を憤るとばかりでも無いらしい。

默つて相手の顔を見て居た直子は、此時わざと冷かに、

「さう……それは少しも關ひませんとも。貴女のお國の方ではあり、また以前の先生なんですもの、度々御尋ねに成るのは道理です。ですけども操さん！ 私はさう思ひますワ。貴女が若し私を、ほんとに信じて下ださるなら、また何事も隠さずに、打明けて下だすつてもよからうと思ふんです。かう云ふと、何だか私の自惚か知れないけども、貴女と私と、此の學校で一所に成つてから、まだ二年位にしか成りませんけども、何だか初から氣が合つて、こんな者でも私は、貴女の一番の親友だと思つてますよ。ですから私は、眞の姉妹より貴女を思つて、貴女には何様な事でも打明け、また貴女の爲めになら、どんな事でも厭はない心算なのです。それに貴女の方では……もしか私の僻見だつたら、どんなにでも謝罪りますけども、——何だか此間から、有体に云へば、此間の園遊會の日から、妙に獨でばかり考へて居て、私には今までの様に、親しく成さらないんですもの……私何だか氣に成つて、好い心地はしませんワ。……で、その譯も、私は大方解つてるんです。それなのにまだ貴女は、ちつとも打明けて下ださらないんですもの……」

と、初めは強ゐて落付いて居たが、果は段々身が入つて來て、他に誰も聞かぬと思へば、云ひ度い丈と殘らず云つたが、流石にまた云ひ過ぎたのを、我ながら耻らうてか、これも耳朶を熱しさせた。

すると操は、何思つたかずつと摺り寄つて、膝にあつた直子の手を、わが兩の手にぢつと握ると、身を震はする様に其所へ突伏して、

「あゝ惡かつた事！ 直子さん堪忍して頂戴！……私ほんとに濟まなかつた事よ。」

と、半ば泣く樣に謝罪るのである。

「アラ、何もそんなに謝罪らなくつてもいゝワ。……」

とは云つたが、今更慰める言葉に閊へて、手持無沙汰に友の背を撫でるばかり。

やゝあつて操は、その顔を擧げると、その赤く成つた瞼を數瞬いて、甘へる樣に見あげながら、

「直子さん！私ほんとに濟まなかつたの……ほんとは此間から、貴女に云はう〳〵と思つてながら、何だか云ひ出せなかつたのよ。で、今日こそ思ひ切つて云ひますが、……何うしませう？　私貴女に相談があるのよ。」

「何の相談？」

「あの……私……」

と、また何とやらはにかんで、鬢の毛を撫であげながらも、眼はまた膝のみ見つめて居たが、

「私、……事によると梅田さん所へ、行つてしまはなければ成らないのよ。」

「そうれ御覧なさいな！……でも、それはお芽出度いのねエ。」

「アラ、貴女は直ぐさう氣を廻はすからいけないワ。行くつたつて、何も……只行くんだワ。只寄宿するばかりなんですワ。」

「まアそうなの？　ぢやア梅田中尉の……」と云ひさして打ち消して、「お芽出度い話ぢやないんですか？ほんと？」

「もう何も隠しやしませんワ。只行くばかりなのよ。」

「そりやアまた何故でせう？」

「故何つて貴女……今度あの薰さんが、戰爭へ出てお しまひに成ると、後は叔母さん斗りで、他に東京には信賴に成る親類も無し、心細くつていけないから、それで私に來てくれないかつて仰有るの、私もお氣の毒ではあるし、さうかと云つて行つてしまへば、貴女と別れなけりや成らないし。……ですから私は、此間から考へて、貴女に相談しやうと思ひながら、何だかつひ云はずに居たもんだから、とう〳〵貴女に怨まれてしまつたんです。」

『さう……さうなの？　けれども操さん！只それ丈の事ならば、何も私に遠慮なさらないで、疾うに相談して下すつてもよさゝうなものねエ。』

と、云ふ言葉には、また操の行き詰つて、何とも挨拶の仕兼ねるのを、それと推してわざと氣を替へ、

『そりやア何うでも可いとして、ほんとにその御相談ならば、私貴女に勧めるワ。私には少しも關はないではやく梅田さんへ入らしつては如何？今の御話の樣子ぢやア、梅田さんへ入らしつたからつて、何も學校を廢めるんぢやないんでせう。只寄宿舎を出る斗りなんでせう。さアそんならば、私も貴女に會へなく成ると云ふのぢやア無し。たゞ今迄の樣に、一所に散歩に出たり、一所の室で寐る事が出來ないばかりなんですから、何もそんなに心配する事は無いでせう。それにもし、梅田さんの方から云へば、幼少い時分から懇意にして、氣心も知れてる貴女ですから、御一所に御住居に成れば、そんな都合の好い事はありますまい、また薫さんにしても、阿母樣御一人置いて居つらしやるより、貴女の樣な方が付いて居らつしやれば、ほんとに安心してお出に成れますからねエ。』

と、何やら云ひ兼ねて居る操の胸には、まだ何物か結ぼれて居る。

『所がねエ、直子さん！……』

『所が、何うしたつて云ふの？』

『あの……叔母さんは來て欲しいつて云ふんですけれども……』

『何誰か不賛成な方があるんですか？』

『はア……あの……肝腎の……』

と、云ひかけてハツと思つた樣に、急にまた顔を赤くして、出もせぬ咳に紛らしたが、もう追付かない。直子ははやくも聞咎めて、

『肝腎の？肝腎の薫さんが御不承知なの？』

と、短刀直入の鋒先、操はそれを避ける袖に、わが面を半ば埋めながら、

『はア……』

と云つた限り俯視いてしまつた。

とう迄聞くと直子の胸に屢々點頭かれる事がある。

思ふにかの梅田の叔母さんなる者は、操を少からず愛しみ、將た信頼にも思ふ所から、我兒のまだ獨身なのを幸ひ、これを嫁の候補者として、自分の家に置かうと云ふのであるが、薰は例の軍人氣質、同じ洋刀仲間には有勝の、例の無妻主義の立場から、これに不承知を稱へるのであらう。



が、さて當の操の心は？

此間の園遊會の折、久し振での邂逅を、餘所ながら見た岡目にさへ、只は見免がしならぬ操の素振。それと明けて云はぬ丈が、却つて眞の戀の徵候と、はやくも見て取つた直子の氣では、あはれこの戀成り立たせて、我が

分身とも思ふ親しい友とその喜を共にしたいばかり。

で、直子は、云ひ悪い事をも思ひ切つて、自分も云へば、友にも云はせる心

「そんなら操さん！貴女は入らつしやる了簡だけども、薫さんが不承知だから、それで躊躇なさると云ふんですね？」

「まアさうなの……。」



「けども、をかしいのねエ、何故薫さんが不承知なんでせう？」

「……何故つて……」

「貴女の様な方に留守番を頼めばそれこそ安心でありさうなものをねエ。」

「でも……私の様な者だから、却つて厄介だとお思ひなすつたんでせう。」

「そんな事があるもんですか……第一叔母さんの御氣

に入つて、此人をと仰有る者を、何で厄介だなんてお思ひなさいませう。それよりか、私やア思てますワ。乾度薫さんは、別に何か考へて居らつしやるんでせう。」と、少し間を置いて、更に言葉を改め「操さん！私當て丶見ませうか。無遠慮に云ふ事よ。」

「ハア、何卒！」

「梅田中尉は無妻主義なんでせう。」

云ひ畢つてぢつと相手を見詰めた。確かに云ひ當てたを誇り顏に。

すると操は、半ば氣を呑まれた樣に、凉しい眼で直子を凝視たが、

「ほんとに直子さん、貴女何でも解るのねエ。」

「矢張り當つたでせう。」

「全くさうなのよ。」

と、後はまたしよげてしまふ。

「それぢやア折角貴女が、行き度いと思つてるのに、薫さんが來ちや困ると仰有るの乎？」

「さうです。……だつて考へて御覧なさいな！先方で厭だと思つて、迷惑がつてる所へ、無理に行くのは變なすわねエ。……けれども直子さん！叔母さんの事を考へると、私はほんとにお氣の毒ですから、出來る丈お世話をしたいと思ふんですけども……。だから私、疾うから貴女に打明けて、相談したいと思つてながらつひ何だか極りが惡いもんですから、とう／＼今日まで云ふ事が出來なかつたんです。でも丶う、貴女がすつかり御存じなんだから、私ア何も隱しはしません。だから貴女も智慧を貸して下さいな！ねエ直子さん！何うしたら可いでせう？」

と、初めて本心を打ちあけて、友の力を借りやうとした。

すると直子も、暫時何か考へて居たが、

「それでは操さん！貴女もう何も隱さないと云ふのなら、も一つ眞實の事聞かして頂戴な！」

「眞實の事とは？」

「ですから貴女は、その梅田さんの所へ行くのに、全く叔母さんがお氣の毒だからと云ふ、そればかりで行

かうと仰有るのか、それとも、……操さん！眞實の事仰有いよ！――貴女あの薫さんを、ほんとに愛して居らしッて？」

と、遂に正面から問ひかけた。

その答にはまた操の、流石に逡巡はざるを得なかつた。が、此塲合この間に對しては、もはや虚飾を云ふべきで無いと、遂に覺悟を極めた操は、咽喉を無理に絞る様な聲で、

『直子さん！　笑つちやいやよ！』

と、云つて顔を掩うてしまつた。

さりとては、まだ誰も笑はぬ者を、何を笑はれると思つたやら？

が、直子にはもう合點の行つたと見えて、

『ようござんす。そんなら私も眞氣で云ひませう。貴女がそれまで思つてるんなら、梅田さんへ入らつしやいましな！』

『でも……薫さんが不承知なのに……』

『そりやア貴女にも似合はない事。薫さんの不承知だと云ふのは、無妻主義で居らつしやるからでせう。ですから、つまり貴女と結婚するのが不承知なので、貴女が只叔母さんのお世話をなさるのには、別に不承知は無いんぢやありませんか。』

『さう云やアさうですけれども……』

『ナ、そんなら何も關はないぢやありませんか。貴女が學校に寄宿する代りに、梅田さん所に同居なさるまでの事です。眞に薫さんを愛してるなら、結婚の何のと云ふ事は、まづ別の問題として、叔母さんを大切にじてあげるがいゝワ。ねエ、操さん！　ですから何も心配せずに、はやく梅田さんへ入らしつやいよ。誰が何と云つたつて、それなら私大賛成！』

と、双手を擧げぬ計りである。

新夫婦

神谷鶴伴

女は年頃廿一二歳ばかり、無論女學生あがりと見えて

髪を當世流行の辨天とやらに無造作に卷いて、藤色のリボンの稍大き過ぎるほどと思ふのを止まらせて居るのは元來が派手好きと見える。色は左までに黒からず眼鼻立も一通り揃つて居るが、唇の薄くて而も口元に締りのないところを見ると、無論これは饒舌の人相である。

これに相對して坐した女は、學校時代の朋友であらう蝦茶袴を穿き、今學校歸りと見えて傍に紫の風呂敷包が行儀よく置いてある。

「まあ貴方、今日は好くこそ御訪ね下さいましたのねえ。丁度幸ひ夫も不在ですから御緩りと御遊びなすつて下さいな、何も別に御搆ひ申しは致しませんが私は昔の御友達と御一緒に學校時代の面白い御話でもするより外には、何一つ樂みといふものは御座いませんですよ。」

と云ひつゝ、主人の女は片手業に茶を入れて客の前に進めた。

女學生は手に受けて默禮し一口啜つたが、聊か小笠原流の作法でも心得て居るのか、其振舞は何處となく優和で、當節の女學生には珍らしく御轉婆な樣子も見えない。

「何卒まあ貴女御搆ひ下さいますな、却つて御邪魔になりましては恐れ入りますわ。私一寸通り途で御座いますから一度御伺ひ申さうと存じながら、つひつい御無沙汰になりまして……」

「いゝえ何う致しまして貴方、私こそ一度御目に掛つていろ〳〵御伺ひ申さうと存じて居りましたが、他方へ緣付きますとなか〳〵自分の思ふやうにばかりも出來ませんので。本當に貴方弱つて仕舞ひますわ、夫の氣六ケ敷いつたら……」

「それでも貴女は御仕合せですわねえ。始終御朋友同志で御噂を申して居りますのよ、梅村さんは好いところへ御緣付遊ばして、旦那樣は當世の交際社會にも持囃されて、それで奥さんにも御優しく成さるからつて、本當に皆さんして御羨み申して居りますのよ、結搆ですわねえ。」

『それは貴方他所目には如何見えますか存じませんがこれでも私の身になつて見ますると、矢張り他には知られない不足もあれば、苦勞もありますわ。』

『苦勞つて貴女、斯様に結搆な御身分でありながら何が御苦勞ですか、それは貴女我儘と申すもので御座いませう。』

と客の蝦茶袴は稍窘むやうな口付でいふと、

『それは貴方、苦勞もあれば不足もありますことよ、他は我儘と申すか存じませんが、私は左様は思ひませんわ。他人様は何んと思つて居らつしやるか知りませんが家の人つたらありませんわ。そりやあ貴方、交際社會にも顔を出して彼是と他人様にも多少持囃されて居るかも存じませんが、其爲に家を明けることばかり多くて仕方がありませんわ。まあ貴方聞いて下さいな、自分ばかり他所へ出て散々保養をして置いて、私には少しも樂しみをさせて呉れませんですもの。今月になつても最う貴女五日も六日も不在にするんですよ、何處へ泊つて來るのか知りませんが、随分留守居をして居る身になつて御覧なるいな、好い心地は致しませんわ。それに貴方偶には成程私にも優しくして、流行の衣服や穿物位は買つても呉れますが、少し氣に入らないことでもあらうものなら、貴方憎らしいぢやありませんか、斯う申しますのですよ、何うも女といふやつは我儘で困るつて。それはねえ貴方、私だつても御飯を頂いて生きて居る人間ですもの、偶には歌舞伎の一幕、春は花見か汐干の一日位保養を致しませんでは生きては居れませんわねえ。自分ばかり左様〱家を明けて樂みをしてばかりゐないで、少しは私をも遊びに出して樂しい思ひをさせて下すつても宜しからうぢやありませんか。左様貴方、毎日〱下女と一緒に臺所にばかり燻つて、鼻の穴を眞黒にして居るやうでは身体が續きはしませんわ。以前學校へ往つて居りました時分、朋達として交際つて居ります頃は夫も斯んなに因業なことばかりも申しては居りませんでしたが、斯うやつて一緒になつて見ますると、互

に良いところは見えないで惡所ばかり兎角見え易いもので御座いましてね、何うしても自分の理想通りにはなか〳〵參りませんもので御座いますわ。それは〳〵夫の私に對して壓制なことばかり申したり致したりしますことは、なか〳〵口では貴方申されませんですよ。それに以前は斯んなでもなくて、隨分開けた、譯の分つた好い人だと思ひましたが、只今では最うつく〴〵と私愛想が盡きて仕舞ひましたわ。」

と饒舌の本相を顯して、立板に水的に、殆んど一言一句の滯りもなく夫に對する我不平を憚るところなく喋々と辨じ去つたのである。謹んで聞いて居た蝦茶は稍煙に卷かれた体で挨拶もそこ〳〵に立ち去つて仕舞つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「君まあ聞いて呉れ玉へ、家の奴つたら斯んなことを抜かすんだぜ……」

「眞平御免だ、何程御馳走になつても妻君の惚氣なんかは餘り聞きたくないね。」

と相手の男は手を横に振つて制する眞似をする。

「妻君の惚氣、馬鹿あ云ひ玉へ、何程僕が醉ぱらつたつて、そんな下らないことは云はない。まあ聞いて呉れ玉へ。」

と云つて盃を下に置いたのは、高いカラーに派手な襟飾を着けた二十八九歳位の男。銚子を運ぶ姉さんは保險會社員といふ見立てをしたが、多分違ふまい。

「まあ聞いて呉れ玉へ、斯んな失敬なことを云ふんだぜ。貴夫ばかり面白い眞似ばかりして、毎晩のやうに宅を明けて遊び廻つてゐられるが、偶には私にも歌舞伎の一幕位見せて下すたつて宜いではありませんかつて。え丶君隨分女といふ奴は我儘ばかり云ふものぢやないか、本當に呆れ返つて仕舞ふ、云はして置けば勝手なことを云ひ居るからな。それやあ君僕だつて交際の爲めとあれば、偶には好くないところへ遊びにもゆき、茶屋酒の一杯位飲んで歸つて、

家内の顔へ臭い息を吹き掛ける位のことはあらうさ然しそれもこれも我が業務の爲めとあれば萬巳むを得ないでは無いか。あゝあ、僕は既う愛相が盡きて仕舞つた、否何、斯んなこと位で愛相が盡きたといふ譯ではないが、まあ君聞いて呉れ玉へ、妻といふ奴は餘程撰んで貰はないと實に後悔することが多いねえ。そりやあ少しは先方でも意外に感ずることがあるかも知れないが、何うも人といふ奴は兎角自分より上ばかりに比較を取りたがつて、下を見るといふことが無いのが缺點で、何うも不足ばかり絶えず云ひたがつて困るものだ。妻を娶るならば、宜しく撰むで娶るべしだ、それは勿論先方が當方の請求に應ずるか否かは別問題だが、撰んだ上にも撰むのは何も此方の權利だ。社會には婦女が數多くあつて我等の希望を滿すべく、恰も春の野邊に種々の花が咲き誇つて居るやう媚を呈して居るではないか。些と八釜しい議論になつたかも知れないが、僕は左樣思ふのだ。勿論女の方でも、萬事に勝れた男を／＼と撰ぶであらうが、此方でも撰んだ上にも撰ぶべしだ兩方で撰み合つて、斯くて何方も程よく似合つた男女が夫婦になるやうになるであらう。』

といつて一口酒を呑み一息ついて言葉を續け、

『そこで僕は思ふのだ。元來女は我儘氣儘なものとして、さて何ういふ婦女を妻にするが適當だらうとねえ君、これはなか／＼一口には云へない難かしい問題で、これから先き君が妻君を迎へるにしても、僕は僕が女學生を妻にした經驗上、君に勸むるに女學生は決して妻になすべからざるを以てしやうと思ふ。僕は僕の妻に甚く手を燒いてゐるからね。そりやあ君、僕の妻などゝ來ると、理窟を拵へること、饒舌をすることゝはなか／＼旨いものだ、感心するね。其かはり料理や衣服を製へることは最も不得手であるから差引いて見ると餘程損さ。勿論饒舌するとは云ひせう、眞逆に其處等の熊さん八さんの内儀さん達と井戸端會議を開いて、亭主の讒訴を擅にするといふほどでもないが、自分の昔の學校友達

でも偶に見えやうものなら、それこそ日頃溜めて置いた滿腔の不平を好い洩し所と、心得て得意になつて饒舌立てる、本當に手が付けられないよ。それで折には夫に對つて喰つて掛かることもある。やれ理想の家庭が何うだとか、夫の心掛けが惡いとか云つて、自分が一家の妻たるべき資格の缺けて居るところには少しも御氣がつかれない。成程學校に居た頃は英語なども習ひ、ピアノ、バイヲリン幾何代數なども習つたであらうが、君普通の家ではピアノなどは置き場所にも困つて仕舞ふ。實際のところをいふと、家政學などいふものもやつては居るさうだが、實地に就いて見るとなかく何うして丸切應用は出來ない。それは左樣だらうさ、幾何をやつても衣服を斷つ寸法は分らず、味噌汁を拵へるに眞逆代數で分量を割り出すといふ譯にも往くまいからねえ。それも何さ、斯んなこと位は當人が覺えやうといふ氣にさへなれば直樣覺えられもするのであるが、其處を覺えやうといふ可愛い心にはならないで、君云草が憎いではないか、明治の文明の敎育を受けた婦女は、下婢のすべきやうな賤しいことはしないでも宜いなどゝ廣言を吐いて庖廚の業は知らないのを自慢にして居るのだ。それもまだこれだけなら僕も我慢をするが、イヤ最う少しだから君辛抱して聞いて呉れ玉へ、僕は今の妻を持つてからといふものは、裁縫が出來ないから、日本服は最うどれもこれも袖口が切れて仕舞つて、他所ゆきに着て出れるやうなのは一枚も無いのだ、何んとまあ餘り可哀相では無いか、察しても呉れ玉へ、妻君のない君なんかの方が却つて小ざつぱりとした風をして居るのだもの、僕は實に情けないよ。妻は實際撰んで持つべきものだ決して媒介の片口ばかりは信ぜられないものだね」と永々と語り了つて盃に殘りの酒を呑み乾し、長く溜息を吐いた。

妻の愚痴、夫の不平、兩々相對して知らず何れが眞の道理に適つてゐるであらうか。然し一旦結婚した以上は輕々しくこれを何うすることも出來ない。世間に斯かる例は珍しからぬ話しである。

（完）

時局判じ繪に就て

本誌は第四卷第七號を以て第一回判じ繪を發表したり、之に對し江湖愛讀諸彦の解答を試むる者、陸續として到り、正解者のみにても無慮千二百名の多きに達し、豫期以上の好結果を收め得られたるは、本誌の滿足とする所なり。

本誌は今後も此の種の企畫を時々試むべし、題の出所は往々本誌中の或る記事より取る事あれば、正しき解を與へんと欲する者は常に本誌の記事を精讀玩味せられよ。今回の畫題は明瞭にして何人にも容易に解し得られたれど、次回よりは奇想天外的のものを課すべければ、其の心して解答を試み玉ひねかし。

今回の正解者千二百名中規定に從ひ先着の分三名を當選者と定め、賞品圖書切符金貳圓宛を呈送したり、其の姓名は左の如し、

東京府下澁谷村高瀬戸　柳原正子
東京市芝區新錢座町藤井方　古川文子
岩代國安積郡山町堂前　堀川つる

正解者の中に就て最も適確に畫意を説明したるもの の四種を左に揭ぐ

▲本日發行の女學世界口繪 中の時局判じ繪は軍神とまで崇められたる故廣瀨中佐が曾て露國に留學中、彼國の侍從武官なる少將某、中佐の非凡なる人物を愛し、中佐が三年の任果てゝ歸朝せんとせし時中佐と別るゝを惜みせめては自 己が愛娘なる三個の姉妹の一を其の妻として娶られんことを乞ひしに、中佐は固く辭して肯かず、今にして令孃と偕老の契を結ばゞ、貴國と砲火相交ゆるに及んで必ず憾あらんとて其の好意を謝絶したり、されど令孃等の纏綿の情は絕つによしなく、遂に中佐が露都を出發する時停車場にて紅涙をながして其行を送る圖と存じ候(許田松下)

▲廣瀨中佐の御身の上と思ひます中佐 が露都にて中將の家に寄寓せられし頃中佐の氣象を見込まれて中 將は其三愛孃のうち一人と婚を結ばんことを乞はれましたが 中佐は承諾されませんでした後露都をはなれらるゝ時三人の令孃は停車場迄中佐を見送 られて涙なかくにとゞめられず衆人の目は皆この三孃に注がれ たとのことで之を畫にしたので御在ませう(伊豆向井)

▲女學世界の口繪中の時局判じ繪は軍神廣瀨 佐の 身の上を示したるものにて中佐がかつて露國 に留學し歸朝さんとする時彼の國の侍從武官なる海軍少將某の三人の令孃等が 停車場構內に於て別れを惜みて紅涙禁めあへぬ所詳細に前號の女學世界 (第四卷第六號)の二百五ページの所にあり(靜岡しづ子)

又た誤解者の中には隨分異樣なるものあり、今其の二三を擧ぐれば、

▲去る四月旅順口沖に於て「ペトロパウロウスク」に乘組み居られたるキリール大公が露都出發の際に於ける 訣別の狀 と解したるもの

▲マカロフ提督追悼式に於け る同未亡人の身の上なり と判じたるもの

▲露國武官の夫人連が旅順口引揚に際し良人と別るゝ光景なり、愁を滿面に帶びたる四人の中、左にあるは海軍少佐ミハイル、セルキーにて之と握手し居るは少佐の夫人なり、此の記事は女學世界七號に旅順口避難の婦人と題して揭げられたり と答へたるもの

▲金州丸監督將校濱口少佐佛國 より歸朝以來神戶あたりの旅館にて云々との記事新聞紙に相見ゆ、それかとも存ぜられ候まゝ御答申上候 と穿ち過ぎたるもの

等あり、是等は正鵠を失したりとはいへ夫々由所ある答文、亦た仲々に面白き節あり、

尚は落選者と雖も正解の分は其の勞を空うせざらんが爲め其の姓名を披露すべきの處紙面に限あるを以て只其の大數を記す

▲東京の部　二百八十六　▲關東の部　百四十二
▲横濱　七十八　▲東海道の部　百八十
▲京坂の部　百十八　▲中國の部　九十二
▲東北の部　百四十三　▲信越地方の部　四十三

次號記事豫告

八月五日發行

▲日本天皇の鴻德　記者謹述
▲新世帶經營の心得　寺田勇吉
▲戰時婦人の覺悟　三輪田眞佐子
▲戰時の衣食住　高木醫學博士
▲長谷川大將の家庭　中村鈴子
▲時局と日本婦人　小林彥五郎
▲日本古代の軍歌　佐々木信綱
▲賢母の手かゞみ　松村仙巖
▲（源氏物語）夏季學校　水原翠香
▲石炭の話　淺野松琴
▲米の話　經濟記者
▲澳國女皇マリヤテレサ　藤葉女史
▲理想の少女　小野田花子
▲（生理衛生）顏の話　糸左近
▲戰塲物語　血染子
▲（小說）決死隊　大塚楠緒子

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册 / 増刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	四十四錢	三十六錢	二十九錢
半頁（増二行）	……	十四圓〇八錢	十一圓五十二錢	九圓二十八錢
一頁（六十四行）	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●臨時注文の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年七月五日發行（第四卷第九號）

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

七月二十日發行

皇師向ふ處醜虜悉く滅び、今や滿州の野、西比利亞の原、我日章旗に風靡せんとするに際し、本誌は其夏期増刊として大勝利の發行を企つ。本書收錄する處には戰爭實記、美談逸話、戰爭小說、戰爭お伽芝居等、苟も軍國少年諸君の讀物は此一卷に盡せる也。

少年世界定期增刊
大勝利

正價十錢
郵稅壹錢五厘

口繪　大勝利（着色石版畫）渡部金秋筆其他寫眞銅版四頁

記事

秋津丸……大江小波君
那翁旗下の將卒……春山霞城君
露艦來……三島霜川君
大砲の彈丸……竹貫佳水君
戰國の武士……鷹野止水君
三笠艦の鳩……桂田玉階君
潜航艇……西村孤峯君
軍國壯烈譚……木村小舟君
少年軍……全國少年諸君

東京日本橋區本町三丁目　發兌元　博文館

（後付の一）

中學課程

教科參考圖書

歴史

文學博士 萩野由之君著

●大日本通史

全二册洋裝上製脊皮金字入 上卷一圓五十錢小包十五錢（下卷未刊）

此書は萩野博士が該博なる學殖と暢達なる文章を以て吾邦神代に於ける事蹟より降て近世徳川の末造に至る迄を最も明晰に叙述されたる者にして其編史の方法は編年史体に依らず文明史体に倣はず、列聖御歴代によりて次第を立てられたるは史學の時代研究には尤も便益を與ふるのみならず列聖治世の蹟と時代の要求せし人物關係の如き一目了知するを得る良史なり

文學士 木寺柳次郎君著

●中等教育 東洋歴史

文學士 木寺柳次郎君著

●日本歴史

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

此書は從來の編纂と其方法を異にし事實を採れは之に連絡する諸種の關係沿革等を、集め或は未だ一定の説なきものは先哲の説を挿入し必要なる制は稍精細に渉り事實正確繁簡其宜しきを得、國史の大要を知るに偏強なるのみならず學生諸君の參考として缺くべからざる良書なり。

法學博士 有賀長雄君著

●帝國史畧

全一册大判洋裝脊皮金字入 正價一圓五十錢小包四百匁

本書は著者が多年講究の餘に出でたるものにして筆を建國より起し

文學士 幸田成友君著

●東洋歴史

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

歴史に古今の區別無し過去を知るにあらずんば安ぞ能く現在を知るを得ん西力東漸の由來する所深きを明め併せて今日の日本が世界の日本として東亞に於ける地位の多難多望なるを知らんと欲せば須らく本書を一讀せよ本書は古來東洋の天地に行動せし諸人種の興亡盛衰を叙述せる一新好著にして識見該博考證精覈東洋史を研究するに最も完全なる無比の良著なり

文學士 吉國藤吉君著

●西洋歴史

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

現今の時勢を知らんと欲せば必ず先づ過去の事實を了せざるべからず歴史を研究する所以茲に在て存す而して紛亂錯綜其眞相を知るに難きもの實に世界文明の根原たる西洋歴史に有りと云ふべし著者は大學に在り斯學を專攻すると數年今や本書を著はし世に公にす乃ち

（後付の二）

全一冊洋裝上製紙數千三百頁 正價金七十錢 郵稅金十二錢

世界史を分ちて東洋史西洋史と爲すは研究上又教授上頗る利ありとす。然れども從來發刊の東西洋史は、著者各其人を異にし、毫も統一する所なし、本書は乃ち然らず、曩に西洋歴史を出して教育社會の好評を博したる木寺文學士が幾多の日子を費し、公私の圖書館を搜索して、材料を收拾し、西洋歴史と同一なる主旨方法注意を以て之を案配編纂せられたるものなれば、著者の二史を併見する者は、能く世界史の大勢に通するを得ん。

文學士 木寺柳次郎君著

●中等教育 西洋歴史

全一冊洋裝上製紙數千三百頁 正價金七十錢 郵稅金十二錢

歴史の書汗牛充棟も啻ならず而して其中等教育の名を冠する者亦少からず。本書の著者別に見る所あり、教授時間を斟酌して繁冗に流るゝを防ぎ成るべく上世を簡畧にして近代に至るに從ひ、漸く精細ならしめ、固有名詞の發音は其時代と國々とに從ひ、多く精巧なる地圖と繪畵とを挿入し、西洋歴史を一體として說くことに三たび意を致せり、是等則ち本史の特色にして、從來世に行はるゝ國史と異なる所なり。

て全編を七期及今代に分ち、主として日本國民の變遷に於ける源因結果の次第を明にせるもの、事實は一に正史に據りて、最も正確に、行文は流暢にして明晰なり、眞に我帝國史の要領を得るに於て、物を囊に探るが如し

落合直文 池邊義象 兩先生著

●新撰日本外史

全一冊洋裝 脊皮金文字入 正價一圓二十錢 小包二百匁

歴史の要は能く事蹟を推究して其眞相を記するにあり、されど文章流暢を缺く時は讀者其眞相を解するに苦む事多し、本書は國史國文に精通なるを以て推さるゝ所の兩先生の特殊の編纂法を以て優雅穩健なる和文を以て綴られたるもの上神代に初まり以て今代に至る迄秩序一貫實に無類の出色を具へたる國文歴史たり

時期を分ちて上世史中世史最近史となし上は羅馬時代下は佛國革命等苟も史上の事實は一切網羅せり議論確證秩序整然史家座右の要册と云べし

文學博士 萩野由之君著

●日本歴史評林

全一冊 洋裝脊皮金文字入 正價一圓八十錢 小包六百匁

事實と評論とは歴史の雙眼なりいかに古今の事實を網羅して豊富を極めたる歴史なりとも評論品隲せずんば史中の事實は悉く枯稿して千載生氣を失はん本書は本邦鴻儒の評論中より其粹を擇び秀を拔き類編されたるを合綴したるものにして一度此書を取りて參照せば史中の人物は躍然紙上に表はれ治亂盛衰の理は刃を迎へて忽ち解けむ

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(後付の三)

中學教科參考書課程

日露の交戰は其勝敗の數殆んど既に定まり蠻露は早晩之を北地に追ひ攘ふを得べしと雖戰後に於ける交戰上有形無形の損害の回復と國力の充實は一に國民一般の責務殊に青年の絶對任務なり、從て今日に於ける青年は悠々自適夏期の長日月を徒に探景訪勝に費して止むへきにあらす本欄は玆點に心付かるゝ熱誠なる青年諸君に平素其の研鑽に心を碎だかるゝ學科に關する參考書冊を推薦して諸賢の講學に不足なからしめんとを期す

文法

文學士 畔柳都太郎君著

●邦語英文典（全一册）

文學士 松井知時君著

●邦語佛蘭西文典（全二册）

一册正價 上製五拾五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

本書は佛語を知らざる人に其大要を知らしめんとするなれどヤヽ進んだる人に對しても尚ほ有用なるものたらしめんが爲めに普通の文典に於ては見るを得ざる所まで立ち入りし點なきに非ず故に一面に於ては獨習用他の一面に於ては敎科用となる故に從來緊き所の法によりこ之を編纂せり且つ本書は昨年三月九日佛國文部省より發布せし佛語文法改正例を參考して各處に之に關する注意を懇篤に與へたり。

文學士 青木昌吉君著

●邦語獨逸文典（全一册）

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

獨逸語は複雜なる法則あり整備なる文法書を得るは極めて困難なり、本書の著者夙に之を遺憾とし其記述の方法を研究し長年月の經驗に照して新に本書を著されたり冗漫錯雜を恐れて簡潔を主とし亦要旨の消滅なからしむ■爲めには嚴正綿密なる解釋を加へたり詢に本書が坊間の文法書の如く漫然外國書を摘譯或は翻案したるものと異なりて、邦語を以て邦人の最も了解會得する樣獨逸の語法を詳說したるは他に見ざる特色なり

次方程式解法に獨華す。立論證明の精細堅實なる洵に類書中一頭地を拔くもの『新撰算術』と相待て算數學者必讀の要書なり。

理學士 林鶴一君著

●新撰幾何學

上製五拾五錢 郵税十錢
並製四拾錢 郵税八錢

本書從來のユークリッド幾何學を根據とせず先づ其一般を說述したるの後、更にユークリッドが第十三公理を否認せる否ユークリッド幾何學に入り主としてロバチエースキー及びボリアイが研究に從ふて說明其微を極む蓋し幾何學の新智識を得んと欲するの士は本書を措て他に求むべからず

理學士 松村定次郎君著

●新撰三角法（全一册）

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

本書は歷史的に在來の三角法より筆を起し平面球面三角法の如きは其一應用として列記せるも必要なる公式の誘導に止め成るべく理論の本道を離れざらん事を勉め應用としては進んで高等諸學科に必要なる諸公式を誘導し理論として圓函數の解析的定義となり轉々して函數の微分方程式定義に達せんとを務めたり

英文典の書汗牛充棟も啻ならず、去れど多くは學生をして無意義なる原語暗誦の弊に陷らしむるか、然らざれば漫りに原書を譯述するに止り、能く其中を得たるもの少し本書の著者玆に見るあり、ベイン、ネスフヰールド等の英文法書、クレアブルーク、ガスペイ、オツトー等の獨佛文法書等を參照し、傍ら著者の創見を加味して、玆に完全なる一英文法書を成す、章を分つ十、節を別つ數十、秩序整齊、叙述簡明にして證例饒多、滔々たる文法書中一新體を創造したるは、是れ著書の密かに誇る所、英文學研究の士に向って一本を推奨するものなり

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

文學士岡田正美君編

解説批評 日本文典 （全二冊）

一冊上製五十五錢 郵税十錢
正價並製一冊四十錢 郵税八錢

本書は帝國國百科全書の第七十八、七十九編として公刊し吾國語上文法上の諸般の事實を我國の一斑の人士に示さんと欲して其を便宜の順序に列記して解説批評したるものにして國語專攻の人士の爲めに殊に時代的文法又は歷史的文法又著者自らの日本文法體系を述べたるものにはあらず「解説」の條下に記述したる事柄は多くは常人普通に用ゐらるゝ諸文典に記述せるを採り讀者をして極めて平易明斷に蘊奥を探るを得せしむ蓋し我邦の文法を述ぶるに於て獨得の長所を有するものなり

數學

理學博士高木貞治君著

新撰算術 （全一冊）

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

世に算術の書類夥多ありと雖も其多くは西洋算術書の飜譯に終り然らざるものは單に機械的に數を說明するに過ぎず本書は筆を整數に起して分數冪根、定理數量及其測定に說き及ぼし結論として負數虚數に筆を擱く其間の說明立論精緻確實而も文字平易流暢一讀の下に『アリスメチック』の原理を了會するを得數の性質は此冊子の内に說き悉されて餘蘊なし

理學博士高木貞治君著 （全一冊）

新撰代數學

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

本書は筆を代數學の原則に起して、有數、函數、方程式の根、整函數の有理分解、多元函數、對稱式論「デートルミナント」二次形式論に及三次及四

理學士松村定次郎君著

新撰微分積分學 （全一冊）

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

微分積分學は解析幾何學力學と並び近世の三大進歩の一と稱せらる然れども其理論の深遠なる應用の廣大なる能く初學者をして會得せしむる良書無きは豈遺憾の至ならずや本書は數學專攻の松村理學士が歐米諸大家の說を基礎として其煩を省き要を拔き其神髓を摩萃して能く短時日に其大意を了解せしむる様記述せられたる無比の良書也

竹貫登代多君著
- 新撰算術問答
- 新撰代數問答
- 新撰幾何問答

上村左川君著
- 新撰和英文典問答

正價各一冊廿錢 郵税一冊四錢宛

發兌元 東京本町 博文館

（後付の五）

教科參考書

中等課程

是より復た爍金三伏の候、講學の士は其課業を休みて或は故郷に、或は勝地に、各自欲する所を撰んで休養せんとす、休養可なり、然れども緑蔭の下、清流の畔、書を繙て、常に講ずる所に思を潜むるは、濫輿の造詣には寔に可なるべし、豈貴重の時日を空費すべけんや、本欄は特に這般の便を顧て教科參考書を薦むること左の如し

地理

理學士　佐藤傳藏君著

●日本新地理（全一册）

らん爲めなり、亞細亞、支那、朝鮮及南洋は、本書の骨髓なり、特色なり、來て此寧馨兒を見よ、日本新地理の好兄弟、好姉妹なる萬國新地理を見よ。

理學士　佐藤傳藏君著

●中等教育 地理學教科書（全一册）

全壹册洋裝上製脊皮金文字入

正價一圓五十錢　郵税八錢

能く其精を拔き、能く其粹を萃め斬新の事實と豐富の材料とにより、中等教育に於ける地理の授業時間を斟酌し編纂したるは、佐藤理學士編纂の本書なり、曩に上卷の發行せらるゝや、直に學習院其他各府縣の尋常中學の教科用書若くは參考用書に採用せられたり、下卷亦同樣重要なる讀書社會の要求に逼られて編書せられしもの、荀も中等教育に於ける地理學の授業をなして其功を全ふせんと欲するものは此書によらざるべからず世界列國の大勢に通曉せんと欲するものは本書によらざるべからず。

邦人の著作なきにしもあらざれども杜撰疎漏見るに堪へざるものゝみ、本書は斯學に就き該博の智識を有する澁江氏が歐米諸國に於ける最近の名著を涉獵して兼て著者の創見を加味し、最新の事實統計を基礎とし最新の組織を以て著述せられたるものにして其材料の豐富なる其系路の明暢なる眞に得易からざるの良書なり。中等學生諸君は參考書として又獨習用として座右に欠のくべからざる珍書たるは本館の信じて疑はざる所なり。

峯是三郎君著

●中等教育 新編地文學（全一册）

全壹册洋裝　正價五拾錢　郵税八錢

天の覆ふ所地の載する所森羅萬象綺羅整列目を眩し耳を破る日月星辰の大美觀山水飛鳥の大文章之を我掌上に轉して其現象結果を論じ兼て人世事業上に論及す萬有百科の中豈是れより愉快にして有益なる學問あらんや本書之を論ずる尤も詳世の翻譯的著書の類にあらず先づ吾人の住處たる地球の全體を論じ其他直接間接に事實を引證して箇々獨立の智識に偏せざるに勗む

理學士　佐藤傳藏君著

●地質學（全一册）

（後付の七）

博文館發行　日露戰爭實記　定期增刊

寫眞版

東鄕大將と卅年前の在英國練習、英艦ウスター號及艦長ヘンダーソン、ミス大佐　野津大將と上原少將及野津大將家庭　軍國貴夫人　第二軍の活動　鎭南浦に於ける常陸丸船側より各御用船を見る　鐵道大隊の京義鐵道工事と井上工兵大佐　青泥窪に於ける露國官衙　旅順の魯國寺院　敵國負傷兵の救護　アレキシーフとクロパトキンの會見　港內より見たる旅順口　陸海軍名譽の死傷各將士　川崎造船所建築の新水雷艇　第三回旅順閉塞隊　水雷驅逐艦叢雲號の乘組全員　內外東西の祝捷會　最近韓國事情、最近の營口、將來の新領土、各地戰死者葬儀、南山激戰の三將軍、遼陽及其附近、佐世保海軍病院の負傷者、其他十數餘

正價　每月八日發行
一冊金二拾錢、六冊一圓十錢、十二冊二圓十五錢、郵稅一冊二錢五厘ッ、

第四卷

日露戰爭寫眞畫報

七月八日發行
大判　縱八寸五分　橫五寸　美本
口繪四拾頁
石版色刷二枚　光澤版八頁　寫眞版三十二頁　本文記事豐富挿入數十

畫報

●聯隊旗の光榮…（嶄新表紙畫）……武內桂舟
●第二軍十三里臺の砲戰……寺崎廣業
●野村少尉の勇武……山中古洞
●常陸丸の悲壯なる甲板……木村光太郎
●裸體勇士の敵兵擊殺……中澤弘光
●工兵の金州城爆發……佐久間文吾
●我勇士司令塔上の敵將を斬る……岡[illegible]榮
●得利寺の大激戰……渡部審也
●最近戰爭……木村光太郎

——{事　記}——

●征露戰史●敵國將來の新版圖（水哉）●日露戰士短評（春涙）●戰時漫言（天渓）●死傷せる我同窓の友（犀東）●彈丸破裂談（佳水）●浦港陥落未來記（春涙）●勇魂武魄（肝付少將）●敵愾餘韻其他勇敢なる騎兵戰死、旅行記等趣味津々、殊に本號よりは本文中にも珍奇なる寫眞を加ふることとせり

戰爭實記共通前金
（一ヶ月）四十七錢（三ヶ月）一圓三十五錢（六ヶ月）二圓六十五錢（一ヶ年）五圓二十錢　郵稅（一ヶ月）六錢五厘宛

（後付の八）

女學世界

(明治卅三年拾貳月廿五日第三種郵便物認可)　第四卷第九號　(明治卅七年七月五日發行 毎月一回五日發行)



(定價金貳拾錢)